

上
丑
細
井
五
十
嵐
遺
跡

丑 子 遺 跡 上 細 井 五 十 嵐 遺 跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査（その3）報告書

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査（その3）報告書

二〇一三・二
国 土 交 通 省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



2013.2

国 土 交 通 省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

丑 子 遺 跡 上 細 井 五 十 嵐 遺 跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書

2013.2

国 土 交 通 省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

丑子遺跡と上細井五十嵐遺跡は、赤城山南麓の末端近く、前橋市上細井町にある遺跡です。両遺跡とも東京日本橋と新潟市を結ぶ一般国道17号のバイパスである上武道路の改築工事に伴って、平成20年度に当事業団が発掘調査を実施いたしました。

上武道路は、県道前橋赤城線までの間が平成24年12月に開通となり、いよいよ前橋渋川バイパスに接続するまでの3.5km区間の工事を残すのみとなっています。残された区間についても現在埋蔵文化財の発掘調査が順調に進められております。

丑子遺跡の発掘調査では、縄文時代から中・近世に及ぶ多くの遺構・遺物が発見され、弥生時代後期から平安時代までの竪穴住居40軒からなる比較的長期間存続した集落であったことが分かりました。また、中世の堀が廻っていることから、15～16世紀頃の館があったことも判明しました。上細井五十嵐遺跡では、縄文時代と平安時代の竪穴住居が調査されたほか、浅間山の火山灰で埋もれた平安時代末の水田も見つかりました。赤城山南麓の台地上では、古代水田跡の発見例はほとんどないので、この地域の開発史を考える上では貴重な調査成果だと思われます。これらの調査の成果は、本地域の歴史を考える上で貴重なものであり、今後の研究資料のひとつとして役立つものと確信しております。

最後になりましたが、国土交通省関東地方整備局、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者の皆様には、発掘調査から本報告書刊行に至るまで多大なご指導・ご協力を賜りました。本書の刊行に際し、心から感謝申し上げますと共に、本書が歴史研究の資料として広く活用されることを願い、序といたします。

平成25年2月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 須田 榮 一

例 言

- 1 本書は、一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)による、亘子遺跡・上細井五十嵐遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 所在地 亘子遺跡 前橋市上細井町 422-1、422-3、423、424、427、428、432番地
上細井五十嵐遺跡 前橋市上細井町 491-1、491-2、496-1、496-2、497-1、498、499、500、501、502、503-1、506-2、506-3番地
- 3 事業主体 国土交通省関東地方整備局
- 4 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 調査期間・面積 亘子遺跡 平成21年1月1日～平成21年3月31日 6,246㎡
上細井五十嵐遺跡 平成20年12月2日～平成21年2月20日 7,042.08㎡
- 6 発掘調査体制は次の通りである。

亘子遺跡

発掘調査担当 主任専門員(総括) 坂口一 主任調査研究員 平井敦・高井佳弘・斎藤聡
遺跡掘削請負工事 株式会社シン技術コンサル
委託 地上測量・空中写真撮影 技研測量設計株式会社
自然科学分析 株式会社火山灰考古学研究所

上細井五十嵐遺跡

発掘調査担当 専門員(主任) 中隆之 調査研究員 大塚智央
遺跡掘削請負工事 須賀工業株式会社
委託 地上測量 株式会社シン技術コンサル
航空測量・空中写真撮影 技研測量設計株式会社
自然科学分析 パリノ・サーヴェイ株式会社

- 7 整理事業の期間と体制は次の通りである。

平成22年度 履行期間 平成22年4月1日～平成23年3月31日
整理期間 平成23年2月1日～平成23年3月31日
整理担当 主任調査研究員 斎藤聡 遺物写真撮影 補佐 佐藤元彦 保存処理 補佐 関 邦一

平成24年度 履行期間 平成24年4月1日～平成25年3月31日
整理期間 平成24年4月1日～平成24年11月30日
整理担当 主席調査研究員 高井佳弘 遺物写真撮影 補佐(統括) 佐藤元彦
保存処理 補佐(統括) 関 邦一

- 8 本書作成の担当者は次の通りである。

編集 主任調査研究員 斎藤聡 主席調査研究員 高井佳弘
執筆 資料統括 桜岡正信(遺物観察表:土師器・須恵器) 主席専門員 大西雅広(遺物観察表:中近世陶磁器類)
主席専門員 岩崎泰一(遺物観察表:石器・石製品) 主席専門員 谷藤保彦(遺物観察表:縄文土器・弥生土器)
主席調査研究員 高井佳弘(前記以外)

- 9 出土石器・石製品の石材同定については飯島静男氏(群馬県地質研究会会員)にお願いした。
- 10 発掘調査諸資料および出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 11 発掘調査および報告書作成に際しては、下記の方々・機関にご協力・ご指導をいただきました。記して感謝いたします。(敬称略・順不同)

群馬県教育委員会、前橋市教育委員会

凡 例

- 1 本文中に使用した方位は、総て国家座標(世界測地系)の第IX系を使用している。なお、座標北と真北との偏差は、庄子遺跡では台地部中央付近のX=47190、Y=-66750で東偏26°31.16"、上細井五十嵐遺跡ではB区中央付近のX=47250、Y=-66880で東偏26°34.29"である。
- 2 遺構断面図に記した数値は標高を表し、単位はmを用いた。
- 3 遺構・遺物実測図の縮尺率は原則として以下のとおりとしたが、最適と思われる縮尺に適宜変更した場合があるので、各図面のスケールを参照していただきたい。

遺構 竪穴住居・竪穴状遺構 1:60 竈 1:30

土坑・井戸 1:40

溝—平面図 1:100か1:40 断面図 1:40

遺物 土師器・須恵器・中世陶磁器・石器(打製石斧・凹石など)・石製品(板碑・砥石など) 1:3

須恵器・中世陶器の大型品、石製品(石臼など) 1:4か1:6

銅銭・石鏃 1:1

なお、1:3以外の縮尺の遺物は、遺物番号のあとに縮尺を記入してある。

- 4 本書の図版に使用したスクリーントーンは、次のことを示している。



- 5 遺構の主軸方位・走向は、竈のある竪穴住居の場合は竈のある方向を主軸方位とし、北から東西180°以内で、竈のない住居とそれ以外の遺構の場合は、長軸方向で北から東西90°以内を主軸方位とした。表記は北を基準とし、東に傾いた場合はN-○°-E、西に傾いた場合はN-○°-Wというように表記した。
- 6 竪穴住居、竪穴状遺構の規模は、主軸方向の長さ×もう一方の長さで表し、なるべく中央付近で計測した。床面積は周溝を含めた面積であり、その計測にはプランメーターを用い、3回計測してその平均値を採用した。
- 7 遺物観察表の凡例は遺物観察表の前(193ページ)に掲載した。
- 8 本書で掲載した地図は、下記のものを使用した。

国土地理院 地形図 1:25,000「前橋」「渋川」「大胡」「鼻毛石」

国土地理院 地勢図 1:200,000「長野」「宇都宮」

前橋市 1:2,500現形図

目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
挿図・表・写真目次	
第1章 調査に至る経過	1
第1節 上武道路について	1
第2節 上武道路と埋蔵文化財	1
第3節 調査に至る経過	2
第2章 調査の方法と経過	5
第1節 調査の方法	5
1 グリッドの設定	5
2 発掘調査の方法	5
第2節 調査の経過	8
1 丑子遺跡	8
2 上細井五十嵐遺跡	9
3 整理作業の概要と遺構名称の改訂	9
第3章 遺跡の位置と環境	10
第1節 地理的環境	10
第2節 歴史的環境	10
第3節 基本土層	19
第4章 丑子遺跡の調査の成果	22
第1節 成果の概要	22
第2節 竪穴住居	24
第3節 竪穴状遺構	103
第4節 土坑	104
第5節 井戸	134
第6節 堀	139
第7節 溝	142
第8節 ビット	145
第9節 遺構外出土の遺物	147
第10節 旧石器時代の調査	149
第5章 上細井五十嵐遺跡の調査の成果	151
第1節 成果の概要	151
第2節 竪穴住居	152
第3節 土坑	160
第4節 溝	163
第5節 水田	166
第6節 遺構外出土の遺物	170
第7節 旧石器時代の調査	174
第6章 自然科学分析	175
第1節 丑子遺跡の自然科学分析	175
1 丑子遺跡におけるテフラ分析	175
2 丑子遺跡におけるプラント・オパール分析	176
第2節 丑子遺跡と東田之口遺跡の火山灰分析	179
第3節 上細井五十嵐遺跡の自然科学分析	183
第7章 総括	189
1 丑子遺跡の調査の成果と意義	189
2 上細井五十嵐遺跡の調査の成果と意義	192
遺物観察表	194
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	上武道路と遺跡の位置	1	第63図	27号住居竈平面図	83
第2図	上武道路8工区の遺跡	3	第64図	28号住居平面図、竈平面図、出土遺物	84
第3図	上武道路調査測量グリッド設定図	6	第65図	29号住居平面図	85
第4図	中小グリッド設定図	7	第66図	29号住居竈平面図、出土遺物	86
第5図	周辺地形分相図	11	第67図	31号住居平面図、竈平面図、出土遺物	87
第6図	庄子遺跡・上畑井五十嵐遺跡調査区周辺図	12	第68図	32号住居平面図	88
第7図	周辺の遺跡	14	第69図	32号住居竈平面図、出土遺物	89
第8図	基本土層調査地点	19	第70図	33号住居平面図、竈平面図	90
第9図	基本土層柱状図	20	第71図	33号住居出土遺物	91
第10図	1号住居平面図、出土遺物	25	第72図	34号住居平面図、出土遺物	92
第11図	2号住居平面図	25	第73図	35号住居平面図	93
第12図	3号住居平面図	26	第74図	35号住居竈平面図、出土遺物(1)	94
第13図	4号住居平面図、出土遺物	27	第75図	35号住居出土遺物(2)	95
第14図	5号住居平面図	29	第76図	36号住居平面図、出土遺物(1)	96
第15図	5号住居掘方平面図、貯蔵穴断面図、竈平面図	30	第77図	36号住居出土遺物(2)	97
第16図	5号住居出土遺物	31	第78図	37号住居平面図	97
第17図	6号住居平面図	32	第79図	38号住居平面図	98
第18図	6号住居掘方平面図、竈平面図	33	第80図	38号住居掘方平面図、出土遺物	99
第19図	6号住居出土遺物	34	第81図	39号住居平面図、出土遺物	100
第20図	7号住居平面図	35	第82図	41号住居平面図、出土遺物(1)	101
第21図	7号住居掘方平面図、竈平面図、出土遺物(1)	36	第83図	41号住居出土遺物(2)	102
第22図	7号住居出土遺物(2)	37	第84図	42号住居平面図	102
第23図	8号住居平面図、竈平面図	38	第85図	1号竈穴状遺構(左)・2号竈穴状遺構(右)平面図	103
第24図	8号住居掘方平面図、出土遺物	39	第86図	1・10・12号土坑平面図、1号土坑出土遺物	109
第25図	9号住居平面図	41	第87図	11・14・15・17・18号土坑平面図、 15・17・18号土坑出土遺物	110
第26図	9号住居掘方平面図、竈平面図	42	第88図	13・21～23・82号土坑平面図	111
第27図	9号住居出土遺物(1)	43	第89図	21～22号土坑断面図、19・20・24・26号土坑平面図、 21・23号土坑出土遺物	112
第28図	9号住居出土遺物(2)	44	第90図	25・27・29～32号土坑平面図、27号土坑出土遺物	113
第29図	10号住居平面図、竈平面図、出土遺物(1)	45	第91図	33号土坑平面図、出土遺物	114
第30図	10号住居出土遺物(2)	46	第92図	34～41号土坑平面図、34・38号土坑出土遺物	115
第31図	11号住居平面図	47	第93図	42～44・46・48・49号土坑平面図	116
第32図	11号住居掘方平面図、竈平面図、出土遺物	48	第94図	50～53・55号土坑平面図	117
第33図	12号住居貯蔵穴・P5断面図、1号竈平面図、出土遺物(1)	51	第95図	54・56号土坑平面図	118
第34図	12号住居出土遺物(2)	52	第96図	57～59・61号土坑平面図、56号土坑出土遺物	119
第35図	12号住居出土遺物(3)	53	第97図	62～66号土坑平面図、66号土坑出土遺物	120
第37図	12号住居出土遺物(4)	54	第98図	67～70・72・73号土坑平面図、68・73号土坑出土遺物	121
第38図	13号住居平面図	55	第99図	74～76号土坑平面図、74・75号土坑出土遺物	122
第39図	13号住居平面図、竈平面図	56	第100図	77～80号土坑平面図、78号土坑出土遺物	123
第40図	13号住居貯蔵穴断面図、出土遺物	57	第101図	81・84号土坑平面図、80号土坑出土遺物	124
第41図	14号住居平面図、竈平面図	58	第102図	82・83・86～88号土坑平面図、87号土坑出土遺物	125
第42図	15号住居平面図、出土遺物	60	第103図	89・90号土坑平面図、89号土坑出土遺物	126
第43図	16号住居平面図、竈平面図、出土遺物	61	第104図	92～95号土坑平面図、90・93・94号土坑出土遺物	127
第44図	17号住居平面図	63	第105図	96号土坑平面図、出土遺物	128
第45図	17号住居掘方平面図、竈平面図	64	第106図	97～101号土坑平面図、97号土坑出土遺物	129
第46図	17号住居出土遺物	65	第107図	102～107号土坑平面図、104号土坑出土遺物	130
第47図	18号住居平面図、竈平面図、出土遺物	66	第108図	108～111、113～115号土坑平面図	131
第48図	19号住居平面図、竈平面図、出土遺物	67	第109図	116・117号土坑平面図、114・116・117号土坑出土遺物	132
第49図	20号住居平面図、出土遺物	69	第110図	118・120・124号土坑平面図、118・120号土坑出土遺物	133
第50図	21号住居平面図	70	第111図	1・2号井戸平面図、2号井戸出土遺物	134
第51図	21号住居掘方平面図	71	第112図	3・4号井戸平面図、4号井戸出土遺物	135
第52図	22号住居平面図	72	第113図	5・6号井戸平面図、出土遺物	136
第53図	22号住居掘方平面図、竈平面図、出土遺物	73	第114図	7・8号井戸平面図、7号井戸出土遺物	137
第54図	23号住居平面図、竈平面図、出土遺物	74	第115図	9～12号井戸平面図	138
第55図	24号住居平面図	75	第116図	1・2号竈平面図	140
第56図	24号住居断面図、1・2号竈平面図	76	第117図	1号堀、2号堀出土遺物(1)	141
第57図	24号住居掘方平面図	77	第118図	2号堀出土遺物(2)	142
第58図	24号住居出土遺物(1)	78	第119図	1号溝平面図	143
第59図	24号住居出土遺物(2)	79	第120図	2・3号溝平面図	144
第60図	25号住居平面図、出土遺物	80	第121図	4号溝平面図、出土遺物	145
第61図	26号住居平面図、竈平面図	81	第122図	ビット都平面図	146
第62図	27号住居平面図、出土遺物	82			

第123図	遺構外出土の遺物(1)	147
第124図	遺構外出土の遺物(2)	148
第125図	遺構外出土の遺物(3)	149
第126図	瓦子遺跡石器時代調査坑・低地部トレンチ配置図	150
第127図	B-1号住居断面図	152
第128図	B-1号住居断平面図、出土遺物	153
第129図	B-2号住居断面図	154
第130図	B-2号住居断平面図、出土遺物	155
第131図	C-1号住居断面図、炉断面図	156
第132図	C-1号住居出土遺物	157
第133図	C-2号住居断面図、出土遺物	158
第134図	C-3号住居断面図	159
第135図	C-3号住居断平面図	160
第136図	B-1~4号土坑断面図、B-1号土坑出土遺物	161
第137図	B-5・6、C-1・2号土坑断面図、B-6・C-2号土坑出土遺物	162
第138図	C-3・4号土坑断面図、出土遺物	163

第139図	A-3号溝断面図	164
第140図	C-1・2号溝断面図	165
第141図	C-4号溝断面図	166
第142図	A区As-B下水田平面図	167
第143図	A区As-B下水田出土遺物	169
第144図	A区田間川・遺構外出土遺物、B区遺構外出土遺物(1)	171
第145図	B区遺構外出土遺物(2)	172
第146図	B区遺構外出土遺物(3)、C区遺構外出土遺物(1)	173
第147図	C区遺構外出土遺物(2)	174
第148図	土層井五十嵐遺跡石器時代調査トレンチ配置図	174
第149図	瓦子遺跡におけるプラント・オパール分析結果	178
第150図	瓦子遺跡西側の土層柱状図	182
第151図	東田之口遺跡7号トレンチ(150-635)の土層柱状図	182
第152図	1地点模式柱状図および試料採取位置	183
第153図	植物珪酸体含量	186
第154図	瓦子遺跡・土層井五十嵐遺跡とその周辺の地形	190
第155図	瓦子遺跡の館に関連する遺構	191

目 次

第1表	上武道路8工区調査遺跡一覧表	3
第2表	遺構名称の改訂	9
第3表	周辺の遺跡一覧表(1)	15
第4表	周辺の遺跡一覧表(2)	16
第5表	周辺の遺跡一覧表(3)	17
第6表	瓦子遺跡土坑一覧表(1)	107
第7表	瓦子遺跡土坑一覧表(2)	108
第8表	ビット一覧表	146
第9表	遺構外出土石器類石材組成一覧	147
第10表	遺構外出土石器類石材組成一覧	147
第11表	遺構外出土割片石材組成一覧	147
第12表	C-1号住居石器類石材組成一覧	157
第13表	C-1号住居割片石材組成一覧	157
第14表	土層井五十嵐遺跡土坑一覧表	161
第15表	遺構外出土縄文土部分類表	170
第16表	遺構外出土石器類石材組成一覧	170
第17表	遺構外出土割片石材組成一覧	170
第18表	テララ検出分析結果	176
第19表	瓦子遺跡におけるプラント・オパール分析結果	178
第20表	テララ検出分析結果	181
第21表	屈折率測定結果	181
第22表	花粉分析結果	185
第23表	植物珪酸体含量	185
第24表	出土遺物観察表(瓦子遺跡1)	194

第25表	出土遺物観察表(瓦子遺跡2)	195
第26表	出土遺物観察表(瓦子遺跡3)	196
第27表	出土遺物観察表(瓦子遺跡4)	197
第28表	出土遺物観察表(瓦子遺跡5)	198
第29表	出土遺物観察表(瓦子遺跡6)	199
第30表	出土遺物観察表(瓦子遺跡7)	200
第31表	出土遺物観察表(瓦子遺跡8)	201
第32表	出土遺物観察表(瓦子遺跡9)	202
第33表	出土遺物観察表(瓦子遺跡10)	203
第34表	出土遺物観察表(瓦子遺跡11)	204
第35表	出土遺物観察表(瓦子遺跡12)	205
第36表	出土遺物観察表(瓦子遺跡13)	206
第37表	出土遺物観察表(瓦子遺跡14)	207
第38表	出土遺物観察表(瓦子遺跡15)	208
第39表	出土遺物観察表(瓦子遺跡16)	209
第40表	出土遺物観察表(瓦子遺跡17)	210
第41表	出土遺物観察表(瓦子遺跡18)	211
第42表	出土遺物観察表(土層井五十嵐遺跡1)	212
第43表	出土遺物観察表(土層井五十嵐遺跡2)	213
第44表	出土遺物観察表(土層井五十嵐遺跡3)	214
第45表	出土遺物観察表(土層井五十嵐遺跡4)	215
第46表	出土遺物観察表(土層井五十嵐遺跡5)	216
第47表	出土遺物観察表(土層井五十嵐遺跡6)	217

写真目次

PL. 1	1	遺跡周辺の航空写真(1961年・国土地理院、上が北、中央上やや左寄りが遺跡)
PL. 2	1	遺跡上空から(上が北、中央やや右が遺跡)
	2	遺跡遠景(西から、中央奥が遺跡)
PL. 3	1	遺跡遠景(北から、左側中央付近が遺跡)
	2	遺跡遠景(南から、中央やや右が遺跡)
PL. 4	1	調査区全景(上空から、左上が北)
	2	調査区全景(南西から、遠景は赤城山)
PL. 5	1	調査区全景(北東から)

PL. 6	1	調査区全景(南東から、遠景は椿名山)
	2	調査区全景(北西から)
	3	1号住居全景(南西から)
	4	1号住居屋方全景(南西から)
	5	2号住居全景(北東から)
	6	2号住居屋方全景(北東から)
PL. 7	1	2号住居貯蔵穴全景(北東から)
	2	3号住居全景(南東から)
	3	3号住居屋方全景(南東から)

	4	4号住居掘方全景(南東から)		5	16号住居貯蔵穴全景(北東から)
	5	4号住居貯蔵穴全景(南から)		6	16号住居遺物出土状態(南西から)
	6	5号住居全景(北東から)		7	17号住居全景(西から)
	7	5号住居掘方全景(北東から)		8	17号住居掘方全景(西から)
	8	5号住居電線全景(北東から)	PL. 16	1	17号住居電線全景(南から)
PL. 8	1	5号住居掘方全景(北東から)		2	17号住居掘方全景(南から)
	2	5号住居貯蔵穴全景(北東から)		3	17号住居貯蔵穴全景(南から)
	3	6号住居全景(南西から)		4	18号住居掘方全景(南西から)
	4	6号住居掘方全景(南西から)		5	18号住居掘方全景(南西から)
	5	6号住居電線全景(南西から)		6	19号住居全景(南西から)
	6	6号住居掘方全景(南西から)		7	19号住居掘方全景(南西から)
	7	6号住居貯蔵穴全景(南西から)		8	19号住居掘方全景(西から)
	8	6号住居貯蔵穴遺物出土状態(北東から)	PL. 17	1	20号住居掘方全景(南西から)
PL. 9	1	7号住居全景(南西から)		2	20号住居貯蔵穴全景(西から)
	2	7号住居掘方全景(南西から)		3	21号住居全景(北東から)
	3	7号住居貯蔵穴全景(南西から)		4	21号住居掘方全景(北東から)
	4	7号住居貯蔵穴全景(北西から)		5	21号住居貯蔵穴全景(南西から)
	5	7号住居炭化材・遺物出土状態(南西から)		6	22号住居全景(西から)
	6	7号住居炭化材出土状態(北東から)		7	22号住居掘方全景(西から)
	7	8号住居全景(南西から)		8	22号住居電線全景(西から)
	8	8号住居掘方全景(南西から)	PL. 18	1	22号住居掘方全景(西から)
PL. 10	1	8号住居電線全景(南西から)		2	22号住居貯蔵穴全景(西から)
	2	8号住居貯蔵穴全景(南西から)		3	23号住居掘方全景(北西から)
	3	9号住居全景(西から)		4	24号住居全景(南から)
	4	9号住居掘方全景(西から)		5	24号住居掘方全景(南から)
	5	9号住居電線全景(西から)		6	24号住居1号貯蔵穴全景(北西から)
	6	9号住居掘方全景(西から)		7	24号住居1号貯蔵穴遺物出土状態(北西から)
	7	9号住居貯蔵穴全景(西から)		8	24号住居2号貯蔵穴全景(北西から)
	8	9号住居遺物出土状態(北西から)	PL. 19	1	24号住居2号貯蔵穴(南西から)
PL. 11	1	10号住居全景(南西から)		2	24号住居貯蔵穴遺物出土状態(西から)
	2	10号住居掘方全景(南西から)		3	24号住居遺物No.221出土状態(南から)
	3	10号住居電線全景(南西から)		4	25号住居全景(南から)
	4	10号住居掘方全景(南西から)		5	25号住居貯蔵穴全景(西から)
	5	10号住居貯蔵穴全景(南西から)		6	26号住居全景(南西から)
	6	10号住居遺物No.1出土状態(南から)		7	26号住居掘方全景(南西から)
	7	11号住居全景(南西から)		8	26号住居電線全景(南西から)
	8	11号住居掘方全景(南西から)	PL. 20	1	26号住居掘方全景(南西から)
PL. 12	1	11号住居電線全景(南西から)		2	27号住居全景(西から)
	2	11号住居掘方全景(南西から)		3	27号住居電線全景(西から)
	3	11号住居貯蔵穴全景(南西から)		4	27号住居掘方全景(西から)
	4	12号住居全景(南東から)		5	27号住居貯蔵穴全景(西から)
	5	12号住居全景(南西から)		6	28号住居全景(北西から)
	6	12号住居1号貯蔵穴全景(南から)		7	28号住居掘方全景(北西から)
	7	12号住居2号貯蔵穴全景(南から)		8	28号住居電線全景(北西から)
	8	12号住居貯蔵穴全景(南東から)	PL. 21	1	28号住居貯蔵穴全景(北西から)
PL. 13	1	12号住居断面A-A' (南東から)		2	29号住居掘方全景(西から)
	2	12号住居As-C堆積状態・A-A' 東端部(南東から)		3	29号住居電線全景(西から)
	3	12号住居P2断面D-D' (南東から)		4	29号住居掘方全景(西から)
	4	12号住居P5全景(北西から)		5	29号住居貯蔵穴全景(西から)
	5	12号住居P5上段土(北西から)		6	31号住居全景(北西から)
	6	12号住居P5断面H-H' (南西から)		7	31号住居掘方全景(北西から)
	7	13号住居全景(南西から)		8	31号住居掘方全景(北西から)
	8	13号住居掘方全景(南西から)	PL. 22	1	31号住居貯蔵穴全景(北西から)
PL. 14	1	13号住居電線全景(南西から)		2	32号住居全景(南西から)
	2	13号住居掘方全景(南西から)		3	32号住居電線全景(南西から)
	3	13号住居貯蔵穴全景(南西から)		4	32号住居1号貯蔵穴全景(南西から)
	4	14号住居全景(南西から)		5	32号住居2号貯蔵穴全景(南西から)
	5	14号住居電線全景(南西から)		6	33号住居全景(北東から)
	6	14号住居貯蔵穴全景(南西から)		7	33号住居掘方全景(北東から)
	7	15号住居全景(南西から)		8	33号住居電線全景(北東から)
	8	15号住居掘方全景(南西から)	PL. 23	1	33号住居掘方全景(北東から)
PL. 15	1	15号住居貯蔵穴全景(南東から)		2	33号住居貯蔵穴全景(北東から)
	2	15号住居貯蔵穴全景(北西から)		3	34号住居全景(南東から)
	3	16号住居全景(南西から)		4	34号住居掘方全景(南東から)
	4	16号住居電線全景(北東から)		5	35号住居掘方全景(北西から)

	6	35号住居雑全景(北西から)	PL. 30	1	42号土坑全景(南西から)
	7	35号住居雑掘方全景(北西から)		2	43号土坑全景(南から)
	8	36号住居全景(南東から)		3	46号土坑全景(北東から)
PL. 24	1	36号住居掘方全景(南西から)		4	49号土坑全景(北西から)
	2	37号住居全景(南西から)		5	51号土坑全景(南から)
	3	38号住居全景(南から)		6	52・53号土坑全景(南西から)
	4	38号住居掘方全景(南から)		7	54号土坑全景(北東から)
	5	38号住居炭化物・焼土出土状態(西から)		8	55号土坑全景(北西から)
	6	39号住居全景(東から)	PL. 31	1	56号土坑全景(南から)
	7	39号住居雑全景(東から)		2	63号土坑全景(南から)
	8	39号住居貯蔵穴全景(東から)		3	64号土坑全景(南西から)
PL. 25	1	41号住居全景(南西から)		4	67号土坑全景(北東から)
	2	1号竪穴状遺構全景(東から)		5	68号土坑全景(西から)
	3	1号竪穴状遺構掘方全景(東から)		6	69号土坑全景(東から)
	4	2号竪穴状遺構全景(南東から)		7	70号土坑、6号井戸全景(南西から)
	5	2号竪穴状遺構掘方全景(南東から)		8	72・73号土坑全景(南西から)
	6	1号土坑全景(南西から)	PL. 32	1	74・75号土坑全景(西から)
	7	5号土坑全景(南西から)		2	76号土坑全景(南から)
	8	9号土坑全景(南西から)		3	33・78号土坑全景(東から)
PL. 26	1	2号土坑全景(南東から)		4	79号土坑全景(南西から)
	2	3号土坑全景(南西から)		5	80号土坑全景(北西から)
	3	4号土坑全景(南西から)		6	81号土坑全景(南東から)
	4	6号土坑全景(南西から)		7	82号土坑全景(南東から)
	5	7号土坑全景(南西から)		8	83号土坑全景(南東から)
	6	8号土坑全景(南東から)	PL. 33	1	84号土坑全景(北東から)
	7	10号土坑全景(西から)		2	87・88号土坑全景(南西から)
	8	11号土坑全景(北西から)		3	89号土坑全景(北西から)
	9	13号土坑全景(北西から)		4	89号土坑全景(南東から)
	10	17号土坑全景(東から)		5	89号土坑全景(南西から)
	11	24号土坑全景(東から)		6	92・93号土坑全景(南西から)
	12	33号土坑全景(南東から)		7	94号土坑全景(南西から)
	13	34号土坑全景(南から)		8	95号土坑全景(南西から)
	14	35号土坑全景(南西から)	PL. 34	1	96号土坑全景(東から)
	15	44号土坑全景(南西から)		2	96号土坑全景(北から)
PL. 27	1	50号土坑全景(南西から)		3	96号土坑断面南半部(東から)
	2	57号土坑全景(南西から)		4	96号土坑断面北半部(東から)
	3	58号土坑全景(北東から)		5	96号土坑断面北端部拡大(東から)
	4	59・61号土坑、5号井戸全景(東から)		6	97号土坑全景(南東から)
	5	62号土坑全景(西から)		7	101号土坑全景(南西から)
	6	65号土坑全景(南西から)		8	102号土坑全景(東から)
	7	66号土坑全景(南西から)	PL. 35	1	102号土坑掘出土状態(東から)
	8	77号土坑全景(南西から)		2	103号土坑全景(南東から)
	9	86号土坑全景(南東から)		3	105号土坑全景(南西から)
	10	90号土坑全景(北から)		4	106号土坑全景(北西から)
	11	98号土坑全景(北西から)		5	107号土坑全景(北西から)
	12	99号土坑全景(北西から)		6	108・109・110号土坑全景(南西から)
	13	100号土坑全景(南西から)		7	111号土坑全景(東から)
	14	114号土坑全景(南西から)	PL. 36	1	113号土坑全景(北東から)
	15	117号土坑全景(北西から)		2	115号土坑全景(南西から)
PL. 28	1	12号土坑全景(南東から)		3	116号土坑全景(南西から)
	2	15号土坑全景(南東から)		4	118号土坑全景(北西から)
	3	17号土坑全景(南東から)		5	120号土坑全景(西から)
	4	18号土坑全景(西から)		6	124号土坑全景(北西から)
	5	19号土坑全景(東から)		7	1号井戸全景(南西から)
	6	19・25・27・31号土坑全景(北東から)		8	2号井戸全景(南から)
	7	20号土坑全景(南西から)	PL. 37	1	3号井戸全景(北から)
	8	21～23号土坑全景(南東から)		2	4号井戸全景(南西から)
PL. 29	1	26号土坑全景(西から)		3	7号井戸掘出土状態(南西から)
	2	32号土坑全景(南東から)		4	7号井戸断面(南西から)
	3	36号土坑全景(南西から)		5	8号井戸全景(北西から)
	4	37号土坑全景(南西から)		6	9号井戸全景(西から)
	5	38号土坑全景(南西から)		7	11号井戸全景(南から)
	6	39号土坑全景(南西から)		8	12号井戸全景(西から)
	7	40号土坑全景(南西から)	PL. 38	1	10号井戸全景(南から)
	8	41号土坑全景(南西から)		2	10号井戸断面(南西から)

- 3 1号堀全景(南西から)
4 館全景(上空から、左上が北)
- PL. 39 1 館全景(南西から)
2 館全景(北東から)
- PL. 40 1 館全景(南東から)
2 館全景(北西から)
- PL. 41 1 1号堀全景(北東から)
2 1号堀全景(南東から)
3 2号堀全景(南西から)
4 2号堀全景(北東から)
5 1号溝全景(南西から)
6 2号溝全景(南西から)
- PL. 42 1 3号溝全景(南西から)
2 4号溝全景(南西から)
3 プラントオパール分析試料採取地点
4 台地部基本土層
5 巨石器調査状況(北西から)
- PL. 43 1 B-1号住居遺物出土状態全景(北西から)
2 B-1号住居全景(北西から)
3 B-1号住居堀方全景(南西から)
4 B-1号住居堀方全景(北西から)
5 B-2号住居全景(北西から)
6 B-2号住居堀方全景(北西から)
7 B-2号住居堀方全景(南から)
8 B-2号住居貯蔵穴全景(南から)
- PL. 44 1 C-1号住居遺物出土状態全景(南から)
2 C-1号住居全景(南から)
3 C-1号住居堀方全景(南から)
4 C-1号住居堀方全景(南西から)
5 C-2号住居全景(南西から)
6 C-2号住居堀方全景(南西から)
7 C-2号住居遺物出土状態(北西から)
8 C-3号住居全景(北西から)
- PL. 45 1 C-3号住居堀方全景(北西から)
2 C-3号住居貯蔵穴全景(南から)
3 B-1号土坑全景(南から)
4 B-2号土坑全景(南東から)
5 B-3号土坑全景(西から)
6 B-4号土坑全景(西から)
7 B-5号土坑全景(東から)
8 B-6号土坑全景(東から)
- PL. 46 1 C-1号土坑全景(南から)
2 C-2号土坑全景(南から)
3 C-3号土坑全景(南から)
4 C-4号土坑全景(南から)
5 A-3号溝全景(南西から)
6 C-1・2号溝全景(北西から)
7 C-1号溝全景(北西から)
- PL. 47 1 C-2号溝全景(北西から)
2 C-2号溝全景(東から)
3 C-4号溝全景(北東から)
4 A区As-B下水田全景(上が北東)
- PL. 48 1 A区As-B下水田全景(北西から、葦子遺跡を望む)
2 A区As-B下水田全景(南東から)
- PL. 49 1 A区As-B下水田全景(北東から)
2 A区As-B下水田全景(北西から)
- PL. 50 1 A区As-B下水田南東隅部(南から)
2 A区As-B下水田東端中部(南東から)
3 A区As-B下水田北東部(南から)
4 A区As-B下水田北東隅部(東から)
5 B区縄文包含層遺物出土状態(北から)
6 C区縄文包含層遺物出土状態(北東から)
7 B区旧石器時代調査1号トレンチ(北東から)
8 B区旧石器時代調査2号トレンチ(北東から)
- PL. 51 1・4・5・6号住居出土遺物
- PL. 52 7号住居出土遺物(1)
- PL. 53 7号住居出土遺物(2)、8・9号住居出土遺物
- PL. 54 10・11号住居出土遺物、12号住居出土遺物(1)
- PL. 55 12号住居出土遺物(2)
- PL. 56 12号住居出土遺物(3)、15・16号住居出土遺物、17号住居出土遺物(1)
- PL. 57 17号住居出土遺物(2)、18・19・20・22号住居出土遺物、24号住居出土遺物(1)
- PL. 58 24号住居出土遺物(2)、27・28号住居出土遺物
- PL. 59 29・32・33・34号住居出土遺物
- PL. 60 35・39号住居出土遺物
- PL. 61 36・41号住居出土遺物
- PL. 62 27・33・56・68・74・78・80号土坑出土遺物
- PL. 63 89・93・96・97・114・116・120号土坑、7号井戸出土遺物、2号堀出土遺物(1)
- PL. 64 2号堀出土遺物(2)、4号溝出土遺物、遺構外出土遺物
- PL. 65 B-1・B-2・C-1号住居出土遺物
- PL. 66 C-2号住居、B-1・B-6・C-2・C-3・C-4号土坑、A区旧河川、A区遺構外出土遺物、B区遺構外出土遺物(1)
- PL. 67 B区遺構外出土遺物(2)
- PL. 68 C区遺構外出土遺物

第1章 調査に至る経過

第1節 上武道路について

上武道路は一般国道17号の交通混雑に対応するために計画された大規模バイパスで、埼玉県熊谷市で深谷バイパスから分岐、群馬県前橋市田口町で現道に接続する延長40.5kmの道路である。現道の西には、前橋澁川バイパス、その先には鯉沢バイパス、また計画では上信自動車道が続いて、県北西部の新たな交通幹線調整備事業として期待されている。平成10年には、前橋澁川バイパスを含めて地域高規格道路「熊谷澁川連絡道路」として計画路線の指定を受け、群馬県では「幹線交通乗り入れ30分構想」の中で主要幹線のひとつに位置づけられている。

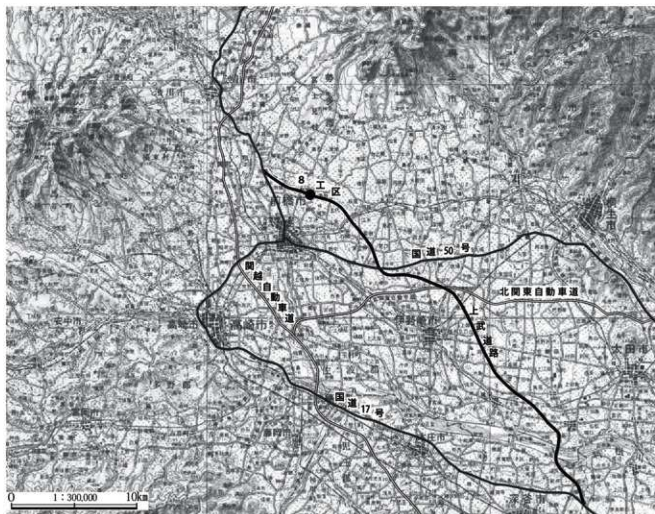
上武道路の建設事業は、昭和45年度から着手され、平

成4年2月までには起点から国道50号までの延長27.4km区間が供用された。その後、供用区間が延伸するとともに交通量は増大し、平成元年度に着手された国道50号から前橋市上泉町までの4.9km区間(7工区)が、平成20年6月に暫定2車線で供用された。

一般国道17号(上武道路)改築事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)が対象とする8工区は、平成17年度に事業が着手され、平成24年度に主要地方道前橋赤城線までの4.7km区間の暫定開通を果たし、全線開通までの最終3.5km区間の発掘調査と工事が進められている。

第2節 上武道路と埋蔵文化財

上武道路が通過する地域は、群馬県内でも有数の埋蔵



第1図 上武道路と遺跡の位置 国土地理院1/200000地勢図「宇都宮」平成18年発行を縮小して使用

文化財包蔵地の多い地域である。群馬県は、昭和48年に文化財保護室を文化財保護課に拡充して調査にあたり、昭和53年度からは財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（現公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）が調査事業を委託して、現在に至っている。

上武道路の建設事業は起点側から段階的に進められてきた。その工程は概ね①埼玉県境から国道50号まで、②国道50号から前橋市上泉町まで、③前橋市上泉町から前橋市田口町の現国道17号までの3つの区間に分けることができ、現在は③の中間まで供用が開始されている。

埼玉県境から国道50号までの区間では、35箇所の遺跡の発掘調査が行われ、調査の成果は26冊の発掘調査報告書として刊行されている。この区間の事業が完了した平成7年には、埋蔵文化財調査の成果をより広く公開するため、冊子総集編「地域をつなぐ 未来へつなぐ—上武道路埋蔵文化財22年の軌跡—」が刊行された。この総集編では、「弥生時代の開拓者」といった平野部での発掘調査や「芳野」の黒書土器出土で話題となった古代勢多部の芳賀郷、東山道駅路のひとつにも推定されていた「あずま道」など、この地域の歴史的課題に対する検討の結果がまとめられており、今後取り組むべき考古学的課題も特記されている。

国道50号から前橋市上泉町までは7工区にあたる。ここでは17箇所の遺跡が発掘調査の対象となり、16冊の発掘調査報告書が刊行されている。この区間の発掘調査では、荒砥川の東で検出された古墳時代の集落が周辺の今井神社古墳や大室古墳群の築造と関連する可能性があること、荒砥前田Ⅱ遺跡では県内でも希少な巴形銅器破片が出土したこと、女塚の調査では浅間粕川テフラが確認されたことで開削年代を特定する手がかりが得られたこと等が成果としてあげられている。荒砥川の西では、帯状低地に分断された台地ごとに縄文時代前期の集落が立地し、旧石器時代の遺物も暗色帯および上位の複数の土層から出土したこと等が注目されている。

前橋市上泉町から現国道17号までは8工区にあたり、31箇所の遺跡、約40万㎡が埋蔵文化財の調査対象となっている。工区名称は県道前橋赤城線を境界にして東が8-1工区、西が8-2工区と呼ばれている。調査は、平成18年度に8-1工区の東端から始められ、工事工程との調整により、平成23年度からは8-2工区の西端である

終点の田口下田尻遺跡の調査も開始された。

8-1工区は、これまでと同様に旧石器時代や縄文時代の遺構・遺物が多いのに対して、8-2工区では縄文時代より新しい遺跡の存在が続々と明らかになっている。遺跡の実態が未知数であった赤城白川流域の白川扇状地では、予想外の縄文時代の埋没谷や旧石器まで含まれていることが判明している。特に最西端の田口下田尻遺跡では整穴住居280棟が検出された大集落が調査され、従来の広瀬川低地帯の遺跡分布の理解を見直す資料が得られている。

これまで、群馬県内の上武道路関連で発掘調査を実施してきた遺跡には、J Kを冠した遺跡略号が付されている。Jが上武、Kが国道を指しており、南側の起点から順次算用数字を1から付している。8工区も、7工区の最終番号J K 52に続けて、この略号を記録類作成に際して使用している。J K 52だけは、上泉唐ノ堀遺跡が供用部分の関係で7工区と8工区で分割されたことから、8工区分の上泉唐ノ堀遺跡にはJ K 52 bをつけて7工区と区別している。また、J K 59鳥取塚遺跡は、水田遺構の存在が想定されていたが、試掘調査で遺構の無いことが判明し、発掘調査対象から除外したものの略号は欠番とせず、そのままとした。（第1表）また、当初関根遺跡群で一括されていた遺跡が田口下田尻遺跡、関根細ヶ沢遺跡、関根赤城遺跡に細分されたこと、平成23年度に開始された田口下田尻遺跡を先行して82としたことから、関根細ヶ沢遺跡は81 a、関根赤城遺跡は81 bとした。

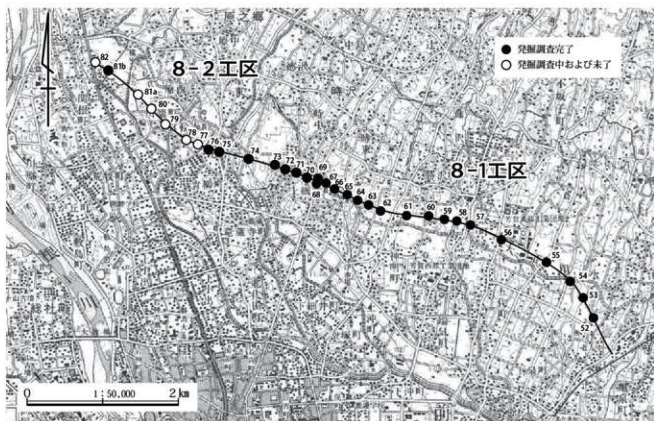
第3節 調査に至る経過

上武道路7工区の発掘調査は、上泉唐ノ堀遺跡を最後に平成16年度末で終了した。その後の工事は順調で、県道前橋大胡線までの供用が間近に迫っていた。さらに同16年度には、国道17号の現道から西の前橋渋川バイパスが着工されたことから、8工区は、開通部分と前橋渋川バイパスとの間に残された格好となり、早期着工を待ち望む声一段と強まった。

8工区が建設に向けて動いたのは、平成18年度に入ってからである。国土交通省による路線測量、関係機関との調整や地元への協力要請を経て、用地取得等の工事着工準備が起点側から始まった。これまでの調査状況から

第1表 上武道路8工区調査遺跡一覧表

JKN	遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号	調査年度	報告書 発行年度
52b	上泉唐ノ廻道跡	前橋市 上泉町	00774	平成18・19・20年度	平成23年度
53	上泉新田塚道跡群	前橋市 上泉町	00775	平成18・19・20年度	平成23年度
54	上泉武田道跡	前橋市 上泉町	00773	平成19年度	平成24年度
55	五代砂留道跡群	前橋市 五代町	00772	平成19年度	平成23年度
56	芳賀東原市地遺跡	前橋市 五代町・鳥取町	00357	平成18・19・20年度	平成24年度
57	鳥取松合下遺跡	前橋市 鳥取町	00776	平成20年度	平成23年度
58	駒城道跡	前橋市 鳥取町	00041	平成19・20・21年度	平成23年度
59	鳥取塚田道跡	前橋市 勝沢町		調査除外	
60	堤道跡	前橋市 勝沢町	00034	平成20年度	平成24年度
61	小神明勝沢境道跡	前橋市 小神明町	00778	平成20年度	平成23年度
62	小神明富士塚道跡	前橋市 小神明町・上郷井町	00403	平成20・21年度	平成23年度
63	東田之口道跡	前橋市 上郷井町	00125	平成20年度	平成23年度
64	丸子道跡	前橋市 上郷井町	00134	平成20年度	平成24年度
65	上郷井五十嵐道跡	前橋市 上郷井町	00777	平成20・21年度	平成24年度
66	天王・東郷屋谷ノ道跡	前橋市 上郷井町	00131	平成20・21年度	
67		前橋市 富士見町	90094	平成20・21年度	
68		前橋市 上郷井町	00798	平成21年度	
69	上町・時沢西組屋谷ノ道跡	前橋市 富士見町	90097	平成21年度	平成24年度
70	王久保道跡	前橋市 上郷井町・富士見町	00794	平成21・24年度	平成24年度
71	新田上道跡	前橋市 上郷井町	00128	平成24年度	
72	上郷井中島道跡	前橋市 上郷井町	00787	平成21・24年度	
73	上郷井獅子山道跡	前橋市 上郷井町	00786	平成21・24年度	平成24年度
74	山王・柴道跡群	前橋市 青柳町	00795	平成21・22・23・24年度	
75	引切塚道跡	前橋市 青柳町	00434	平成24年度	
76	青柳宿上道跡	前橋市 青柳町	00325	平成24年度	
77	日輪寺諏訪前道跡	前橋市 日輪寺町		調査除外	
78	諏訪道跡	前橋市 日輪寺町	00144	調査除外	
79	川端根岸道跡	前橋市 川端町	00807	平成24年度	
80	川端山下(道東)道跡	前橋市 川端町	00808	平成24年度	
81a	関根榎ヶ沢道跡	前橋市 関根町	00802	平成24年度	
81b	関根赤城道跡	前橋市 関根町	00803	平成24年度	
82	田口下田尻道跡	前橋市 田口町	00804	平成23年度	



第2図 上武道路8工区の遺跡 国土地理院1/50000地形図「前橋」平成10年発行を使用

みて、埋蔵文化財が用地内にあることは明確であったことから、埋蔵文化財の発掘調査を実施するための調整がおこなわれた。

埋蔵文化財の発掘調査について実施に向けての協議が、国土交通省関東地方整備局長と群馬県教育委員会教育長、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長との間で行われ、平成18年2月16日付で「一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)の実施に関する協定書」(以下、「協定書」という。)が三者の間で締結された。これによって、群馬県教育委員会の調整を経て、埋蔵文化財の発掘調査を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が受託することとなった。

協定書では、協定の適用区間、発掘調査の実施場所・対象面積が示され、平成18年10月1日～平成29年3月31日に発掘調査を完了させることが明記された。なお、「協定書」は、平成18年6月20日付で、調査期間の開始を3ヶ月前倒しとする変更のための「変更協定書」が締結されて、現在に至っている。この「変更協定書」に基づいて、平成18年7月から東端の上泉唐ノ堀遺跡・上泉新田塚遺跡群の発掘調査が開始された。

また、各遺跡が発掘調査に入る前には、調査範囲と調査面積の確定、調査期間や経費算定のため、群馬県教育委員会文化財保護課により、平成18年4月25・26日、同年5月17・18日、同年8月11日、同年12月5～7日、平成19年8月16～27日、同年12月10～14日、平成21年1月6日～8日、同年4月20日～5月7日、同年9月25～29日、平成22年12月6～20日、平成23年5月12日、同年8月22日～24日、同年10月18日、の13回(23年度末現在)にわたって、8工区の試掘調査が実施された。

埴子遺跡・上細井五十嵐遺跡の試掘調査は平成19年12月10～14日に行われた(両遺跡の各地区の位置については、第8図参照)。その結果、埴子遺跡東側の低地部ではAs-軽石の堆積が確認され、その下面に水田の存在が想定された。さらに同遺跡の西側大部分を占める台地部では、古墳時代前期～奈良時代の竪穴住居が比較的濃密に分布することが確認された。上細井五十嵐遺跡では、東端の低地状の部分(のちにA区となる地区)で広くAs-B軽石が堆積していることが確認され、この下面に比較的広い範囲でAs-B下水田が存在することが確認された。その西側のやや高い地区(のちにB区となる地区)では、

縄文時代と思われる竪穴住居と、古墳～平安時代の遺物が確認された。その西側は、現状でも幅23～40mの浅い谷地形となっており、その東西と比べても一段低くなっている(B区とC区との間の地区)が、ここは試掘調査の結果、後世の削平と旧河川によって遺構面が消滅しており、本調査は不要と判断された。その西側は隣接する天王遺跡に向かって緩やかに上る斜面となる(のちにC区となる地区)。ここは狭面積なので試掘は行われなかったが、隣接する天王遺跡では、同じ時期に行った試掘調査で古墳時代の竪穴住居が確認されたので、この斜面にも遺構の存在することはほぼ確実であり、本調査が必要と判断された。すなわち、埴子遺跡・上細井五十嵐遺跡の両遺跡では、上細井五十嵐遺跡の西側に調査不要の部分がある以外は、低地部にはAs-B下水田が、台地やや高い地区では集落といった遺構がほぼ全域にわたって想定されたため、広い範囲で本調査が必要とされることとなった。調査対象面積は、埴子遺跡で6,246㎡、上細井五十嵐遺跡で7,042.08㎡である。

両遺跡の本調査は、上武道路8工区全体の調査・工事工程の中で調整され、翌平成20年度の後半に行われることとなったが、他の遺跡の調査期間の変更などの要因で数回の工程変更がなされ、実際には埴子遺跡は平成21年1月から、上細井五十嵐遺跡は平成20年12月から調査が開始されることになった。

第2章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

1 グリッドの設定

上武道路のⅡ期工事の部分については、発掘開始当初から統一したグリッドを設定することとし、以下のように大中小グリッドを設定した。グリッド設定には国土座標系を使用した。ただし、7工区は旧国土座標系＝日本測地系を用いてグリッド設定を行っているが、8工区からは新国土座標系＝世界測地系を用いることとしたので、両者のグリッドは直接接続しないため注意が必要である。

大グリッドは1km四方であり、これを第〇地区と呼称する。8工区については国土座標系 $X=45000$ 、 $Y=-63000$ を南東隅とした1km四方を第1地区とし、以後路線に沿った形で第3図のように地区を設定した。本報告書で報告する庄子遺跡、上細井五十嵐遺跡はいずれも第6地区に含まれる。中グリッドは一つの地区の内部を100m四方で区画したもので、これを〇区と呼称する。各地区の南東隅を1区とし、以後西に向かって2区、3区とし、10区、つまり1kmに達すると、1区の北側に戻りそこを11区とし、同様に西に向かって12区、13区……とする。以後それを繰り返して各地区の北西隅は100区となる。庄子遺跡は第4図にみるように、17区、18区、28区の3区にまたがり、上細井五十嵐遺跡は19区、29区、30区、40区の4区にまたがる形となっている。小グリッドはこの中グリッドの内部をさらに5m四方に区画するもので、第4図のように、中グリッド内を5m毎の碁盤目に区画し、南東隅から西に向かってA～T、北に向かって1～20とし、グリッド名称は中グリッドの区名と、小グリッドのアルファベットと数字を組み合わせ、5m四方の南東隅を代表させて、「18E15」というように表すことにした。平面図中ではこれを略して「18E15」というように表記している。本報告書ではこのグリッド名称を用いて各遺構の場所を表示するが、土坑やピットなどの小さい遺構の平面図などでは、それよりもさらに細かい単位で表示する必要があるものがある。その場

合は、小グリッドの中をさらに1m単位で分割したポイントで表し、そこが小グリッドのポイントから北・西方向にどれだけ離れているかを表記することにした。たとえば「18E15北1m西2m」のポイントは、小グリッドの「18E15」のポイントから北に1m、西に2m離れた位置であることを示している。

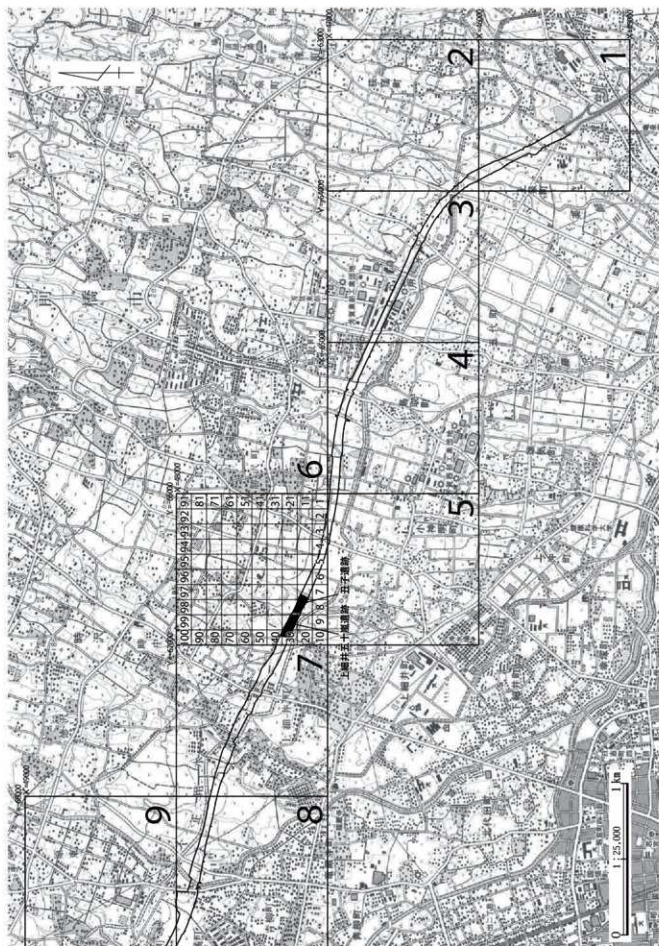
2 発掘調査の方法

調査区設定については、庄子遺跡は東側の低地部と西側大部分の台地部とに分かれるが、低地部はトレンチ調査を行ったところ、As-B軽石は見られるものの、傾斜がかなり強いため、水田等の遺構は存在しないと判断し、全域に対する調査は行わないことにした。ただし、この部分でプラントオパール分析を行ったところ、ある程度の量のイネが検出されたため、一部では水田が設けられていた可能性があることが判明した。その調査結果は第6章第1節(175ページ)に掲載したとおりである。台地部は全域を調査対象としたが、この間には道路・水路ではなく、全域を一度に調査することができたため、特に地区分けは行っていない。遺構番号は、地区分けを行っていないことに伴い、すべて遺構種毎の続き番号で表した。

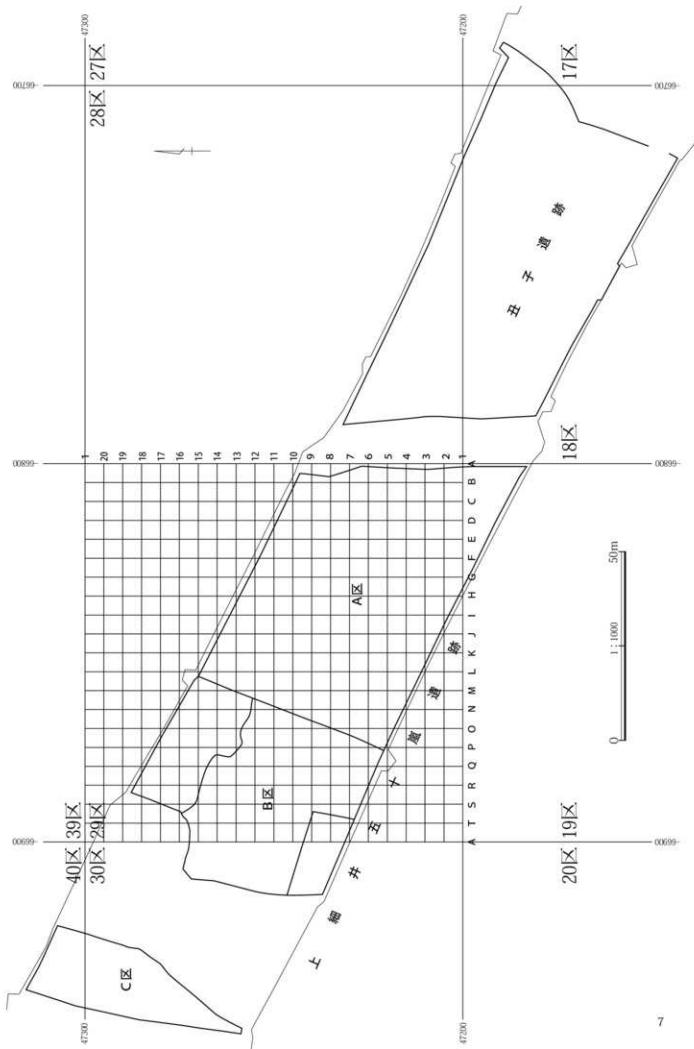
上細井五十嵐遺跡は4ページで前述したように、西側に調査対象地から除外された部分があり、また、東側には中央を南北に市道が横断していたため、第4図のように、A～Cの3地区に分けて調査を行った。遺構番号は、調査区毎に続き番号で表した。そのため、遺構番号の前にA～Cの区名を付して区別している。たとえば、A区の3号溝はA-3号溝、B区の2号住居はB-2号住居と呼称している。なお、B区は調査の過程で、中央部に旧河道が通り、そこには大きな礫が多数含まれていて遺構が存在しないことが判明した。そのため、遺構が残っていたのは北端部と西部部だけであり、この部分のみ調査を行うことにした。

両遺跡とも、現地における調査において採用した調査方法に特殊なものではなく、ごく標準的な方法を用いた。その概略は以下の通りである。

表土除去は基本的にバックホーを用いた。表土除去終



第3図 上式道路調査測量グリッド設定図 国土地理院1:25000地形図(前掲)・「大洲」平成22年発行、「大洲」平成14年発行、「錦毛石」昭和56年発行を使用



第4図 中小グリッド設定図

了後はジョレンを用いて遺構確認を行い、確認できた遺構について調査を行った。遺構の種類は主として竪穴住居であり、その他、土坑、溝、堀、水田、ピットなどであり、それぞれに適した方法を用いた。竪穴住居のセクション図については、柱子遺跡では基本的に竪の無い対辺のほぼ中央を結んだ線のみで図し、その他は必要に応じてエレベーション図を作成した。上細井五十嵐遺跡ではセクション図は十字形にセクションラインを設定して図した。上細井五十嵐遺跡で調査した水田については、As-Bの純層が10cm前後と厚い部分が多かったため、上部をジョレンで除去した後、移植ゴテで水田面を掘り広げた。この水田部については、花粉分析・イネ属同定とプラントオパール(植物珪酸体)分析を内容とした自然科学分析を実施し、その結果は第6章第3節(183ページ)に掲載したとおりである。

遺構の測量は、平面図は原則として測量業者に委託し、電子平板を用いてデジタル実測を行った。断面図は作業員により手実測を実施した。縮尺は1/10、1/20、1/40を遺構の性格に合わせて適宜使用した。上細井五十嵐遺跡の水田については、航空測量を実施し、測量時間の短縮を図った。写真撮影はデジタル写真を基本とし、重要なものについては6×7白黒を併用した。調査区の全景写真は業者に委託し、ラジコンヘリによる空中撮影を、柱子遺跡については2回、上細井五十嵐遺跡についてはA区で1回実施した。

遺構の調査終了後、ロームの堆積状態が良好な部分については、旧石器時代の調査を行った。柱子遺跡では台地部分でロームが良好に残っていたが、調査対象となるロームの層厚は薄いので、竪穴住居などで破壊されており、そのため、調査位置はそれらの遺構が少ない部分を選んで設定した。各調査坑の大きさは2×2mであり、それを40ヶ所設定し、ジョレンで掘り下げて調査を行ったが、各調査坑からは遺構・遺物とも見つからなかった。上細井五十嵐遺跡では、B区北側調査区で2×4mのトレンチを2ヶ所設けて調査を行ったが、遺構・遺物とも見つからなかった。

また、白川扇状地の形成時期などを明らかにする資料を得るため、柱子遺跡の西側の露頭と、東隣の東田之口遺跡とでテフラ分析を実施した。その結果については第6章第2節(179ページ)に収録した。

第2節 調査の経過

1 柱子遺跡

本遺跡の発掘調査は、平成21年1月上旬から事務手続き、環境整備を行い、1月19日より現地における調査を開始した。本遺跡は東側の低地部分と、西側大部分を占める台地部分に分かれるが、まず低地部分については、遺構の有無・内容を再確認するため、トレンチを4ヶ所設け、それを重機により掘削調査した。その結果、表土下1～2m位の層位にAs-B純層の堆積が認められるものの、各トレンチの中では傾斜が著しいため、水田と思われるような平坦面は認められないと判断した。そのため、この部分については全域に対する調査は行わないこととし、トレンチは29日に埋め戻した。ただし、低地部の一部に水田が存在した可能性は否定できず、その有無を確実に把握し、その年代も確定するため、3月5日に再度トレンチを掘削し、テフラとプラントオパール分析のための試料を採取した。第6章第1節(175ページ)にあげた自然科学分析は、このようにして採取した試料を基に分析を行ったものである。

台地部分については20日から重機を移動して表土除去を開始した。翌21日からは遺構確認も並行して実施した。この台地部分は遺構が多く、ほぼ全域に遺構が存在することが判明した。その数は、最終的には竪穴住居40軒、竪穴状遺構2基、土坑111基、井戸12基、溝4条、堀2条である。表土除去作業は28日に終了した。遺構確認で重複関係を精査したところ、竪穴住居に対して、堀と土坑、溝が比較的新しい遺構であることが判明し、しかも、堀はかなり大規模で調査に時間を要することから、まずこれらの遺構から調査に着手することとした。堀の掘り下げ作業は小型の重機も使い、2月5日から開始した。同時に、堀に囲まれた内側にある土坑・溝の調査を開始した。溝の掘り下げ作業は2月16日に終了したので、18日に堀とそれまでに調査した土坑・溝の全景を航空写真撮影した。この堀は実測作業等が終了した後、周囲の遺構調査の排土捨て場として利用した。

18日に空撮が終了した後、住居の調査を調査区東側から開始した。同時に土坑の調査も継続した。これらの遺

構の調査がほぼ終了した3月12日には、遺跡の全景を航空写真撮影した。さらに残った住居・土坑については3月28日まで継続して調査した。その間17日から、遺構調査が終了した部分より旧石器時代の調査を開始した。この調査は27日まで継続して行った。これによって遺構の調査はすべて終了した。機材などの撤収作業は27日から行い、翌28日からは調査区の埋め戻しを開始し、31日にはすべての作業を終了した。

2 上細井五十嵐遺跡

本遺跡の発掘調査は平成20年12月2日に開始し、まず、調査区の幅杭確認、草刈など、環境整備を行い、11日に東端のA区から重機を用いた表土除去作業を開始した。この地区では県教育委員会の試掘調査結果の通り、As-Bが広く堆積しているのが確認され、その下面に水田が想定されるため、その上面まで表土を除去し、さらにAs-B下面の水田の調査は15日より開始した。この区の表土除去は1月5日には終了し、翌6日からはC区に重機を移動し、この区の表土除去作業を行った。A区の水田面調査は溝の調査も並行して16日まで行い、19日には、航空写真撮影と航空写真測量を行った。その後A区では下層の遺構の確認や北壁・南壁の土層実測などを2月9日まで継続して行った。

C区では表土除去作業を1月14日まで行い、同時に遺構確認も行った。その結果、竪穴住居3軒、土坑4基、溝4条を確認し、19日からはそれら遺構の調査を開始し、2月3日にはほぼ終了したため全景写真を撮影した。さらにこの区の北側には縄文土器の包含層があることが確認され、その調査も一部並行して行って、その全景写真は翌4日に撮影し、遺物を取り上げた。C区はその後補助的な調査を10日まで行った。

B区は2月26日より表土除去を開始したが、中央部は大きく削平されて遺構面がなくなっており、遺構が残っているのは北端部と南西部の一部であることが判明したため、この部分のみ調査を行うこととした。遺構確認の結果、見つかった遺構は住居2軒、土坑6基であり、それらの調査は29日より開始した。また、北調査区ではロームがよく残っていたため、12日から旧石器時代の調査をトレンチ2ヶ所で行ったが、遺構遺物は出土せず、現地における調査は2月20日にすべて終了した。

3 整理作業の概要と遺構名称の改訂

整理作業はまず平成23年2月1日より平成23年3月31日まで2ヶ月間行い、その後1年間中断の後、平成24年4月1日より11月30日まで8ヶ月間、合計10ヶ月間実施した。遺構図面は点検・修正を行ったのち、デジタルトレースを行った。遺物については接合・復元、写真撮影、実測、トレースののち、トレース原稿をスキャニングしてデジタルデータとした。同時に遺物観察を行った。写真は基本的に遺構・遺物ともデジタル写真から編集を行ったが、一部フィルムから取り込んだものもある。それらの作業と並行して本文の執筆、土層注記や各種一覧表などを作成し、それらを併せてデジタル編集し、報告書原稿を作成した。

なお、整理の過程で、調査時と遺構名称の改訂が生じている。それらは第2表に示したとおりである。

第2表 遺構名称の改訂

上細井五十嵐遺跡	
調査時の名称	改訂した名称
30号住居	1号竪穴状遺構
40号住居	2号竪穴状遺構
16号土坑	1号井戸
28号土坑	2号井戸
45号土坑	3号井戸
47号土坑	4号井戸
60号土坑	5号井戸
71号土坑	6号井戸
85号土坑	39号住居貯蔵穴
91号土坑	7号井戸
112号土坑	8号井戸
119号土坑	9号井戸
121号土坑	10号井戸
122号土坑	11号井戸
123号土坑	12号井戸

上細井五十嵐遺跡	
調査時の名称	改訂した名称
A-1号井戸	欠番
C-3号溝	欠番

第3章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

亘子遺跡・上細井五十嵐遺跡は、群馬県の中央部に位置する赤城山南麓の末端近くにある。

赤城山は標高1828mの複合成層火山で、広大な裾野をもっていることで知られている。山の南側では、特に標高約500m付近よりも下部は傾斜が緩くなり、徐々に傾斜を下げて広瀬川低地帯へとつながっていく。この広瀬川低地帯は中世までの旧利根川の氾濫原である。この山麓地帯には山頂方向から幾筋もの谷が入り、それらは南流してみなこの広瀬川低地帯で広瀬川に注いでいる。

南麓の地形をみると、中央付近を流れる荒砥川を境として東西で大きく異なっている。東側は約20～30万年前に発生した山体崩壊による岩層なだれによってできた、「流れ山」と呼ばれる小丘陵が多く存在し、起伏に富んでいる。それに対して西側は、基底部に大湖砕流が堆積するところや、赤城白川の形成した扇状地などがあり、傾斜が緩やかで広々としている。亘子遺跡・上細井五十嵐遺跡の両遺跡は、この白川扇状地の上に立地している。標高は約141～145mであり、あとわずか700mほど南に下がると広瀬川低地帯となる。まさに赤城山麓の末端というべき位置である。

なお、亘子遺跡西端の崖面の露頭と、東隣に位置する東田之口遺跡で、この白川扇状地の形成年代の一端を知ることができる土層が観察できた。そのためこの両地点で土層に含まれる火山灰分析を行い、その結果を第6章第2節(179ページ)に掲載した。

この白川扇状地にも山頂方向から幾筋もの小河川が流れ下っており、細かくみれば決して平坦ではなく、起伏のある地形である。亘子遺跡では東側に上幅30～40mの谷があり、それによって東田之口遺跡ののる台地部と分断されている。その底面は平坦に造成され、発掘調査前は畑や水田として利用されていた。この谷と亘子遺跡台地部との比高差は約2mである。また、亘子遺跡の台地部分の西端は崖面となり、上細井五十嵐遺跡A区へと急激に落ち込む。その比高差は約3mであり、ここに

前述の露頭が見られる。

上細井五十嵐遺跡は、やや複雑な地形の部分にある。亘子遺跡との崖を挟んで、東半部(A区)はややひろい低地部となり、この部分にAs-B下水田が存在した。その西側(B区)はやや高くなり、平安時代の住居が見られるが、さらに西側は新しい谷が入り、23～40mの幅で遺構が存在しない。西端部(C区)は西隣の天王遺跡につづく台地の東端で、東に向かって下がる地形となり、この斜面に遺構が存在する。

第2節 歴史的環境

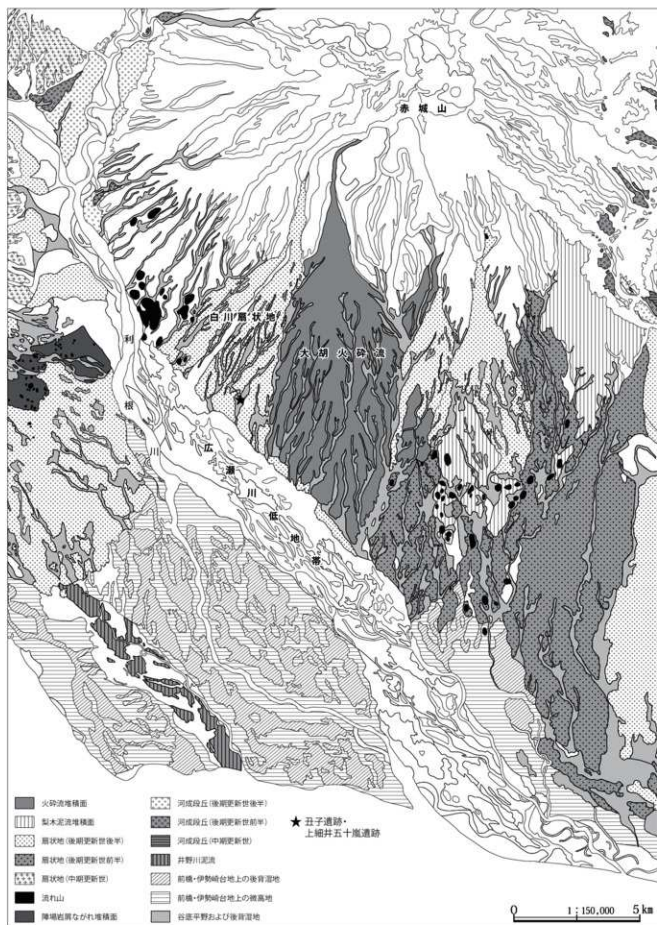
赤城山麓の地は約3万年前の旧石器時代以降の遺跡が数多く残され、県内有数の遺跡密集地帯として有名である。そのため、上武道路の予定地でも、路線のほぼ全域が遺跡として調査対象となっているほどである。以下、本節では亘子遺跡・上細井五十嵐遺跡周辺の遺跡について概観する。

旧石器時代

赤城山南麓は有名な岩宿遺跡が存在し、相沢忠洋氏がフィールドとして研究活動を行った、学史的にも重要な地である。現在の前橋、伊勢崎、桐生の地域には、有名な旧石器時代の遺跡が多くあるが、亘子遺跡・上細井五十嵐遺跡周辺での調査例はこれまであまり多くなく、第7図の範囲内では、鳥取福蔵寺遺跡(45、番号は第7図・第3～5表の番号と一致。以下同じ)でAs-YF直下から、細石器が出土している程度である。しかし上武道路の調査では、上細井中島遺跡(10)、上細井蟬山遺跡(11)、胴城遺跡(16)、芳賀東部団地遺跡(18)、五代砂留遺跡群(19)などで旧石器時代の遺物が出土しており、調査例が急激に増加した。亘子遺跡・上細井五十嵐遺跡ではこの時代の遺構・遺物は見つかっていない。

縄文時代

縄文時代の遺跡は第7図の範囲に限っても数多く知られ、枚挙に遑がない。赤城山麓は前期の集落が多いこと



第5図 周辺地形分類図(群馬県「群馬県史通史編1」付図2を改変使用)



第6図 王子遺跡・上郷井五十嵐遺跡調査区周辺図 前橋市役所発行1/2500前橋市現形図(平成21年調査、富士見地区は平成29年調査)を使用

で知られ、芳賀東部団地遺跡(18)、同西部団地遺跡(41)、同北部団地遺跡(149)や、五代中原遺跡(21)を初めとした五代地区の遺跡群など、多くの遺跡で前期の住居が調査されている。以後、中期は五代伊勢宮遺跡(27)など、後期は芳賀東部団地遺跡(18)、小神明九科遺跡(50)などで調査例があるが、晩期には激減する。上武道路の調査でも多くの遺跡で縄文時代の遺構を調査し、中でも堤遺跡(15)では後期の柄鏡形敷石住居3軒のほか、草創期から後期にかけての遺構・遺物を多く調査している。丸子遺跡ではこの時期の遺構はなく、わずかな遺物が出土しているだけであるが、同時期に前橋市教育委員会によって行われた上細井北遺跡群(文献51)の調査では、北側隣接地で前期諸磯C式の竪穴住居1軒が調査されている。上細井五十嵐遺跡ではC区に前期の竪穴住居1軒があり、B区とC区では縄文土器の包含層が見られた。

弥生時代

弥生時代の遺跡は数が少ないのが第一の特徴である。第3～5表をみれば明らかのように、この時期の遺跡は非常に少ないが、貴重な調査例として、小神明倉本遺跡(52)での中期から後期の住居2軒、小神明湯気遺跡(53)の後期の住居1軒、端気遺跡(61)のこの時代の可能性のある方形周溝墓などがある。上武道路の調査では、小神明勝沢境遺跡(14)で後期様式の住居2軒を調査している。上細井五十嵐遺跡ではこの時期の遺構・遺物はないが、丸子遺跡ではやや不明瞭ながら後期の住居1軒を調査している。

古墳時代

古墳時代に入ると遺跡は増加するが、前期のものはまだ数が少ない。その中で、芳賀東部団地遺跡(18)では前橋市教育委員会が調査した調査区で73軒の住居が確認され、この時期にすでに大きな集落が成長し始めていることが分かっている。その他、五代中原遺跡(21)、五代江戸屋敷遺跡(28)、鳥取福蔵寺遺跡(45)などでもこの時期の住居が調査され、さらに五代江戸屋敷遺跡では方形周溝墓も2基見つかっている。上武道路関連の遺跡では、山王・柴遺跡(12)、小神明勝沢境遺跡(14)、芳賀東部団地遺跡(18)などで前期の住居が見つかり、調査例が増加した。丸子遺跡では覆土層にAs-Cの純層が堆積し

た住居1軒のほか、4～5軒を調査している。遺跡の数は、中期を経て後期になると増加する。中・後期の遺跡は第3～5表にみるように非常に多く、この時期に開発が進んだことを窺わせる。集落遺跡は、芳賀東部団地遺跡(18)、五代伊勢宮遺跡(27)などの五代地区の遺跡、鳥取福蔵寺遺跡(45)などで数多く調査されている。上武道路の調査では東田之口遺跡(3)、山王・柴遺跡(12)、胴城遺跡(16)、芳賀東部団地遺跡(18)などで多くの住居を調査しているが、その中で特筆すべきは東田之口遺跡の調査例である。ここでは中～後期の住居を68軒調査し、その周囲を含めれば相当な規模の集落であったことが分かった。おそらくここが当地域の拠点的な集落であったと思われるが、芳賀東部団地遺跡(18)のように奈良・平安時代にまで継続している遺跡があるのに比べ、東田之口遺跡では短期間で終末を迎えていることが注目される。丸子遺跡でも中～後期の住居を27軒調査し、やはり奈良時代には3軒と激減している。上細井五十嵐遺跡ではこの時代の遺構は見つかっていない。

なお、本遺跡の周辺では大規模な古墳は少ない。赤城南麓の大規模な前方後円墳としては本遺跡の南東方向に大きく離れた大室古墳群が上げられ、この古墳群の動向は当地域の古墳の様相にも大きな影響があったものと思われる。第7図の範囲内では大日塚古墳(36)、丸子塚古墳(78)、オボ塚古墳(116、現状で全長35m)などが前方後円墳であり、その他は中小規模の円墳が分布する。『上毛古墳総覧』をみると、南橋村に45基、芳賀村に64基があり、富士見村には29基があるが、第3～5表にみるように消滅してしまったものも多い。古墳の調査例としては芳賀西部団地遺跡(41)で31基の古墳が調査されていることが注目される。丸子遺跡では古墳は見つかっていないものの、同じ台地上には先述の丸子塚のほか、いくつかの古墳の存在が知られており、前橋市教育委員会による上細井北遺跡群No.1・2の調査では3基の古墳が調査された(文献51・52)。その結果をうけて石島和夫氏は、この台地上に丸子塚古墳を中心とした古墳群があったとし、それを「丸子塚古墳群」と呼ぶことを提起されている(文献52)。

その他、山王・柴遺跡(12)ではAs-C前後の畚跡が調査されているが、低地の少ない地域であるためか、Hr-FAやHr-FP1に関わる古墳時代の水田は見つかっていない。



第7図 周辺の遺跡(国土地理院1/25000地形図「前橋」平成22年発行、「渋川」平成14年発行を使用)

第3表 周辺の道跡一覧表(1)

番号	道跡名	集落・溝・土垣など○ 墳墓● 生産跡□							備考	文献	
		水田・古	縄文	弥生	古墳前期	古墳中後	奈・平	中・近			
1	丸子道跡			○		○		○	弥生後期住居1。古墳前～奈良・平安集落。中世館の堀、土葺、井戸。	2・本書	
2	上細井五十嵐道跡		○			■			縄文前期集落。平安集落。As-8下水田。	2・本書	
3	東田之口道跡		△			○	○	○	古墳時代後期集落。粘土採掘坑。中世館跡。	2・5	
4	天王道跡		○			○	○	○	古墳後期～奈良・平安集落。	2	
5	東廻屋谷戸道跡		○			○	○	○	奈良・平安集落。中近世福立柱建物。火葬墓。	2・54	
6	上町道跡						○	○	奈良・平安集落。道路。御井。	3	
7	時沢西廻屋谷戸道跡						○	○	奈良・平安集落。道路。近世水田。	3・65	
8	王久保道跡						○	○	平安集落。	3	
9	新田上道跡		△		△					72	
10	上細井中島道跡	△	○					○	As-0k下から縦長割片出土。縄文早期段穴住居1。中前期集落。平安集落。	3	
11	上細井御山道跡	△	○			○●		○	珪質頁岩削器。黒色頁岩槍先形尖頭器出土。縄文前期集落。古墳後期住居1。古墳1。奈良・平安集落。	3	
12	山王・集道跡群				○	○●■			古墳前・後期集落。小石塚群。方墳周囲。横穴式石室。高。	3・4	
13	小神明富士塚道跡	△	○			○	○	○	縄文包含層。古墳後期～奈良・平安集落。近世稲敷。	2・3・6・27	
14	小神明勝沢道跡	△	○	○	○	○		○	縄文中期埋葬。弥生後期集落。古墳集落。	2・6	
15	堤道跡		○					○	縄文早期期形尖頭器製作跡。前期・後期集落。後期敷石住居。平安集落。	2	
16	御城道跡	△	○		○	○●		○	YF～0k間でナイフ型含む120点の旧石器。縄文前期集落。古墳1基。古墳前期。後期～奈良・平安集落。江戸墓。	1・2・8・9	
17	鳥取松合下道跡							○	古墳～奈良・平安集落。	2・8	
18	芳賀東部団地道跡	△	○		○	○	○	□	(前橋市調査分)縄文前～後期集落。古墳4基。古墳前期。後期～奈良・平安集落。鍛冶遺構含む。(事業団調査分)As-8P下～暗色帯環状ブロック2。縄文集落。古墳前期集落。古墳後期～奈良・平安集落。近世墓。	1・2・9・44～46・49・50	
19	五代砂留道跡群	△	○		○			○	旧石器3ブロック。縄文前期集落。古墳前期集落(銅鏡出土)。平安集落。	1・7・9	
20	中原道跡				△					72	
21	五代中原道跡			○	○			○	縄文前期集落。古墳前期～後期集落。平安集落。	36・38・40	
22	天神道跡		△		△			○		72	
23	五代山街道跡		○					○	縄文前・中期集落。古墳後期集落。平安集落。	40	
24	五代伊勢宮道跡(2)		○					○	縄文前・中期土坑。平安集落。	43	
25	五代深堀道跡		○					○	縄文中期集落。古墳後期～奈良・平安集落。	33・36・41	
26	江戸屋敷道跡		△		△					72	
27	五代伊勢宮道跡		○			○●	○	□	○	縄文前・中期集落。古墳後期～奈良・平安集落。8世紀未鍛冶工房。	32・35～38・42
28	五代江戸屋敷道跡				○●	○		○	○	古墳前期集落・方形周溝墓。古墳後期～奈良・平安集落。	34
29	五代竹花道跡		○				○	○	○	縄文中期集落。古墳後期～奈良・平安集落。和同開珎2・神刀開珎3。銅製跡出土。	32・39
30	五代木福道跡		○					○	○●	古墳後期～奈良・平安集落。和同開珎。碓方出土。鍛冶工房含む。	32・33・39・41
31	木福道跡		△		△					72	
32	杉山道跡				△					72	
33	上泉城							○	16世紀。大胡城の支城。上泉(大胡)氏。橋。戸口。五輪塔。	68・69	
34	西久保道跡				△					72	
35	大目道跡		△							72	
36	大目塚古墳					●			原形をとどめないが、前方後円墳で横穴式石室と推定。明治38年発掘。馬具など遺物多数出土。	10	
37	端気前道跡									72	
38	下曲輪道跡				△					72	
39	ホーロク塚古墳					●			消滅。「総覧」芳賀10号。円墳。	71・72	
40	後原道跡		△							72	
41	芳賀西部団地道跡		○			●		○	縄文前期集落。古墳31基。墳輪棺1。	47	
42	高橋古墳群					●			消滅。	72	
43	芳賀13号墳					●			消滅。	72	
44	鳥取東原道跡		○					○	古墳後期住居1。近世墓。	24	
45	鳥取福蔵寺道跡	△	○		○	○		○	旧石器YF下細石器。縄文前期～後期集落。古墳前期。後期～奈良・平安集落。	25・26	

第3章 遺跡の位置と環境

第4表 周辺の遺跡一覧表(2)

番号	遺跡名	集落・溝・土坑など○ 墳墓● 生産跡□							備考	文献
		水田・倉■	縄文	弥生	古墳前期	古墳中後	奈・平	中・近		
46	北原遺跡				△		△		15～16世紀。文献58は領城の支城とし、58は覺智六郎右衛門ら越後勢の築城とする。堀。	72
47	鳥取の砦					△		○	消滅。	68・69
48	前原古墳					●			消滅。	72
49	小神明西田遺跡	○				○●			縄文前期集落。古墳中期集落。後期古墳5基。	29
50	小神明九料遺跡	○					○	○	縄文後期集落(柄鏡形敷石(住居3軒含む)。古墳後期～奈良・平安集落。近世墓。	28・30・31
51	小神明下田遺跡	△					○	○	縄文前期・中～後期初期集落。平安集落。近世環濠。	27
52	小神明倉本遺跡	△	○				○	○	弥生中・後期集落。戦国以降環濠。	28
53	小神明湯気遺跡	△	○				○		縄文草創期尖頭器出土。弥生後期住居。古墳中・後期～奈良・平安集落。	30
54	小神明合田遺跡	△					○		奈良・平安集落。	31
55	小神明の砦							○	16世紀。堀、土居。	68・69
56	小神明大明神遺跡					○		○	古墳後期集落。	28
57	小神明谷向遺跡	△				△				29
58	谷畑遺跡					○	○		古墳後期集落。平安集落。	19
59	時沢湯屋遺跡							○	全長2.7kmの堀跡。	68・69
60	寄居遺跡							○	「小神明の寄居」とも。	68・69
61	湯気遺跡	○	●			○			縄文草創期尖頭器。前・中期集落。弥生方形周溝墓。古墳中・後期集落。中世環濠。	11・12
62	上神神明宮裏遺跡					△		△		72
63	上神上ノ山古墳					●			径17.5mの円墳。横六式石室。直刀・耳環・人骨・函など出土。消滅。	10
64	上神五反田遺跡							○		72
65	茶木田遺跡							○	奈良・平安集落。	16
66	三袋城之内遺跡							△		72
67	三袋城							○	市街地となり消滅。北条高広。	68・70
68	三袋下高輪遺跡					△		△		72
69	三袋の寄居							○	16世紀。現私立女子高校。堀、戸口、櫓台。	68
70	清王寺の寄居							○	消滅。現朝社会館。	68
71	南越1号墳					●			消滅。	72
72	南越2号墳					●			消滅。	72
73	西福遺跡	○				○			縄文土坑。古墳後期集落。	17
74	南天依道跡	△				△				72
75	南越4号墳					●			消滅。	72
76	南田之口遺跡	○						○	縄文前期土坑。古墳中・後期集落。	15
77	南越13号墳					●			消滅。	72
78	辻子塚					●		○	「総覧」6号。前方後円墳。昭和29年。平安住居調査。	10
79	南越8号墳					●			消滅。	72
80	荒屋敷遺跡	△	△							72
81	南越9号墳					●			消滅。	72
82	南越11号墳					●			消滅。	72
83	葉師遺跡	△				△				72
84	王間久保遺跡	△								72
85	孤塚古墳					●			「総覧」南越14号墳。円墳。	71・72
86	八幡山の砦							○	詳細不明。五輪塔。板碑。	68・69
87	青柳寄居遺跡							○■	平安集落。古代(時期不詳)の水田跡も。	14
88	神明遺跡A					△				72
89	青柳宮上遺跡					○			昭和27年。古墳後期住居調査。	10
90	引切塚遺跡	△				○●		○	古墳後期集落。横六式石室1基調査。奈良・平安時代集落。	21・22
91	旭久保遺跡	△				○	○	○	古墳後期～平安集落。	58・62・63
92	原之郷下白川遺跡					△				65・66
93	念仏遺跡							△		72
94	原之郷白川遺跡					△				63
95	原之郷中子遺跡									72
96	原之郷鯛沢遺跡	△						○	平安集落。	59・61
97	小沢の場遺跡	○						○	平安集落。	60・61
98	時沢中島遺跡					△				72
99	時沢基太遺跡	△							縄文包蔵地。	72
100	時沢諏訪遺跡	△							縄文包蔵地。	72
101	時沢中谷遺跡							△		72
102	時沢橋8遺跡	△						△		72

第5表 周辺の道跡一覧表(3)

番号	道跡名	集落・溝・上坑など○ 墳墓● 生産跡□ 水田・倉■ 遺物のみ△							備考	文献
		旧石器	縄文	弥生	古墳前期	古墳中後	奈・平	中・近		
103	時沢橋道跡		△					○	江戸時代屋敷。	61
104	時沢床東道跡		△							55
105	時沢四ツ塚道跡		△		△					72
106	時沢大角谷戸道跡				△					72
107	時沢森林道跡				△					72
108	時沢西森林道跡						△			72
109	新田上古墳					●			消滅。	72
110	時沢西高田道跡							○	平安集落。	62・63・66
111	時沢宮東道跡							△		72
112	時沢中屋敷道跡				△		△			72
113	定福道跡				△					72
114	田之口道跡				△		△			72
115	西曲輪道跡							△		72
116	オゾ塚古墳					●			横穴式石室を伴う前方後円墳。直刀、小刀、刀子、鉄鏝、円筒埴輪、形象埴輪出土。	10
117	芳賀49号墳					●			消滅。	72
118	オゾ塚西古墳					●			昭和34年発見。墳丘をもたない小型の竪穴式小石塚。	10
119	祖之木原道跡						○	○	古墳後期～奈良・平安集落。	57・66
120	時沢下百駄山道跡		△		△					72
121	時沢森後道跡				△		△			72
122	時沢上福道跡		△							72
123	時沢古田道跡				△					72
124	時沢東瀬訪日道跡							△		72
125	時沢東瀬訪日道跡							△		72
126	時沢滝脇道跡		△		△					72
127	時沢山王道跡		△							72
128	時沢橋廻り道跡		△							72
129	横塚道跡		△							72
130	小暮八幡道跡		△							72
131	小暮西辻道跡	△								72
132	小暮清塚道跡		△							72
133	広面道跡	○						○	縄文前期集落。平安集落。	53
134	浅見塚道跡					●			「総覧」芳賀56号墳。円墳。「石塚現存」とする。	71・72
135	嶺城							○	16世紀。戦国期の並郭式の丘城。北第二郭の東部を一部調査。堀切、土居、堀戸口、井、腰郭、帯郭。	23・68・69
136	大林下道跡		△							72
137	小坂子新林道跡							△		72
138	大特戸・十二翠道跡		△							72
139	寺岡道跡	○						○	縄文前期集落。平安集落。	55・67
140	孫田道跡	○						○	縄文土坑。平安溝（道跡か）。	55・67
141	上百駄山道跡		○					○	縄文前期集落。平安時代集落。小観治道構含む。中世前期跡。	55・56
142	市之進道跡		△							72
143	高橋道跡				△					72
144	東公田道跡		△							72
145	東公田古墳					●			「総覧」記載漏れ。径約4mの円墳。横穴式石室。7世紀後半。	13
146	芳賀59号墳					●			消滅。	72
147	小坂子城							○	16世紀。嶺城の支城か。堀切、土居、戸口、腰郭。	68・69
148	五反田道跡								芳賀北部団地道跡として調査。149参照。	48
149	芳賀北部団地道跡	○					□		縄文前・中期集落。奈良～平安集落。製鉄遺構含む。	48
150	新次郎道跡								芳賀北部団地道跡として調査。149参照。	48
151	芳賀北曲輪道跡	○				●			縄文前期、中期末～後期初集落。古墳未群集墳。	18
152	勝沢城							○	16世紀。嶺城の支城か。堀、帯郭。	68・69
153	東曲輪道跡		△							72
154	芳賀46号墳					●			消滅。	72
155	鳥取番城道跡							○		72
156	宮前道跡								芳賀東部団地道跡として調査。18参照。	44～46
157	四門戸道跡								芳賀東部団地道跡として調査。18参照。	44～46
158	鬼特戸の菅							○	16世紀。堀。	68・69
159	下殿道跡								芳賀東部団地道跡として調査。18参照。	44～46
160	芳賀北原道跡	○					○	○	古墳後期集落。平安集落。	20

第3章 遺跡の位置と環境

参考文献

- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008 『年報27』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009 『年報28』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010 『年報29』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2011 『年報30』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2011 『東田之口遺跡』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2012 『小神明跡平岡遺跡・小神明塚土塚遺跡』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2012 『五代砂留遺跡』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2012 『鳥取松合下遺跡・制城遺跡』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2012 『上武遺跡・旧石器時代遺跡群(3)』
- 前橋市 1971 『前橋市史第1巻』
- 前橋市教育委員会 1983 『踏気遺跡群Ⅰ』
- 前橋市教育委員会 1984 『窺気遺跡群Ⅱ』
- 群馬県教育委員会 1982 『緊急文化財調査報告書 川面遺跡・東公田古墳』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1984 『青柳寄居遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1985 『南田之口遺跡』
- 前橋市教育委員会 1985 『基本田遺跡』
- 前橋市教育委員会 1987 『西堀遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1990 『芳賀北曲輪遺跡』
- 前橋市教育委員会 1990 『谷塚遺跡発掘調査報告書』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1992 『芳賀北原遺跡』
- 前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988 『引切塚遺跡』
- 前橋市教育委員会 1993 『引切塚Ⅱ遺跡』
- 前橋市教育委員会 1994 『平成5年度市内遺跡発掘調査報告書』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998 『鳥取東原遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998 『鳥取福蔵寺遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1999 『鳥取北原遺跡』
- 前橋市教育委員会 1983 『小神明遺跡群Ⅰ』
- 前橋市教育委員会 1984 『小神明遺跡群Ⅱ』
- 前橋市教育委員会 1985 『小神明遺跡群Ⅲ』
- 前橋市教育委員会 1986 『小神明遺跡群Ⅳ』
- 前橋市教育委員会 1987 『小神明遺跡群Ⅴ』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2001 『五代竹花遺跡・五代木福Ⅰ遺跡・五代伊勢宮Ⅰ遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2001 『五代江戸屋敷遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2002 『五代伊勢宮Ⅱ遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2002 『五代伊勢宮Ⅲ遺跡・五代深堀Ⅱ遺跡・五代中原Ⅰ遺跡・五代伊勢宮Ⅳ遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2003 『五代伊勢宮Ⅴ遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2003 『五代伊勢宮Ⅵ遺跡・五代中原Ⅱ遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2004 『五代竹花Ⅱ遺跡・五代木福Ⅲ遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2004 『五代中原Ⅲ遺跡・五代山街道Ⅰ遺跡・五代山街道Ⅱ遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2005 『五代木福Ⅳ遺跡・五代深堀Ⅲ遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2007 『五代伊勢宮遺跡(Ⅰ)』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2009 『五代伊勢宮遺跡(Ⅱ)』
- 前橋市教育委員会 1984 『芳賀団地遺跡群第1巻 芳賀東部団地遺跡Ⅰ』
- 前橋市教育委員会 1988 『芳賀団地遺跡群第2巻 芳賀東部団地遺跡Ⅱ』
- 前橋市教育委員会 1990 『芳賀団地遺跡群第3巻 芳賀東部団地遺跡Ⅲ』
- 前橋市教育委員会 1991 『芳賀団地遺跡群第4巻 芳賀西部団地遺跡Ⅳ』
- 前橋市教育委員会 1994 『芳賀団地遺跡群第5巻 芳賀北部団地遺跡Ⅴ』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998 『芳賀東部団地遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2005 『芳賀東部団地遺跡Ⅲ』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2009 『上堀井北遺跡群No.1』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2010 『上堀井北遺跡群No.2』
- 富士見村教育委員会 1992 『広面遺跡』
- 富士見村教育委員会 1992 『東組榎谷戸遺跡』
- 富士見村教育委員会 1995 『上百敷山遺跡・寺間遺跡・孫田遺跡』
- 富士見村教育委員会 1996 『上百敷山遺跡Ⅱ』
- 富士見村教育委員会 1996 『組之木原遺跡』
- 富士見村教育委員会 1998 『旭久保Ⅱ遺跡』
- 富士見村教育委員会 1998 『原之郷棚沢遺跡』
- 富士見村教育委員会 1998 『小沢の岡遺跡』
- 富士見村教育委員会 1997 『平成8年度村内遺跡』
- 富士見村教育委員会 1998 『平成9年度村内遺跡』
- 富士見村教育委員会 1999 『平成10年度村内遺跡』
- 富士見村教育委員会 2000 『平成11年度村内遺跡』
- 富士見村教育委員会 2001 『平成12年度村内遺跡』
- 富士見村教育委員会 2002 『平成13年度村内遺跡』
- 富士見村教育委員会 2003 『平成14年度村内遺跡』
- 群馬県教育委員会 1989 『群馬県の中世城跡』
- 山崎一 1978 『群馬県古城址の研究』上巻 群馬県文化事業振興会
- 山崎一 1979 『群馬県古城址の研究』補遺篇上巻 群馬県文化事業振興会
- 群馬県 1938 『上毛古墳総覧』
- 群馬県文化財情報システムWE.B版

奈良・平安時代

赤城南麓の地域は古代には「勢多郡」に属していた。勢多郡は「和名抄」によれば深田・田邑・芳賀・柱萱・真壁・深渠・深澤・時澤・藤澤の9郷からなっている。第7図の範囲でいえば、本遺跡を含む中央から東部一帯が芳賀郷、北西部に時沢郷、南部に柱萱郷の比定地があるが、芳賀部の比定地には、「芳郷」の墨書土器がかなり離れた二之宮洗橋遺跡(第7図の範囲外)から出土していることなど、不確定要素も大きく、確定しているわけではない。なお、図の南西隅に当たる前橋市街地の大部分は、当時

群馬郡に属していたものと思われる。

奈良・平安時代の遺跡は非常に数が多く、小規模な調査で見つかっている住居も含め、集落が広い範囲に分布していることが分かる。

本遺跡の周辺でまず取り上げるべき遺跡は、やはり芳賀東部団地遺跡(18)である。ここでは古墳時代後期から続く奈良・平安時代の大集落が調査されている。その南側に位置する五代地区の諸遺跡(五代伊勢宮遺跡(27)や五代江戸屋敷遺跡(28)、五代竹花遺跡(29)など)や、南西側に位置する鳥取福蔵寺遺跡(45)や小神明地区の遺跡

(小神明九科遺跡(50)、小神明湯気遺跡(53)など)でも同時期の住居が多く見つかっており、丑子・上細井五十嵐遺跡の東側に多くの集落が分布していたことが判明している。逆の西側一帯は、これまで大規模な調査が少なかったが、旧富士見村教育委員会の調査で同時代の住居が点々と見つかっており(時沢西高田遺跡(110)など)、また、上武道路関連の調査でも、天王遺跡(4)、東組屋谷戸遺跡(5)、上町遺跡(6)、時沢西組屋谷戸遺跡(7)など、多くの遺跡で同時代の住居が調査され、遺跡の周辺には奈良・平安時代の集落が非常に濃密に分布することが確認された。

丑子遺跡では奈良時代の住居は3軒、平安時代の住居は1軒であり、古墳時代に比べて数が少ない。このように、古墳時代に数多くの住居があった集落遺跡で、奈良時代以降急激に数が少なくなる傾向は、先述したように東隣の東田之口遺跡(3)でも同様である。とすれば、律令制が確立していくという時期に集落の再編・移動があったことになり、その意味が目玉されよう。上細井五十嵐遺跡では平安時代の住居2軒が調査されている。

その他、県内西部の多くの遺跡で見ついているAs-B下水田は、この地域では調査例が少なかったが、今回上細井五十嵐遺跡で調査することができた。その他、芳賀東部団地遺跡(18)など数カ所で確認されている穀作関連遺構も、注目すべき遺構としてあげることができる。

中近世

天仁元年(1108)の浅間山噴火以降、この地域に台頭したのが藤原秀郷流の武士団であり、本遺跡周辺で勢力をふるったのは、足利重俊を祖とする大胡氏である。彼等

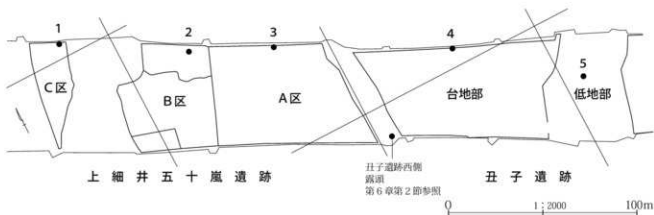
の名は『平治物語』『平家物語』『吾妻鏡』などに散見し、平安時代末から南北朝期までこの地に勢力を有していたようであるが、その後の詳細はよく分からない。

戦国時代に属する城跡としては、嶺城(135)があり、さらに第7図の範囲外であるが大胡城があり、それらに関わる支城・砦・遠堀(上京城(33)、鳥取の砦(47)、時沢遠堀遺跡(59)、小坂子城(147)など)がこの地域に多くみられる。東隣の東田之口遺跡(3)でも中世に属すると思われる掘立柱建物や多くのピット、柱穴、土坑、堀などが見つっている。残念なことに遺構の残りが悪く、館内部の構造などが分からなかったが、上記のような中世の状況の中で理解すべき館跡があった可能性が高い。丑子遺跡でも館の堀と思われる大規模な堀が見つっており、それに囲まれた内部にはピット、土坑が分布しているが、館内部の残りはさらに悪かった。このように、遺跡周辺は中世の城館が比較的濃密な分布を示している地域であると言える。

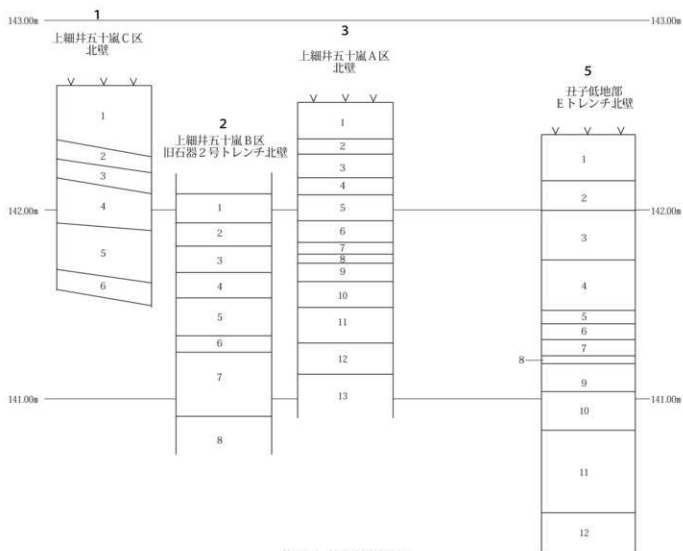
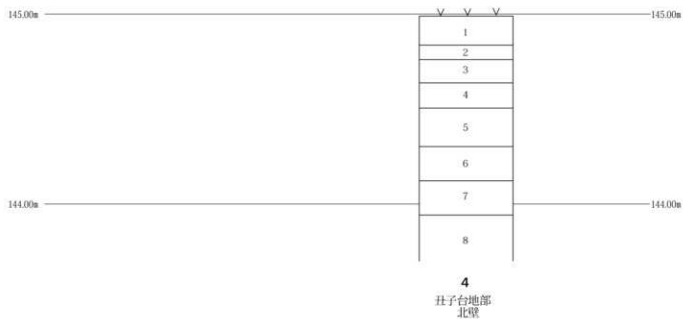
第3節 基本土層

基本土層は第8図に見るとおり、丑子、上細井五十嵐の両遺跡で地区ごとに作成し、その柱状図は第9図にまとめて示した。

上細井五十嵐遺跡C区は北壁中央(第8・9図の1)で実測し、表土からローム漸移層までを示した。同じくB区では、旧石器時代の調査を行ったので、その2号トレンチの北壁の土層(2)を示した。そのため、表土から遺構確認面までを除去したのちの土層となっている。これが当遺跡に堆積する標準的なローム層であるが、遺物



第8図 基本土層測量地点



第9図 基本土層柱状図

基本土層

- 1 上畑井五十嵐遺跡 C区北壁
- 表土
 - 田耕作土
 - 黒褐色土(10YR3/1) 大量のAs-C軽石を含む。
 - 黒色土(10YR2/1) 少量のAs-C軽石を含む。縄文包含層。
 - 黒褐色土(10YR3/2) As-C軽石を含まない。縄文土器片も含まない。
 - 褐色土(10YR4/6) 粘性強い。ローム層移層。
- 2 上畑井五十嵐遺跡 B区旧石器2号トレンチ北壁
- 黒褐色土(10YR3/2) 砂質で小礫を含む。ローム層移層。縄文土器を包含する。
 - 黄褐色ローム(10YR5/6) 小礫を若干含む。
 - 明黄褐色ローム(10YR6/6) 砂質。礫は含まない。
 - 暗褐色ローム(10YR3/3) 砂質で、黒色味が強い。礫は含まない。細かい白色軽石を含む。
 - にぶい黄褐色ローム(10YR4/3) 非常に固く締まっている。鉄分が凝集している。細かい白色軽石を含む。
 - オリーブ褐色ローム(2.5Y4/3) 固く締まっている。
 - 灰黄色砂層(2.5Y7/2)
 - 灰白色砂層(2.5Y8/1) やや粒径大きい。地下水の影響で鉄分を含む。
- 3 上畑井五十嵐遺跡 A区北壁
- 表土
 - 明褐色土(7.5YR5/6) 水田床上。
 - 灰黄褐色土(10YR4/2) 水田床上。
 - 褐色土(10YR4/6) 砂質。締まり、粘性なし。この地点が水田となる前の耕作土だと考えられる。
 - 暗褐色土(10YR3/3) As-B混入。粗砂を多く含む。
 - 黒褐色土(10YR3/2) As-Bを多く含む。
 - As-B純層 灰層も含めたユニットが明確に残存。
 - 黒色粘質土(10YR2/1) As-B下水田の耕作土。締まり、粘性が強い。
 - 黒褐色土(10YR3/2) As-C、Br-FP軽石を含み、全体的にゼラゼラとした砂質土。鉄分の凝集がみられる。

は出土していない。同じくA区では北壁中央の土層(3)を示した。A区ではAs-B下水田が調査されているので、As-Bの堆積が良好な地点を選んで示した。7層がAs-Bの純層であり、層厚はこの地点のように残りのよいところで10～15cmもあり、火山灰層も含めてユニットが良好に残っている。その下層となる8層が水田耕作土となる。そのさらに下層では、トレンチ調査の結果でも顕著な水田面は見つからなかった。この基本土層にもそれは示していない。ただし、南壁ではAs-B下水田耕作土の黒色粘質土の下層に、間層を挟んで黒色粘質土(As-Cを含む)が堆積している部分があり、そこからイネのプラントオパールが検出されているので、より古い水田も存在したらしい。しかし良好な被覆層は存在せず、面として把握できるものではなかった。面的な調査は行ってない。おそらく水田耕作土の一部が、削平を受けながらも残存しているものと思われる。プラントオパール分析の結果については第6章第3節(183ページ)を参照。

- 灰黄褐色土(10YR4/2) As-Cを含む。締まり、粘性が強い。
 - 褐色土(10YR4/1) 水の影響を受け、鉄分凝集ブロックを多量に含む。締まり、粘性が強い。
 - 灰黄褐色粘土(10YR5/2) 鉄分凝集ブロックを多く含む。
 - 褐色粘土(10YR6/1) 砂質に富む。
- 4 子子遺跡台地部 北壁(旧石器調査トレンチNo.21)
- 表土 黄灰色土(2.5Y5/1)軽石を含む。
 - にぶい黄色ローム(2.5Y6/4) ソフトローム。軽石(As-YPか)含む。
 - 明黄褐色ローム(2.5Y6/6) As-YPを含む。YPの残存度は地点によって大きく異なる。
 - にぶい黄色ローム(2.5Y6/4) As-0kを含む。ハードローム。
 - 灰黄色洪水砂礫層(2.5Y6/2) 非常に固く締まっている。礫(0.5から2.0cm)を多く含む。
 - 黄褐色ローム(2.5Y5/6) 軽石(As-0kか)をまばらに含む。シルト分を含む。
 - にぶい黄色ローム(2.5Y6/3) 砂質の部分がある。
 - 灰黄色シルト(2.5Y7/2) シルトの多い層とやや砂粒を含む層とが水平に互層になる。白川扇状地堆積物の最上層と思われる。
- 5 子子遺跡低地部 Eトレンチ北壁(自然科学分析試料採取地点)
- 表土
 - 灰黄色土(2.5Y6/2)
 - 暗灰黄色土(2.5Y4/2)
 - 暗灰黄色土(2.5Y5/2)
 - 灰黄色粗粒洪水砂(2.5Y5/1)
 - 黒泥土(2.5Y2/1)
 - 暗灰黄色土(2.5Y4/2)
 - 灰黄色細粒火山灰(2.5Y5/1) As-Kk一次堆積。
 - 灰色粗粒火山灰(7.5Y5/1) As-B一次堆積。上部に小豆色細粒火山灰。
 - 黒泥土(2.5Y2/1)
 - 灰黄色洪水砂(5Y4/1) As-CとBr-FAlに伴う軽石を含む。
 - 淡色黒泥土(オリーブ黒・7.5Y3/1)

子子遺跡では台地部と低地部の土層を示した。台地部は北壁中央(4)で実測し、表土から白川扇状地堆積物の最上層までを示した。この白川扇状地堆積物については、当遺跡の西側の崖に露頭があり、これではほぼ全貌が観察できる(第8図中央下の地点)。これについては、第6章第2節(179ページ)で取り上げた。低地部(5)では地表下2.2mまでを示した。これ以下は湧水のため掘削が不可能であった。9層がAs-B純層であり、当初この下面に水田面が想定されたが、5ページで記述したとおり、この面の傾斜がかなり強いので、この場所に水田は存在しないものと判断し、面的な調査は行わなかった。ただし、プラントオパール分析の結果、As-B直下の10層の他、その上の3・4層、その下の11・12層からもイネのプラントオパールが検出されているので、この谷地形のどこかでは各時代に水田が営まれていたものと思われる。この分析結果は第6章第1節(175ページ)に掲載した。

第4章 丑子遺跡の調査の成果

第1節 成果の概要

丑子遺跡は東側の低地部(上幅30～40mの南北方向の谷)と、西側の台地部に分けられる。全体の面積としては台地部が大部分を占める。調査前の土地利用の状況は、低地部は底面を平坦に造成され、南に向かって緩やかな段をなす水田として利用されていた。台地部もほぼ平坦に造成されて、全域が畑として利用されていた。4ページで述べたように、事前の試掘調査の結果から、低地部にはAs-Bの堆積が見られるので、その下に平安時代後期の水田が想定され、台地部には古墳時代から奈良時代にかけての集落が存在するものと考えられていた。

発掘調査では、まず低地部にトレンチを掘削(トレンチの位置は第126図参照)し、As-B下水田の存在を確認する作業を行った。その結果、As-Bの堆積は認められたものの、その下面の傾斜はかなり強く、水田の造営は困難であると判断したため、この部分の本調査は行わないこととした。しかし近接地域に水田が存在する可能性は残るため、基本土層5を実測したところと同一地点でプラントオパール分析を実施した(その結果は第6章第1節参照)。その結果、As-B下面だけではなく、その上下の複数の層からもイネのプラントオパールが検出されたことから、この谷地形のどこかで複数の時代に水田が営まれていたことが判明した。

台地部では縄文時代から近世に及ぶ、多数の遺構・遺物が見つかった。調査した遺構の数は、竪穴住居40軒、竪穴状遺構2基、土坑111基、井戸12基、堀2条、溝4条、ピット19基であり、比較的多様な遺構を調査することができた。以下、それらを概観する。

竪穴住居40軒は、調査区全域に分布する。重複するものは少なく、比較的散在している。大まかに見て調査区の西側よりも東側に多い傾向にあるが、これは後世に西側に館が造営されたために削平された結果かもしれない。当初の分布状態を示していない可能性も考えられるので注意が必要である。実際、本遺跡内では全体に削平が行われていたようで、遺構確認までの表土が浅く、遺構の

残りが悪いところが多かった。そのため上部のほとんどが削平されて、床面のみ、あるいは掘方のみになってしまった住居も少なくない。後述する弥生時代の住居は柱穴と貯蔵穴のみから復元できたものである。

これら40軒の住居の年代は、弥生時代1軒、古墳時代33軒、奈良時代3軒、平安時代1軒、不明2軒である。比較的長期間にわたって集落が続いているといえるが、その中心は古墳時代中～後期で、この時期に27軒が集中しており、その前後の住居は少ない。

これら多数の住居の中で注意を引くのは12号住居と名付けたものである。この住居には、覆土の下層にAs-Cが一次堆積していた。As-Cは主柱穴の埋土上部にまで入り込んでいるので、噴火のわずかに前に廃絶されたものであることが分かる。住居に伴うと思われる遺物の出土はほとんどないが、わずかに出土した土器から3世紀後半のものと思われる。この住居はその後5世紀前半～中頃まで窪みとして残っていたようで、その窪みに土器が廃棄されていた。また、41号住居としたものは大部分が削平されていたが、柱穴と貯蔵穴からその存在が想定でき、貯蔵穴内とその周囲から出土した土器から、弥生時代の住居であると思われる。

土坑は111基という多数が見つかっているが、土坑に確実に伴う遺物はほとんどないので、時期や用途を特定できるものは少ない。全体の分布は東側よりも西側に多く、後述する堀の内側にあるものは101基あり、その中には中世の館に関連するものが多く含まれていると推定される。平面形が方形で、浅く底が平坦なものが多いが、中には特徴的な形態のものがある。56号土坑は出土遺物から8世紀代のものであると思われる、その形状は「水室」ではないかと指摘されているものに近い。89号土坑は中～近世の遺物が出土し、整った形状から室(むろ)のような用途が考えられる。また96号土坑は天井部をもつ地下室のような土坑であるが、不整形で壁も整っておらず、あるいは掘削途中で廃棄したものかもしれない。内部からは中世の遺物が出土しているので、これは館に伴うものである可能性がある。

井戸は12基調査したが、あるいは120号土坑としたも

のも井戸であるかもしれないので、それを入れれば13基となる。これも出土遺物が少なく、時期の特定は困難であるが、明らかに近代以降と思われる遺物は出土していないため、埋没した時期は近世かそれ以前に遡るものであると考えられ、やはり堀の内側にあるものは館に伴うものである可能性がある。作業上の危険があるため、底面まで掘削できた井戸は120号土坑も含めても2基しかないが、いずれも地下水は湧き出てこなかった。本遺跡は白川扇状地と呼ばれる扇状地上にあるため、もともと地下水位まではかなりの深さがあるはずであり、あるいは地下水が豊富な時期のみに機能した、季節的な井戸ではないかと考えられる。

堀は上面幅が広いところで5mに近い大規模なもので、台地部の西半分が存在する。覆土から15～16世紀の遺物が出土するので、これがこの堀の存続年代と思われる。この時期の館を囲んでいた堀であると考えられる。堀の平面形状は横になった逆F字形であり、これが館の南と東をなしていたと思われる。西側は上細井五十嵐遺跡に落ち込む崖にまで達していることを崖面で確認できたので、館の西側は崖線をそのまま利用していたことが分かる。また、北側は第7章の総括で触れるように、南の堀から約60m北で堀の痕跡が観察できたため、これが館の北限であると思われ、とすればこの館の規模は南北約70m、東西は北辺で約85m、南辺で約50mであり、東側に入り口が開く構造であったと考えられる。内部には前述の土坑、井戸があったと考えられ、それらから中世の遺物が出土している。しかし、残念ながら柱穴と思われるピットは、限られた範囲にわずか19基しか見つからず、館の建物は把握できなかった。おそらくこの付近は、後世に畑耕作などによってかなり削平を受けたのであろう。

溝は4条確認している。いずれも傾斜の通り北東から南西の方向をとっているが、4条とも細く、途中で途切れているため、水を流すような目的ではないことは明らかである。そのうち、2号溝と3号溝は、約2m離れて並行しており、道の側溝である可能性があるが、わずか6m程度しか調査区に掛かっていないので、断定することは難しい。その他の2条の溝は何らかの区画に関わるものであろう。

13ページで述べたように、周囲には複数の古墳が存在

し、本遺跡は古墳群の中にあると言ってもよい状況である。今回の調査区では古墳は見つかっていないが、本遺跡の調査成果を考える上では、古墳の存在を忘れるわけにはいかないであろう。

本遺跡の台地部には、白川扇状地堆積物の上にロームが残っていたため、以上の遺構の調査が終了したあと、全域で旧石器時代の調査を行った。しかし、遺構・遺物は全く出土していない。

第2節 竪穴住居

竪穴住居は合計42軒調査したが、そのうち30号住居、40号住居としたものは、竈・炉や柱穴・貯蔵穴などの施設がなく、住居としての使用には疑問があるので、今回の整理作業において「竪穴状遺構」に分類を変更した。そのため本書において竪穴住居として報告するのは40軒で、その時期別の内訳は、弥生時代1軒、古墳時代33軒、奈良時代3軒、平安時代1軒、不明2軒である。調査区全体に分布するが、西側には少なく、東側に多い傾向にある。住居同士の重複は少なく、比較的散在している。表面が削平されているものが多く、残りは全般によくない。西側に少ない傾向が見られるのは、その要因の一つとして、中世にこの部分が館として利用されていたことがあるものと思われる。館の造営時に、周囲より激しい削平が行われたため、完全に削平された住居がこの館内部に存在していた可能性が考えられるからである。

1号住居(第10図、第24表、PL. 6-2・3, 51)

調査区東側にある。住居南東隅部分が調査区外となり、完掘できていない。

位置 17区S・T17・18。 **重複遺構** 南西に2号住居が重複する。本住居が新しい。 **形状** 南東隅が調査区外となるが、長方形と考えられる。 **主軸方位** 長軸方向を主軸としてN-31°W。 **規模** 3.80×3.33m。

床面積 調査区外となる部分を除いて残存部分を計測すると10.40㎡である。 **壁高** 26cm。 **覆土** 北西辺のごく近く以外は、暗灰黄色土一層で埋没しているの、人為的に一気に埋められたと考えられる。北西壁際の土層(セクション図の2・3層)は不自然な堆積であり、この部分に壁を支えたような施設があった可能性がある。

床面 掘方を黄褐色土で埋め戻し、その上にロームと褐色土の薄い貼床を施して床面とするが、表面はあまり固くない。南に向かって緩やかに下がっているが、ほぼ平坦といえる。 **柱穴** 床面北側にピット1基(P1)がある。南北隅を結ぶ対角線上にあるが、やや浅すぎることで、対になるピットがないことから、柱穴である可能性は低い。このピットの計測値は以下の通り(長径×短径×深さ、cm)。

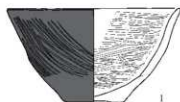
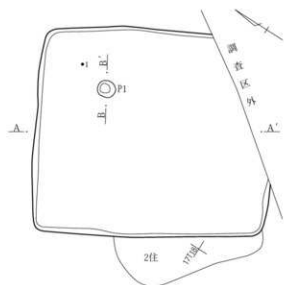
P1 29×27×13

炉 確認できなかった。 **貯蔵穴** 調査範囲内では確認できなかった。 **周溝** 調査範囲内では確認できず、もともと存在しなかったと思われる。 **掘方** 北西半部は一部を除いて深さ1~7cmと浅いが、南東部は深く掘る傾向にあり、25cm前後ある部分もある。 **遺物** 遺物は全体に少ない。掲載したのは土師器鉢1点、同甕1点であり、その他小破片として土師器杯・椀類3点、同高杯4点、同埴1点、同甕・壺類22点が出土している。 **時期** 出土遺物から4世紀後半と考えられる。

2号住居(第11図、PL. 6-4~7-1)

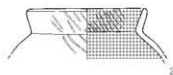
調査区東側にある。1号住居に大半を壊され、南西壁付近が残存するのみである。

位置 17区S・T17・18。 **重複遺構** 北東に1号住居が重複し、本住居を大きく壊している。 **形状** 南西壁付近しか残存していないので不明であるが、やや歪んだ方形と推定される。 **主軸方位** 南西辺の方向はN-49°W。 **規模** 北西壁と南東壁との間の長さは、セクションを取った部分で計測して2.26m。 **床面積** 残存部分は1.15㎡。 **壁高** 12~17cm。 **覆土** 黒褐色土一層で埋没しており、人為的に一気に埋めたものと考えられる。 **床面** 掘方をローム粒を多く含む暗灰黄色土で埋め戻し、その上に黒褐色土の薄い貼床を施して床面とするが、表面はあまり固くない。凹凸はなく平坦だが、南東に向かい緩やかに下がっている。ただし、南西の一部分のみの調査であり、これが全体の傾向であるかどうかは不明である。 **柱穴** 残存部分のほか、1号住居掘方底面からも柱穴の痕跡は確認できなかった。 **炉** 確認できなかった。1号住居によって破壊されているものと思われる。 **貯蔵穴** 南側にある。半分を1号住居に壊されているが、方形に近い楕円形で、長径は62cm、短径は現状で51cm、深さは30cmである。 **周溝** 確認できなかった。 **掘方** 北西部は1~5cm程度と浅いが、南東部は10~15cmと深く掘っている。 **遺物** 非常に少なく、掲載遺物はない。小破片として土師器杯・椀類2点、同甕・壺類6点が出土している。 **時期** 小破片しか出土していないので、時期は確定できないが、4世紀後半の1号住居に破壊されているので、それよりも古いものである。

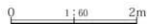


1号住居

1. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 軽石、ローム粒を含む。一気に埋められた上らしい。
2. ロームの崩れた上。
3. 黒褐色土(2.5Y3/1) ローム粒をわずかに含む。
4. ローム粒と褐色土(10YR4/4)の混土。貼床。以下掘方。
5. 黄褐色土(2.5Y5/4)



第10図 1号住居平面図、出土遺物



2号住居

1. 黒褐色土(10YR2/2) ロームブロック、焼土ブロックを少量含む。炭化物をわずかに含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2) ロームブロックをやや多く含む。焼土粒、炭化物をわずかに含む。貯蔵穴理上。
3. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを多く含む。焼土粒、炭化物をわずかに含む。貯蔵穴理上。
4. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土粒、ローム粒を含む。掘方。
5. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒を多く含む。焼土粒をわずかに含む。掘方。

第11図 2号住居平面図

3号住居(第12図、PL. 7-2・3)

調査区東側にあり、大部分が調査区外となる。東側は大きく攪乱で破壊されており、住居の西隅付近のみが調査できたにすぎない。

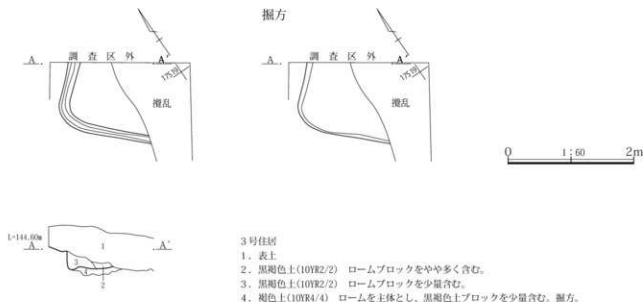
位置 17区S18・19。 **重複遺構** なし。 **形状** 西隅付近のごく一部しか調査できなかったが、隅は直角に近いので、方形になると推定される。 **主軸方位** 南西辺の方向はN-46°-W。 **規模** 不明。 **床面積** 残存部分を計測すると1.11㎡。 **壁高** 調査区の壁面で計測して24cm。 **覆土** 黒褐色土で埋没しているが、ごく一部しか残っていないため、自然埋没か人為埋没かの判断は困難である。 **床面** 掘方を褐色土で埋め戻して床面とする。表面はほぼ平坦だがあまり固くない。 **柱穴** 柱穴の可能性のあるピットは見つかっていない。写真(PL. 7-2・3)に写っているピット2基はいずれも断面観察から新しい時期のものと確認でき、攪乱と考えられる。 **竈・炉・貯蔵穴** 確認できなかった。 **周溝** 調査できた範囲内では、全域に廻っていた。幅10～15cm、深さ2～5cmである。 **掘方** 掘方底面までは床面から5～15cmあり、底面には全体に細かい凹凸がある。 **遺物** 出土遺物はない。 **時期** 出土遺物がないので、時期は不明である。

4号住居(第13図、第24表、PL. 7-4・5,51)

調査区北東辺東隅近くにあり、北側が調査区外となる。床面が削平され、かろうじて掘方部分のみが残った住居である。

位置 17区T19、18区A・B18・19。 **重複遺構** なし。 **形状** 北東部の半分以上が調査区外となるが、方形になるものと推定される。 **主軸方位** 南辺の方向はN-81°-E。 **規模** 南辺は全体が調査区内となり7.13m。西辺は5.10mでさらに調査区外に延びる。 **床面積** 床面は残っていないが、住居の残存部分を計測すると19.15㎡。 **壁高・覆土** 削平されて全く残っていない。 **床面** 削平されて全く残っていないが、掘方が比較的深いので、それを埋め戻して床面を構築していることは明らかである。 **柱穴** 掘方底面にはP1～5の5基のピットが見つかった。このうち、P1・P2の2基はその位置と規模から主柱穴と考えられるが、P3はセクション図に見るとおり、掘方埋土の途中から掘り込まれているため、主柱穴ではないことは明らかである。各ピットの規模は以下の通り(長径×短径×深さ、cm)。深さは掘方底面から計測した深さである。P1には径20cmの柱痕が残っていた。

P1 44×-×87 P2 42×31×78



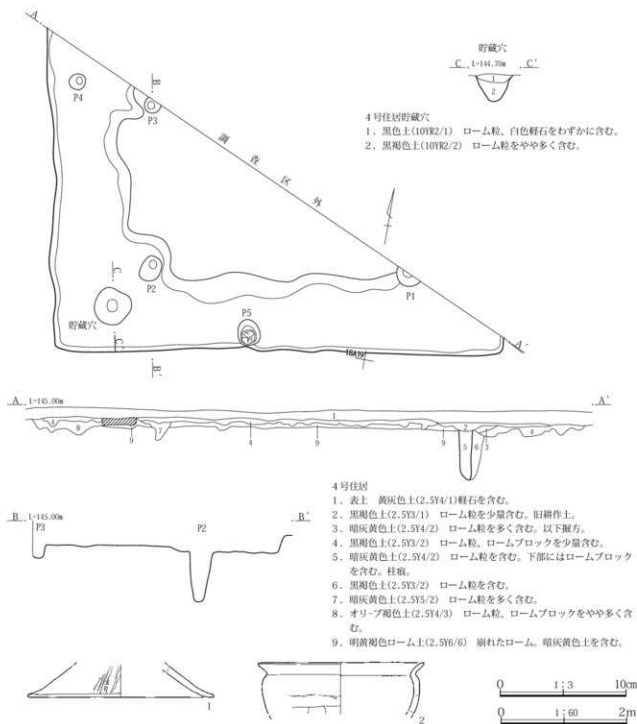
第12図 3号住居平面断面図

P 3 26×26×18 P 4 26×25×22

P 5 40×35×17

竈 確認できなかった。貯蔵穴 南西隅付近に貯蔵穴の可能性のある掘り込みがある。長径60cm、短径56cmのやや不整な円形で、深さは43cmである。周溝 確認できなかった。掘方 床面からの深さは不明だが、全体に深く、調査区壁(A-A'セクション)で見ると10cm以上あるところが大部分である。住居壁に沿って幅約1m

の範囲はさらに5～10cm程度深く掘り込んでいて、この部分の底面の細かい凹凸はやや顕著である。P1・2はちょうどその境にあるので、支柱穴の外側を深く掘るという意図があったらしい。遺物 遺物は少ないが、土師器高杯、甕各1点を掲載した。いずれも貯蔵穴からの出土である。その他、小破片として土師器甕・壺類4点が出土している。時期 出土遺物から6世紀前半であるとと思われる。



第13図 4号住居平面断面図、出土遺物

5号住居(第14～16図、第24表、PL. 7-6～8-2.51)

調査区東隅近くにある。他の遺構と重複しているものの、残存状態がよい住居である。

位置 18区B・C16・17。 **重複遺構** 6・7号住居、101号土坑と重複する。本住居は101号土坑よりも古いが、6・7号住居よりも新しい。また、竈の前には径約1.2mの円形の掘乱があり、床面を壊している。 **形状** ほぼ正方形。 **主軸方位** N-126°-W。 **規模** 5.36×5.38m。 **床面積** 25.46㎡。 **壁高** 25～36cm。 **覆土** 暗褐色土ないし黒褐色土で埋没しており、自然堆積と考えられる。 **床面** ごくわずかな凹凸はあるが、ほぼ平坦で固く締まっている。大部分は掘方を埋め戻し貼床を施しているが、中央南側の掘方が浅いところでは、ごく一部地山のローム面を直接床面としている部分がある。 **柱穴** P1～4の4本の柱穴が住居四隅からの対角線上に配されている。柱穴周囲の床面がよく踏み固められていたため、床面では柱痕跡を、掘方底面では柱穴の掘方をほぼ把握することができた。各柱穴の規模は次の通り(長径×短径×深さ、cm。○内は掘方底面で計測した柱掘方の規模であり、長径×短径、cm)。

P1 35×22×92 (26×22)

P2 26×25×78 (41×34)

P3 29×28×70 (56×46)

P4 28×24×52 (50×42)

竈 南西壁やや南寄りにある。全長126cm、幅88cm、焚き口幅30cm、燃焼部幅34cmである。燃焼部は住居内であり、煙道は壁外側に55cm張り出している。両袖先端部分に倒置した土師器裏が据えられ(7と8)、焚き口天井部分の構築材であったと思われる長さ47cm、幅23cm、厚さ8cmの平たい礫が、焚き口部の床直上にあった。これらの裏と石で焚き口が作られていたと思われる。袖の芯は地山のロームを細長く掘り残り、その上にローム土を貼り付けるようにして袖を作っている。 **貯蔵穴** 竈の左側、住居の南西隅にある。隅丸の長方形であり、住居の方位に合わせて掘られている。最下層を除いて住居とほぼ同様な土で埋没しており、住居使用時には開口していたものと思われる。長さ100cm、幅66cm、深さ82cmである。 **周溝** 大部分には見られるが、北東壁北寄りと南東壁ほぼ中央、南西壁竈南側の3箇所で見切れている。幅10～20cm、深さ1～14cmである。 **掘方** 南半

部をやや高く残す他は、全体に10～20cm深く掘って、細かい凹凸も目立つ。底面に顕著な施設は見られない。 **遺物** 遺物は多くない。掲載したのはすべて土師器で、杯2点、高杯1点、甕6点である。その他小破片として、土師器杯・椀類37点、同高杯11点、同壺・甕類193点、須恵器杯・椀類1点が出土している。また、住居周縁部近くの床面直上と1～5cm浮いた高さから、長さ12～18cm、幅8cm程度の細長い自然石10点が散在して出土している。これらは磨み石などの可能性がある。 **時期・所見** 出土した遺物から6世紀後半と思われる。竈の方向が南西向きなのは少なく、他には16、33号住居があり、39号住居もその可能性がある。

6号住居(第17～19図、第24表、PL. 8-3～8.51)

調査区東隅近くにある。南西側の半分以上を5号住居に壊されて残りが悪い。

位置 18区B・C17・18。 **重複遺構** 南西側に5号住居が重複する。本住居が古い。 **形状** 正方形に近い方形。 **主軸方位** N-47°-E。 **規模** 4.52×4.44m。 **床面積** 5号住居に破壊された部分を復元して推定17.79㎡。 **壁高** 12～18cm。 **覆土** 黒褐色土や黄褐色土で埋没しているが、不自然な堆積であり、人為的に埋められていると思われる。 **床面** 掘方を埋め戻して床面とする。全体的に平坦であるが、一部を除いて硬化は弱い。 **柱穴** 5号住居の掘方底面で柱穴2本(P2・3)が見つかり、これを含めたP1～4の4本が主柱穴になるものと思われる。各柱穴の規模は次の通りである(長径×短径×深さ、cm)。

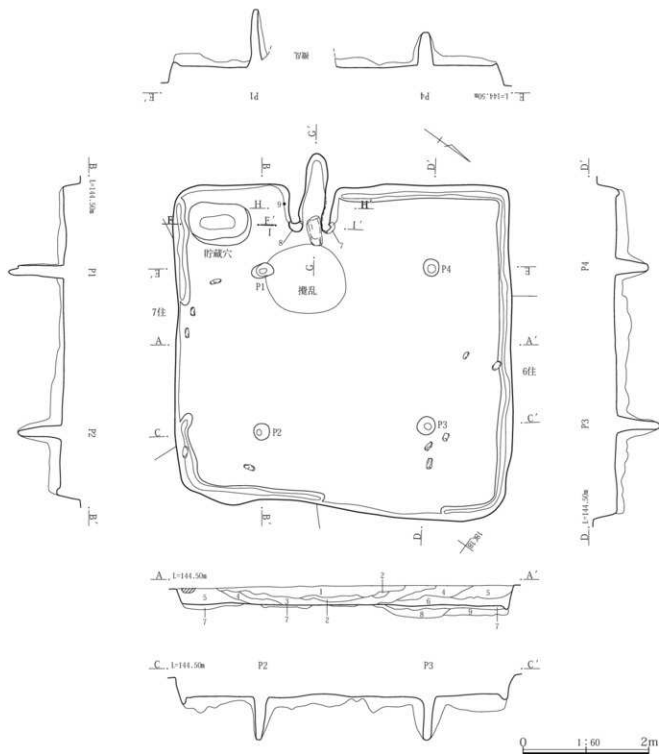
P1 40×34×76

P2 26×22×18 (5住掘方底面で計測)

P3 29×24×22 (5住掘方底面で計測)

P4 54×42×64

竈 北東壁中央やや南にある。煙道部先端を掘乱で破壊されている。現存長93cm、幅75cm、焚き口幅35cm、燃焼部幅40cmである。煙道部は屋外に20cm張り出している。両袖先端には扁平な角礫を立て、それを芯としてシルトを貼り付け袖を作っている。天井部の崩壊土と思われる灰白色シルトも見られるので、この竈はシルトを主に用いて構築しているらしい。焼土や炭化物も多く見られるので、よく使用されていたことが分かる。 **貯蔵穴** 竈



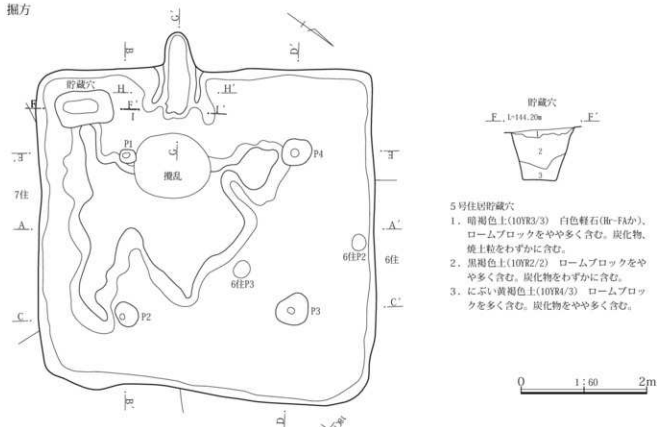
5号住居

1. 黒褐色土(10YR2/3) 明黄褐色軽石をやや多く含む。ロームブロック、炭化物を少量含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2) 明黄褐色軽石をやや多く含む。ロームブロック、炭化物粒をわずかに含む。
3. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを多く含む。明黄褐色軽石をやや多く含む。炭化物粒、炭土粒、白色軽石をわずかに含む。
4. 黒褐色土(10YR2/3) ロームブロック、明黄褐色軽石をやや多く含む。炭化物粒、白色軽石をわずかに含む。

5. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを多く含む。明黄褐色軽石、白色軽石をわずかに含む。
6. 黒褐色土(10YR2/3) ロームブロックを多く含む。明黄褐色軽石、白色軽石、炭化物粒、炭土粒を少量含む。
7. ロームブロックと黒褐色土(2.5Y3/1)の混合土。固く締まっている。陥床。
8. ロームブロック主体の上。暗灰黄色土(2.5Y4/2)を含む。掘方。
9. 黒褐色土(2.5Y3/2) ロームブロックを多く含む。掘方。

第14図 5号住居平面図

掘方

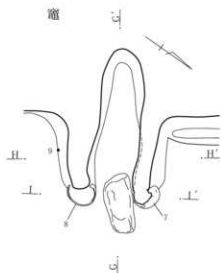


5号住居貯蔵穴

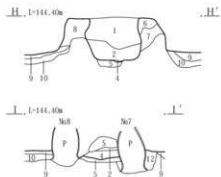
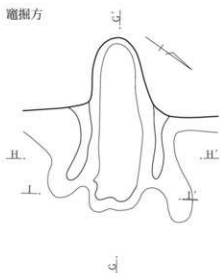
1. 暗褐色土(10YR3/3) 白色軽石(Hu-FAか)、ロームブロックをやや多く含む。炭化物、焼土粒をわずかに含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2) ロームブロックをやや多く含む。炭化物をわずかに含む。
3. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ロームブロックを多く含む。炭化物をやや多く含む。

0 1; 60 2m

竈



竈掘方

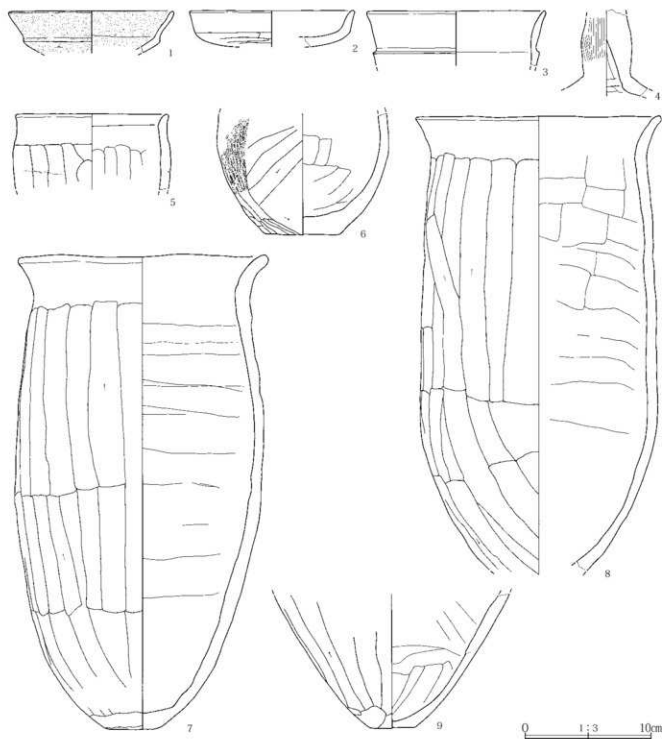


5号住居竈

1. 黄褐色土(2.5Y5/3) 少量の焼土ブロックを含む。
2. 焼土ブロックと黄褐色土の混土。
3. 黒褐色土(10YR3/2)
4. 焼土と灰黄褐色土(10YR4/2)の混土。炭化物を含む。
5. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒、ロームブロックを多く含む。以下、掘方。
6. 明黄褐色ローム土(2.5Y7/6) 上面が焼土化している。竈袖。
7. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土、炭化物、ロームを含む。内面は焼土化している部分がある。竈袖。
8. にぶい黄色ローム土(2.5Y6/4) 焼土を少量含む。内面は焼土化している部分がある。竈袖。
9. 黄褐色土(2.5Y5/3) ローム粒を多く含む。住居陥床。
10. 黒色土(2.5Y2/1) ローム粒、ロームブロックを多く含む。以下掘方。
11. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) ローム粒、焼土粒を多く含む。
12. 黒色土(2.5Y2/1) ローム粒を含む。裏の掘え付け穴。

0 1; 30 1m

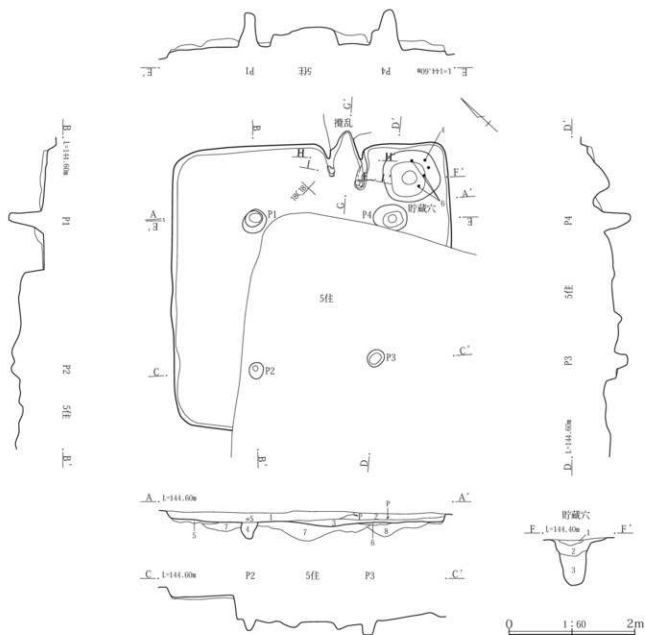
第15図 5号住居掘方平面図、貯蔵穴断面図、竈平面断面図



第16図 5号住居出土遺物

の右側、住居南東隅にある。やや歪んだ正方形で、長さ90cm、幅82cm、深さは70cmと深い。遺物が5点出土しているが、これは穴が完全に埋没した後、その埋没土の上の形而出土しているものであり、貯蔵穴の中からの出土ではない。周溝 確認できなかった。掘方 全体に細かい凹凸が目立つが、特に竈の前から北西側にかけて深く掘り、最も深いところでは床面から30cmある。

遺物 遺物は多くない。掲載したのは、いずれも土師器で、杯3点、甕3点である。それらのうち、4・6は貯蔵穴の埋土の上から出土している。その他小破片として、土師器杯・椀類28点、同甕・壺類65点、ミニチュア土器3点が出土している。**時期** 出土遺物から6世紀前半のものであると思われる。



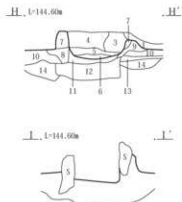
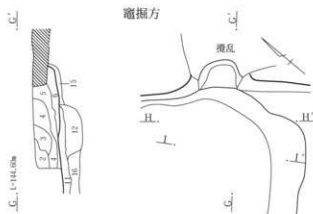
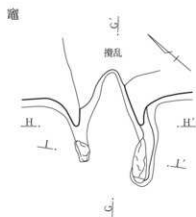
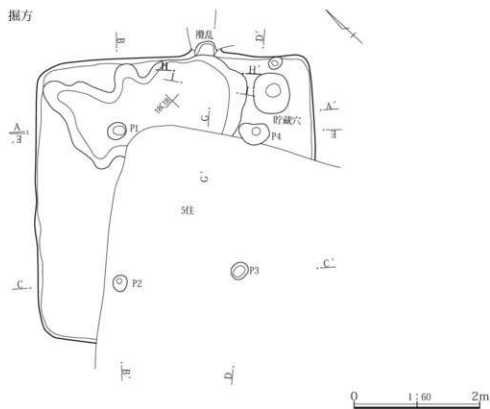
6号住居

1. 黒褐色土(10YR3/2) Br-Faに伴う白色軽石、ロームブロックを含む。
2. 黄褐色土(2.5Y3/3) 焼土ブロックを含む。
3. 黒褐色土(2.5Y3/2) 焼土ブロックを含む。
4. 黒褐色土(2.5Y3/2) ローム粒を含む。P1埋土。
5. 黒褐色土とロームブロックの混合。以下掘方。
6. 灰黄褐色シルト(10YR6/2) ローム粒を含む。貼床の残りか、締まりよい。
7. 暗灰黄色土とロームブロックの混合。
8. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒を多く含む。

6号住居貯蔵穴

1. 褐灰色土(10YR4/1) 焼土粒を含む。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土粒、ローム粒、少量の灰白色シルトを含む。
3. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) ローム粒を多く含む。焼土をごくわずかに含む。

第17図 6号住居平断面図

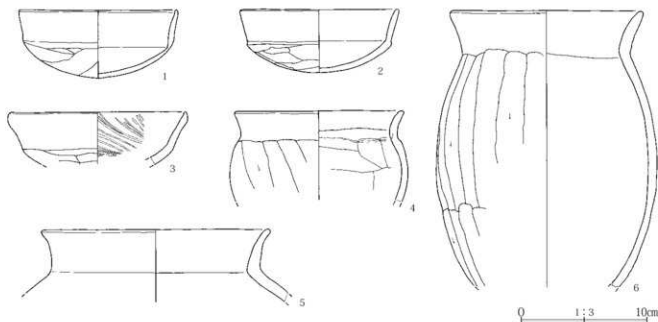


6号住居竈

1. 黄褐色土(2.5Y5/3) ローム粒、焼土粒を含む。
2. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 軽石を含む。
3. 灰白色シルト(2.5Y7/1) 焼土、黄灰色土を含む。天井部の崩壊か。
4. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 軽石、炭化物を含む。
5. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土、灰白色シルトを含む。
6. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土、灰白色シルトをやや多く含む。
7. 灰白色シルト(10YR7/1) 一部焼土化している。竈袖。
8. 濃い黄褐色シルト(10YR7/2) 内側は焼土化している。竈袖。
9. 灰黄色土(2.5Y6/2) 焼土、ローム粒、軽石を含む。竈袖。
10. 黄褐色土(2.5Y5/3) ローム粒を含む。以下掘方。
11. 灰黄褐色土(10YR5/2) 焼土を多く、ローム粒を少量含む。
12. 黒褐色土(2.5Y3/2) ローム粒、ロームブロックを多く含む。
13. 黄灰色土(2.5Y6/1) ややシルト質。
14. ロームの崩れた土と暗灰黄色土(2.5Y4/2)の混合。
15. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) ローム粒を含む。
16. 暗灰黄色土とロームブロックの混合。



第18図 6号住居掘方平面図、竈断面図



第19図 6号住居出土遺物

7号住居(第20～22図、第24・25表、PL. 9-1～6.52・53)

調査区東隅近くにある。炭化材が出土し、焼失家屋だと思われる。確認面にはHr-FAの一次堆積が見られる。

位置 18区B・C15～17。**重複遺構** 5号住居、101・103号土坑と重複する。本住居はいずれよりも古い。

形状 ほぼ正方形である。**主軸方位** N-66°-W。

規模 中央付近で計測して5.96×5.92m。**床面積** 5号住居の破壊された部分を復元して、推定32.53㎡。

壁高 24～28cm。**覆土** 住居周縁部が黒褐色土(セクション図の4層)、黄褐色土(3層)で埋まった後、黒色土(2層)でほぼ一気に埋まっている。炭化材は3層の上面に見られるので、住居が焼失した直後に4・3層が周囲から流入し、その後炭化した材が崩れたらしい。確認面では一番上層にHr-FAの一次堆積(1層)が見られたので、その頃にもわずかに凹んでいたことが分かる。

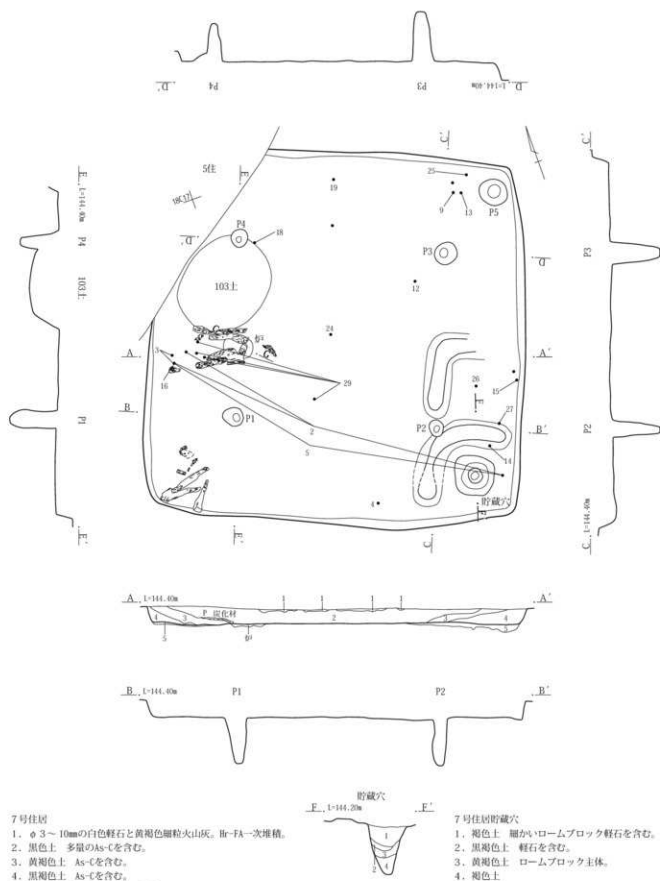
床面 全体に平坦で、硬化している。掘方は周辺部をごく浅く掘るのみで、中央部は地山を直接床面としている。炉のある辺と逆の辺には、壁近くにL字型のわずかな高まり(幅45cm、高さ2～3cm)が見られる。この付近には、掘方底面にP6～8、P12の4基のピットが見られ、何らかの施設(入り口か)があったものと思われる。**柱穴** P1～4の4本が主柱穴と思われる。その他、北東隅にP5、掘方底面にはP6～12がある。これらのうち、P7とP8は平面形が方形で床面のL字型の高まりの内側に並んでおり、何らかの施設を支える穴であると思わ

れる。それぞれの大きさは以下の通り(長径×短径×深さ、cm)。

P 1	34×29×76	P 2	28×22×76
P 3	37×35×78	P 4	29×26×60
P 5	47×40×40	P 6	60×56×23
P 7	26×20×11	P 8	25×18×15
P 9	35×30×20	P 10	33×31×29
P 11	28×22×15	P 12	27×20×12

炉 北西部の、主柱穴(P1～P4)を結んだ線上にある。わずかな掘り込みをもつ地床炉で、長径48cm、短径36cmの楕円形である。炉の南東側には長さ18cm、幅9cmの細長い自然礫が置かれていた。炉の埋土は炭化物を含む黒色土である。底面は一部焼土化していた程度で、あまり使用されていたように思えない。炉の上には炭化材が多く残っていた。**貯蔵穴** 南東隅にある。やや歪んだ正方形で、縦・横とも63cm、深さは80cmと深い。周囲を囲むようにL字型のわずかな高まり(幅40～46cm、高さ3～7cm)が設けられている。この高まりの内側は床面よりも4～10cm低くなっており、その中央に貯蔵穴が掘ってある。あるいはここに蓋のようなものが設置されていたのかもしれない。**周溝** 確認できなかった。

間仕切り溝 間仕切りのための溝と考えられるものが掘方から4条見ついている。北東壁と、南西壁とに2本ずつ、それぞれほぼ対応する位置にある。壁の直下から、主柱穴を結んだ線まで延びており、4本の主柱穴を結ん



第20図 7号住居平断面図



第22図 7号住居出土遺物(2)

第4章 瓦子遺跡の調査の成果

だ範囲の内外で、空間の使用法が異なっていたことを窺わせる。それぞれの溝の規模は次の通り(長さ×幅×深さ、cm)

M1 138×17～22×9～10

M2 132×18～23×13～16

M3 158×20～26×5～7

M4 139×19～21×10～11

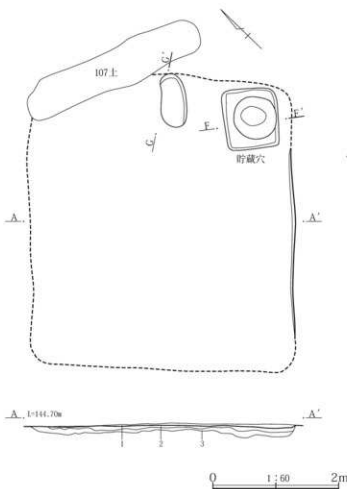
掘方 壁に沿って幅1.2～1.6m程度の部分を浅く(1～5cm)掘っているが、中央部はほとんどない。前述の入り口と考えられる部分は12cmと深い(A-A'セクション参照)。**遺物** 出土遺物は多い。土器は炉の西側、貯蔵穴とその北側の壁際付近、北東隅付近の3ヶ所にやや

集中している。掲載した土器いずれも土師器で、杯2点、高杯16点、鉢3点、椀2点、台付鉢1点、埴2点、壺1点、甕2点であり、石製品として滑石製勾玉1点が覆土中から出土している。その他、小破片として土師器杯・椀類10点、同高杯96点(うち9点は赤彩)、同甕・壺類207点、同埴38点、須恵器甕・壺類1点である。**時期** 出土遺物から5世紀前半のものと思われる。

8号住居(第23・24図、第26表、PL. 9-7～10-2, 53)

調査区東隅近くにある。表面が削平され、床面がかるうじて残っている程度の残存率である。

位置 18区C・D18・19。 **重複遺構** 北に107号土坑



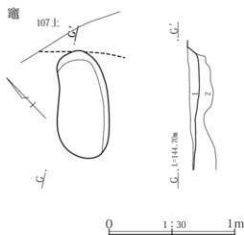
8号住居

1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロック、白色軽石(Br-FAか)を少量含む。炭化物粒、焼土粒をわずかに含む。
2. 黒褐色土(2.5Y3/2) ロームブロックを含む。固く締まっている。貼床。
3. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ロームブロック、ローム粒を多く含む。掘方。



8号住居貯蔵穴

1. 黒褐色土(10YR2/2) ロームブロック、焼土ブロックを少量含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒、焼土粒をわずかに含む。
3. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ロームブロックをやや多く含む。焼土粒をわずかに含む。
4. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロック、焼土ブロック、灰白色シルトブロックをやや多く含む。
5. 暗褐色土(10YR3/3) 焼土ブロックを多く含む。ロームブロック、灰白色シルトブロックを少量含む。
6. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ロームブロックをやや多く含む。粘性あり。



8号住居竈

1. 黒褐色土(10YR3/2) ロームブロックを含む。炭化物、焼土粒をわずかに含む。底面はわずかに焼土化している。
2. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを多く含む。掘方。

第23図 8号住居平面断面図、竈断面断面図

が重複する。本住居が古い。 **形状** 方形。 **主軸方位** N-45°-E。 **規模** 4.70×4.20m。 **床面積** 107号土坑で破壊された部分も復元して、推定19.35㎡。

壁高 削平されて南東壁の一部だけしか残っていない。最も高いところで5cmである。 **覆土** 削平されているため、覆土はわずかに黒褐色土1層しか残っていない。 **床面** 掘方を全体的に暗灰黄色土で埋め戻し、さらに黒褐色土の貼床を施して床面としている。床面は中央付近から東部にかけて残っていたが、平坦で、特に中央部分は固く締まっている。 **柱穴** 床面調査時は浅い攪乱が多く存在したため、その存在に気がつかなかったが、掘方調査時にP1~4の主柱穴を確認した。P3のすぐ脇にはほぼ同じ大きさ・深さのP5があるので、この部分は柱の取り替えか補強が行われていた可能性がある。P6は深くしっかりとしたビットだが、性格は分からない。それぞれの大きさは以下の通り(長径×短径×深さ、cm)。掘方底面で計測しているので、言うまでもなく床面ではさらに数値が大きくなるはずである。

P 1	24×20×17	P 2	24×22×20
P 3	28×24×25	P 4	28×26×22
P 5	30×19×30	P 6	51×38×26

竈 北東壁の中央やや南寄りに焼土・炭化物をわずかに含む土が楕円形に分布していたため、ここが竈だと思われるが、この付近は床面まで削平されており、この楕円形の部分は竈掘方の底部だと考えられる。その大きさは、長さ85cm、幅42cm、深さは最も深いところでも8cmで、その下層は住居掘方埋土となっており、竈掘方としてはやや浅いものである。底面には一部焼土化している部分が残っていた。 **貯蔵穴** 東隅にある。長さ97cm、幅88cm、深さ16cmの方形の凹みの中に、70×68cm、深さ44cmの円形のビットが掘られる形である。埋土の特徴からは把握できなかったが、この方形の凹みは、蓋などの痕跡と思われる。埋土の断面を見ると、住居内側から土が流れ込んでいることが分かり、住居廃絶時に人為的に埋められた可能性が考えられる。 **周溝** 掘方調査時にも確認できなかった。 **掘方** 住居中央付近をやや高く残すものの、全体に10~15cm前後掘っている。底面には細かい凹凸が目立つ。 **遺物** 遺物の出土は少なく、掲載できるのはいずれも土師器で、杯1点、器台と思われるもの1点、壺1点、甕2点である。小破片としては

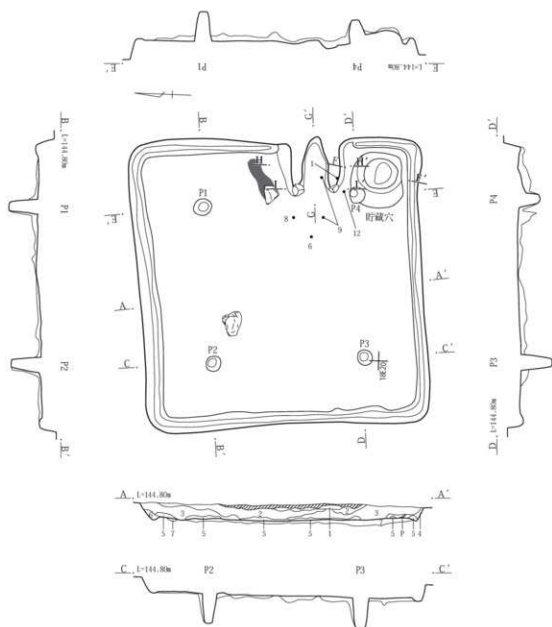
土師器杯・椀類9点、同高杯2点、同甕・壺類30点が出土している。 **時期・所見** 出土遺物から6世紀前半のものと思われる。残りの非常に悪い住居であるが、貯蔵穴に蓋の痕跡らしいものがあるのが注意される。

9号住居(第25~28図、第26表、PL.10-3~8,53)

調査区東部の北端近くにある。北東辺に近いが、全体を調査できた。重複する遺構や攪乱もなく、残りがよい。 **位置** 18区D・E19・20。 **重複遺構** なし。 **形状** 竈のある辺がやや長い。 **主軸方位** N-87°-E。 **規模** 中央付近で計測して4.43×4.51m。 **床面積** 19.15㎡。 **壁高** 18~30cm。 **覆土** 黄褐色土ないし黄灰色土で薄く埋まった後、暗灰黄色土、黒褐色土で埋まっている。 **床面** 掘方をロームを主体とする黄褐色土で埋め戻して床面とする。ほぼ平坦である。 **柱穴** P1~4の4本の主柱穴が四隅からの対角線上に配されている。P4は貯蔵穴の縁部に掛かり、竈にもごく近い位置にある。各柱穴の大きさは以下の通り(長径×短径×深さ、cm)。

P 1	30×26×46	P 2	24×22×47
P 3	25×24×49	P 4	26×24×34

竈 東辺の中央やや南寄りにある。長さ92cm、幅106cm、焼き口幅40cm、燃焼部幅34cmである。燃焼部は住居内にあり、煙道の壁外側への張り出しは少なく5cmである。両袖部の先端には、長さ25cm、径10~18cmの自然礫を立てて焼き口とする。竈左側の床面から出土した石も、周囲に炭化物が分布していたため、構築材の一部がここに転落した可能性がある。袖は灰黄褐色シルトを主材料として作っている。竈内部はよく焼土化しており、また、埋土には天井部と思われる固く焼けた焼土ブロックが多く見られ、よく使用されていたことが分かる。 **貯蔵穴** 南東隅にある。長さ88cm、幅80cmのやや歪んだ長方形である。底面の位置に比べて、北側と西側が広がっており、しかも、主柱穴のP4がその部分に掛かってしまっていることが不自然であるため、あるいは北側と西側は使用途中で崩れて広がってしまったのではないかと考えられる。埋土の大部分は住居の覆土と共通するため、住居埋没と同時に埋まったものと考えられる。 **周溝** 全周している。竈の掘方調査では、竈を作る部分にも構築前に周溝が掘られていたことが判明した。幅13~25cm、



9号住居

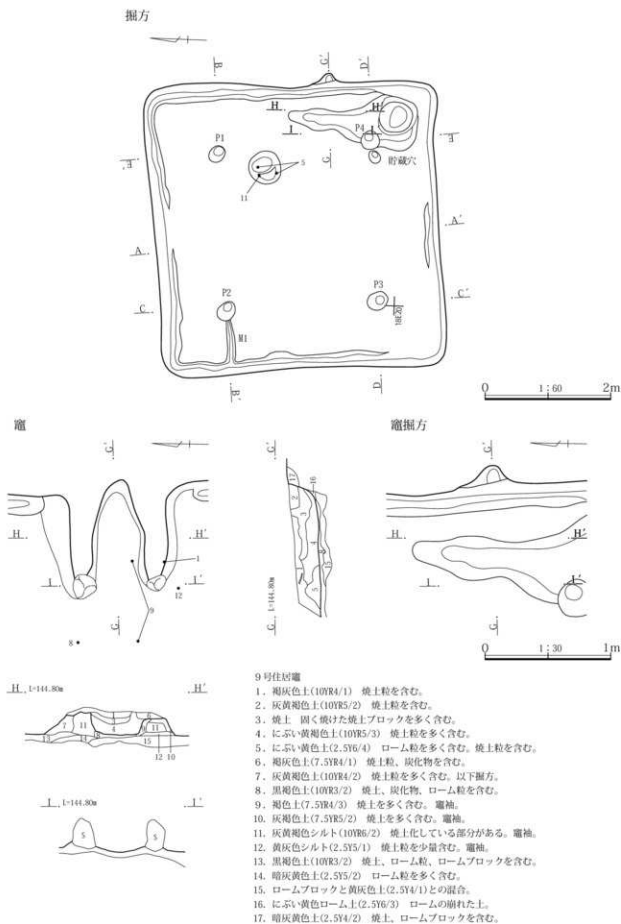
1. にぶい黄色ローム土(2.5Y6/4) やや砂質。
2. 黒褐色土(2.5Y3/2) 軽石を含む。ローム粒を少量含む。
3. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 軽石を少量含む。ローム粒を全体に含む。
4. 黄褐色土(2.5Y5/4) ローム粒を多く含む。
5. 黄灰色土(2.5Y4/1) 炭化物、焼土粒を含む。ローム粒を少量含む。
6. 黄褐色土(2.5Y5/3) ローム粒を多く含む。
7. 黄褐色土(2.5Y5/6) ロームを主体とし黒褐色土ブロックを少量含む。焼土ブロック、炭化物をわずかに含む。掘方。

9号住居貯藏穴

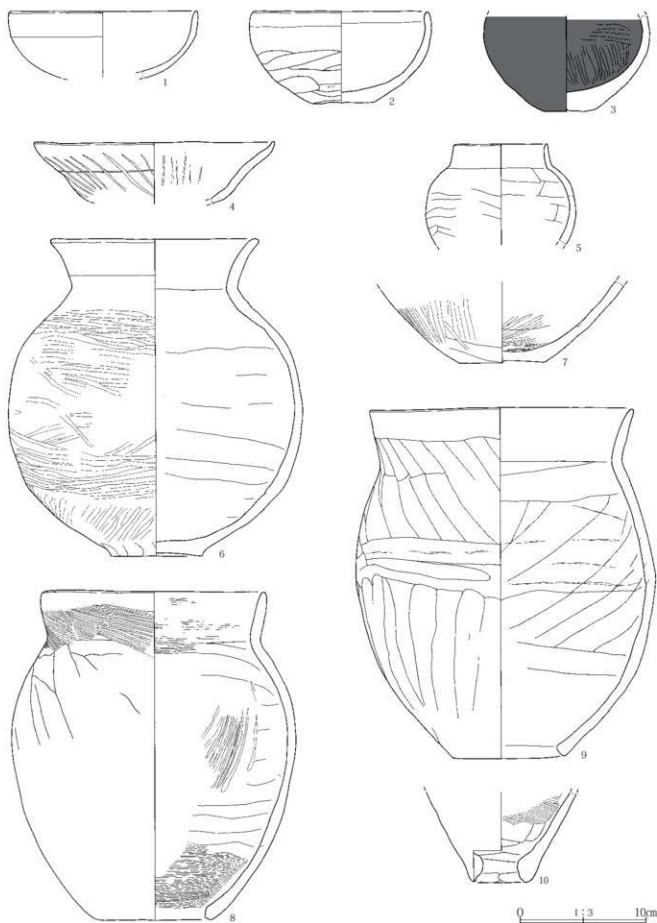
1. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒、ローム小ブロックを含む。
2. 黄褐色土(2.5Y5/3) ローム粒、ローム小ブロックを多く含む。
3. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) ローム粒をわずかに含む。

0 1:60 2m

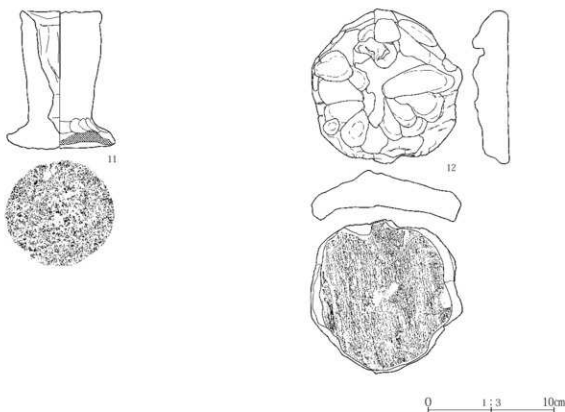
第25図 9号住居平断面図



第26図 9号住居掘方平面図、窟断面図



第27図 9号住居出土遺物(1)



第28図 9号住居出土遺物(2)

深さ1~9cmである。**間仕切り溝** 掘方調査によって西壁からP2に向かって間仕切りと思われる溝(M1)が見つかっている。幅7~14cm、深さ4~7cmである。

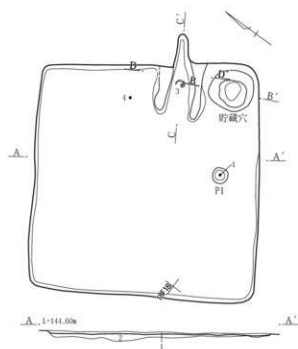
掘方 全体に浅く、3~12cm程度で、南側がやや深い傾向にある。底面には細かい凹凸が見られる。貯蔵穴の部分から竈に向かって浅く土坑状に掘られているのが目立つ。また、竈左前の部分には53×50cm、深さ26cmの小さな土坑が掘られ、内部から壺(5)と支脚(11)が出土した。このうち、壺は竈内出土のものと同接合したので、この土坑は本来床面から掘られていたものを見落としてしまった可能性がある。**遺物** 遺物の出土は比較的多い。掲載したのはいずれも土師器で、鉢3点、高杯1点、壺3点、甗3点、支脚1点、粘土塊1点である。竈周辺からの出土が多く、鉢(1)、壺(6)、甗(8・9)、粘土塊(12)などが見られる。粘土塊としたものは径12cm程度の円形で厚さは3cmあり、上面は指撫で、下面は蹄状の圧痕が残る。用途不明の遺物である。その他小破片として土師器杯・椀類7点、同高杯4点、同甗・壺類70点が出土している。**時期** 出土遺物から5世紀後半と考えられる。

10号住居(第29・30図、第26表、PL.11-1~6,54)

調査区東部のやや北寄りにある。削平を受けて壁のほとんどはなくなっているが、床面はほぼ全体が残っていた。

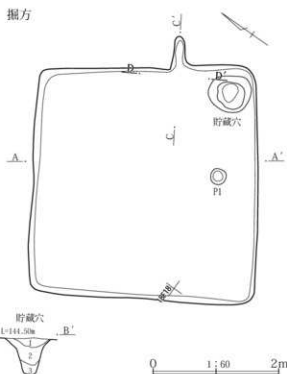
位置 18区E・F17・18。**重複遺構** なし。**形状** 南東辺が北西辺より約30cm長く、また、南東壁は竈を挟んで食い違っているが、四隅の丸みが少なく、全体は比較的整った方形をしている。**主軸方位** N-54°-E。

規模 3.67×3.56m。**床面積** 12.48㎡。**壁高** 0~5cm。**覆土** 最下層の褐灰色土1層しか残っていない。**床面** 掘方をロームブロックを多く含む褐灰色土で埋めて床面とする。平坦ではあるが、あまり硬化していない。**柱穴** 確認できなかった。南東にあるP1は単独で見つかっており、位置からみても柱穴とは思えない。径26cmのほぼ円形で、深さは15cmである。内部から1の土師器杯が完形のまま出土した。**竈** 北東辺の南寄りにある。全長138cm、幅85cm、焚き口幅36cm、燃燒部幅31cmで、燃燒部は住居内にあり、煙道は壁外側に50cm張り出している。削平のため基部しか残っていないが、袖は灰白色シルトで作られており、また、同じシルトが竈内にも見られることから、このシルトを用いて竈



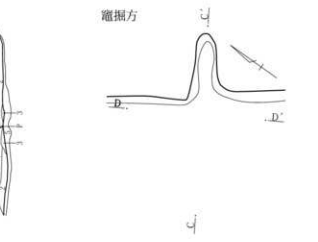
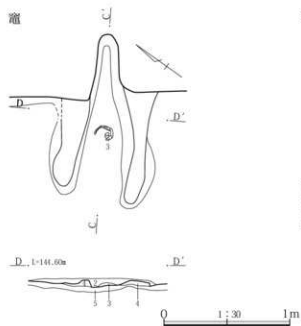
10号住居

1. 褐色土(10YR4/1) ローム粒を少量含む。
2. 褐色土(10YR4/1) ロームブロックを多く含む。掘方。



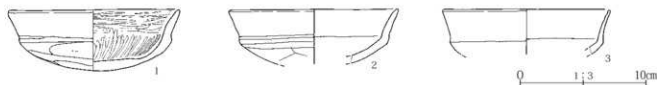
10号住居貯蔵穴

1. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒、白色鮮石をわずかに含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを少量含む。
3. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックをやや多く含む。やや粘性あり。

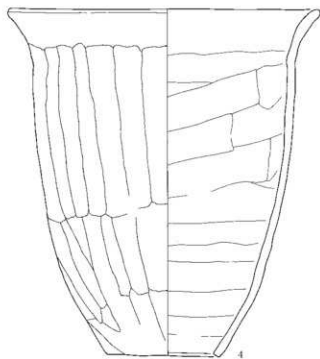


10号住居竈

1. 灰褐色土(7.5YR4/2) 焼土粒を多く含む。灰白色シルト粒をまばらに含む。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土粒、灰白色シルト粒を含む。
3. 灰白色シルト(10YR7/1)
4. 黒褐色土(10YR3/1) 灰白色シルトを含む。竈袖の最下部。
5. 赤い黄褐色土(10YR5/3) ローム粒を多く含む。焼土粒を多く含む。掘方。



第29図 10号住居平面図、竈平面図、出土遺物(1)



第30図 10号住居出土遺物(2)

0 1:3 10cm

を構築したものと思われる。燃焼部には3の土師器杯が伏せられた状態で残っていた。**貯蔵穴** 竈の右、住居東隅にある。長径74cm、短径64cmの、やや方形に近い楕円形で、深さは58cmである。**周溝** 確認できなかった。**掘方** 全体に3~12cm程度、ほぼ平坦に掘られている。**遺物** 遺物は少ない。掲載したのは土師器4点で、杯3点、甑1点である。杯(3)は竈内から、杯(1)はP1内から、甑(4)は竈北西の床直から出土した。その他土師器杯・碗類2点、同喪・壺類10点が出土している。**時期** 出土遺物から6世紀後半と考えられる。

11号住居(第31・32図、第26表、PL.11-7~12-3,54)

調査区東部のほぼ中央にある。上面に削平を受けているために床面までの深さはかなり浅くなってしまっていたが、他の遺構・攪乱との重複がないので、比較的残存状態がよい住居である。

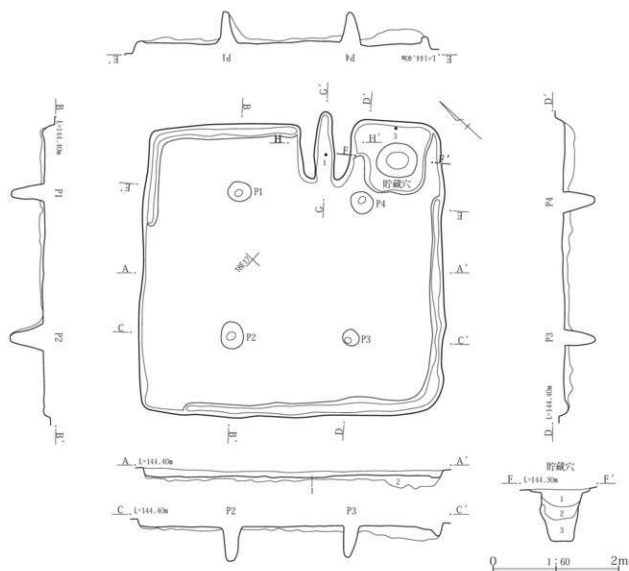
位置 18区D・E16・17。**重複遺構** なし。**形状** 比較的整った正方形である。**主軸方位** N-47°-E。

規模 4.84×4.66m。**床面積** 20.95㎡。**壁高** 8~16cm。**覆土** 削平を受けているため、最下層と思われる暗灰黄色土1層しか残っていない。**床面** 掘方をロームブロックを多く含む暗灰黄色土で埋め戻し床面とする。表面の硬化は弱い。**柱穴** P1~4を主柱

穴とすると思われるが、その位置はやや内側に偏り、主軸方向に長い長方形に配置されている。また、掘方底面からはピット1基(P5)が新たに見つかった。住居中央やや北西寄りにあり、P2とP3からはほぼ等距離にあるため、住居の構造に何らかの役割をもった柱穴である可能性がある。それぞれの柱穴の大きさは以下の通り(長径×短径×深さ、cm)。

P 1	38×30×52	P 2	43×35×54
P 3	26×24×50	P 4	38×32×52
P 5	22×19×12		

竈 北東壁中央やや南寄りにある。全長117cm、幅95cm、焚き口幅22cm、燃焼部幅24cmである。燃焼部は住居内にあり、煙道は壁外側に17cm張り出している。袖は灰黄色あるいは黄灰色シルトで作られており、埋土中にも灰白色シルトが多く見られることから、これらのシルトで竈が構築されていたと思われる。竈内部は底部を中心によく焼土化していた。燃焼部には支脚と思われるやや細長い自然礫(長さ12cm、径8cm)が立ったまま残され、その上に1の土師器杯が被さるように載っていた。**貯蔵穴** 竈右側の住居南東隅にある。深さ5~20cmほど四角く掘られた部分があり、その中央に楕円形の貯蔵穴が掘られている。貯蔵穴そのものは65×54cmで、深さは床面から計測して82cmある。周囲の四角い部分は、竈袖まで達



11号住居

1. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒、軽石を含む。
2. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ロームブロックを多く含む。掘方。

11号住居貯蔵穴

1. 黒褐色土(10YR2/2) ロームブロックをわずかに含む。やわらかい。
2. 黒褐色土(10YR2/3) ロームブロックを少量含む。やわらかい。
3. 黒褐色土(10YR2/3) ロームブロックをやや多く含む。やわらかい。

第31図 11号住居平面図

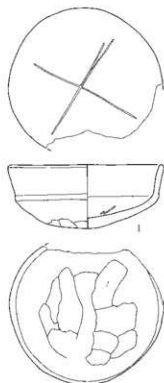
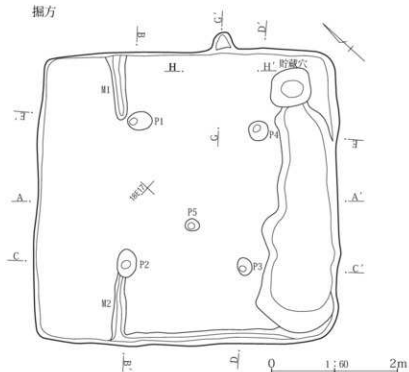
しているが、この部分は掘り過ぎの可能性が強く、本来は約1m四方の方形の範囲だったと考えられる。また、深さも住居掘方埋土まで含めて掘ってしまった可能性が強く、これも本来はセクション図に見るように、4～5cm程度の深さだったのではないかと考えられる。とすると、貯蔵穴脇で底から14cm淨いた高さから出土している3の跡の破片も、本来その四角い凹みの底にあったことになる。つまりこの貯蔵穴付近の本来の姿は、方約1m、深さ4～5cm程度の四角い掘り込みの中央に、楕円形の貯蔵穴が掘られていたというものだと考えられるのである。この四角い掘り込みは蓋などを設置した施設と

考えられ、とすれば4～5cmの深さの方がよりふさわしいと考えられる。周溝 北西壁の南西側から西隅付近にかけてと、貯蔵穴付近には見られないが、その他の部分に確認できた。幅12～25cm、深さ1～17cmの明瞭な周溝である。間仕切り溝 掘方底面で、北東壁、南西壁からそれぞれP1、P2に向かって間仕切りと思われる溝が見ついている。前者をM1、後者をM2とする。両者の規模は以下の通り(長さ×幅、cm)。深さは周囲も含めて凹凸が多いため、計測不能であるが、いずれも浅く、痕跡程度の残存度である。

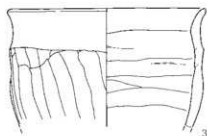
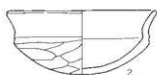
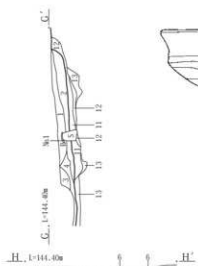
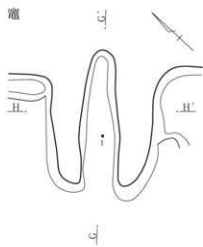
M1 102×20～32

第4章 丑子遺跡の調査の成果

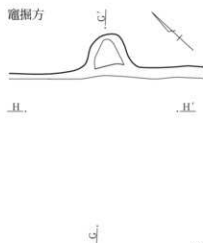
掘方



竈



竈掘方



11号住居竈

1. 暗褐色土(10YR3/3) 灰白色シルト粒、焼土粒をわずかに含む。
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 灰白色シルトブロック、ロームブロック、焼土ブロックをやや多く含む。部分的に灰を含む。
3. にぶい黄褐色土(10YR5/4) 灰白色シルトブロックを多く含む。焼土ブロックを少量含む。天井部の崩落か。
4. 暗褐色土(10YR3/3) 灰白色シルトブロック、焼土ブロックを少量含む。
5. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒、軽石を含む。

6. 灰白色シルトと暗灰黄色土の混合。竈袖。
7. 灰黄色シルト(2.5Y7/2) 焼土化している部分がある。竈袖。
8. 黄灰色シルト(2.5Y6/1) やや砂質。竈袖。
9. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 焼土粒を含む。以下掘方。
10. 灰白色シルト(2.5Y7/1) 暗灰黄色土を含む。
11. 灰黄褐色土(10YR5/2) 焼土、ローム粒を含む。
12. 黒褐色土(2.5Y3/2) ローム粒を含む。
13. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒を多く含む。



第32図 11号住居掘方平面図、竈平面図、出土遺物

M2 110×16～21

掘方 住居南東壁に沿って、幅80～120cm、深さ20cm前後に土坑状に深く掘る部分があるが、それ以外は5～10cm程度と浅い。底面には細かい凹凸が顕著である。

遺物 遺物の出土は少ない。掲載したのはいずれも土師器で杯2点、鉢1点、手捏ねのミニチュア土器1点である。その他小破片として、土師器杯・椀類10点、同高杯2点、同裏・壺類47点が出土している。**時期** 出土遺物から6世紀後半と思われる。

12号住居 (第33～37図、第26～28表、PL.12-4～13-6, 54～56)

調査区東部中央にあり、1号堀と重複して北西隅付近を失っている。覆土の下層にAs-Cが一次堆積している。

位置 18区F・G17・18。**重複遺構** 1号堀と重複し、本住居が古いことは平面で確認した。**形状** 方形だが、やや平行四辺形気味に歪んでいる。**主軸方位** N-14°-W。**規模** 6.16×6.25m。**床面積** 1号堀で破壊されている部分も復元して、推定36.23㎡。**壁高** 36～52cm。**覆土** 一次堆積土(A-A'セクションの11・12層)が堆積した後に、As-Cの純層(9層)が堆積している。柱穴内にもAs-Cが堆積しているので、As-Cの降下時期は、上屋及び柱が撤去され、一次堆積土が堆積した後である。住居中央は、As-Cが攪拌されてローム土との混土(10層)となっていることから、As-C降下後にこの住居の中に人が立ち入り、この部分のAs-Cと床面のローム土とを踏んで攪拌した可能性がある。**床面** 地山を直接床面としている。**柱穴** 4本の柱穴(P1～4)が四隅からの対角線上に配されている。そのため住居の歪みそのまま柱穴配置の歪みとなっている。また、西側の2本(P1・4)に比べ、東側の2本(P2・3)は浅いという特徴がある。P5は貯蔵穴の可能性があるので、貯蔵穴の項で記述する。P6～9の4本のピットについては不規則な配置であり、径も小さく浅いので、用途は不明である。ただし、P8・9は炉と反対側の壁際にあるので、入り口に関わるもの(梯子穴)である可能性が考えられる。各ピットの大きさは以下の通り(長径×短径×深さ、cm)。

P1 60×48×52 P2 51×46×38

P3 45×39×30 P4 51×40×58

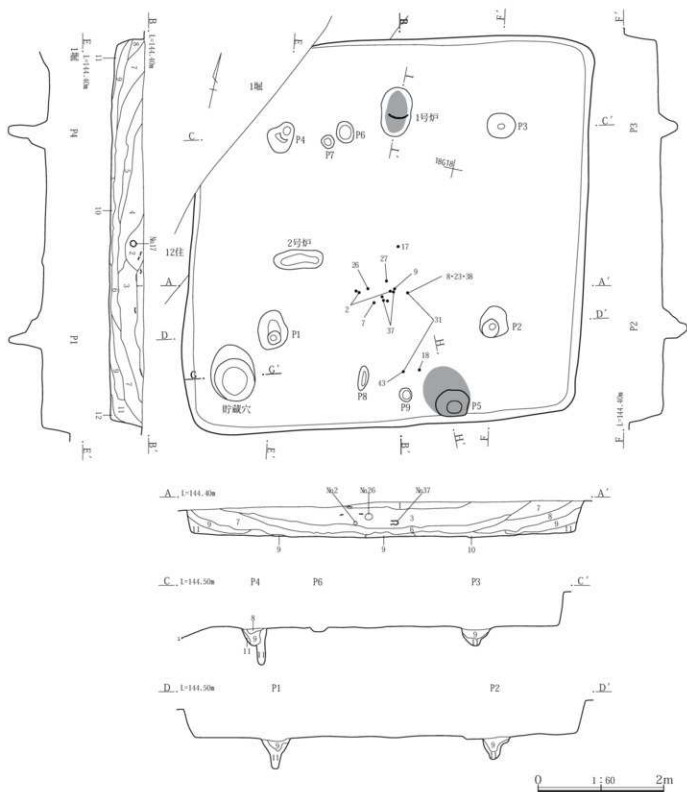
P5 54×42×58 P6 34×28×7

P7 20×19×5 P8 40×15×8

P9 22×20×12

炉 北西部(1号炉)と南西部(2号炉)とに1ヶ所ずつある。1号炉はいわゆる地床炉であり、長径78cm、短径49cmの楕円形で、深さ4cmである。底面はよく焼土化しているため、これが本住居で主として用いられた炉であろう。中央部には土器片が横断するように設置されているが、セクション図にみる2層は掘方ではなく、地山の焼土化が及んだ範囲であり、したがって土器片は、地山を掘って埋めこんだのではなく、地山上面から押し込んで設置したものである。この2層の底面までは、床面から10cmの厚さがある。2号炉は長さ78cm、幅31cmの長楕円形で、深さ11cmである。底面が焼土化しているために、これも炉であると判断したが、焼土化はさほど強くなく、1号炉に対して補助的な役割の炉であると考えられる。

貯蔵穴 南西隅にある。床面では長径92cm、短径70cmの楕円形だが、主たる部分は68×61cmのほぼ円形である。深さは69cmである。As-Cを含まない黒ボク土で埋没し、最上部は住居の一次埋没土(11層)が覆っている。黒ボク土は住居の覆土には存在しないので、住居廃棄以前に埋められた可能性が高い。また、P5は南東壁直下中央やや東寄りにある。径はやや小さいが、弥生後期の住居はこの位置に貯蔵穴を設けるのが通例なので、これも貯蔵穴であると思われる。上面に85×70cmの範囲で焼土が堆積しているのが注目される。埋土にはAs-Cを含まず、11層に近い土で埋没しているため、住居廃棄時には穴が開いていた可能性が高い。とするとこの上面を覆う焼土層は住居廃棄後、このピットが埋まりきった後に形成されたことになるが、焼土の性格は不明である。**周溝** 確認できなかった。**掘方** なし。**遺物** 出土遺物は多い。As-Cの下層から出土した遺物は、1号炉に埋め込まれた土器片と、P5(貯蔵穴?)から出土した小破片を除いて全くなく、それ以外のすべての遺物はAs-Cの上層、特に3層からの出土が大半を占める。平面図に出土地点が落ちている土器はほとんどが3層出土のものである。これらの土器は5世紀前半～中頃のモノなので、その頃までこの住居は凹みとして残り、そこに遺物が廃棄されたものであろう。P5から出土した小破片は覆土出土の破片と接合して樽系土器の短頸部の口縁部であること

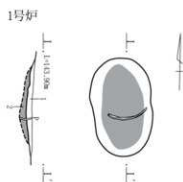
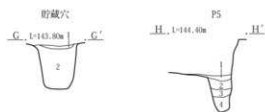


12号住居

1. 黒色土 φ 1～10mmのAs-Cを多量に含む。
2. 暗褐色土 φ 1～5mmのAs-Cを含む。
3. 黒色土 φ 1～10mmのAs-Cを多量に含む。
4. 暗褐色土 φ 1～10mmのAs-Cを多量に含む。
5. 黒褐色土 φ 1～5mmのAs-Cを少量含む。
6. 黒色土 φ 1～5mmのAs-Cを多量に含む。

7. 黒褐色土 φ 1～5mmのAs-Cを含む。
8. 暗褐色土 φ 1～5mmのAs-Cを含む。
9. φ 1～10mmの白色軽石、青灰色粗粒火山灰、As-C一次堆積。
10. 黄褐色土 As-Cとローム、の混土。
11. 褐色土 As-C含まない、少量のAs-VP含む。
12. 褐色土と黒色土の混土。

第33図 12号住居平面図



12号住居貯蔵穴

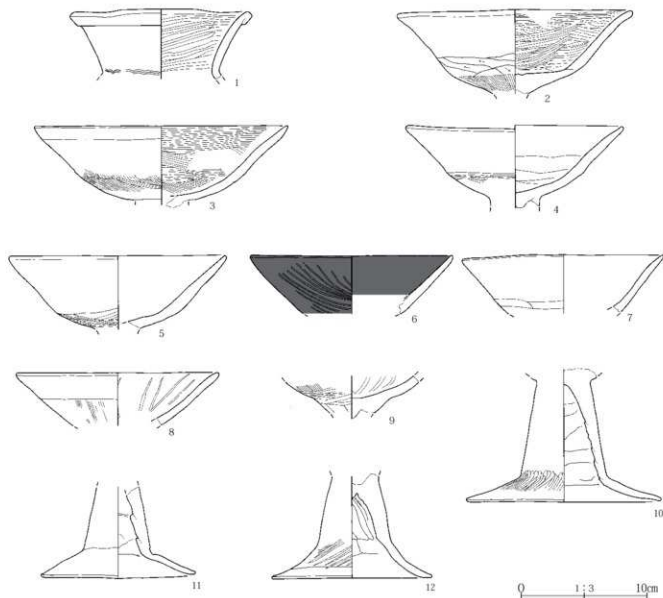
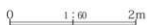
1. 褐色土。As-C含まない。少量のAs-Yを含む。住居層上の11層と同じ。
2. 黒ボク土。As-C含まない。

12号住居P 5

1. 焼土 As-C含まない。
2. 黄褐色土 ロームブロック。As-C含まない。
3. 黒褐色土 細かいロームブロックを含む。As-C含まない。
4. 褐色土 細かいロームブロックを含む。As-C含まない。

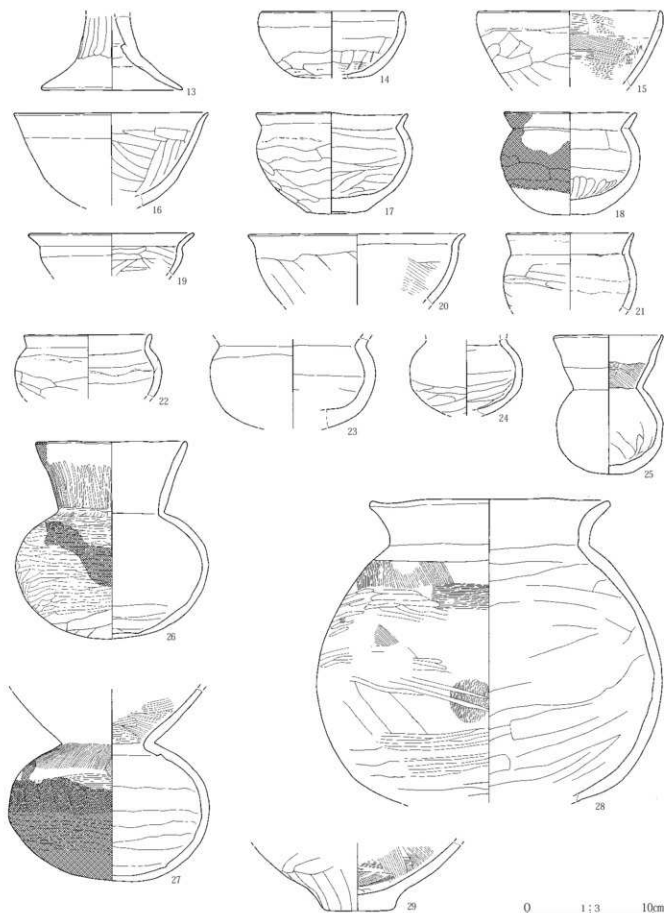
12号住居1号炉

1. 黒色土。
2. 焼土 掘方ではなく、地山が焼土化した範囲。

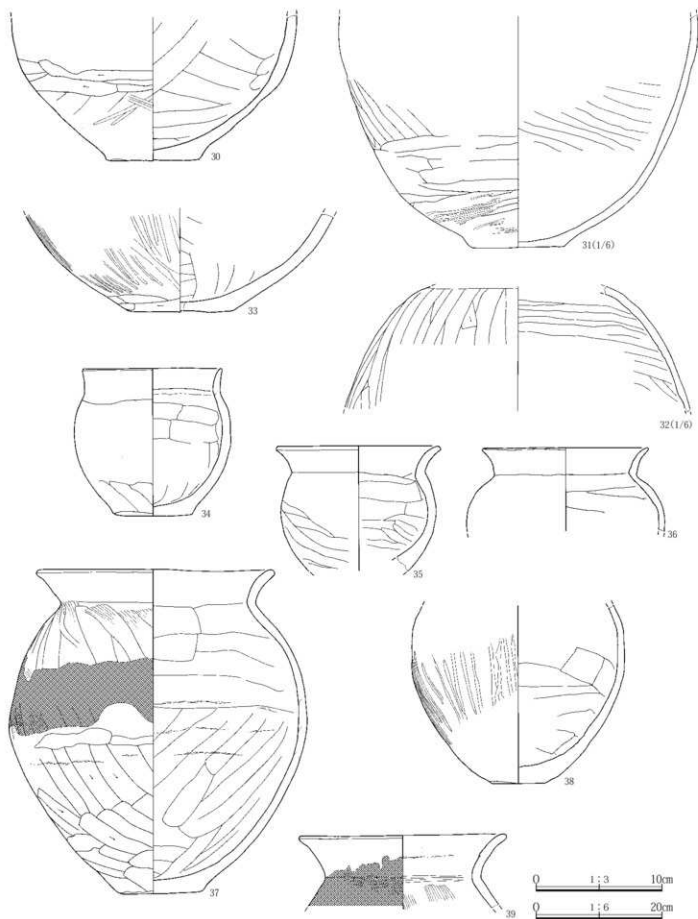


第34図 12号住居貯蔵穴・P 5断面図、1号炉平面断面図、出土遺物(1)

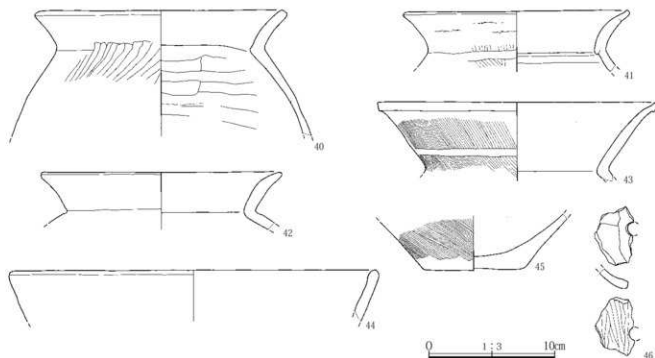
第4章 丑子遺跡の調査の成果



第35図 12号住居出土遺物(2)



第36图 12号住居出土遺物(3)



第37図 12号住居出土遺物(4)

が分かり、1として掲載した。掲載した土器はこの1を除いてすべて土師器であり、器種は不確かなものもあるが、高杯12点、鉢8点、椀2点、台付鉢1点、埴3点、壺1点、甕17点、甗1点である。その他、小破片も土師器ばかりで、杯・椀類41点、高杯174点、甕・壺類753点、埴129点、甗5点が出土している。須恵器も甕・壺類1点が出土しているが、上層からの出土と思われる。

時期・所見 埋土の下層にAs-Cの純層が堆積していることから、その噴火のわずかに前に廃絶された住居である。住居に伴う土器がわずかなので時期の特定は難しいが、前述の通り貯蔵穴の可能性の高いP5から出土した土器が弥生時代後期・樽式の系譜を引くもので、3世紀後半のものと思われることから、本住居の時期もその頃と考えられる。それ以外の土器はすべて5世紀前半～中頃のものであり、その頃まで凹みが残っていた本住居に廃棄されたものである。本住居の形状はほぼ正方形であり、その点で古墳時代前期の特徴をもっているが、4本柱穴、複数の埴の配置、入り口と考えられるピットの存在、貯蔵穴(P5)の位置など、弥生時代後期の住居と共通する要素がある。弥生時代後期の住居は長方形なのが通例なので、その点で大きく異なるが、以上のことから、本住居はその伝統を色濃く受け継いだ形態であるといえることができる。

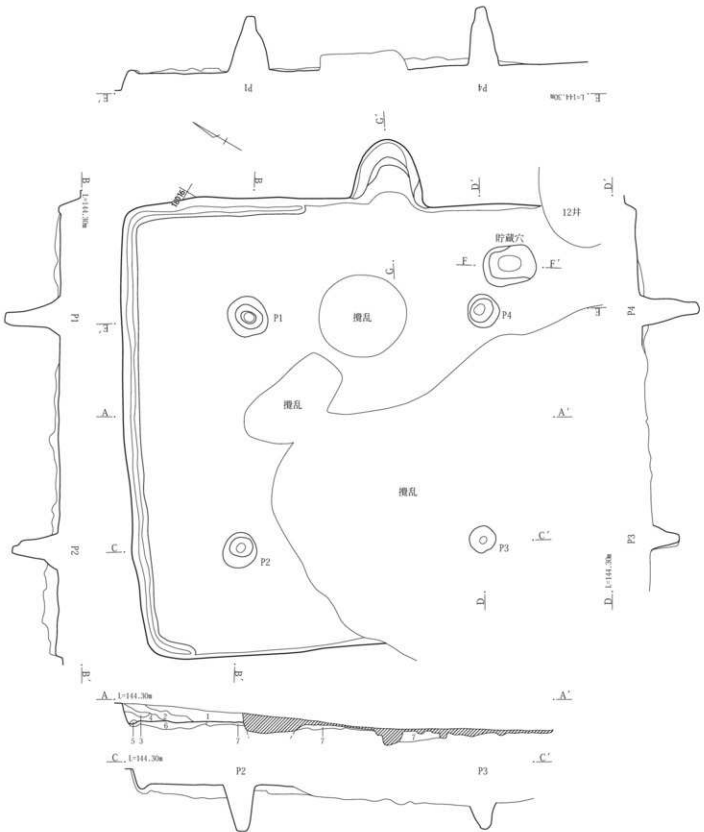
13号住居(第38～40図、第28表、PL.13-7～14-3)

調査区南東辺中央付近にある。南東方向に向かって削平されている上、南側を攪乱により大きく壊され残りが悪い。南東隅も井戸が重複して失われている。

位置 18区C～E14～16。 **重複遺構** 12号井戸と重複。本住居が古い。 **形状** 攪乱によって破壊されて不明な点が多いが、主柱穴が四隅からの対角線上にあると想定し、おおよそ正方形の形状が復元できる。残存する北西・北東の二隅は直角に近く、各辺も直線的で、残存部分は整った形状である。 **主軸方位** N-58°-E。

規模 北東壁—南西壁間の長さは、竈付近で計測して7.10m。 **床面積** 柱位置などから南東壁・南西壁を復元して、推定49.73㎡。 **壁高** 0～32cm。 **覆土** 壁付近が褐色土、暗褐色土、黒褐色土などで埋まった後、中央部の大部分が褐色土で埋没している。 **床面** 攪乱で壊された部分が多く、床面が残っている範囲は半分程度である。掘方を黒褐色土とロームブロック、ロームの崩れた土などで埋め戻し、床面とする。全体的に平坦だが、あまり硬化していない。 **柱穴** P1～4の4本の主柱穴が確認できる。それぞれの大きさは以下の通り(長径×短径×深さ、cm)。P3がやや小さく浅いのは、攪乱の底面で見つがっているからである。

P1 68×60×88



13号住居

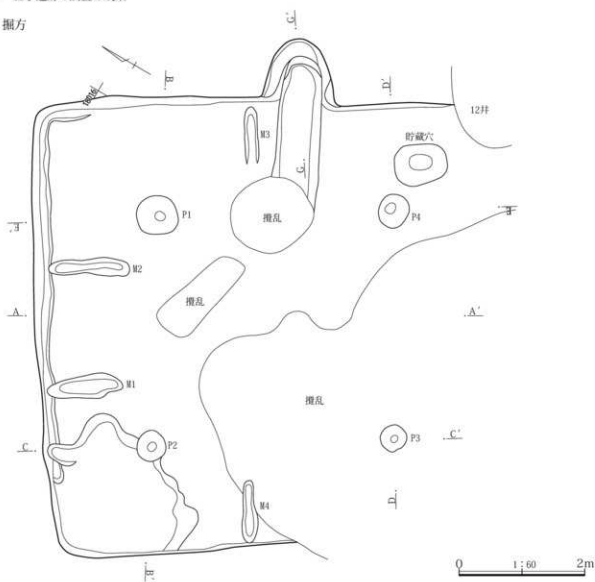
- | | | | |
|---------|---------------------|----------------------|----------|
| 1. 褐色土 | 細かいロームブロックを含む。 | 5. 黒褐色土 | |
| 2. 黒褐色土 | φ 1 ~ 3 mmの白色軽石を含む。 | 6. 黒褐色土とロームブロックの混合土。 | |
| 3. 暗褐色土 | ロームブロックを含む。 | 7. ロームの崩れた土 | 黒褐色土を含む。 |
| 4. 褐色土 | | | |

0 1:60 2m

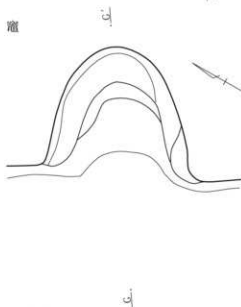
第388図 13号住居平断面図

第4章 瓦子遺跡の調査の成果

掘方



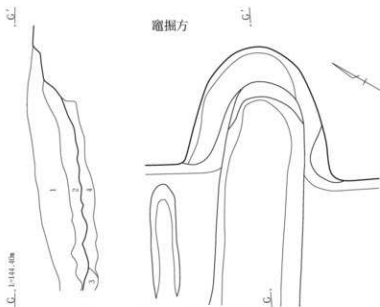
竈



13号住居竈

1. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 軽石、ローム粒、焼土粒を含む。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土粒を多く含む。よく締まり固い。

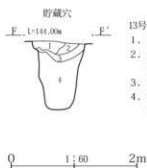
竈掘方



3. ロームブロック、灰白色シルトブロック、焼土の混合。
4. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒、焼土粒を含む。

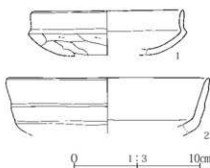
0 1; 30 1m

第39図 13号住居掘方平面図、竈平面断面図



13号住居貯蔵穴

1. 黒褐色土(10YR2/3) ローム粒、焼土粒を少量含む。
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 白色軽石をわずかに含む。非常に粘性がある。
3. 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロック、焼土ブロックをやや多く含む。
4. 褐色土(7.5YR4/6) ロームを主体とし暗褐色土ブロックを少量含む。焼土ブロックをやや多く含む。



第40図 13号住居貯蔵穴断面図、出土遺物

P 2 58×52×74

P 3 42×40×46 (掘乱の底面で計測)

P 4 54×50×95

竈 北東壁のほぼ中央にある。上面を大きく破壊され、竈袖も残っていない。セクションG-G'の1・2層がその破壊された層であるが、この行為が住居廃絶後いつ行われたかは明確ではない。ただし、竈付近の壁が大きく壊されていないことから見て、廃絶直後に竈を破壊したのではないと思われる。このため、竈使用時の面は全く残っていなかった。掲載した平面図は破壊された後の図と、掘方の図である。破壊後の竈の跡は、住居の壁の外に1m張り出し、壁の部分で幅を計測すると1.31mである。掘方は竈の中央を幅70cmの溝状に掘り下げている。この溝は住居内側に2.3m伸び、先端は掘乱に破壊されている。**貯蔵穴** 竈に向かって右側の、北東壁から60cm離れた位置にある。おそらくこの付近が南東隅になるものと思われる。長方形で、長さ84cm、幅62cm、深さは108cmと深い。大部分は褐色土で埋没しており、廃絶時に一気に埋められたらしい。**周溝** 北東辺の竈北側から北西辺に確認できる。幅16～20cm、深さ3～8cmの明瞭な周溝である。**間仕切り溝** 掘方底面では間仕切り溝と思われる溝が4本見つかっている。北西壁の、P1とP2の間に2本(M1・2)、北東壁の竈の左脇に1本(M3)と南東壁のちょうど対応する位置に1本(M4)である。それぞれの規模は以下の通り(長さ×幅×深さ、cm)。

M 1 120×25～40×7～8

M 2 129×20～29×9～14

M 3 91×20～22×9

M 4 99×16～26×13

掘方 全体に浅く掘られていて、西隅など一部がやや深

く、最も深いところで20cmである。**遺物** 出土した遺物は少ない。掲載したのは土師器杯2点で、いずれも貯蔵穴内から出土している。その他小破片として、土師器杯・椀類24点、同高杯3点、同器台1点、同甕・甕類96点、須恵器瓶類2点、同短頸壺2点、同蓋2点が出土している。**時期** 出土遺物から6世紀後半と考えられる。

14号住居(第41図、PL.14-4～6)

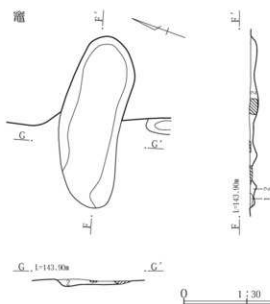
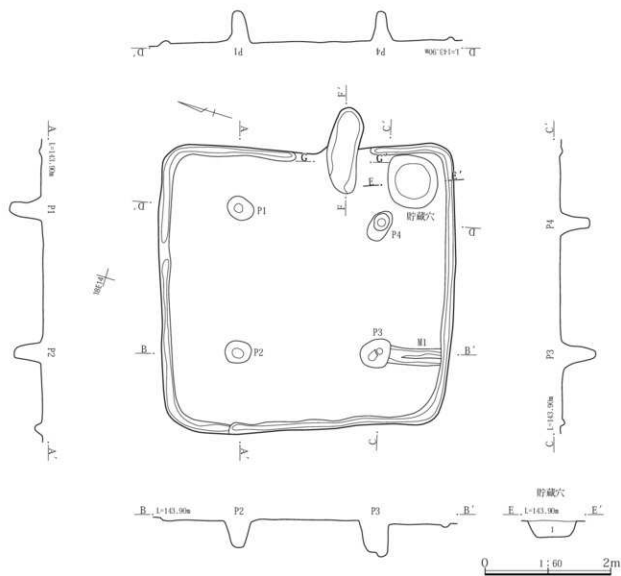
調査区南隅付近にある。他の遺構や大きな掘乱との重複はないが、床面も削平され、掘方の底部のみが残っていた。

位置 18区D・E12・13。**重複遺構** なし。**形状** 全体に正方形に近いが、西辺が東辺より40cm前後短く、やや台形気味に歪んでいる。また、東辺は竈部分を中心に、住居内側へ向かって弧状に弱く湾曲している。**主軸方位** N-73°E。**規模** 中央付近で計測して4.40×4.68m。**床面積** 床面は失われているが、周溝底面外側で計測して19.86m²。**壁高・覆土・床面** 削平のためなくなっている。**柱穴** 4本の主柱穴が四隅からのおおよそ対角線上に配されているが、P4のみは貯蔵穴を避けるようにやや住居中央側に偏っている。それぞれの大きさは以下の通り(長さ×短径×深さ、cm)。

P 1 43×36×52 P 2 42×35×44

P 3 53×45×57 P 4 52×31×46

竈 東辺の南寄りにある。袖や焼土底面などは削平されており、掘方の底部のみが残っている状態で、調査時は長さ137cm、幅45～49cmの浅い土坑状の凹みになってしまっていた。壁の外側には67cm張り出している。**貯蔵穴** 竈に向かって右側の、南東隅壁直下にある。94×80cmの不整な円形で、深さは36cmである。暗灰褐色土1層で一気に埋まっている。**周溝** 竈周辺を除いて全周



14号住居竈

1. 焼土
2. にぶい黄褐色土(10YR5/4) 焼土粒を少量含む。ローム粒を含む。

14号住居貯蔵穴

1. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 軽石、ローム粒を少量含む。

第41図 14号住居平面断面図、竈平面断面図

している。幅12～24cm、深さ1～16cmで、明瞭な周溝である。**間仕切り溝** 南壁とP3をつなぐ1本だけがみつまっている。長さ82cm、幅25～27cm、深さ3～6cmである。中央に段差が認められるため、2時期が重複している可能性もある。**掘方** 掘方底面のみの調査となったが、底面には顕著な凹凸はなく、ほぼ平坦である。**遺物** 遺物の出土は非常に少なく、掲載できるものはない。小破片としては、土師器壺・甕類5点が出土しているのみである。**時期** 竈の痕跡があることから5世紀後半以降のものであるが、出土遺物が少なく、確定できない。

15号住居(第42図、第28表、PL.14-7～15-2,56)

調査区南隅付近にある。他の遺構との重複はないが、西辺と北東隅を攪乱のため失っており、全容を把握できなかった。

位置 18区E・F11・12。**重複遺構** なし。**形状** 歪みはあるが、長方形と思われる。**主軸方位** N-14°-E。**規模** 3.64×[4.50]m。**床面積** 現存部分を計測すると14.44㎡。**壁高** 4～15cm。**覆土** 削平を受けているので、ごく浅くしか残っていない。黒色土ないし黒褐色土で埋没している。**床面** 浅い掘方を全体的にロームの崩れた土で埋め戻して床面とする。表面にはごく薄い黒褐色土の層が貼床状に存在し、固く締まっている。ほぼ平坦だが、西側に比べ東側がわずかに高くなっている。**柱穴** 床面調査段階で5基のビット(P1～5)を確認し、掘方精査時にさらに1基のビット(P6)を確認した。4本柱穴のような配置にあるビットは見られないが、長軸のほぼ中央線上に位置するP1とP2は、西壁が攪乱にわずかに掛かる位置にあつたとすると、東西両壁からの距離がほぼ等しくなり、この長方形の住居に対してかなり規則的な配置となるので、この2本が本住居の主柱穴となる可能性が考えられる。各ビットの規模は以下の通り(長径×短径×深さ、cm)。

P1	18×15×32	P2	22×16×34
P3	38×30×29	P4	31×25×17
P5	29×24×13	P6	31×24×31

炉 住居床面中央やや北東寄りに、焼土と炭化物を含む土が66×53cmの範囲に分布しており、これが炉であると思われる。いわゆる地床炉であるが、焼土の量は少なく、

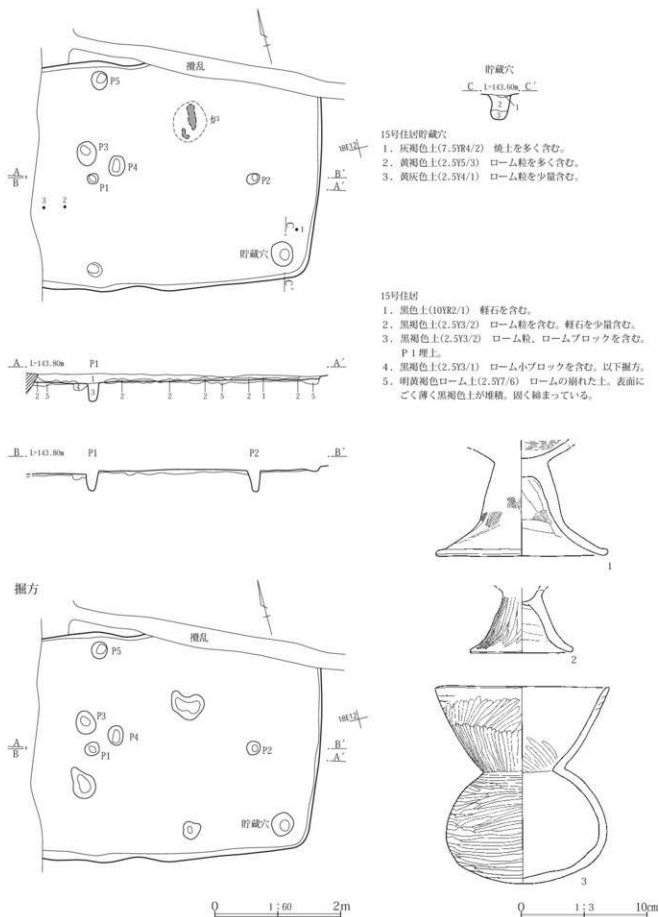
使用頻度は高いとは思えない。炉の明確な掘方は認められなかったが、住居掘方の調査時に、やや南側に54×42cm程度の不整形の凹み(深さ7cm)が見つかり、これが炉掘方の一部である可能性がある。**貯蔵穴** 南東隅付近に径38×34cm、深さ45cmのビット状の窪みがあり、やや小さいが、配置から貯蔵穴と思われる。**周溝** 確認できなかったが、掘方底面では壁に沿ってわずかな凹みが認められるので、本来は浅い周溝が存在した可能性がある。**掘方** 全体にごく浅い。表面には細かい凹凸が見られる。**遺物** 出土遺物は少なく、掲載したのはいずれも土師器で、高杯1点、台付甕1点、埴1点である。1の高杯は貯蔵穴すく北側の床直から出土したが、その他の2点は住居西端近くで、床面からわずかに浮いた高さから出土している。その他小破片として、土師器壺2点が出土している。**時期** 長方形で、2本柱穴と推定される住居であり、本遺跡では珍しい形態である。出土遺物から4世紀後半と思われる。

16号住居(第43図、第28表、PL.15-3～6,56)

調査区の南東隅にある。谷地形に向かって東側へ低くなる傾斜面にあり、東側の大半はこの斜面によって破壊されている。

位置 18区D10・11。**重複遺構** なし。**形状** 北西部のみの残存であるが、方形であると思われる。

主軸方位 N-103°-W。**規模** 全体は不明だが、北辺は4.35m、西辺は5.20mが残っている。西辺の南端部には貯蔵穴があるので、南西隅はこの付近と考えられ、とすれば、全体の規模は1辺5.30～5.50m程度の方形になるのではないだろうか。**床面積** 掘方底面が残っている部分で計測して、10.00㎡である。**壁高** 0～20cm。**覆土** 暗灰黄褐色土で埋没している。**床面** 中央部を除いて掘方はほとんどなく、地山を床面としている。表面は固く締まっている。**柱穴** 西壁から約1m離れて、P1・2の2本が見つまっている。配置から見て、これを西辺とする4本柱穴であると思われる。その他、竈脇に1基のビット(P3)があるが、これは用途不明である。**竈** 西辺中央やや南寄りにある。全長97cm、幅83cm、焚き口幅45cmである。燃焼部は住居内にあり、煙道部の壁外側への張り出しは30cmである。両袖が残り、それは灰白色シルトで作られている。竈内部に

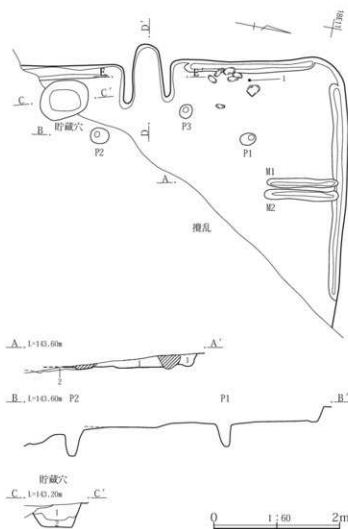


第42図 15号住居断面図、出土遺物

天井部の一部と思われる焼土塊が崩落していたが、竪内部の焼土化は弱い。**貯蔵穴** 西辺の南端部、住居の南西隅と推定される位置にある。80×58cmの長方形にやや近い楕円形で、深さは38cm、底面は平坦である。下部に堆積している暗灰黄色土は住居覆土とよく似ているので、住居廃絶時にはこの貯蔵穴は開いていた可能性がある。**周溝** 北西隅と竪脇を除いて存在する。幅15～20cm、深さ1～3cm程度のやや不明瞭な周溝である。**間仕切り溝** 北壁に直交する間仕切り溝が2条見つかっている。規模は以下の通り(長さ×幅×深さ、cm)で、2～7cm離れて平行している。

M1 114×13～15×6～9

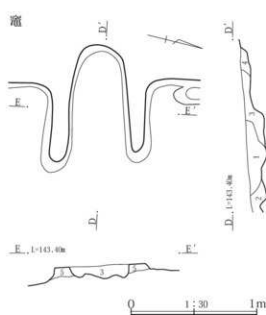
M2 119×14～16×9～15



16号住居貯蔵穴

1. 黒褐色土(2.5Y3/1) 軽石を含む。ローム粒をまばらに含む。
2. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒をやや多く含む。

掘方 A-A'セクションにみるように、中央部はやや深く掘られているが、その他の部分はごく浅いか、ほとんどない。掘方底面には細かい凹凸が見られる。**遺物** 遺物の出土は少ない。掲載するのは土師器杯1点のみである。これは竪北側の西壁際の床直から出土した。その周囲からは長さ15～20cm、径6～10cmの細長い自然礫が5点出土し、鶴編み石の可能性はあるが、これらは床面から5～15cm浮いた高さから出土している。その他小破片として土師器杯・椀類7点、同裏・壺類23点、須恵器杯・椀類2点が出土している。**時期** 1点のみ出土した土師器杯からの推定であるが、7世紀前半と考えられる。

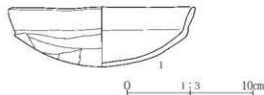


16号住居

1. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 軽石、ローム粒を含む。
2. 黄褐色土(2.5Y5/4) ローム粒を多く含む。掘方。

16号住居竪

1. 焼土と褐色土(10YR4/4)の混土。
2. 褐色土(10YR4/4)
3. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土ブロックを含む。
4. 褐色土(10YR4/4) 軽石を少量含む。
5. 灰白色シルト(10YR7/1) 黒褐色土を含む。竪袖。



第43図 16号住居平面断面図、竪平面断面図、出土遺物

17号住居(第44～46図、第28・29表、PL.15-7～16-3, 56・57)

調査区南東隅近くにある。掘乱により一部を破壊されているものの、比較的残りがよい。

位置 18区F・G11・12。 **重複遺構** 18号住居、105号土坑と重複する。本住居が18号住居より新しいことは遺構確認面で確認し、105号土坑より古いことは断面で確認した。 **形状** 四隅の丸みの少ない正方形であるが、北辺に比べて南辺がわずかに短い。 **主軸方位** N-7°-W。 **規模** 主軸方向は中央付近で計測して5.98m。もう一方の辺は掘乱の北側の部分で計測して5.98m。

床面積 掘乱で破壊されている部分も復元して、推定32.57㎡。 **壁高** 13～31cm。 **覆土** 一部を除いて黒褐色土1層で埋没しているため、人為的に埋められたと思われる。 **床面** 全体的に浅い掘方を、ロームブロックを多く含むにぶい黄褐色土で埋め戻して床面とする。床面はほぼ平坦で固い。 **柱穴** 4本(P1～4)の柱穴が住居四隅からの対角線上に配されている。その他に性格不明の2本のピットが住居中央付近にある。それぞれの大きさは以下の通り(長径×短径×深さ、cm)。P1の径が小さく浅いのは、105号土坑の底面で見つかったためである。

P 1	22×19×44	P 2	50×44×72
P 3	33×30×59	P 4	46×42×64
P 5	40×32×59	P 6	44×30×61

竈 北辺のほぼ中央にある。燃焼部から煙道部にかけて掘乱によって破壊されている。全長は133cm、幅105cm、焚き口幅62cmである。現状では袖が短い。床面の焼土・炭化物はさらにその外側にまで広がっていたので、これは破壊されているためと思われる。本来は住居内にもう少し延びていた可能性が高い。掘乱により壊されているが、燃焼部の大部分と煙道は住居外に作られ、壁から103cm張り出している。覆土には黄灰色あるいは灰白色シルトを多く含むので、これらのシルトを用いて竈が構築されたい。竈内から竈左側にかけては、杯(1)、甕(6・7)、剣形石製品(10)などの遺物が出土している。

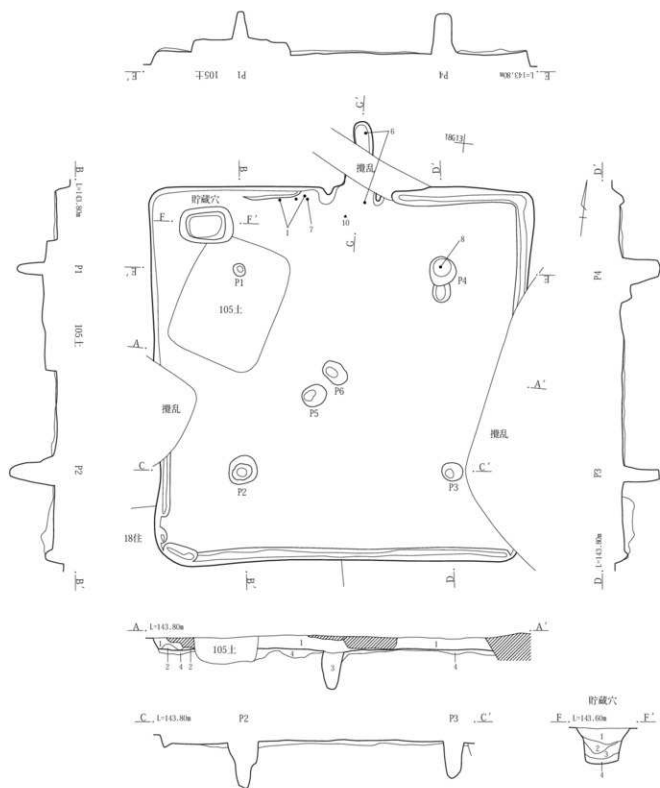
貯蔵穴 竈に向かって左側の、住居北西隅にある。長方形で、大きさは85×58cm、深さは56cmである。 **周溝** 北西部は明瞭ではなく図示できなかったが、わずかな凹みは認められたので、本来全周していると思われる。幅

12～20cm、深さはピット状になっているところを除いて、2～10cmである。 **掘方** 全体に5cm前後と浅いが、一部15cm程度に掘り窪めたところがある。南壁際の中央付近には、周溝の位置に沿って深さ9～24cm程度の小ピットが5基並んでいた。ちょうど竈の反対側となる位置であり、あるいは入り口などに関わる施設かもしれない。 **遺物** やや大きな遺物は竈付近に集中する傾向がある。掲載した土器は土師器杯3点、同台付甕1点、同甕4点、須恵器盥1点であり、石製模造品の剣形石製品1点も出土している。その他小破片として土師器杯・椀類51点、同高杯2点、同甕・甕類131点、須恵器蓋1点が出土している。 **時期** 出土した遺物から7世紀前半と思われる。

18号住居(第47図、第29表、PL.16-4・5, 57)

調査区南東隅近くにあり、南西側は調査区外となるため、完掘できていない。また、北東隅は重複する17号住居のため破壊されている。調査区壁の断面(A-A')をみると、床面が残っていたことが分かるが、周辺に浅い掘乱が多かったこともあり、調査時には広い範囲で床面を把握することができなかった。そのため、掘方底面の調査を行った。

位置 18区G・H11。 **重複遺構** 17号住居と重複し、本住居が古いことを平面で確認した。 **形状** 方形だと思われる。 **主軸方位** N-82°-E。 **規模** 主軸方向は、残存部分から4.35mと推定され、もう一方の方向はやはり残存部分から、4.30m以上と推定される。 **床面積** 17号住居に破壊されている部分は北辺と東辺を延長して復元し、調査区外となる部分を除いた面積を計測すると、推定12.45㎡である。 **壁高** 削平のため不明。調査区壁(A-A'セクション)でみると、覆土は最大で18cm残っている。 **覆土** 暗灰黄色土、オリーブ褐色土を中心とした土で埋没していた。 **床面** 残りは非常に悪かったが、掘方をロームブロック、ローム粒を含む暗灰黄色土や黄褐色土で埋め戻して床面とする。A-A'セクションでは、中央部にオリーブ褐色土による貼床が見られ、それは固く締まっていた。 **柱穴** 調査した範囲では見つからない。西側にある、調査区境にかかるピットは、住居覆土を切って掘られており、新しいものである。 **竈** 東辺にある。掘方だけの調査であるが、



17号住居

1. 黒褐色土(2.5Y3/1) 軽石、ローム粒を少量含む。
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 雑土、炭化物を多く含む。
3. 黒褐色土(2.5Y3/2) ローム粒をやや多く含む。P 6埋土。
4. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ロームブロックを多く含む。表面は固く締まっている。掘方。

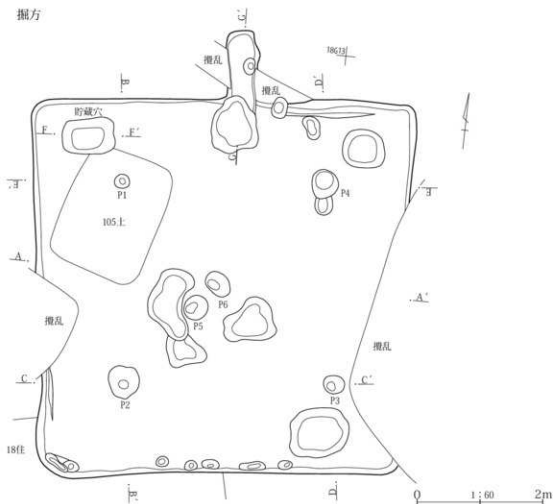
17号住居貯蔵穴

1. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒、焼土粒を少量含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒を少量含む。小礫(φ 5mm)を含み、締まりやや弱い。
3. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒を多く含む。
4. 黄褐色土(2.5Y5/3) ローム粒を多く含む。

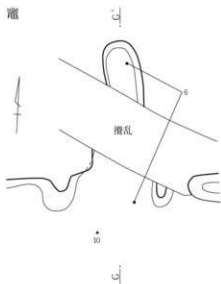
0 1:60 2m

第44図 17号住居平断面図

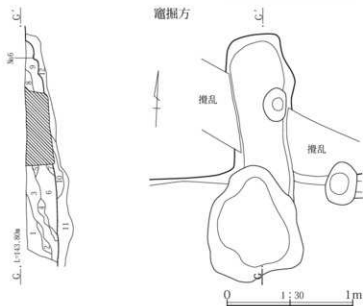
掘方



竪



竪掘方

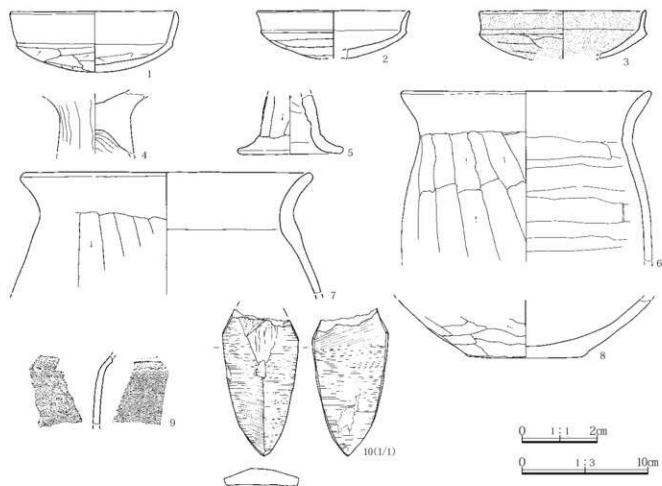


17号住居竪

1. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒、焼土粒、軽石を含む。
2. 黄灰色土(2.5Y4/1) 炭化物を含む。ローム粒、焼土粒をまばらに含む。
3. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒、焼土粒、軽石を含む。
4. 焼土 暗灰黄色土を含む。
5. 黒色土(2.5Y2/1) 軽石を含む。
6. 黄灰色シルト(2.5Y6/1)と焼土、黄灰色土の混合。天井部の崩落か。
7. 灰白色シルト(2.5Y7/1) ローム土、焼土を含む。

8. 焼土主体の土 暗灰黄色土を含む。
9. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 焼土を含む。
10. 暗赤褐色土(5YR3/6) 焼土ブロックを主体とし、褐色土ブロックを少量含む。以下掘方。
11. 褐色土(7.5YR4/6) ロームブロック、焼土ブロックを多く含む。
12. 褐色土(10YR4/4) ロームブロックを多く含む。焼土ブロックを少量含む。

第45図 17号住居掘方平面図、竪断面図



第46図 17号住居出土遺物

袖の痕跡は掘方底面にわずかに残っていただけであり、住居廃絶時に完全に破壊されたらしい。壁からの張り出しは50cmである。竈の左前には長さ24cm、幅20cm、厚さ10cmほどの角の取れた自然石があったが、あるいは竈の構築に用いられたものである可能性がある。竈前面からは土器片が出土した。 **貯蔵穴** 住居南東隅にある土坑が貯蔵穴だと思われるが、発掘区境にかり、半分程度が調査できたにすぎない。調査区内では楕円形を呈し、調査区壁で径65cm、深さ43cm（A-A'セクションで見える床面の高さから計測）である。中層以上は住居覆土と同じ土で埋まっており（A-A'セクションの6層）、廃絶直後には貯蔵穴の下層が既に埋まり始めていたらしい。 **周溝** 調査した範囲では見つかっておらず、断面にも痕跡が見られないので、本来なかったものと考えられる。 **掘方** 細かい凹凸は見られるが、特に大きな凹みはない。A-A'セクションを見ると、全体に床面から8～15cmある。 **遺物** 竈前を中心に遺物が出土した。掲載するのは土師器杯2点、同把手付台鉢1点、

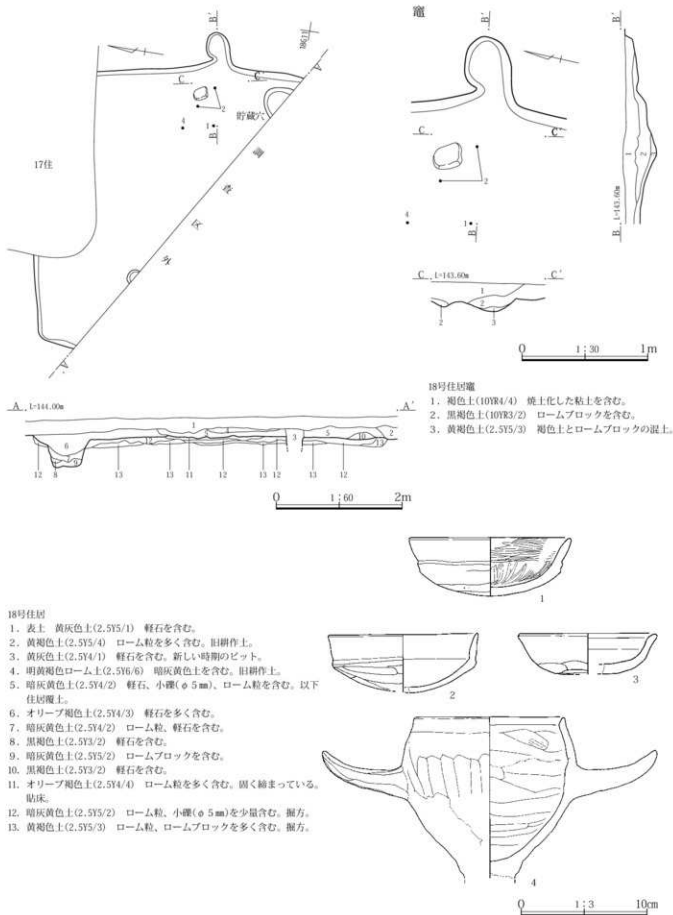
須恵器杯1点である。そのうち3を除いた3点は竈前の床面から出土している。その他、小破片として土師器杯5点、同裏4点が出土している。 **時期** 出土遺物から6世紀前半と考えられる。

19号住居(第48図、第29表、PL.16-6～8、57)

調査区南西辺近くの中央付近にある。南側を1号堀に破壊され、半分程度しか残っていないかった。

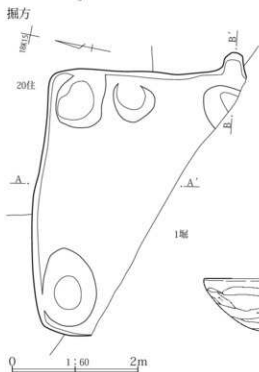
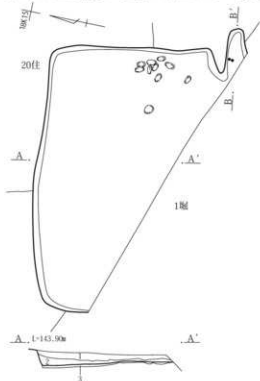
位置 18区J・K14、**重複遺構** 20号住居、1号堀と重複する。本住居は20号住居より新しく、1号堀より古いことを平面で確認した。 **形状** 方形と推定される。 **主軸方位** N-79°E。 **規模** 主軸方向は北部で計測して4.22m。それと直角方向は最も残存している東辺近くで計測して3.15mまで残っている。 **床面積** 残存部分は7.88㎡。 **壁高** 19～31cm。 **覆土** 褐色土、黒褐色土で埋没している。特に人為的な埋没とするような特徴はない。 **床面** 浅い掘方をロームブロックを非常に多く含むにぶい黄褐色土で埋め戻して床面とする。

第4章 瓦子遺跡の調査の成果

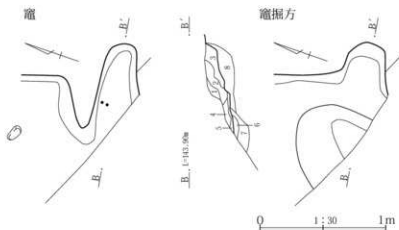


第47図 18号住居平面断面図、竈平面断面図、出土遺物

床面の硬化は弱い。柱穴 確認できなかった。竈 東壁で見つっている。住居の形態が正方形に近いのであれば、東壁の中央やや南寄りに位置すると思われる。南西側を1号堀で破壊されているため、袖も左側しか残っていない。全長は80cmと推定され、左側の袖から復元して幅は約90cm、焚き口幅は約30cmと推定される。竈内からは土師器製の小破片が出土した。貯蔵穴・周溝



確認できなかった。掘方 北東・北西隅が土坑状にやや深く掘られている他は、全体に浅い。底面には細かい凹凸が見られる。遺物 遺物の出土は少ない。掲載したのはいずれも土師器で、杯1点、甕1点である。その他小破片として、土師器杯・椀類9点、同高杯(赤彩)1点、同甕・壺類40点が出土している。時期 出土遺物から7世紀代と思われる。

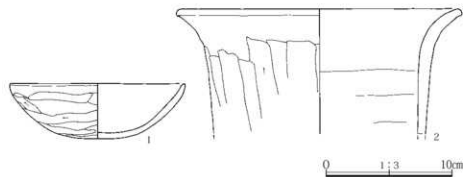


19号住居

1. 黒褐色土(10YR3/2) 1~5mmの白色鮮石(FA)を含む。
2. 褐色土(10YR4/4) 多量のロームブロックを含む。
3. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ロームブロックを非常に多く含む。掘方。

19号住居竈

1. 褐色土(7.5YR4/3) 焼土ブロックをわずかに含む。シルトブロックをやや多く含む。崩落した天井か。
2. 褐色土(7.5YR4/4) 焼土ブロックを多く含む。シルトブロックをやや多く含む。崩落した天井か。
3. 暗褐色土(7.5YR3/4) 焼土ブロックをやや多く含む。炭化物粒をわずかに含む。
4. 暗褐色土(10YR3/4) 焼土ブロックを少量含む。炭化物粒をわずかに含む。
5. 暗褐色土(10YR3/4) 焼土ブロック、灰を少量含む。
6. 焼土 以下掘方。
7. 黒褐色土(2.5Y3/1) ローム小ブロックを含む。
8. 暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2) ローム粒を含む。上層に黄灰色シルト(2.5Y6/1)を部分的に含む。



第48図 19号住居断面図、竈断面図、出土遺物

20号住居(第49図、第29表、PL.17-1・2,57)

調査区南西辺中央付近にある。床面は削平され、掘方のみしか残っていなかった。さらに南側を19号住居により破壊されている。

位置 18区J・K14・15。 **重複遺構** 19号住居と重複し、本住居が古いことは平面で確認した。 **形状** ほぼ整った正方形。 **主軸方位** 後述するように東壁中央に竈と思われる痕跡があるので、東西方向を主軸と判断し、計測するとN-81°-Eである。 **規模** 壁が残存している部分の、できるだけ中央に近いところで計測すると、3.88×4.05mである。 **床面積** 19号住居と掘方で破壊されているところを復元して計測すると、推定15.50㎡である。 **壁高・覆土** 床面が完全に削平されていたため不明。 **床面** 掘方を黒色土とロームブロックの混土によって埋め戻しているが、床面は削平されていた。

柱穴 掘方底面でP1・2・4の3本、19号住居掘方底面でP3の1本が見つかり、これを主柱穴とするものと思われる。各柱穴の大きさは以下の通り(長径×短径×深さ、cm)。

P1	34×30×39	P2	30×26×50
P3	32×26×27	P4	40×26×52

竈 東壁中央南寄りの部分に焼土が見られたため、これが竈の痕跡であると考えられる(G-G'セクション)が、完全に破壊されており、掘方部分を含めて、どのような形態であったかは不明である。住居壁外側への張り出しも見つからなかったが、大きく削平されているので、本来の張り出しの有無・長さはもちろん分からない。

貯蔵穴 南東隅の楕円形の土坑が貯蔵穴だと思われる。54×30cmで、深さは80cmと深い。覆土中、底面から36cmの高さのところから3の土師器甕が出土した。 **周溝** 確認できなかった。 **掘方** 中央部分には北西から南東に向かってやや高い部分があるが、その周囲は確認面から20cm前後掘り下げている。底面には細かい凹凸が見られる。 **遺物** 遺物の出土は少ない。掲載したのはいずれも土師器で、高杯1点、鉢1点、甕1点である。2と3は貯蔵穴から出土している。その他小破片として土師器杯・椀類4点、同甕・壺類12点(その大部分は甕と思われる)、同ミニチュア土器1点が出土している。 **時期** 出土遺物から6世紀前半と思われる。

21号住居(第50・51図、PL.17-3~5)

調査区南西辺近くの中央やや西側にある。西から南側を1・2号堀に破壊されて2つに分かれてしまっている。

位置 18区K~N15~17。 **重複遺構** 1・2号堀、58号土坑と重複し、本住居が古いことは平面で確認した。 **形状** ほぼ正方形になると思われる。 **主軸方位** 竈・炉の位置が分からないので主軸方位を確定できないが、仮に北東壁の方位を主軸方位として計測するとN-34°-Wである。隅部分は2ヶ所残っているが、東隅、西隅ともほぼ直角に交わっている。 **規模** 東隅、西隅がほぼ直角に交わっているのを、これを延長すると、北隅、南隅もほぼ直角に交わり、全体として正方形に近い形となる。そのようにして復元して計測すると、北西-南東方向は8.30m、北東-南西方向は8.00mである。

床面積 上記のように復元して床面を計測すると、推定63.28㎡である。 **壁高** 8~31cm。 **覆土** やや大きな軽石(Hr-Faに伴うものと思われる)を含む褐色土で埋まっている。 **床面** 浅い掘方を、黒色土ブロックとロームブロックの混合土、あるいは、ロームブロックを含むロームの崩壊土で埋め戻して床面としている。表面の硬化は弱い。 **柱穴** 床面では東隅に1本(P2)しか確認できなかったが、掘方の調査でもう1本(P1)を確認した。いずれも住居四隅を結んだ対角線上に位置しているので、これが4本柱穴の南(P1)と東(P2)の隅になるものと思われる。北・西の2本は2号堀によって破壊されたのであろう。各柱穴の大きさは次の通り(長径×短径×深さ、cm)。

P1	59×44×70	P2	64×52×74
----	----------	----	----------

竈・炉 調査範囲内では確認できなかった。 **貯蔵穴** 東隅にある。床面上ではやや丸みを帯びた正方形であるが、底面は楕円形であり、それから見ると、本来は北西-南東方向を主軸方向とした長方形を意図したものと思われる。それを基準として計測すると、長さ115cm、幅114cmである。深さは70cmある。 **周溝** 床面の調査では確認できなかったが、掘方の調査では南東壁に沿って顕著な周溝状の掘り込みが見つかり、この辺には本来周溝があったものと思われる。幅15~25cm、深さは床面から13~20cmである。 **間仕切り溝** 掘方の調査において、間仕切り溝と思われる溝が4本確認された。いずれも壁から直角に掘られ、主柱穴を結ぶ線で止まってい

第2節 竪穴住居

貯蔵穴



竪



20号住居

1. 黒色土とロームブロックの混土。掘方。

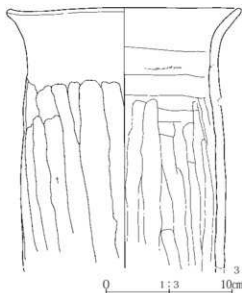
20号住居貯蔵穴

1. 褐色土 ロームブロックを含む。
2. 黒褐色土

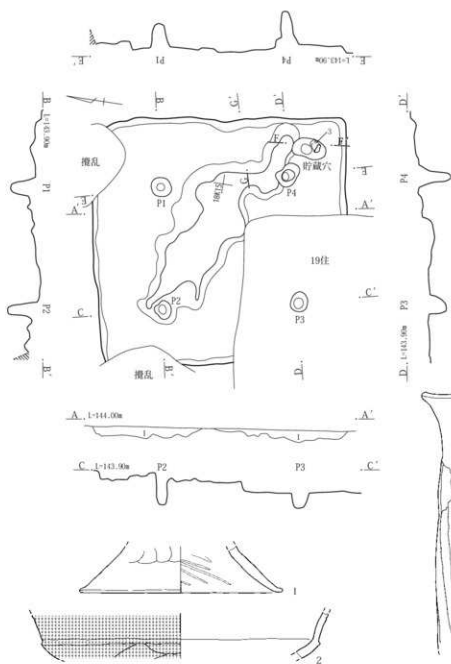
20号住居竪

1. 焼土
2. 褐色土とロームブロックの混土。
3. 黒色土とロームブロックの混土。住居掘方。

0 1:60 2m



0 1:3 10m



第49図 20号住居平面図、出土遺物

る。M1は北東壁の中央、M4は南東壁の中央、M2・3はP2の部分に設けられている。このうちM2・3の2本は近接している、あるいは新旧関係にあるものかもしれないが、確認できなかった。それぞれの規模は以下の通り(長さ×幅×深さ、cm)

M1 148×30～36×3～10

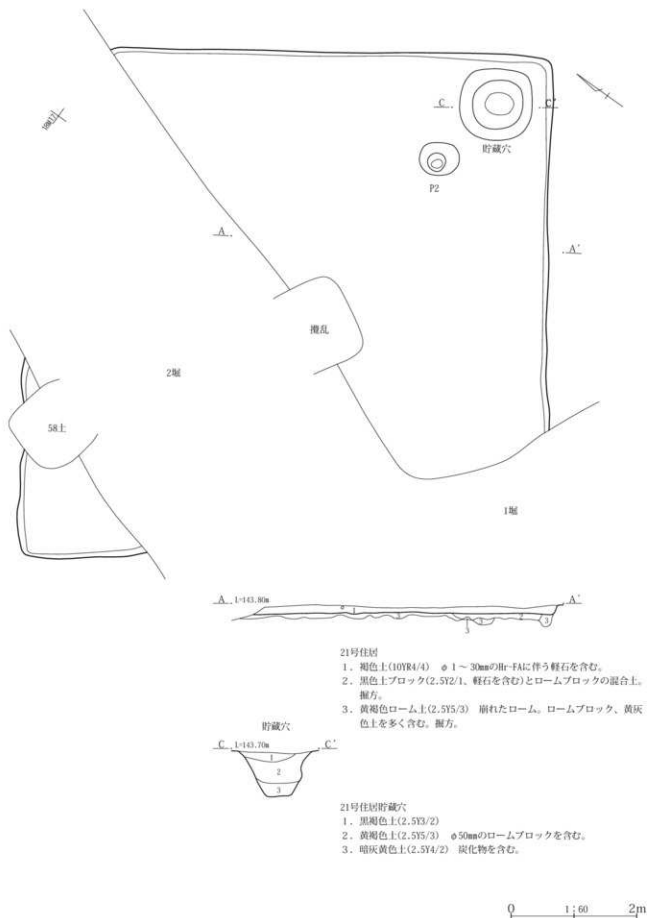
M2 166×18～32×4～8

M3 118×20～30×3～4

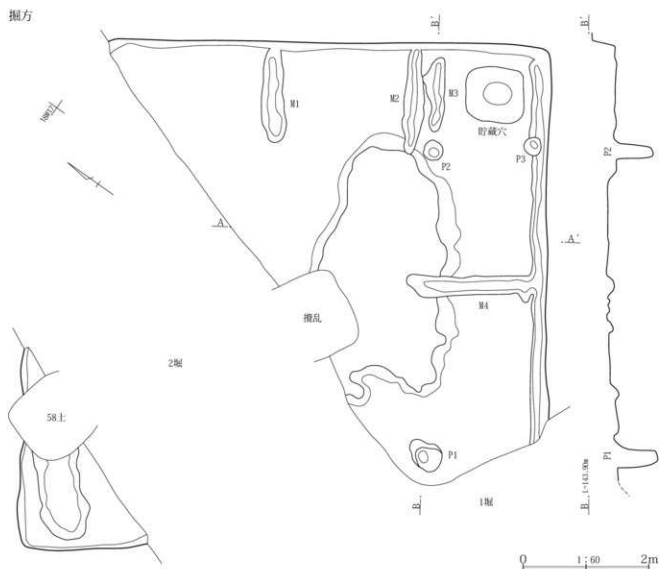
M4 200×25～34×7～12

掘方 南東側にやや高い部分があり、西隅付近には土坑

状にやや深い部分もあるが、その他の部分は全体に5～10cm掘られている。細かい凹凸は全体に見られる。遺物 遺物は少なく、掲載できるものはない。小破片として、土師器杯・椀類9点、同高杯1点、同甕・壺類36点、須恵器杯・椀類2点、同甕・壺類1点が出土している。**時期** 出土遺物が少なく小破片ばかりなので特定できないが、5～6世紀代のものと思われる。東隅に貯蔵穴があり、その近くに竪がみられないことから、あるいは竪をもつ住居である可能性がある。



第50図 21号住居平面図



第51図 21号住居掘方平面断面図

22号住居 (第52・53図、第29表、PL.17-6~18-2, 57)

調査区中央にある。表面が削平され、特に南壁は畠の畝間の攪乱によりほぼ削られていた。

位置 18区J・K17・18。 **重複遺構** 西側に106号土坑が重複し、本住居が古いことは平面で確認した。

形状 ほぼ正方形だが、主軸方向がわずかに長い。

主軸方位 N-100°-E。 **規模** 中央付近で計測して5.40

×5.17m。 **床面積** 106号土坑で破壊されているところを復元して、推定26.92㎡。

壁高 0~12cm。

覆土 わずかしか残っていないが、その部分ではローム土を多く含む暗灰黄色土1層で埋没している。

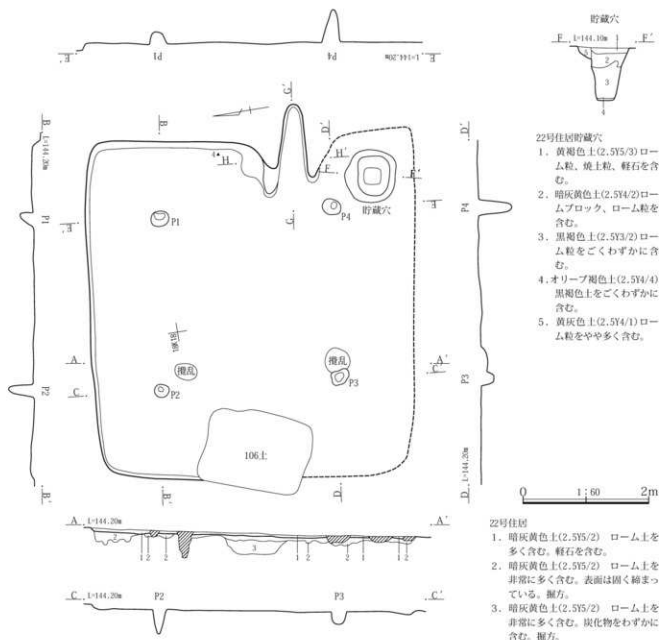
床面 掘方を、ローム土を非常に多く含む暗灰黄色土で埋め戻して床面とする。全体に平坦である。固く締まっている

が、特に竪付近は著しい。 **柱穴** 床面でP1~4の4

本が見つかっており、これを主柱穴としているものと思われる。掘方底面では、南壁際中央で2本のビット(P5・6)が新たに見つまっているが、あるいは入り口に関わるものかもしれない。各ビットの大きさは以下の通り(長さ×短径×深さ、cm)。

P 1	28×24×21	P 2	22×21×40
P 3	32×22×20	P 4	30×24×52
P 5	32×27×31	P 6	50×42×28

竪 東壁中央の南寄りにある。右袖の外側が攪乱で破壊されている。全長150cm、幅は残存部分で125cm、焚き口幅は49cmである。燃焼部は住居内にあり、煙道は住居外に長く延びる。壁の外側への張り出しは65cmである。地山のロームを掘り残して袖の基部としているが、それよりも上部は削平のため失われていた。左袖の内側は特に

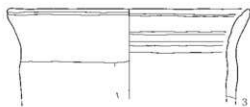
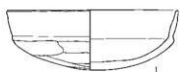
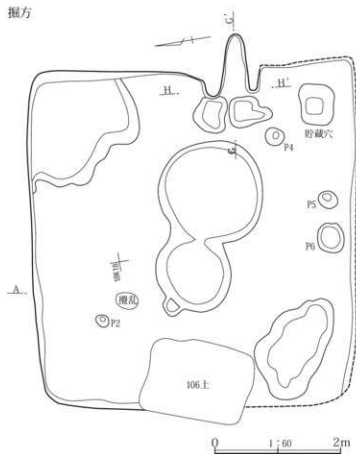


第52図 22号住居平面断面図

よく焼土化していた。掘方底面の調査では、左右両袖の各々の前面に小さな土坑状の凹みが見つかった。焚き口部分に甕などの土器か、あるいは石が据えられていた痕跡である可能性があるが、それらは使用面の調査では見つかっていないので、それらが据えられていたとすれば、廃絶時か使用中で撤去されたものと思われる。貯蔵穴 住居南東隅にある。東西85cm、南北80cmのやや歪んだ方形で、深さは84cmと深い。F-F'セクションで見ると、南北の長さは使用時には60cmであり、その際は東西に長い長方形だった。周溝 確認できなかった。掘方 住居北東隅や南西隅付近を深く掘るほか、中央に

2基の円形の土坑を掘るなど、凹凸が多い。2基の土坑は東西につながって瓢箪形になっているが、東は径1.65～1.70m、西は径1.20～1.27mのほぼ円形である。掘方底面からの深さは19～28cmだが、底面は平坦で、そのレベルはほぼ等しい。この土坑の埋土は掘方埋土とほぼ同じであるが、炭化物をわずかに含んでいた。遺物 遺物の出土は少ない。掲載したのは土師器杯2点、同甕1点、滑石製白玉1点である。その他小破片として、土師器杯・椀類22点、同甕・壺類68点、同鉢2点、須恵器杯・椀類1点、同蓋1点、同甕・壺類1点が出土している。時期 出土遺物から7世紀前半と思われる。

掘方



A'

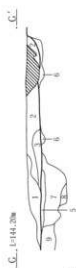
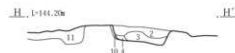
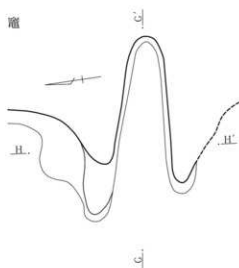


4 (1/1)

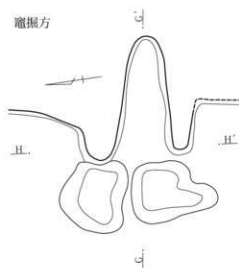
0 1:1 2m

0 1:3 10cm

竈



竈掘方



22号住居竈

1. 褐灰色土(10YR4/1) 軽石、焼土粒を含む。
2. 焼土小ブロックとロームブロックの混合。炭化物を含む。
3. 黒褐色土(10YR3/1) ローム小ブロック、焼土を含む。
4. 崩れたローム。
5. 焼土 炭化物を含む。以下面方。
6. 黒褐色土(10YR3/1) 焼土、ローム粒を含む。
7. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒、ローム小ブロックをやや多く含む。焼土を少量含む。
8. ロームの崩れた土。
9. ローム土と黄灰色土の混合。
10. 焼土。
11. ロームブロックと黒褐色土の混合土。焼土を少量含む。

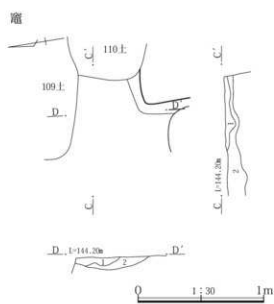
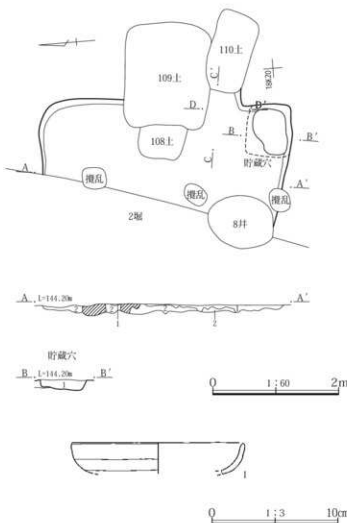
第53図 22号住居掘方平面図、竈断面図、出土遺物

23号住居(第54図、第29表、Pl.18-3)

調査区中央やや北側にある。上面が削平されて掘方のみになっていたほか、多くの遺構と重複して残りが非常に悪い住居である。

位置 18区K19・20。 **重複遺構** 2号堀、108～110号土坑、8号井戸と重複し、本住居はそのいずれよりも古い。 **形状** 南壁の方が他の辺と異なっているので、台形に近い方形になるものと思われる。 **主軸方位** N-97°-E。 **規模** 主軸方向の長さは不明だが、もう一方は東壁近くで計測して4.02m。 **床面積** 土坑・井戸・攪乱で破壊されているところを復元すると、2号堀で破壊されている部分を除いた面積は、推定6.22㎡である。 **壁高・覆土・床面** 削平のため不明。床面は掘方をロームブロック・ローム土と褐色土の混合土で埋め戻して作っている。 **柱穴** 調査範囲内では確認できな

かった。 **竈** 東壁の南半部にある。焼土を多く含む灰褐色土の堆積から竈の存在が分かったが、上面が削平され、左側と煙道部とを109・110号土坑に破壊されているため、詳細が分からない。壁の部分で幅は55cm以上、壁からの張り出しは25cm以上あるが、袖などは全くなっている。 **貯蔵穴** 住居南東隅にあり、住居の壁に接するように掘られている。83×73cmのやや東西に長い方形である。深さは17cmであり、掘方底面とほぼ一致する。 **周溝** 確認できなかった。 **掘方** 確認面からは全体に10～15cm程度の深さがあり、底面には細かい凹凸が多く見られる。 **遺物** 遺物は少なく、掲載できたのは土師器杯1点のみである。その他小破片として、土師器甕・壺類4点、須恵器甕・壺類1点が出土している。 **時期** 出土遺物はわずかであるが、8世紀後半と思われる。



23号住居

1. 褐色土とロームの混土。掘方。
2. 褐色土とロームブロックの混土でローム主体。掘方。

23号住居竈

1. 灰褐色土(7.5YR4/2) 焼土を多く含む。
2. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒を多く含む。

23号住居貯蔵穴

1. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒を少量含む。締まり弱い。

第54図 23号住居平面図、竈平面図、出土遺物

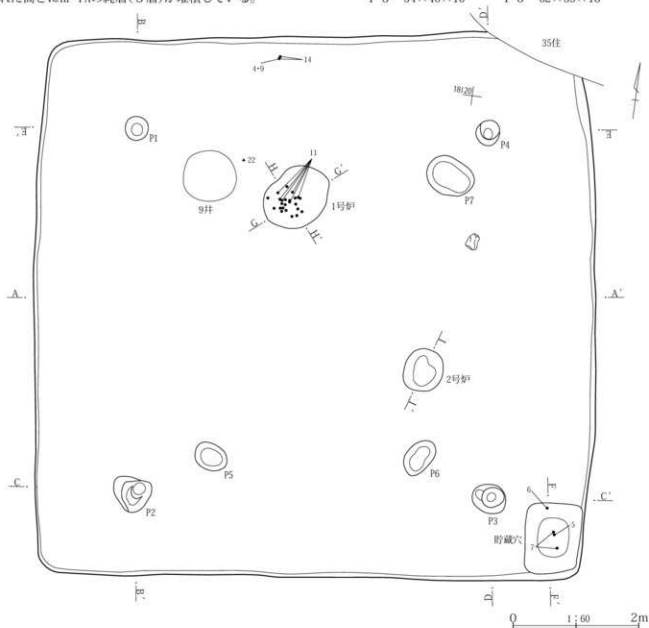
24号住居(第55～59図、第29・30表、PL.18-4～19-3.57・58)

調査区中央やや北寄りにある大型の住居である。北東隅を35号住居に破壊されている以外は残りが比較的よい。

位置 18区H～J 18～20。 **重複遺構** 35号住居と9号井戸と重複し、本住居がいずれよりも古いことは平面で確認した。 **形状** ほぼ正方形。 **主軸方位** N-9°-W。 **規模** 中央で計測して8.58×8.94m。 **床面積** 35号住居で破壊されているところも復元して、推定73.09㎡。 **壁高** 2～22cm。 **覆土** 4層(細かいロームブロックを含む黄褐色土)の上、床面から5～10cm離れた高さにHr-FAの純層(3層)が堆積している。

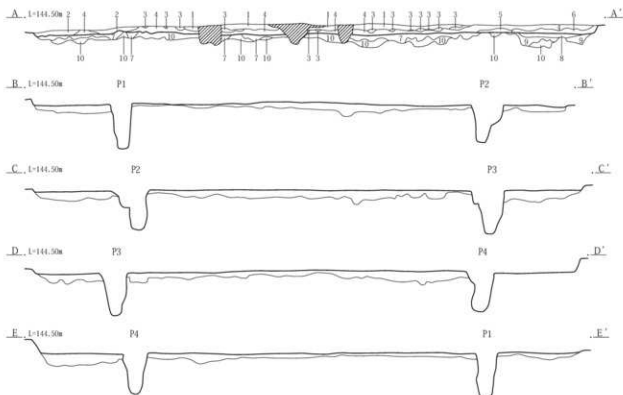
床面 浅い掘方をローム粒・ロームブロックを含む黄褐色土や暗灰黄色土で埋め戻して床面とする。床面の硬化は弱い。 **柱穴** 床面ではP1～7の7基のピットが見つかっている。このうちP1～4の4本が、深さもあり、主柱穴であると思われる。P5～7の3基は、深さが浅く、柱穴とは考えられないが、いずれも主柱穴の内側で規則的な配置となり、何らかの施設に関わるものである可能性がある。その配置からみて、9号井戸の位置にも、同様なピットがあった可能性がある。それぞれの大きさは以下の通り(長径×短径×深さ、cm)。

P 1	38×36×72	P 2	61×53×60
P 3	56×46×68	P 4	41×38×64
P 5	54×40×10	P 6	62×39×18



第55図 24号住居平面図

第4章 瓦子遺跡の調査の成果



24号住居

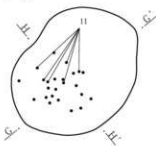
1. 黒褐色土(2.5Y3/2) ϕ 5~30mmのHr-FAに伴う白色軽石を含む。
2. 黒色土(2.5Y2/1) Hr-FAに伴う軽石を含む。
3. ϕ 1~10mmの白色軽石と上位に黄褐色細粒火山灰、Hr-FA一次堆積。
4. 黄褐色土(2.5Y5/3) 細かいロームブロックを含む。
5. 黄褐色土(2.5Y5/6) 細かいロームブロックを多く含む。
6. 黒褐色土(2.5Y3/2) 大きなロームブロックを含む。
7. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) ローム粒を含む。以下掘方。
8. 黄灰色土(2.5Y4/1) ローム粒、ロームブロックを含む。
9. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) ローム粒、ロームブロックを含む。
10. ロームの崩れた上。暗灰黄色土を含む。



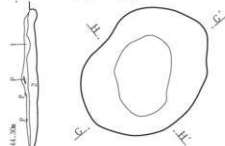
24号住居貯蔵穴

1. 灰黄褐色土(10YR4/2) As-Cを含む。
2. 黒色土(2.5Y2/1) As-Cを含む。
3. 褐色土(10YR4/4) As-C、細かいロームブロックを含む。
4. 黒褐色土(2.5Y3/2)
5. 暗褐色土(10YR3/3) 細かいロームブロックを含む。
6. 黒色土(10YR2/1) ロームブロックを含む。

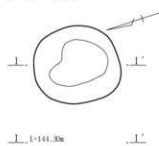
1号炉



1号炉・掘方



2号炉・掘方



24号住居1号炉

1. 褐灰色土(10YR4/1) 焼土粒を含む。
2. 褐灰色土(7.5YR4/1)と焼土の混土。

24号住居2号炉

1. 焼土と褐色土(10YR4/4)の混土。

0 1:30 1m

0 1:60 2m

第56図 24号住居断面図、1・2号炉平面図

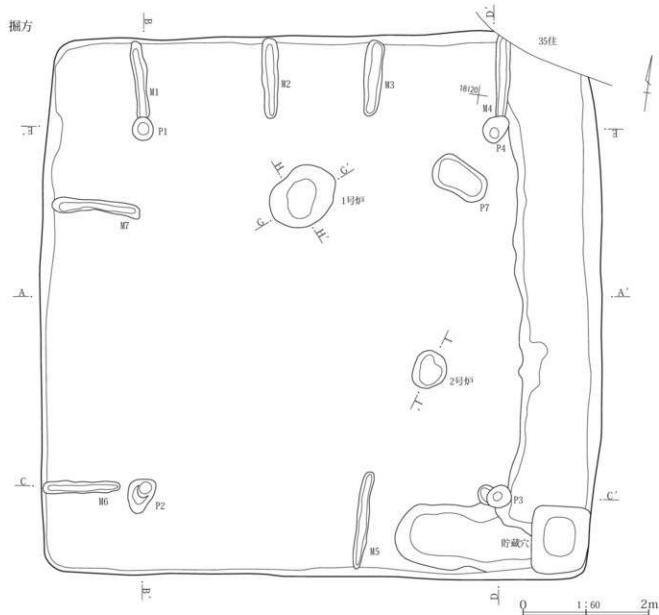
P 7 77×59×26

炉 住居北側と東側の2ヶ所にある。前者を1号炉、後者を2号炉として調査した。いずれもいわゆる地床炉である。1号炉は115×85cmの歪んだ楕円形で、表面はよく焼土化し、裏(11)の破片が多数散布していたので、こちらが主に使用された炉であると考えられる。掘方は最も深いところで7cmある。2号炉は70×62cmの楕円形の範囲に焼土が散っていたが、焼土の量は多くなく、こちらは副次的に使用された炉であると思われる。掘方は最も深いところで8cmある。

貯蔵穴 住居南東隅に、壁に接して設けられている。長さ112cm、幅90cmの長方形で、深さは62cmある。底部からは鉢と埴が1点ずつ、埋土の上層からは鉢1点が出土した。用は2つに割れていたが、

鉢はいずれもほぼ完形であり、本来貯蔵穴の付近に保管されていたものであろう。埋没土は最下層を除いてやや不自然なので、人為的に埋められた可能性が高い。周溝 確認できなかった。間仕切り溝 掘方調査によって、間仕切りと思われる溝が8本見つかった。M5は少し長いが、その他は主柱穴を結ぶ線よりも外側にあり、住居の周縁部を区切る用途をもったものと考えられる。そのうち、M1～4の4本は北壁に沿って存在し、P1～P4の間を3区画に分割している。分割の幅は中央(M2と3の間)が160～170cm(溝心-心で計測)でやや狭く、両脇(M1と2、3と4の間)が200～215cmとやや広い。各溝の規模は以下の通り(長さ×幅×深さ、cm)

M 1 122×16～22×6～9



第57図 24号住居掘方平面図

第4章 瓦子遺跡の調査の成果

M2 128×20～26×5～13

M3 121×22～29×7～8

M4 132×15～23×1～6

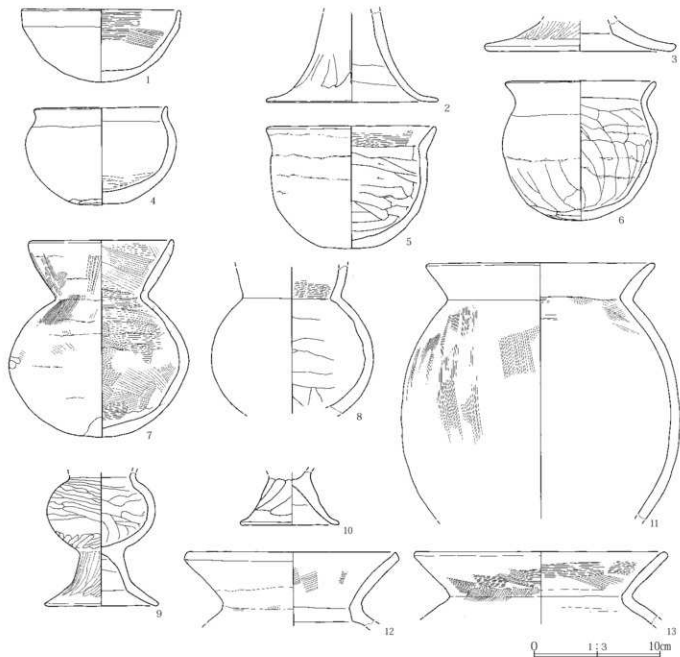
M5 155×14～19×7～9

M6 122×14～20×1～6

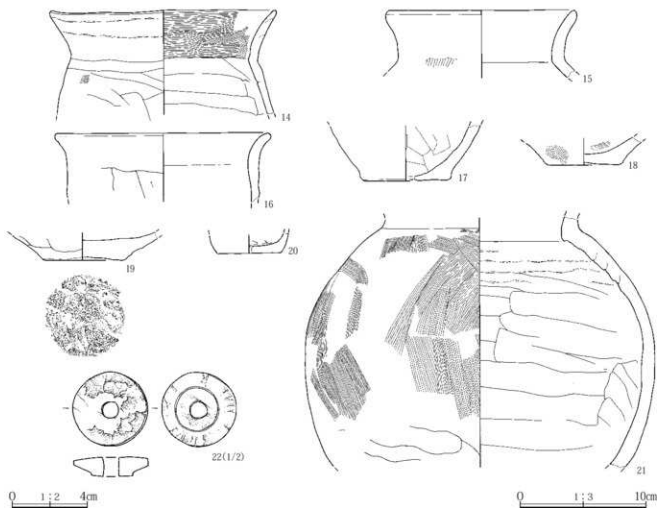
M7 140×16～25×10～12

掘方 全体に5～10cm程度の深さがあるが、東壁に沿った部分と南東隅付近は、幅1.0～1.2mの溝状に深さ20cm程度掘り下げている。その他の場所は細かい凹凸は見られるが、大きな掘り込み等はない。**遺物** 遺物は比較的多い。掲載する土器はすべて土師器で、椀1

点、高杯2点、鉢3点、埴1点、壺3点、脚付小型壺1点、台付甕1点、甕8点、手捏ねのミニチュア土器1点であり、他に石製品の紡輪1点が出土している。これらのうち、4の鉢、9の脚付小型壺、14の甕は北壁際中央付近の床面から、5・6の鉢と7の埴は貯蔵穴から、11の甕は1号がから、22の紡輪はが北西の床面から出土している。その他小破片として、土師器杯・椀類30点、同高杯26点、同甕・壺類433点、須恵器杯・椀類7点、同甕類3点が出土している。**時期・所見** 出土遺物から4世紀後半と思われる大型の住居である。覆土の中層にHr-FAの一次堆積層がみられるのが注目される。



第58図 24号住居出土遺物(1)



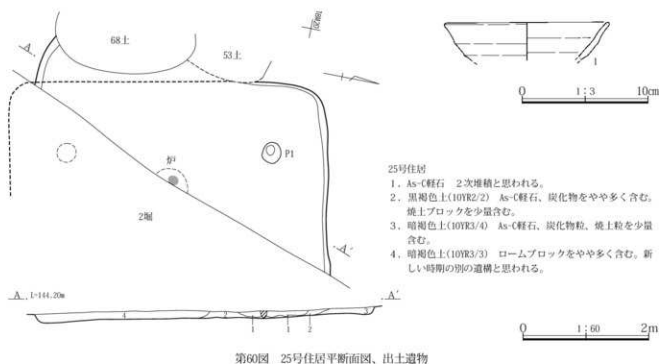
第59図 24号住居出土遺物(2)

25号住居(第60図、第30表、PL.19-4・5)

調査区中央付近にある。南東の大部分を2号堀に破壊されている。南半部には別の浅い遺構が重複している可能性がある。

位置 18区L19・20。 **重複遺構** 2号堀、53・68号土坑と重複する。本住居はいずれよりも古いことを平面で確認した。 **形状** 調査できた範囲が狭いので不明確であるが、南壁と北壁の方位はかなり異なり、さらに、わずかに見つかっている西壁をそのまま延長すると南西隅とずれてしまう。そのためこれが一つの住居とすると、かなり歪んだ方形になるものと思われるが、覆土の項で述べるように、南半部には浅い遺構が重複しているものと思われ、南壁はその遺構のものである可能性が高い。それが正しければ、25号住居の壁は北壁と西壁の一部のみが確認されていることになり、それは直角に近い角度で交わっているの、方形になるものと思われる。それを前提とし、さらに仮に南壁と北壁の中央にあると仮定

すると、復元できる住居の壁は、第60図平面図の破線のようになると思われる。 **主軸方位** 床面に見られる焼土は如と考えられるが、住居の形状が前項の通りとすると、これは西壁に近い位置となり、とすれば、東西方向が主軸方位と考えられる。そのため、北壁の方向を計測して、主軸方位はN-102°-Wと推定できる。 **規模** 復元した形状では、南北約5mとなる。 **床面積** 不明。 **壁高** 10～18cm。 **覆土** 覆土にはAs-C軽石の層(1層)があるが、より下層(2・3層)にもAs-Cの軽石が含まれているため、この層は2次堆積と思われる。南半部の4層はこれらの覆土を切っており、その底面が床面とほとんど変わらない深さではあるものの、4層の中にAs-C軽石は含まれておらず、新しい遺構であると考えるのが妥当であろう。 **床面** 地山を直接床面としている。 **柱穴** P1の1本だけが見つかっている。これを北西隅とする4本柱穴と考えられる。大きさは以下の通り(長径×短径×深さ、cm)。



第60図 25号住居平面断面図、出土遺物

P1 34×30×28

炉 2号堀に切られている位置に径15cmの円形の焼土があり、その周囲もやや焼土化していたため、ここが炉と考えられる。2号堀で切られている部分で径は58cmである。いわゆる地床炉で、掘り込みはほとんどない。中央部分を除いて焼土化は弱く、あまり使用頻度は高くはないように思われる。**貯蔵穴・周溝** 調査した範囲では確認できなかった。**掘方** なし。**遺物** 遺物はごく少ない。掲載したのは須恵器杯1点であるが、出土位置不明であり、4層からの出土であると考えられる。その他小破片として土師器杯・椀類2点、同表・壺類7点、須恵器裏類1点が出土しているが、これらも同様に4層からの出土である可能性があり、住居に伴う土器は確定できない。**時期・所見** 掲載した土器は9世紀後半のものと思われるが、この住居は炉をもっており、年代が合わない。前述の通り、この土器は新しい遺構のものであろう。住居に確実に伴う土器は不明なので、年代は確定できない。

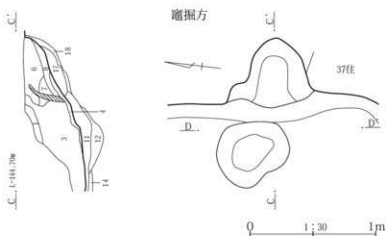
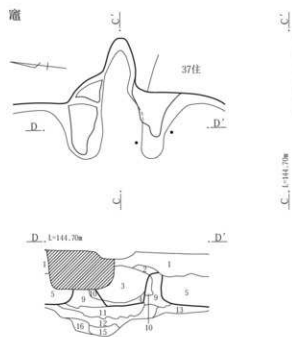
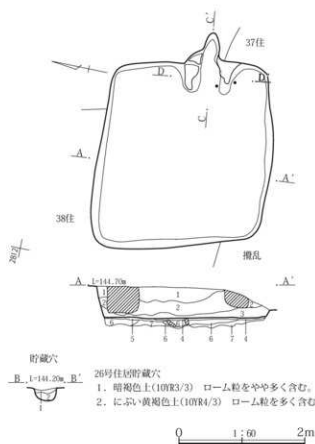
26号住居(第61図、PL.19-6～20-1)

調査区北東辺近くの中央付近にある。南西部を掘乱に破壊されている他は、残存状態は比較的良好。

位置 28区H1。**重複遺構** 37・38号住居と重複し、本住居はいずれよりも新しいことを平面で確認した。南

には29号住居があるが、わずかに重複していない。なお、南部には東西に長い掘乱がかかっており、そのため、表面が削られている。A-A'セクションで南側が下がっているのはそのためである。**形状** 全体として平行四辺形に近い方形である。**主軸方位** N-78°-E。

規模 中央付近で計測して、2.90×2.78m。**床面積** 6.74㎡。**壁高** 10～49cm。**覆土** 3層に分けることができた。下層ほどよく締まり硬化していた。特に人為的埋没とする根拠はない。**床面** 掘方をローム土を主とした土で埋め戻し、薄い貼床を施して床面とする。表面は平坦で硬く締まっている。**柱穴** 確認できなかった。**竈** 東壁南寄りにある。左袖の上半部を掘乱によって壊されている以外は残りがよい。全長96cm、幅85cm、焚き口幅33cm、燃焼部幅33cmである。燃焼部は住居内にあり、住居外への張り出しは45cmである。両袖とも残り、それは黄灰色シルトによって作られていた。竈内には天井部の崩落と思われる灰白色あるいは褐灰色シルトが見られるので、これらのシルトによって竈が構築されていたのであろう。袖の内側はよく焼土化しており、よく使用されていたものと思われる。**貯蔵穴** 床面では確認できなかったが、掘方の調査によって住居南東隅付近に小土坑が見つかり、これが貯蔵穴であると思われる。長さ56cm、幅42cmの不整な楕円形で、深さは床面から計測すると24cmである。この貯蔵穴が住居使用時に開



第61図 26号住居平面図、竪断面図

口していたかどうかは未確認であり、確定できない。

周溝 確認できなかった。**掘方** 住居西部を中心にやや深く掘り込んでいて、最も深いところでは20cmある。底面には細かい凹凸が見られる。**遺物** 遺物は小破片のみの出土で、掲載できるものはない。小破片としては、土師器杯・椀類18点、同高杯4点、同蓋・壺類105点、須恵器杯・椀類4点、同蓋1点、同壺類1点が出土している。**時期** 出土遺物が小破片ばかりなのでやや確実性にかけるが、6世紀後半だと思われる。

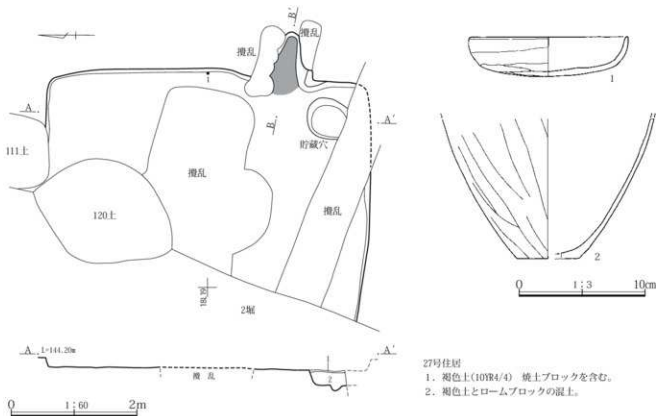
27号住居(第62・63図、第30表、PL.20-2~5,58)

調査区中央にある。西側を2号堀により大きく破壊されているほか、111・120号土坑や攪乱も重複し、残りは非常に悪い。

位置 18区K・L18・19。**重複遺構** 2号堀、111・120号土坑と重複し、本住居はいずれよりも古いことを平面・断面で確認した。**形状** 西半部は破壊されているが、方形であると思われる。**主軸方位** N-91°-E。**規模** 破壊されている部分が多いので、規模を計測できるところがないが、主軸方向は最も長い南壁付近で計測して3.75mが残るのみである。もう一方は、東壁付近で

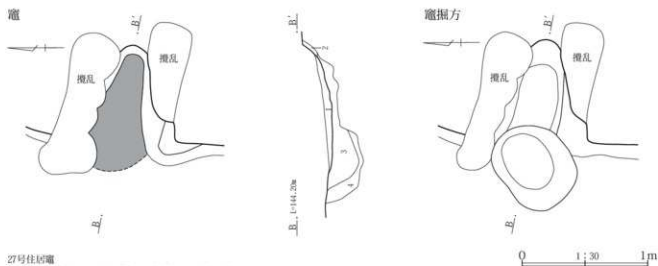
計測して5.15mと推定される。**床面積** 土坑や攪乱で破壊されている部分を推定復元すると、2号堀で破壊されている部分以外の床面積は、推定14.86㎡である。

壁高 14~16cm。**覆土** 図に示せなかったが、ローム粒や軽石・焼土粒を含むにふい黄褐色土1層で埋没していた。**床面** 破壊されている部分が多いため、床面は限られた範囲しか残っていない。わずかな凹凸を平坦にする程度で掘方はほとんどなく、大部分は地山を床面としている。**柱穴** 確認できなかった。**竈** 東壁の南側にある。竈の畝間の攪乱が重複してしまっているため、非常に残りが悪い。左側の袖は完全に破壊されていたが、右側は基部が残っていた。竈の底部は煙道部にかけて緩やかな登り傾斜となり、全体に焼土・炭化物が散っていた。焼土の分布範囲から判断して、全長は100cm以上と推定される。壁から外側には75cm張り出しており、燃焼部の大部分が壁の外側に出る形態であったと考えられる。**貯蔵穴** 住居南東隅、竈に近い位置にある。南側を攪乱に破壊されているため、長径は不明だが、短径64cmの楕円形で、深さは24cm。中央にさらに8cm深い小ピットが掘られている。褐色土とロームブロックの混土でほとんどが埋没しており、人為的に埋め戻されたも



27号住居
1. 褐色土(10YR4/4) 焼土ブロックを含む。
2. 褐色土とロームブロックの混土。

第62図 27号住居平面断面図、出土遺物



27号住居竪

1. 灰褐色土(7.5YR4/2) 焼土、炭化物、灰を多く含む。
2. 黄褐色土(2.5Y5/3) ローム質の上。内側が焼土化している。以下掘方。
3. 褐灰色土(10YR4/1) 焼土粒、ローム粒、炭化物を多く含む。
4. ローム粒、ロームブロック、黒褐色土の混合。

第63図 27号住居竪断面図

のと考えられる。周溝 確認できなかった。掘方 ほとんどない。遺物 遺物は少なく、掲載するのはいずれも土師器で杯1点、甕1点である。このうち1の杯は東壁際の中央付近から床面からわずかに浮いて出土した。その他小破片として、土師器甕・壺類95点、須恵器杯・椀類1点、同盤1点、同蓋1点、同甕・壺類2点が出土している。時期 出土遺物は少ないが、それらからみて8世紀後半と思われる。

28号住居(第64図、第30・31表、PL.20-6~21-1,58)

調査区中央付近にある。上面が削平され、壁は北半部しか残っておらず、南壁付近は床面も削られていた。

位置 18区I17。重複遺構 なし。形状 削平された部分が多いのでやや不明確ではあるが、長方形と考えられる。主軸方位 N-103°-E。規模 主軸方向は北半部で計測して2.83m。もう一方は南壁が削られているため、推定であるが、中央付近で計測して3.92mである。床面積 南半部を平面図の破線のように復元して、推定10.22m²である。壁高 0~10cm。覆土 北半部の底面付近しか残っていないが、黒褐色土で埋没していた。床面 北壁に沿った部分などを除いて地山のロームを直接床面としている。掘方のある部分は黒褐色土とローム土の混土で埋めている。床の表面はよく締まって硬い。柱穴 確認できなかった。竪 東壁の

南東隅近くにある。焼土の存在から竪と考えられるが、完全に破壊されており、掘方の浅い凹みが残るだけであった。この凹みは長さ89cm、幅89cmの不整形で、床面からの深さは7cmであり、底面にはわずかに焼土化した部分があった。壁外側への張り出しは42cmである。貯蔵穴 南東隅にある。床面では長さ62cm、幅48cmの長方形であるが、掘方底面では北側に広がる形となる。深さ6~8cmで、中に径14~18cm、深さ30cmの小ピットが掘られている。この小ピットの上半部から、2点のほぼ完形の須恵器杯が重なるように出土した。埋土は住居と同じ黒褐色土であり、同時に埋没したものと考えられる。

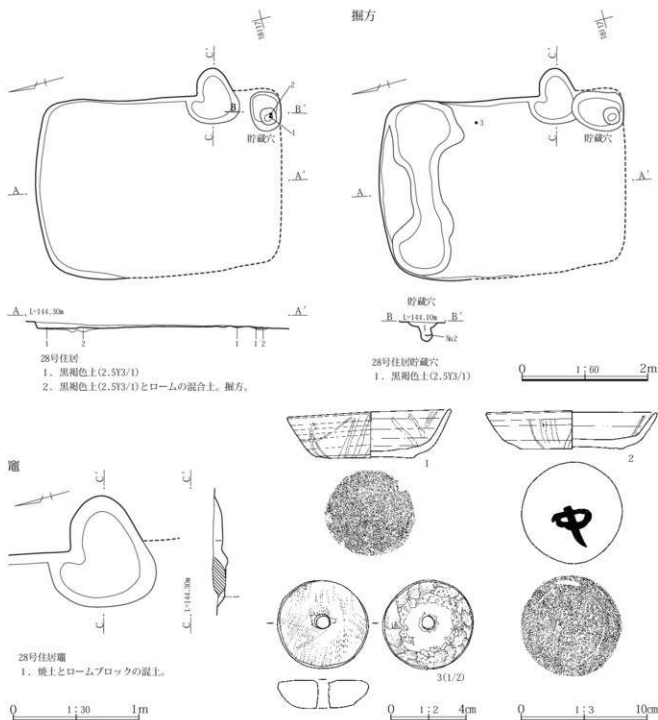
周溝 確認できなかった。掘方 北壁に沿って溝状に掘られている(深さは最も深いところで11cm)以外は、掘方はほとんどない。遺物 遺物は少なく、掲載するのは貯蔵穴から出土した須恵器杯2点と北壁際掘方から出土した紡輪1点である。その他小破片として土師器甕・壺類2点が出土している。時期 2点の須恵器杯から8世紀前半と考えられる。

29号住居(第65・66図、第31表、PL.21-2~5,59)

調査区北東辺近くの中央付近にある。この付近は浅い掘乱が多く、遺構確認が困難であったため、当初35号住居との重複を逆に考えて調査してしまった。

位置 18区H20、28区H1。重複遺構 35・37号住居

第4章 丑子遺跡の調査の成果



第64図 28号住居平面図、竈平面図、出土遺物

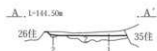
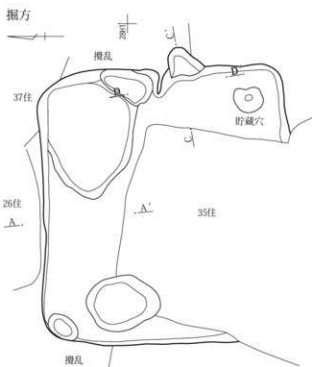
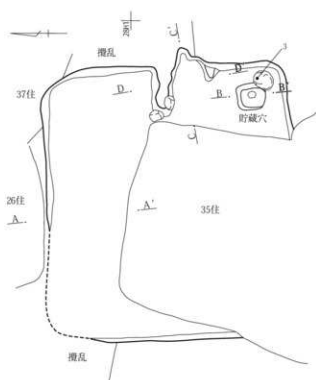
と重複し、35号住居より古く、39号住居より新しい。35号住居とは、調査当初新田関係を逆に考えていたが、出土遺物から本住居が古いことが判明し訂正した。北部は東西に長い攪乱と重複し、東壁の竈北側と、北西の壁が破壊されている。形状 東西にやや長い方形と推定されるが、南壁と西壁をそのまま延長すると、やや台形に近い形となる。主軸方位 N-88°-E。規模 残存部分のうち、可能な限り中央に近い部分で計測すると、

4.38×3.95m。床面積 南壁と西壁を延長して、35号住居に破壊された部分も推定すると、推定16.62㎡である。壁高 0～30cm。覆土 黒褐色土を中心とした土層で埋没している。床面 掘方をローム粒・ロームブロックを含む黄灰色土で埋め戻して床面とする。床面の硬化は弱い。柱穴 掘方調査でも確認できなかった。竈 東壁中央やや南寄りにある。左袖がよく残っているのに比べ、右袖は痕跡程度しかない。全長は左袖

の先端から計測して105cm、幅は袖の基部に近い部分で105cmである。燃焼部は住居内にあり、壁の外側への張り出しは27cmとごく短い。左の袖の中心部はロームを掘り残して芯としており、その周囲にローム土を中心とした土を貼り付けて袖を作っている。先端には、焚き口の石と思われる細長い自然礫(第29図の南側の石)が残っていた。右袖は基部しか残っていないが、浅黄色シルトブロックが残っていたので、ロームやシルトを用いて竈を構築していたものと思われる。貯蔵穴 住居南東隅にある。長さ46cm、幅42cmのやや歪んだ方形で、深さは52cmである。ロームブロックを非常に多く含む暗褐色土で埋没しており、人為的に埋められたものと考えられる。

貯蔵穴の上の南東側からは最大径32cmの円礫が置かれたように出土し、その上に3の糞がのっていた。

周溝 確認できなかった。掘方 やや凹凸が大きく、北東隅や北西隅付近は土坑状に深く掘っている。前者の深さは床面から25cm、後者は同じく34cmであり、その他の部分も5～8cm程度掘るところが多い。遺物 掲載した遺物はいずれも土師器で、杯2点、甕2点である。その他の小破片は、前述のような事情で、本来35号住居に属するものが多く含まれていると思われるが、土師器杯・碗類26点、同甕・壺類225点、須恵器杯・碗類15点、同蓋1点、同甕・壺類6点、同瓶1点である。時期 出土遺物から7世紀後半と考えられる。



29号住居

1. 黒褐色土(2.5Y3/2) 軽石、ローム粒を含む。
2. 黄灰色土(2.5Y4/1) ローム粒、ローム小ブロックを含む。掘方。



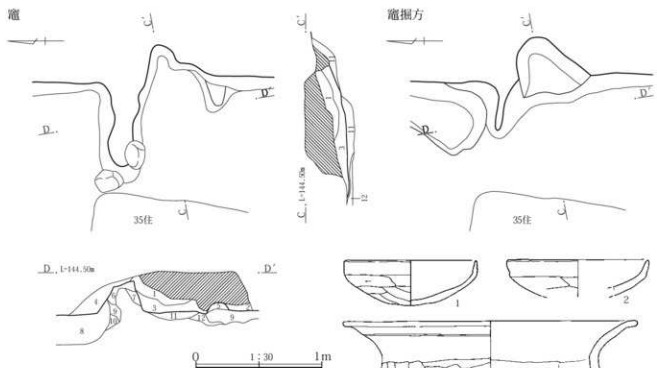
29号住居貯蔵穴

1. 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロック、白色軽石、焼土粒を少量含む。
2. 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロックを非常に多く含む。

0 1:60 2m

第65図 29号住居平面図

第4章 瓦子遺跡の調査の成果



29号住居竈

1. オリーブ褐色土(2.5Y4/3) ローム粒を多く含む。焼土粒は少ない。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒を少量含む。
3. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 焼土、ローム粒、ローム小ブロックを多く含む。
4. 黒褐色土(2.5Y3/2) ローム粒を含む。焼土粒を少量含む。
5. 浅黄色シルトブロック(2.5Y7/3) 竈袖の下部部。
6. 黄褐色土(2.5Y5/3) 竈袖。
7. 焼土 6層が焼土化した土。以下掘方。
8. 黒褐色土(2.5Y3/2) ローム粒、ローム小ブロック、焼土粒を含む。
9. ローム小ブロックと黒褐色土の混合。
10. 黄灰色土(2.5Y4/1) ローム粒を含む。
11. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土、炭化物、ローム粒を多く含む。
12. ロームの崩れた土。

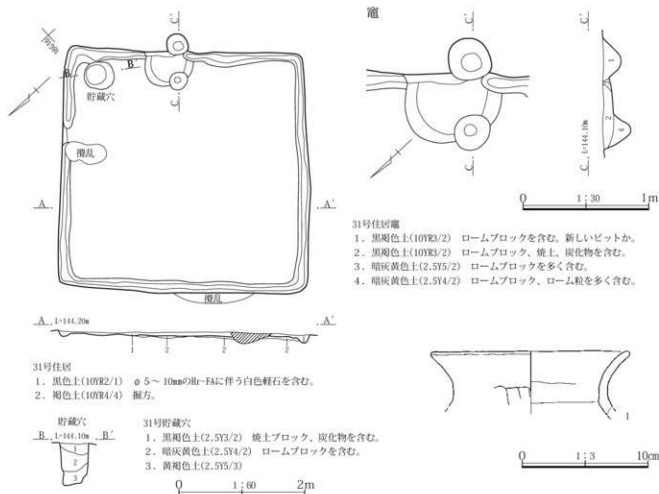
第66図 29号住居竈平面断面図、出土遺物

31号住居(第67図、第31表、PL.21-6~22-1)

調査区東半部のほぼ中央にある。削平のため、ごく薄くしか残っていない。

位置 18区G・H15・16。 **重複遺構** なし。 **形状** 四隅がほぼ直角の整った正方形である。 **主軸方位** N-134°-E。 **規模** 中央付近で計測して3.85×3.95m。 **床面積** 14.35㎡。 **壁高** 2~12cm。 **覆土** 削平のためごく薄くしか残っていない。Hr-FAに伴うと思われる軽石を含んだ黒色土で埋没している。 **床面** 掘方はごく薄く、東半部を中心として地山のロームを直接床面としている部分も多い。 **柱穴** 確認できなかった。 **竈** 南東辺やや北東寄りに焼土・炭化物を含む土が存在したため、そこを竈と考えて調査したが、竈掘方と思われる窪みはあったものの、袖や燃焼部の焼土など

は確認できず、完全に破壊されてしまったものと考えられる。煙道部に位置する凹みも、竈の施設というよりも新しい時代のピットであると思われる、竈の形状等は不明である。 **貯蔵穴** 竈に向かって左側の、住居東隅にある。47×42cmの楕円形で、深さは68cmと深い。 **周溝** 北東辺中央部など、ごく一部を除いて全周している。幅12~20cm、深さ5~14cmの明瞭な周溝である。 **掘方** 西半部がごく浅く掘られているのみで、その底部は細かい凹凸が見られる。 **遺物** 遺物の出土は少ない。掲載したのは土師器甕1点のみで、これは竈から出土している。その他小破片として土師器甕・壺類11点が出土しているだけである。 **時期** 出土遺物は少ないが、6世紀代のものと考えられる。



第67図 31号住居平面図、竪穴平面図、出土遺物

32号住居(第68・69図、第31表、PL.22-2~5,59)

調査区北西辺中央やや南寄りにある。南西部に下がる緩やかな傾斜で削平されており、北東部の1/2~1/3程度しか残存していなかった。

位置 18区Q・R19・20。 **重複遺構** 84号土坑と重複し、本住居が古いことは平面で確認した。 **形状** 北東辺の形状から、方形と思われる。 **主軸方位** N-58°-E。 **規模** 主軸方向は削平のため不明。もう一方は5.42m。 **床面積** 不明。 **壁高** 0~30cm。 **覆土** 北東部では、暗褐色土や黒褐色土で埋没していた。

床面 掘方はなく、地山のロームを直接床面としている。ほぼ平坦である。 **柱穴** P1~4の4本が見つかり、これを主柱穴とするとと思われる。各柱穴の大きさは次の通り(長径×短径×深さ、cm)。

P 1 22×19×32 P 2 25×22×44

P 3 21×20×40 P 4 20×18×40

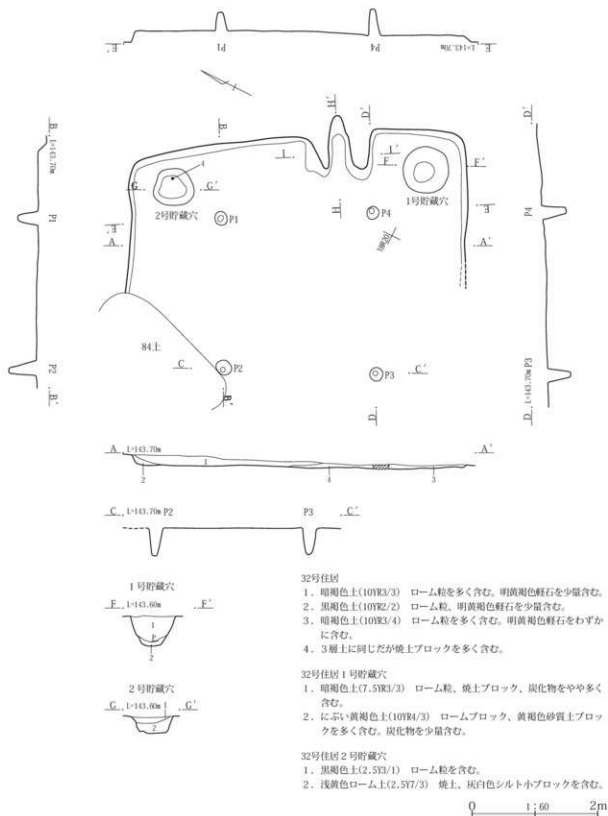
竪 北東壁のやや南寄りにある。上面が削平され底部の

みの残存であるが、両袖とも残り、全形は分かる。全長104cm、幅107cm、燃焼部幅22cmである。袖の底部は地山を削り残している。竪内部には全体に厚さ3cm程度の焼土(9層)が見られるが、これは竪底面をなす地山が被熱によって焼土化したものであろう。 **貯蔵穴** 北東、南東の両隅にある。南東のものを1号貯蔵穴、北東のものを2号貯蔵穴として調査した。いずれも上層に床面と思われるような硬化面はないので、住居使用時には両方とも使われていた可能性があるが、1号貯蔵穴の埋土は大部分が住居埋土と同様の暗褐色土であるのに対し、2号貯蔵穴はほとんどが浅黄色ローム土であることが異なり、2号の方は人為的に埋められたものと思われる。そのため、2号貯蔵穴は廃絶時いち早く埋められたか、あるいは既に埋まっていたと考えられる。それぞれの貯蔵穴の大きさは、1号貯蔵穴が77×72cmの楕円形で深さ47cm、2号貯蔵穴が65×58cmの不整形形で深さは27cmである。 **周溝** 確認できなかった。 **掘方** 掘方はない。

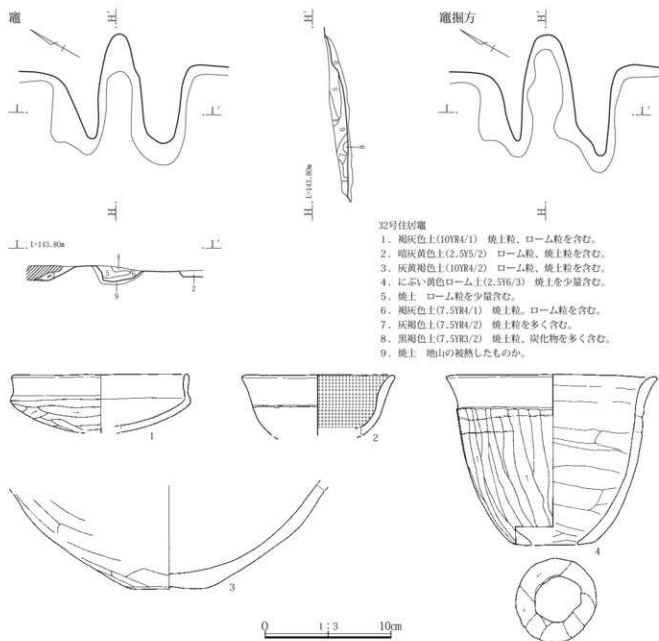
第4章 丑子遺跡の調査の成果

遺物 遺物は少ない。掲載したのはいずれも土師器で杯1点、鉢1点、甕1点、甗1点である。このうち、甗は2号貯蔵穴の埋没土の上(床面から5cm上となる高さ)から、甕は同貯蔵穴の埋土中から出土した。その他小破片

として土師器杯・椀類11点、同高杯1点、同甕・甗類36点、須恵器甕・甗類1点が出土している。**時期** 出土遺物から6世紀後半と思われる。



第68図 32号住居平面図



32号住居竪

1. 褐灰色土(10YR4/1) 焼土粒、ローム粒を含む。
2. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) ローム粒、焼土粒を含む。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒、焼土粒を含む。
4. にぶい黄褐色ローム土(2.5Y6/3) 焼土を少量含む。
5. 焼土 ローム粒を少量含む。
6. 褐灰色土(7.5YR4/1) 焼土粒、ローム粒を含む。
7. 灰褐色土(7.5YR4/2) 焼土粒を多く含む。
8. 黒褐色土(7.5YR3/2) 焼土粒、炭化物を多く含む。
9. 焼土 地山の焼熱したものか。

第69図 32号住居竪断面図、出土遺物

33号住居(第70・71図、第31表、PL.22-6~23-2,59)

調査区北西隅近くにある。土坑により大部分が破壊されている。

位置 28区P・Q4・5。 **重複遺構** 21・82・83号土坑と重複し、本住居がいずれよりも古いことは平面・断面で確認した。 **形状** 方形と思われる。 **主軸方位** N-101°-W。 **規模** 主軸方向は4.50m以上。もう一方は西壁付近で計測して5.10mである。 **床面積** 不明。 **壁高** 6~12cm。 **覆土** 白色軽石・ローム粒・焼土粒を含む暗褐色土で埋没している。 **床面** 掘方をロームブロック、黄灰色土、黒褐色土の混土で埋め戻し、暗灰黄色土の薄い貼床を施して床面とする。残っている

のが住居の周辺部のみであるためか、床面の硬化は弱い。

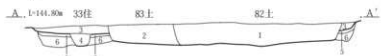
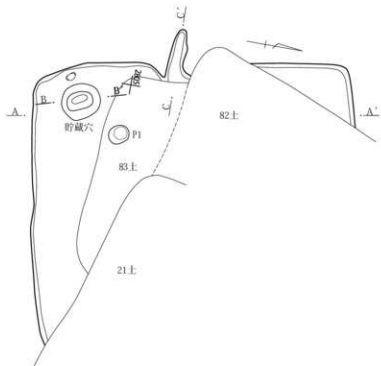
柱穴 83号土坑の底面で見つかったビット(P1とした)が、その位置から考えて本住居のものと考えられる。大きさは長径34cm、短径28cm、深さ38cmである。

竪 西壁中央やや南寄りにある。82・83号の2つの土坑に前面を破壊され、残りが悪い。左袖が残り、それから計測すると、全長は86cm以上はあったはずである。煙道が壁の外側に延び、その張り出しは52cmである。埋土に焼土ブロックが多く含まれていたが、袖や底面の焼土化は弱い。 **貯蔵穴** 住居南西隅にある。63×56cmの楕円形で、深さは68cmある。にぶい黄褐色土で大部分が埋没しているが、この層は締まりが弱いので、一気に人為的

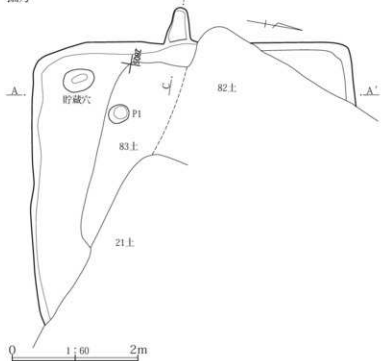
に埋められたものと思われる。周溝 確認できなかった。掘方 全体的に深く平坦に掘られている。床面からの深さは5~20cmである。遺物 遺物の出土は少ない。掲載したのはいずれも土師器で杯1点、甕1点、

鉢2点である。その他小破片として土師器杯・椀類15点、同甕・甕類44点、須恵器甕・甕類1点が出土している。

時期 出土遺物から6世紀代と思われる。



掘方



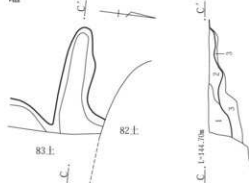
33号住居貯蔵穴

1. 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒を少量含む。
2. 黒褐色土(10YR2/3) ローム粒を少量含む。焼土粒をわずかに含む。
3. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム粒、黄褐色砂質土ブロックを少量含む。やわらかい。

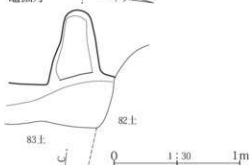
33号住居

1. 暗褐色土(10YR3/4) 白色軽石、ロームブロックをやや多く含む。82号土坑。
2. 暗褐色土(10YR3/4) 白色軽石、ロームブロックをやや多く含む。焼土粒、炭化物を少量含む。83号土坑。
3. 暗褐色土(10YR3/3) 白色軽石、ローム粒、焼土粒を少量含む。以下33号住居。
4. 貯蔵穴。
5. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) ローム粒、ロームブロックを含む。掘方。
6. ロームブロック、黄灰色土、黒褐色土の混合。掘方。

竈



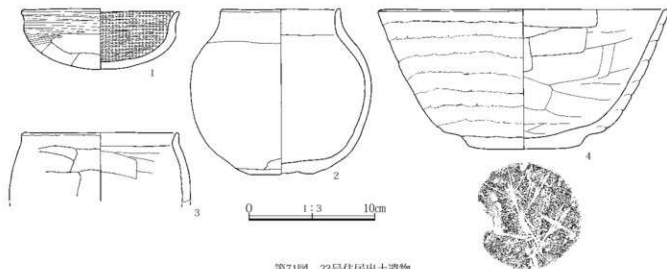
竈掘方



33号住居竈

1. 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒を多く含む。白色軽石、焼土粒をわずかに含む。
2. 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒、焼土ブロックを多く含む。白色軽石をわずかに含む。
3. 褐色土(10YR4/4) 焼土ブロックを含む。掘方。

第70図 33号住居断面図、竈断面図



第71図 33号住居出土遺物

34号住居(第72図、第31表、PL.23- 3・4, 59)

調査区北東辺の中央付近にある。大半が調査区外となり、南西隅を中心とした一部分だけが調査できた。

位置 28区F・G1・2。 **重複遺構** なし。 **形状** 方形と思われる。 **主軸方位** 竈の位置が不明なので確定できないが、南辺を計測するとN-77°-E。 **規模**

不明だが、東西方向は3.62m以上、南北方向は2.76m以上である。 **床面積** 調査区内だけを計測すると4.22㎡である。 **壁高** 調査区壁で計測すると最も高いところで56cmである。 **覆土** A-A'セクションで見ると、底面の両脇に堆積している黒褐色土、暗灰黄色土の上に灰黄褐色土1層が厚く堆積している。 **床面** 掘方をローム粒・ローム小ブロックを多く含む黄褐色土で埋め戻し、床面とする。表面は平坦でよく締まり固い。

柱穴 掘方で2本のピットを確認した。そのうちのいずれかが柱穴になるものと思われる。各柱穴の大きさは以下の通り(長径×短径×深さ、cm)。深さは床面からの深さを計測した。

P 1 32×30×66 P 2 38×30×55

竈・貯蔵穴・周溝 確認できなかった。 **掘方** 掘方底面は凹凸が見られ、不整形の土坑状に深いところもあるが(床面から13～24cm)、5cm前後の浅い部分が多い。

遺物 狭い面積にもかかわらず、比較的多くの遺物が出土している。掲載したのはいずれも土師器で、杯4点、甕2点、台付甕1点、鉢1点であるが、その他に小破片として、土師器杯・椀類81点、同高杯1点、同甕・壺類238(うち、壺と思われる2点は赤彩)、ミニチュア土器8点、須恵器杯・椀類3点、同甕・壺類1点、同瓶1点

である。 **時期** 出土遺物から6世紀後半と考えられる。

35号住居(第73～75図、第32表、PL.23- 5～7, 60)

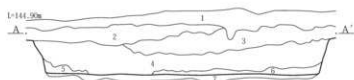
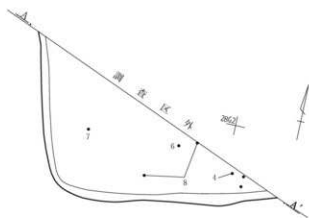
調査区北東辺近くの中央付近にある。この付近は攪乱が多く、遺構確認が難しかったため、当初29号住居との新旧関係を逆に考えて調査してしまった。

位置 18区H20。 **重複遺構** 24・29号住居と重複し、本住居が新しい。29号住居とは、当初新旧関係を逆に考えて調査してしまったが、出土遺物から本住居が新しいことが判明したため訂正した。しかし、29号住居と重複する部分の壁については失われてしまったので、平面図では推定ラインを復元した。 **形状** 長方形。 **主軸方位** N-99°-E。 **規模** 北半部の平面形は推定したものであり、中央付近で計測して3.25×4.63mと推定される。 **床面積** 南東隅の攪乱部分の床面も復元して、推定13.43㎡。 **壁高** B-B'セクションの部分で42cm。 **覆土** 攪乱や新しい時期の掘り込みが見られ、残りがよくないが、A-A'セクションの部分では、主に黒褐色土で埋没している。1～3層については住居埋没後に掘られたもので、形状が不自然であり、あるいは動物穴ではないかと思われる。 **床面** 掘方を埋め戻して、大部分には暗灰黄色土の貼土を施して床面とする。 **柱穴** 確認できなかった。 **竈** 東壁の南半部にある。袖は見られず、燃焼部が壁の外に張り出す形式と思われる。壁の外側への張り出しは60cm、壁面における幅は70cmである。上層に焼土を含むローム土(1層)が見られ、これが竈天井部の構築土ではないかと考えられる。 **貯蔵穴** 確認できなかった。南東隅に新しい時期の掘り込

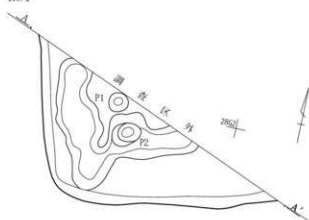
第4章 瓦子遺跡の調査の成果

34号住居

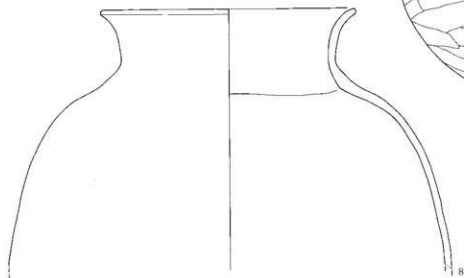
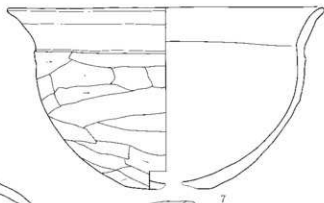
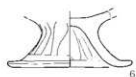
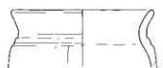
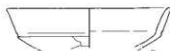
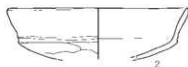
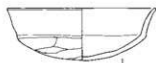
1. 表土 黄灰色土(2.5Y5/1).
2. 黒褐色土(2.5Y3/1) 旧耕作土。軽石を含む。
3. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 旧耕作土。軽石を含む。
4. 灰黄褐色土(10YR4/2) 軽石を含む。焼土粒を全体に少量含む。
5. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒を含む。
6. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) やや砂質。黒褐色土ブロック、ローム粒を含む。
7. 黄褐色土(2.5Y5/3) ローム粒、ローム小ブロックを多く含む。固く締まっている。掘方。



掘方



0 1:60 2m



0 1:3 10cm

第72図 34号住居平面図、出土遺物

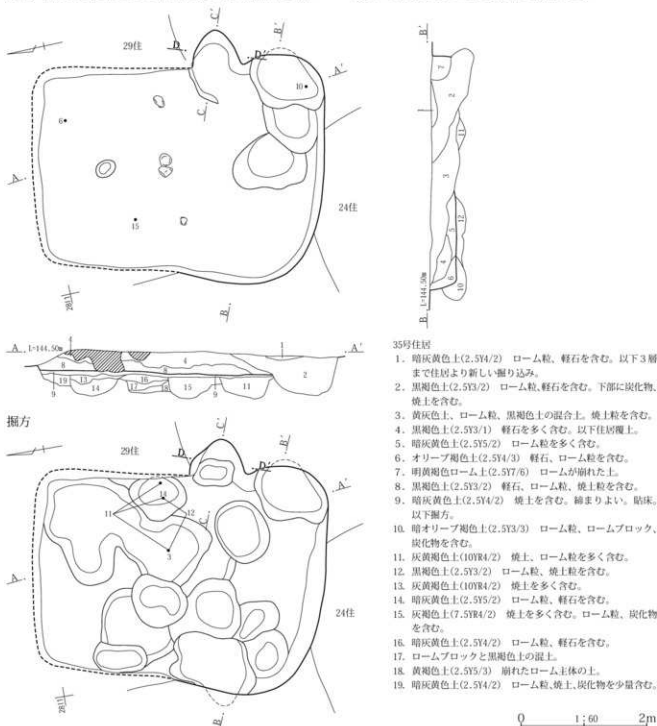
みがあるので、これによって破壊された可能性がある。

周溝 確認できなかった。**掘方** 全体に深く、いくつもの土坑が連結したような形状である。A-A'セクションに見るように、これらの土坑状の凹みの埋土には新旧関係が見られるので、これらは単純な住居掘方ではなく、掘方底面を土坑状に掘り込んでローンを採掘した後に、それを埋め戻して住居床面としたものではなからうか。

遺物 出土した遺物は多い。掲載したのは土師器杯2点、

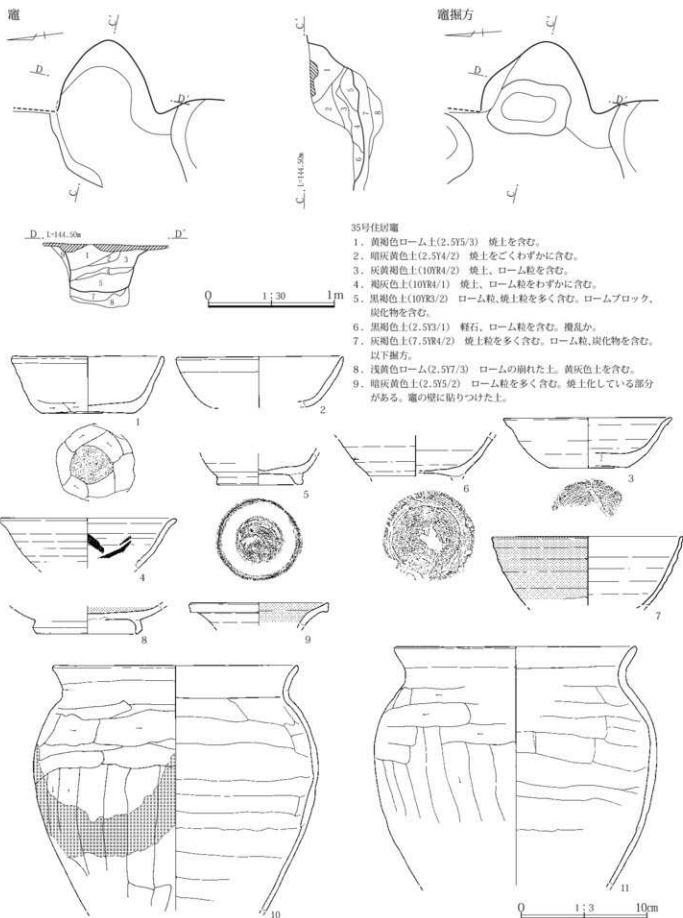
同斐5点、須恵器杯3点、同椀1点、同斐1点、灰釉陶器椀2点、同瓶1点である。その他の小破片は、29号住居の項で述べた通り、35号住居の遺物を29号住居として取り上げてしまったものも多いと思われるが、35号住居出土として取り上げたものは、土師器杯・椀類23点、同高杯(赤彩)3点、同斐・壺類178点、須恵器杯・椀類36点、同斐・壺類1点、同瓶3点、灰釉陶器瓶2点である。

時期 出土遺物から9世紀後半と思われる。

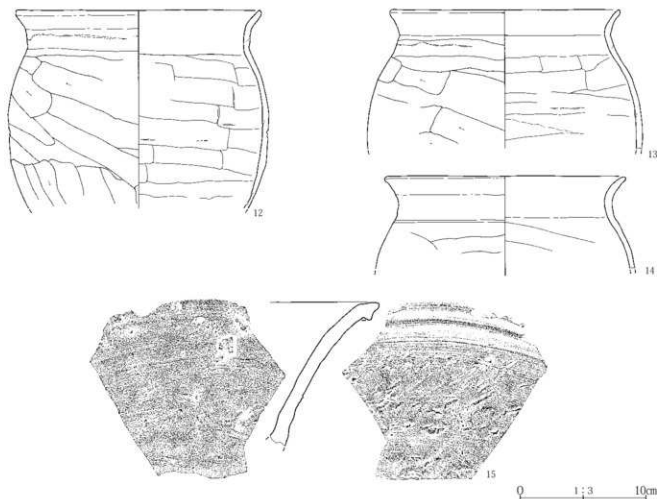


第73図 35号住居平断面図

第4章 瓦子遺跡の調査の成果



第74図 35号住居竈断面図、出土遺物(1)



第75図 35号住居出土遺物(2)

36号住居(第76・77図、第32表、PL.23-8・24-1.61)

調査区北東辺の西寄りにある。大部分が調査区外となる。

位置 28区J・K3。 **重複遺構** 7号井戸が北西隅に

わずかに重複する。本住居が古いことを断面で確認した。

形状 方形と思われる。 **主軸方位** 竈・炉が確認できなかったため、主軸方位は不明。南西辺の方位を計測するとN-27°-W。

規模 南西辺は4.25m、南東辺は3.50m残っているため、それ以上の規模である。 **床面積**

残存部分を計測すると7.68㎡。 **壁高** 調査区壁(A-A'セクション)で見ると、覆土は最も厚いところで39cm残っているため、本来の壁高はそれ以上である。

覆土 下層が暗褐色土、上層が黒褐色土で埋没している。特に人為的な痕跡は見られない。 **床面** 平坦で硬く締まっている。掘方は部分的で、ほとんどは細かい凹凸を埋める程度であり、地山を直接床面としているところもある。 **柱穴**

床面では確認できなかったが、掘方調査

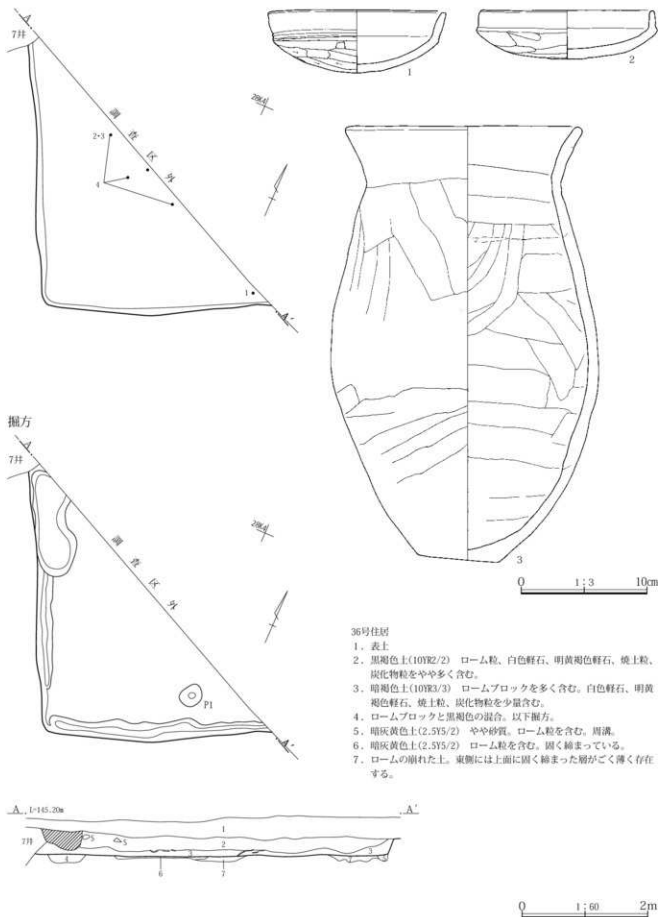
で1本のピット(P1)が見ついている。しかし、その位置が南東壁に近く、柱穴としては不自然なので、他の施設か、住居とは別の遺構と考えられる。大きさは長径38cm、短径30cm、深さは床面から30cmである。

竈・貯蔵穴 確認できなかった。 **周溝** 床面では把握できなかったが、掘方調査ではほぼ全周しているのを確認したので、本来存在したものと思われる。掘方底面での幅は15～27cmであり、深さは床面から6～10cmである。

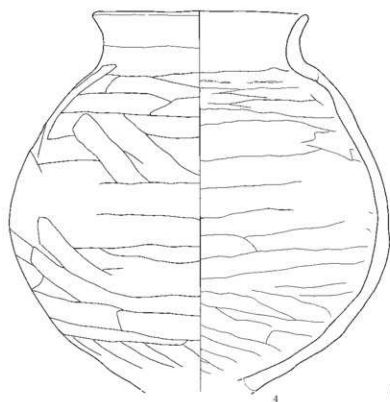
掘方 南西壁の北部に土坑状に掘られているところがある(床面からの深さは11～15cm)以外は、部分的に凹みが見られるだけである。 **遺物** 掲載したのはいずれも土師器で、杯2点、甕2点である。大きな破片は3層の

上面に多く見られ、住居廃絶後に流れ込んだものと思われる。その他小破片として土師器杯・椀類16点、同高杯3点、同甕・甕類44点、須恵器甕・甕類2点が出土している。 **時期** 出土遺物から6世紀後半と思われる。

第4章 丑子遺跡の調査の成果



第76図 36号住居平面断面図、出土遺物(1)



第77図 36号住居出土遺物(2)

0 1:3 10cm

37号住居(第78図, Pl. 24- 2)

調査区北東辺近くの中央付近にある。この付近は攪乱が多い上、他の住居とも重複して、北東隅を中心としたわずかな部分しか残っていない。竈や柱穴などの施設が全く見つかっておらず、遺物も出土しないため、「竪穴状遺構」に分類すべき遺構である可能性もある。

位置 28区G・H1。 **重複遺構** 26・29号住居と重複し、本住居が古いことを平面で確認した。その他の南西側は攪乱によって削平されている。 **形状** 方形と思われる。 **主軸方位** 竈・炉が確認できないので、主軸方位は不明である。北東辺は西側でやや屈曲してしまうが、直線部分の方位はN-69°-Wである。 **規模** 不明だが、北西-南東方向は最大2.02m分残っている。

床面積 現存する部分を計測すると、1.83㎡。 **壁高** 12～16cm。 **覆土** ローム粒・軽石を含む褐色土1層で埋まっており、人為的埋没の可能性が考えられる。 **床面** 地山のロームを直接床面としている。わずかな凹凸が見られる。 **柱穴・竈・炉・貯蔵穴・周溝** 確認できなかった。 **掘方** ない。 **遺物** 出土遺物はない。 **時期** ごくわずかな部分の調査であり、出土遺物もないので時期を特定できないが、26・29号住居よりも古いことから、6世紀前半以前のものである。

37号住居
1. 褐色土(10YR4/1) ローム粒、軽石を含む。

0 1:60 2m

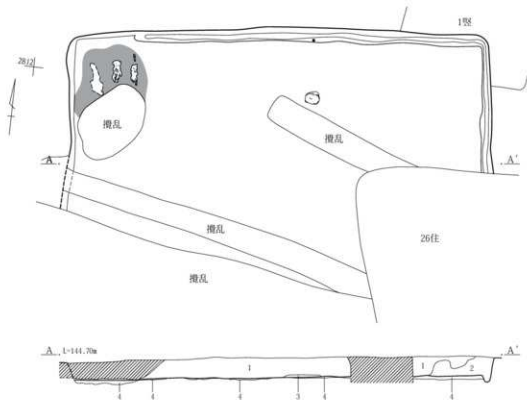
第78図 37号住居断面図

38号住居(第79・80図、第32表、PL.24-3~5)

調査区北東辺近くの中央付近にある。攪乱により南半分を破壊されている。

位置 28区H・11・2。 **重複遺構** 26号住居・1号竪穴状遺構と重複し、本住居はいずれよりも古いことを平面で確認した。 **形状** 南半分が破壊されているが、方形と思われる。 **主軸方位** 竪・竪が確認できていないので主軸方位は不明であるが、北辺の方位はN-84°-Eである。 **規模** 東西の長さはなるべく中央に近い部分で計測して6.80m。南北の長さは最大で4.26mである。 **床面積** 残存部分を計測して20.62㎡。 **壁高** 23~30cm。 **覆土** A-A'セクションでは、東辺近くを除いて暗灰褐色土で埋没している。 **床面** 掘方は周辺部を除いてごく浅く、それを暗灰黄色土で埋め戻して床面とする。ほぼ平坦で全体に硬く締まっている。 **柱穴** 確認できなかった。 **竪・炉** 確認できなかったが、A-A'セクションでは中央付近に焼土・炭化物を

含む灰黄褐色土薄い堆積(3層)が見られ、この付近に竪があった可能性もある。なお、住居床面北西隅には焼土と炭化材(3本が等間隔に並んでいる)が径約1mの範囲に集中していたが、これは位置から考えて竪とは思えない。また、この部分以外に焼土・炭化材は確認できていないので、この住居が焼失家屋であったとは考えられず、この焼土・炭化材の性格は不明である。 **貯蔵穴** 確認できなかった。 **周溝** 北辺から東辺にかけてめぐっている。幅8~15cm、深さ4~11cmの明瞭な周溝である。 **掘方** 周辺部の幅1.0~1.4mの範囲がやや深い(深さ5~8cm)が、中央付近は1~3cm程度とごく浅い。全体に細かい凹凸が見られる。 **遺物** 掲載したのはいずれも土師器で、高杯1点、甕2点、壺1点である。その他小破片として、土師器杯・椀類10点、同高杯9点、同甕・壺類70点が出土している。 **時期** 出土遺物からは6世紀前半と考えられるが明確ではない。

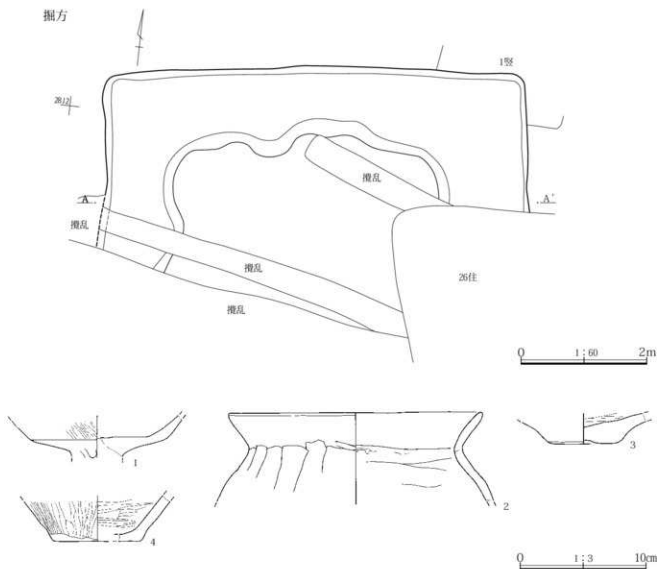


38号住居

1. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 軽石、ローム粒を含む。
2. 黒褐色土(2.5Y3/2) 軽石、ローム粒、炭化物を含む。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土、炭化物を含む。
4. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒を含む。固く締まっている。掘方。

0 1:60 2m

第79図 38号住居平面断面図



第80図 38号住居掘方平面図、出土遺物

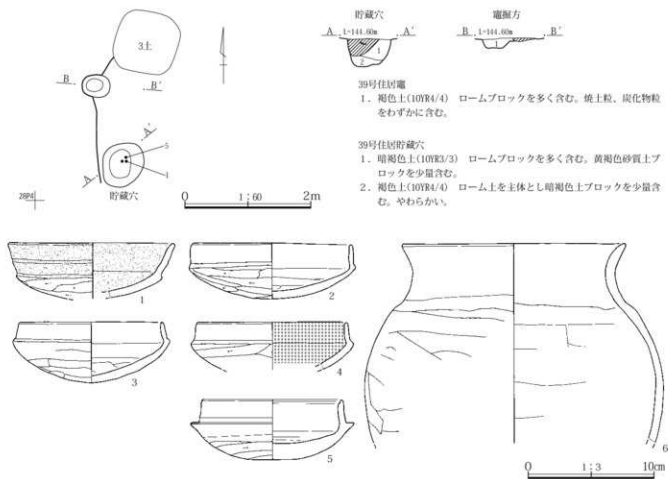
39号住居 (第81図、第32・33表、PL.24- 6~8, 60)

調査区北西隅近くにある。掘方の底部がごくわずかに残るもので、当初竪穴住居とは認識していなかったが、焼土が見られる部分を竈、遺物が出土する土坑(旧85号土坑)を貯蔵穴と考えて、竪穴住居と判断したものである。

位置 28区O4。 **重複遺構** 住居の範囲には3・66号土坑の他、86号土坑も重複する可能性がある。掘方埋土がほとんど残っていないので、直接の新旧関係は把握できなかった。 **形状** 不明。 **主軸方位** 不明確だが、わずかに残る壁の痕跡から東西方向だと思われる。 **規模** 不明。 **床面積** 不明。 **壁高・覆土・床面** 削平されているため不明。 **柱穴** 確認できなかった。 **竈** 埋土に焼土粒・炭化物を含む小土坑が竈の掘方の底部

であると考えた。長径44cm、短径35cmで、深さは14cmである。 **貯蔵穴** 竈と思われる小土坑の南にあり、ここが住居南西隅になると思われる。長径78cm、短径65cmの不整形で、深さは44cmである。 **周溝** 確認できなかった。 **掘方** 確認面が掘方底面にごく近い部分であると思われる。 **遺物** 残りが非常に悪いにも関わらず、貯蔵穴内と、わずかに残る掘方から比較的多くの遺物が出土している。掲載したのは土師器杯5点、同壺1点である。その他土師器杯・椀類が8点、同壺・壺類が59点出している。 **時期・所見** 残りがあまりに悪いが、貯蔵穴と思われる土坑の存在と竈と思われる焼土の存在から住居として復元したものである。時期は6世紀後半と思われる。

第4章 丑子遺跡の調査の成果



第81図 39号住居断面図、出土遺物

41号住居(第82・83図、第33表、PL.25-1.61)

調査区東部の南寄りにある。柱穴と思われるピットが4本と、貯蔵穴と思われる小土坑1基が確認されただけであるが、その土坑と周囲から弥生土器が出土することから、この付近に弥生時代の竪穴住居があったものと判断したものである。すなわち、削平によって床面が掘方底面まで削平され、柱穴と貯蔵穴だけが残されたものであり、その配置から、後述のような形状の住居を推定復元した。

位置 18区G・H14・15。 **重複遺構** なし。 **形状** 柱穴4本と、貯蔵穴と思われる小土坑のみであるが、第82図のような長方形の住居ではないかと思われる。この住居の形状は、柱穴P1-P4間の中点と、P2-P3間との中点を結んでそれを住居の中軸線とし、さらに2つの中点を結んだ線の中点を住居の中心点とし、その上で、中軸線と平行ないし直角の線で柱穴・貯蔵穴を囲み復元したものである。それぞれの辺の位置は、南西隅は貯蔵穴が収まるようにし、それを基準として、中軸線、

中心点で折り返して4辺の位置を決定した。 **主軸方位** 上記のように推定した主軸方位はN-22°-E。 **規模** 上記のように推定すると、長軸7.20m、短軸5.60mとなる。 **床面積** 上記の規模から単純に計算すると、40.32㎡と復元できる。 **壁高・覆土・床面** 削平されて存在しない。 **柱穴** やや歪んだ配置だが、P1~4の4本が主柱穴と判断した。それぞれの規模は以下の通り(長径×短径×深さ、cm)。

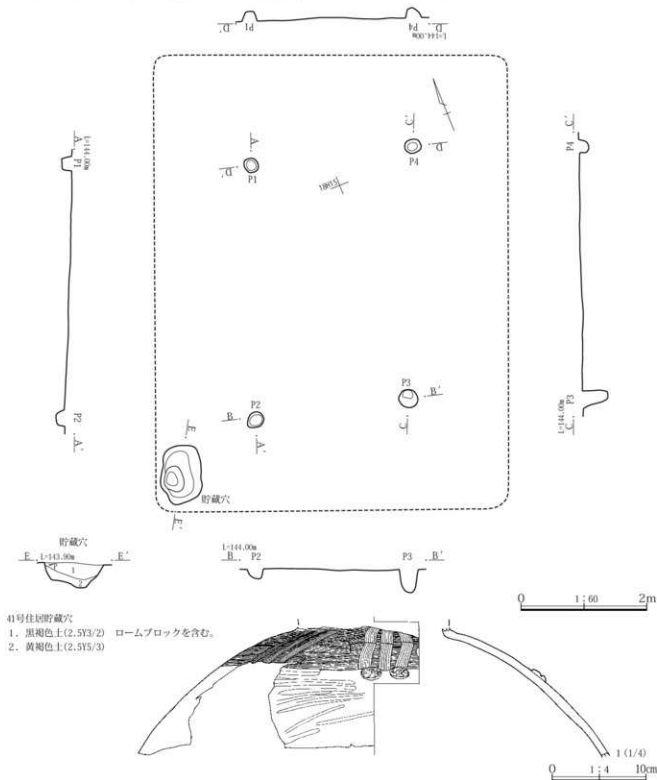
P 1 24×21×16 P 2 28×24×15

P 3 30×28×40 P 4 26×22×16

炉 確認できなかった。 **貯蔵穴** 住居南西隅と推定される位置にある。長さ95cm、幅64cmのやや歪んだ長方形で、深さは41cmである。内部から1・2・4・5の土器がバラバラになった状態で出土した。埋没土には特記すべきような点はなく、自然埋没と考えられる。 **周溝・掘方** 削平されて存在しない。 **遺物** 本住居に関わる遺物は少なく、掲載した遺物は貯蔵穴から出土した4点と、周辺から出土した1点の、計5点の土器片である。

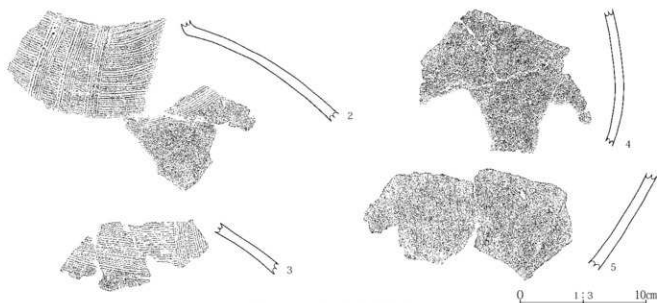
これらは文様・胎土などの特徴から、同一個体と思われる。丸い胴部をもつ壺であり、肩部に横位の櫛描を巡らしたのち、縦位の櫛描文を8ヶ所に施し、その下端には刺突を充填した円形貼付を2個ずつ配するらしい。他に2点の小破片が出土している。**時期・所見** きわめて残りが悪いが、出土した遺物から、弥生時代後期の

樽式の住居と思われる。4本の柱穴と、貯蔵穴と思われる小土坑1基のみからの復元であるが、上述のような長方形の住居と復元できる。13ページで述べたように隣接地では縄文時代前期の住居も見つかっているが、本調査区ではこの住居が最古であり、このあと古墳時代前期にかけての住居が続いて営まれている。



41号住居貯蔵穴
 1. 黒褐色土(2.5Y3/2) ロームブロックを含む。
 2. 黄褐色土(2.5Y5/3)

第82図 41号住居平面図、出土遺物(1)



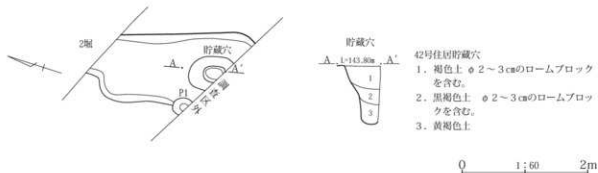
第83図 41号住居出土遺物(2)

42号住居(第84図)

調査区南西辺中央にある。調査区内にわずかにかかっていただけだったので、この部分は調査区を拡張して調査した。その結果、住居の北東辺と思われる部分を調査できたが、この住居は床面まで削平され、掘り部分のみが残っていただけであった。南側隣接地では同時期に前橋市教育委員会によって圃場整備事業に伴う発掘調査(上細井北遺跡群No 1)が行われており、この住居はそこで6区H 5号住居と呼ばれて調査された住居の北側延長部にあたると思われる(前橋市埋蔵文化財発掘調査団『上細井北遺跡群No 1』2009)。

位置 18区K 13。 **重複遺構** 2号堀が北部に重複している。本住居が古いことは平面で確認した。 **形状** ごく一部の調査であるが、前橋市教育委員会の調査範囲を合わせて、方形であることが判明している。調査できた直線的な壁は北東辺であり、調査区境にかかる部分が屈曲するように見えている部分が住居東隅になる。 **主軸**

方位 調査区に掛かっている北東壁の方位は、 $N-19^{\circ}-W$ 。 **規模** 不明。 **床面積** 不明。 **壁高・覆土・床面** 削平のため残っていない。 **柱穴** 調査区壁に掛かるピット(P 1)が柱穴である可能性が高い。大きさは調査できた部分では最大径32cm、深さ59cmである。 **竈** 確認できなかった。 **貯蔵穴** 前述のように住居東隅と思われる部分にある。調査区内の形状から見て、北西-南東の方向にやや長い楕円形と考えられる。長径は70cm以上であると推定され、短径は調査区内では54cmである。深さは92cmと深い。 **周溝** 確認できなかった。 **掘方** 壁際を0.6~1.1mの幅で細長く掘り下げているが、その他の場所は削平のため不明である。 **遺物** 出土遺物はない。 **時期** 調査区内では出土遺物がなく、時期不明であるが、前橋市教育委員会の調査範囲では小破片ながら出土遺物があり、報告書(前掲)では「6世紀代から7世紀代と考えられる」とされている。



第84図 42号住居平面図

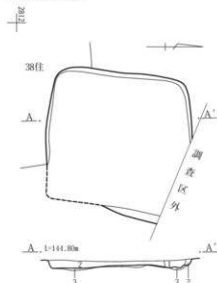
第3節 竪穴状遺構

竪穴状遺構は合計2基ある。いずれも調査区北辺近くの中央付近にあるが、住居とすると小さすぎ、竈や炉、柱穴や周溝などの施設がなく、遺物の出土もごく少ないものである。そのため、これらは通常の住居として使用されていたものとは思えないので、「竪穴状遺構」として報告する。

1号竪穴状遺構(第85図、PL.25-2・3)

調査区北東辺のほぼ中央にあり、北東隅が調査区外となつて完掘できていない。南東部は削平のために壁が破壊されている。調査当時は30号住居として調査したが、住居とすると非常に小型であり、また、床面は非常に硬く締まっているものの、竈や炉、柱穴や壁溝等の施設がなく、さらに遺物の出土もほとんどない。そのため、住居ではない可能性が高いものと判断し、「1号竪穴状遺構」という名称に変更したものである。

1号竪穴状遺構



1号竪穴状遺構

1. 黒色土(10YR2/1) As-Cを含む。
2. 褐色土(10YR4/4) As-Cを含む。
3. 黒褐色土(10YR3/2) As-Cを含む。ごく薄い。非常に硬く締まっている。掘方。

2号竪穴状遺構

1. 黒褐色土(10YR3/2) As-Cを含む。
2. 褐色土(10YR4/4) ロームブロックを含む。
3. ロームブロックと暗灰黄色土(2.5YR5/2)の混合土。表面は硬く締まっている。掘方。

位置 28区H2。 **重複遺構** 38号住居と重複し、本遺構が新しい。 **形状** やや歪んだ方形。 **主軸方位** 竈・炉がないので主軸方位を決定できないが、床面を計測すると南北方向がやや長いので、こちらを主軸とし、西辺の方位を計測するとN-6°-Eである。 **規模** 中央付近で計測して2.32×2.22m。 **床面積** 調査区外となる部分を除くと4.33㎡であるが、北辺、東辺をそのまま延長して全体を復元すると、推定4.68㎡である。 **壁高** 0~14cm。 **埋没土** As-Cを含む褐色土で埋没している。A-A'セクションに見える黒色土(1層)は新しい時期の別の遺構か、あるいは掘乱である。 **床面** 非常に硬く締まっている。掘方はほとんどなく、床面にはごく薄く黒褐色土が貼り付くように堆積していた。全体に中央が高く、周囲に向かってわずかに低くなっている。西壁際中央にはわずかに高くなった部分があり、そこだけ地山のロームが表面に現れ、緩やかに盛り上がっていた。 **掘方** 前述のようにほとんどなく、黒褐色土が薄く堆積しているのみである。 **遺物** 土師器製の小破片1点が出土したのみであり、掲載できる遺物はない。

2号竪穴状遺構



掘方



第85図 1号竪穴状遺構(左)・2号竪穴状遺構(右)平面図

時期 出土遺物がほとんどなく確定できないが、6世紀前半の38号住居よりも新しいので、それ以後の時期のものである。

2号竪穴状遺構(第85図、Pl.25-4・5)

調査区北東辺近くの中央やや東寄りにある。調査当時は40号住居として調査したが、1号竪穴状遺構と同様な理由で、「2号竪穴状遺構」に名称を変更して報告する。

位置 18区E・F20、28区E・F1。**重複遺構** なし。

形状 やや歪んだ正方形。**主軸方位** 南北方向がやや長いので、こちらを主軸とし、北辺に直角の方位を計測すると、N-22°-W。**規模** 中央付近で計測して、2.36×2.26m。**床面積** 4.47㎡。**壁高** 10~12cm。

埋没土 ロームブロックを含む褐色土とAs-Cを含む黒褐色土で埋没している。**床面** 掘方をロームブロックと暗灰黄色土の混土で埋め戻して床面とする。中央が緩やかに高まっているなど、平坦ではないが、表面は硬く締まっている。**掘方** 床面から掘方底面までは、全体に1~10cmほどある。東半部が比較的深く掘られる傾向にある。**遺物** 出土した遺物は少なく、掲載できるものはない。小破片として土師器杯・椀類2点、同壘・壺類14点が出土している。**時期** 出土遺物がほとんどなく、重複遺構もないので不明である。明らかに中世以降の遺物は出土していないことから、古代以前のものであることは言えると思われる。

第4節 土坑

土坑は合計111基調査した、ほぼ全域に分布しているが、東半部には少なく、西半部に多い。特に中世の館を囲んでいると思われる堀の内側に多く、一部では重複も激しいが、その外側となる部分には10基しかなく対照的である。この分布傾向は竪穴住居の傾向と逆であり、これは土坑が館に伴う可能性が強いことを示唆するものと思われる。

土坑に確実に伴うと思われる遺物は少ないので、時期を特定できるものはほとんどない。遺物が出土した土坑をまとめると、何らかの遺物を出土した土坑は合計61基、そのうち最も新しい時期の遺物をみると、近現代5基、近世13基、中世19基、それ以前24基となる。近現代

の遺物は、遺構面が浅い部分も多く、混入の可能性が考えられるので、それが出ているからといって近現代の土坑と断定することは難しく、慎重に扱う必要があると思われる。特に6号土坑を除いて近現代の遺物は1点のみの出土であり、これらは混入である可能性が高いと考えることができる。逆に6号土坑は近現代遺物が4点と多いので、それ以外の遺物も多いものの、近現代の遺構である可能性は捨てきれないと思われる。以上のような理由から、1点だけ出土している近現代の遺物は混入品として除外し、その上で再度最も新しい遺物をみると、近現代1基、近世16基、中世19基、それ以前25基となる。もちろん、先述したように、確実に土坑に伴う遺物が把握できる土坑は少ないので、これは所属時期の大体の傾向を示すだけであるが、最も新しい時期の遺物として中近世のものが出土する土坑が35基あるのは注目すべきであろう。さらに、それ以前の遺物が最も新しい時期である土坑25基や、遺物を全く出土しない50基についても、中近世の遺物がたまたま伴わないだけであるという可能性はあると思われる。なぜなら、この遺跡では平安時代以前の竪穴住居が数多く調査され、全体としてその時期の土器が多く出土するが、それに対して中近世の遺物は数が圧倒的に少ないからである。その事実からみれば、これらの土坑も中近世のものである可能性を考慮すべきだし、また、前述のように館の内部と考えられる場所に多く見られることから見れば、その可能性は低くはないと思われるのである。以上、はなはだ貧弱な理由であり、断定はできないが、111基のうちのかなり多くの数の土坑が中近世のものであると思われる。

土坑の平面形には、長方形、円形、楕円形、不整形など、各種のものがあがるが、方形のものが多く、また、遺構の全体図(付図1)に明らかかなように、その主軸方向を見ると、堀の主軸方向(1号堀とした部分では、N-69°-WかN-27°-Eである。139ページ参照)と平行あるいは直交する方向に近いものが多く存在する。この方向は竪穴住居の方向とは大きく異なっており、この点も、多くの土坑が館に伴うのではないかと推定する根拠の一つになっている。

土坑の全体的な傾向は以上の通りである。以下、特徴的な土坑についてのみ、個別に記述することにする。そ

の他の土坑の基礎的なデータは第6・7表にまとめた通りである。

56号土坑(第95・96図、第34表、PL.31-1,62)

調査区の南西隅付近、18区Q・R18・19グリッドにある。長径3.56m、短径3.01mのやや方形に近い楕円形の土坑で、深さ0.5～0.6mの土坑の中に、さらに長径1.28m、短径1.12m、深さ0.35～0.4mの小さな土坑が掘られたような形状をしている。遺物が比較的多く出土しており、そのうち土師器杯1点、同裏1点、須恵器杯3点、同瓶1点を掲載した。他に小破片として土師器杯12点、同高杯2点、同裏・壺類34点、同瓶2点、須恵器杯3点、同裏・壺類1点が出土している。これらの遺物から、本土坑の時期は8世紀後半と思われる。

遺物や土層には特別な点はないので、それから本土坑の用途を特定するのは困難であるが、その形態は「氷室」と推定されているものに似ているため、その可能性を考慮すべきであろう(中山晋「古代日本の氷室の実態」『立正史学』79 1996)。

89号土坑(第103図、第35表、PL.33-3～5,63)

調査区の北西隅付近、28区Q5・6グリッドにある。81号土坑と重複し、本遺構が古い。中軸線で計測すると全体の長さは4.23mであるが、長さ2.60～2.80m、幅2.05～2.18mのやや歪んだ長方形の土坑の南側に、長さ1.28～1.54m、幅0.98～1.10mの長方形の柄が付くような形態をしている。北側の部分は深さ1.40mで、底面はほぼ平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。柄の部分は南にいくに従って高くなり、南東端の部分では北側底面より0.40m高くなっている。主軸方位はN-26°-Wであり、堀や周囲の土坑の方向とは大きく異なっている。埋土は細かく分けることができ、不自然な埋没状態なので、人為的に埋められたものと思われる。遺物は比較的多く、掲載したの中世の国産焼締陶器裏1点(13世紀第2四半期か)、在地系土器内耳鍋2点(15世紀後半～16世紀初頭か)、鉄製品の鎌1点である。その他小破片として土師器杯・椀類6点、同高杯2点、同裏・壺類8点、須恵器杯・椀類1点、同裏・壺類1点、埴輪1点、近世の国産焼締陶器3点、近現代の土器類1点が出土しているが、前述のように近現代の遺物は混入であ

る可能性が高いので、この土坑の埋没時期は近世と考えられる。

やや特徴的な形態であるので、特別な用途をもった土坑と思われる。遺物・土層には用途を推定できるようなものはないが、北側の部分に何らかの方法で天井を作り、室(ムロ)のような用途に用いたものではないかと推定したい。その場合、南側の細い部分を入り口として用いたものと考えることができよう。ただし、後世の削平を考えたとしても、天井部を掘り残して作れるほど深い遺構ではないので、天井部を作ったとしても、板などを渡したか、あるいは竪穴住居のように屋根を掛けたのではないだろうか。残念ながら、調査ではそのような痕跡は発見できなかったため、この点については推測の域を出ない。

96号土坑(第105図、第36表、PL.34-1～5,63)

調査区の西部、28区N・O2・3グリッドにある。特異な形態の土坑である。確認面では、掘乱が重複しているので推定ではあるものの、長径約2.4m、短径約2.0mの不整な楕円形であるが、それを掘り下げたところ北側に大きく広がっていることが判明した。そのまま調査を続けるのは危険であったため、トレンチを中央部に設定して掘り下げたところ、平面図・断面図にみるように、ロームを掘り残して天井部とした、地下室のような形態であることが判明した。地下部分の大きさは、最も広いところで計測して、長さ約3.8m、幅約2.0mの長楕円形で、深さは確認面から2.66mである。しかし、地下室のような形態のものとして作られたとしても、壁や底面は整ったものではないので、未完成のまま放棄された可能性が高いと考えられる。また、断面図を見ると分かるように、北側の先端が細く狭くなっていて、この部分は非常に不自然である。残念ながらそのような形態となった原因は不明であるが、埋没の過程で天井部が崩れるなどして割れ目が生じたのかもかもしれない。埋没土を見ると、13、12層で大きく埋まったのち、11～3層によって入り口の方向から埋まっている。その堆積状況から見ると、比較的短時間のうちに、人為的に埋められたと考えるのが妥当であろう。遺物は少なく、掲載したのは須恵器短頸壺の蓋と推定されるもの1点、中世在地系土器の片口鉢2点、同内耳鍋か焙烙1点、同裏2点、敲き痕

第4章 瓦子遺跡の調査の成果

のある石製品1点である。その他小破片としては土師器の裏が1点出土しているだけである。出土遺物に近世のものはないので中世の遺構と考えることができ、堀の内側にあることから、館に伴う遺構である可能性が高いと思われるが、未完成であると考えられることもあり、その用途は不明である。

102号土坑(第107図、PL.34-8,35-1)

調査区南東辺近くの中央付近、18区D4グリッドにある。長さ1.05m、幅0.61m、深さ0.37mの長方形の土坑で、中に4個の角礫が並べたように入っていた。底面からはやや浮いた高さにあるので、埋める過程で石を入れたようである。遺物が出土しないので時期は不明だが、堀の内側ではないので、古墳～古代の集落に伴うものである可能性が高い。その性格を特定することはできないが、石を人為的に並べていると考えられることから、特別な用途をもった土坑であると思われる。

114号土坑(第108・109図、第36・37表、PL.27-14,63)

調査区中央南、18区J14・15グリッドにある。長さ1.92m、幅1.13m、深さ0.37mの長方形の土坑である。小さな土坑であるにもかかわらず、ほぼ完形の中世在地系土器皿3点、銅銭4点が出土しているので、あるいは墓ではないかと考えられる。ただし、人骨は全く確認できなかったため、断定はできない。また、焼土、炭化物も見られなかった。出土遺物のうち、皿は、1は14世紀後半、2・3は15世紀前半のものと考えられ、また、銅銭のうち最も新しいのは1368年初鑄の「洪武通寶」なので、本遺構の年代は15世紀前半と考えられる。また、主軸方位が堀の方向とほぼ一致するため、館に伴う遺構である可能性が高く、142ページで述べているように堀の存続年代が15～16世紀初頭と考えられるので、その中でも比較的古い遺構であることになる。位置は館の南隅となり、この部分に墓が営まれることがあるのかという疑問も含めて、今後さらに検討が必要な遺構である。

この土坑の西側には、ほぼ同形同大で、やはり主軸方位が堀と似ている118号土坑がある。この土坑からも中世在地系土器の内耳鍋の小破片が出土しているので、同時期のものである可能性が高いが、中世の遺物はそれのみであり、副葬品のようなものは出土していない。ただ

し、底面に炭化物の薄い層が存在するのが注目される。これのみで墓と断定することはできないが、114号土坑と併せて考えるべき遺構である。

120号土坑(第110図、第37表、PL.36-5,63)

調査区中央、18区K19グリッドにある。平面観察により27号住居よりも新しく、2号堀よりも古いと判断して調査したが、整理作業によって2号堀よりも新しい遺物が出土していることが判明したため、重複関係を誤認して調査した可能性が高く、2号堀よりも新しいものであると思われる。確認面における大きさは、残存部分で計測して、長径2.37m、短径1.67mであるが、本来は円形であったと思われる。深さは2.01mと深く、その形態から、井戸である可能性が高い。掲載した遺物は中世在地系土器皿1点、同内耳鍋2点であり、その他小破片として土師器裏・壺類2点、須恵器杯・椀類1点、近世在地系土器焙烙・鍋類2点、時期不詳の土器類1点がある。近世の遺物が出土しているので、埋没時期は近世以降と考えられる。

第6表 丸子遺跡土坑一覧表(1)

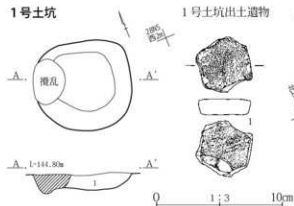
番号	所在グリッド	主軸方位	大きさ(m)		備考 ()内は小破片のため未記載の遺物数
			長辺×短辺×深さ		
1	28IKN 4・5	N-69°W	1.05×0.97×0.17		中世円盤状製品1(土師甕・甕3、須恵甕・甕1、近世四角陶輪1、同在地系帛格・甕1)
2	28IKP 4	N-67°W	2.06×1.26×0.21		(土師杯・椀5)
3	28IKO 4	N-76°W	1.01×0.99×0.35		39住・66土と重複。新旧不明。
4	28IKN 3	N-83°E	0.94×0.82×0.79		(土師杯・椀4、同高杯2、同甕・甕7)
5	28IKP 2	N-16°E	1.06×0.92×0.17		
6	28IKN・O2	N-33°E	0.75×0.55×0.33		96土より新。(土師高杯5、同甕・甕11、須恵甕・甕1、近世四角陶輪1、近現代陶磁器2、同土器類2)
7	28IKN・O1	N-4°E	0.563×0.50×0.25		
8	28IKN 1・2	N-28°W	0.46×0.42×0.12		
9	28IKO 1	N-9°E	0.92×0.80×0.15		
10	28IKR 3	N-78°W	1.40×1.06×0.13		
11	28IKL 3・4	N-62°W	3.58×1.16×0.36		7井より新。
12	28IKL 2	N-75°W	1.40×1.15×0.26		(土師甕・甕3、近現代瓦1)
13	28IKP 5	N-75°W	2.58×0.96×0.35		22土より古。(土師杯・椀2、同高杯1、同甕・甕17、近世四角陶輪1、同在地系帛格・甕1)
14	28IKM 1	N-74°W	0.97×0.59×0.16		92土より新。
15	28IKL 1	N-81°W	1.18×0.78×0.30		中世内耳鍋2
16	1号井戸に変更。				
17	28IKM 3・4	N-72°W	1.80×1.19×0.42		中世片口鉢2(土師甕・甕5)
18	28IKN・N1	N-86°W	2.65×2.11×0.45		古瀬戸平椀1、中世在地系内耳鍋か1(土師杯・椀7、同甕・甕14、須恵甕・甕3、近世在地系帛格・甕3)
19	28IKQ・R1・2	N-66°W	1.73×1.07×0.29		27・31土と重複。新旧不明。
20	28IKK 1	N-20°E	2.801×2.56×0.48		2層より古。
21	28IKO・P4・5	N-69°W	5.23×2.45×0.58		33住・23・82・83土より新。土師1(土師杯・椀5、同甕・甕1、須恵甕・甕1)
22	28IKO・P5・6	N-71°W	6.48×1.861×0.39		13・25・82土より新。中世常滑甕1(土師杯・椀15、同甕・甕35、須恵甕・椀2、近世在地系帛格・甕1)
23	28IKO・P5	N-74°W	3.951×1.341×0.35		21・22土より古。82土とは新旧不明。
24	18IKM・N20	N-89°E	1.88×0.86×0.12		(土師杯・椀2、須恵甕・甕1)
25	28IKR 2	N-20°E	1.40×1.11×0.41		27土より新。(土師甕・甕12、近世在地系帛格・甕1、近現代土器類1)
26	28IKL・M3	N-70°W	1.87×1.71×0.54		(土師甕・甕6、近世在地系帛格・甕2)
27	28IKR 2	N-67°E	2.61×2.12×0.20		25・31土より古。19土とは新旧不明。土師杯1、同甕1(土師杯・椀2、同甕・甕9)
28	2号井戸に変更。				
29	18IKN・O20	N-84°E	2.11×1.02×0.42		30土と重複。新旧不明。
30	18IKN・O20、 28IKN・O1	N-9°W	1.77×1.06×0.16		29土と重複。新旧不明。(土師甕・甕1、須恵甕・甕1)
31	28IKR 2	N-60°E	1.32×1.07×0.19		27土より新。19土とは新旧不明。
32	18IKN 18	N-65°W	2.10×2.06×0.29		
33	28IKM・N2・3	N-7°E	3.43×1.70×0.80		78・90土より新。54土は新旧不明。土師甕4、中世在地系内耳鍋か1、同内耳鍋か帛格1(土師杯・椀25、同高杯8、同甕・甕76、須恵甕・椀2、同甕・甕1、近世四角陶輪1、同在地系帛格・甕3)
34	18IKP 19	N-3°W	1.89×1.66×0.29		4溝より新。龍泉須奈系陶罐か1(土師杯・椀1、同甕・甕3)
35	18IKQ 18・19	N-21°E	2.82×2.00×0.07		
36	18IKP 19	N-73°W	1.39×0.92×0.09		4溝より新。
37	18IKP・Q18・19	N-73°W	1.05×0.96×0.10		4溝より新。
38	18IKP・Q18	N-72°W	0.94×0.82×0.06		4溝より新。中世在地系皿1(土師甕・甕1)
39	18IKQ 18	N-14°E	1.10×0.72×0.33		40土より新。
40	18IKQ 18	N-19°E	1.62×1.261×0.11		39土より古。4溝より新。
41	18IKQ 17・18	N-79°W	0.86×0.78×0.08		4溝より新。
42	18IKM 18	N-40°E	1.11×0.98×0.41		(須恵甕・甕1、中世在地系片口鉢・内耳鍋1)
43	18IKM・N18	N-85°W	1.67×1.26×0.24		
44	18IKM 18	N-32°E	1.35×1.14×0.46		(中世在地系片口鉢・内耳鍋1)
45	3号井戸に変更。				
46	18IKQ・R16	N-64°W	1.69×1.621×0.37		59土より新。
47	4号井戸に変更。				
48	28IKO 1	N-18°E	1.81×0.93×0.41		
49	18IKN 17・18	N-64°W	3.29×2.46×0.49		
50	18IKP 20	N-19°E	2.37×1.67×0.39		4溝と重複。新旧不明。
51	18IKM 19	N-75°W	2.82×2.28×0.21		52・53土より新。2井より古。
52	18IKM 19・20	N-19°E	1.271×1.68×0.19		51土より古。53土とは新旧不明。
53	18IKL・M19・20	N-72°W	1.901×1.84×0.14		51土より古。25住・68土とは新旧不明。(土師甕・甕1)
54	28IKM・N3	N-65°W	4.36×3.25×0.22		78土より新。33土とは新旧不明。(土師甕・甕13、須恵甕・椀1、同甕・甕1)
55	18IKM 16・17	N-19°E	2.10×1.44×0.25		(土師杯・椀1、同甕・甕1、近世在地系帛格・甕1)
56	18IKQ・R18・19	N-84°E	3.56×3.01×0.96		土師杯1、同甕1、須恵甕3、同甕1(土師杯・椀12、同高杯2、同甕・甕36、須恵甕・椀3、同甕・甕1)
57	18IKO 16	N-14°E	1.85×1.14×0.47		2層より古。(土師甕・甕3)
58	18IKM 16	N-13°E	1.191×1.21×0.46		21住より新。2層より古。
59	18IKQ・R16・17	N-59°W	4.951×1.69×0.30		5井より新。46土より古。61土とは新旧不明。
60	5号井戸に変更。				
61	18IKQ・R17	N-89°W	2.321×1.50×0.40		59土と重複。新旧不明。
62	18IKO 16	N-72°W	1.60×1.19×0.50		(中世在地系片口鉢・内耳鍋1)
63	18IKQ 20	N-6°E	2.36×1.30×0.10		
64	18IKP 18	N-75°W	0.98×0.96×0.06		
65	18IKR 17	N-17°E	1.85×1.15×0.36		(土師甕・甕3、灰輪1、近世在地系帛格・甕4)

第4章 瓦子遺跡の調査の成果

第7表 瓦子遺跡土坑一覧表(2)

番号	所在グリッド	主軸方位	大きさ(m)		備考 ()内は小規模のため未記載の遺物数
			長辺×短辺×深さ		
66	28KO 4・5	N-21°E	5.01×1.97×0.48	22土より古。古瀬戸地類1, 中世常滑陶器区8費1, 中世在地系片1跡1(土師杯・2, 同費・遺29)	
67	28KL 1・2	N-70°W	1.74×1.42×0.59	(土師費・遺1, 近世在地系陪・跡1)	
68	18KL・M19	N-8°W	2.25×1.93×0.65	25住より新。53土より古。中世在地系皿1(土師費・遺6)	
69	18KL 18・19	N-15°E	1.56×1.60×0.41	2堀より古。	
70	18KP 17・18	N-72°W	1.46×1.38×0.38	6月より新。	
71	6号井戸に変更。				
72	18KM16・17	N-16°E	1.09×0.67×0.51	73土より新。	
73	18KM16・17	N-14°E	1.51×1.24×0.31	72土より古。古瀬戸縁輪小皿1(土師費・遺1)	
74	18KO・P20, 28KO・P1	N-31°W	3.21×2.83×0.96	75土より古。土師杯2・同皿1, 同台付費1, 同費1(土師杯・椀4, 同高杯2, 同費・遺27, 須恵杯・椀2)	
75	18KO20, 28KO 1	N-80°W	0.90×1.11×0.53	74土より新。中世常滑陶器区1	
76	18KP 17・18	N-78°W	1.02×0.79×0.40		
77	18KP・Q17	N-14°E	1.77×1.23×0.32		
78	28KM 2・3	N-84°E	2.45×1.73×0.42	33・54土より古。90土より新。須恵皿1, 土師費2(土師費・遺4)	
79	28P 1	N-86°E	0.60×0.56×0.48	(土師杯・椀5, 同費・遺1)	
80	28P 1・J 2	N-59°W	3.58×2.53×0.27	3溝より新。板碁1, 石製品1	
81	28QC・R 5	N-70°W	4.35×2.67×0.64	89土より新。(土師杯・椀5, 同費・遺8, 須恵費・遺1)	
82	28PC・Q 5	N-71°W	4.67×3.63×0.35	33付・83土より新。22土より古。23土とは新計不明。(土師費・遺3)	
83	28PC・Q 4・5	N-77°W	3.26×0.95×0.30	33住より新。22・82土より古。	
84	18KR 20	N-17°E	2.45×1.03×0.45	32住より新。(土師高杯1, 同費・遺2)	
85	30号井戸的竪穴に変更。				
86	28KN・O 4	N-67°W	2.96×1.12×0.48	95土より新。87・88土とは新計不明。	
87	28KN 4	N-37°E	2.06×1.16×0.24	88・95土より新。86土とは新計不明。中世在地系内耳竪か1(土師杯・椀4, 同費・遺4, 須恵杯・椀1, 近世在地系陪・跡2)	
88	28KN 4	N-65°W	3.67×2.89×0.12	95土より新。87土より古。86土とは新計不明。(土師杯・椀2, 同費・遺5, 須恵費・遺1, 時期不詳土器類1)	
89	28NQ 5・6	N-26°W	4.23×2.22×1.40	81土より古。中世同地系陪陶器区1, 在地系内耳竪2・跡1(土師杯・椀6, 同高杯2, 同費・遺8, 須恵杯・椀1, 同費・遺1, 碁輪1, 近世同地系跡3, 近現代土器類1)	
90	28KM・N 2	N-11°E	0.97×0.95×0.74	33・78土より古。中世常滑陶器区8費1(土師費・遺2, 須恵費・遺1, 時期不詳土器類3)	
91	7号井戸に変更。				
92	28KL・M 1	N-17°E	1.83×1.18×0.16	93土より新。14土より古。(土師費・遺2)	
93	28KL 1	N-71°W	2.48×2.03×0.16	92土よりも古い。中世常滑陶器区1跡1, 宋銭1(時期不詳土器類1)	
94	28KM・N 2	N-79°W	3.55×1.81×0.36	土師杯1, 中世在地系内耳竪か1, 同片1跡か1(土師杯・椀4, 同高杯1, 同費・遺13, 近世在地系陪・跡1, 同在地系皿1)	
95	28KN 4	N-65°W	3.05×2.04×0.66	86・87・88土・4月より古。	
96	28KN・O 2・3	N-22°E	3.80×1.95×0.46	6土より古。須恵短須恵蓋か1, 中世在地系片1跡2, 同内耳竪か陪1, 同費2, 石製品1(土師費・遺1)	
97	18KM20, 28KM 1	N-22°E	3.80×1.95×0.46	99土より新。中世在地系皿1(土師費・遺2, 時期不詳土器類1)	
98	28KN・O 1	N-69°W	2.42×1.09×0.26		
99	18KM20, 28KM・N 1	N-67°W	3.08×1.60×0.31	97土より古。100土より新。11・12・16・18・19Pとは新計不明。	
100	18KM・N20, 28KM・N 1	N-21°E	2.03×0.87×0.09	99土より古。13・16Pとは新計不明。	
101	18KC 16	N-63°W	1.09×1.00×0.10	5住・103土より新。(土師費・遺2)	
102	18KD 14	N-17°E	1.05×0.61×0.37		
103	18KB・C 16	N-60°E	1.61×1.33×0.70	7住より新。101土より古。(土師杯・椀2, 同費・遺6)	
104	18KH・I 13	N-12°E	2.25×2.12×0.15	土師杯1(土師杯・椀6, 同費・遺7, 須恵杯・椀1)	
105	18KG 12	N-14°E	2.00×1.55×0.18	17住より新。	
106	18KK 17	N-22°E	1.66×1.26×0.54	23住より新。	
107	18KC 19	N-68°W	2.99×0.69×0.21	8住より新。	
108	18KK 20	N-10°E	1.15×0.74×0.39	23住・109土より新。	
109	18KJ・K 20	N-12°E	1.66×1.39×0.70	23住・110土より新。108土より古。(土師杯・椀1, 同費・遺6, 近世在地系陪・跡1, 同在地系皿1, 近現代陶器類1)	
110	18KJ・K 20	N-71°W	1.28×0.73×0.60	23住より新。109土より古。(土師杯・椀1, 同費・遺5, 時期不詳土器類1)	
111	18KJ 19	N-5°E	1.97×1.12×0.16	27住より新。2堀より古。	
112	8号井戸に変更。				
113	18KG 13	N-42°E	1.26×1.07×0.58	116土より新。	
114	18KJ 14・15	N-33°E	1.92×1.13×0.37	中世在地系皿3, 宋銭4(土師費・遺1)	
115	18KE 19	N-36°E	1.59×1.11×0.56	(土師杯・椀5, 同費・遺4)	
116	18KF・G 13・14	N-50°W	2.99×2.66×0.97	113より古。117土とは新計不明。中世在地系内耳竪1, 宋銭1, 碁石1(土師杯・椀2, 同高杯7, 同費・遺25, 須恵費・遺1, 近世在地系皿1, 時期不詳土器類2)	
117	18KG 13	N-44°E	1.39×1.24×0.75	116土と重複。新計不明。中世在地系内耳竪1	
118	18KL 15	N-68°W	2.03×1.20×0.35	中世在地系内耳竪1(土師費・遺4)	
119	9号井戸に変更。				
120	18KK 19	N-33°E	2.37×1.67×2.01	27住より新。2堀より新。中世在地系皿1, 同内耳竪2(土師費・遺2, 須恵杯・椀1, 近世在地系陪・跡2, 時期不詳土器類1)	
121	10号井戸に変更。				
122	11号井戸に変更。				
123	12号井戸に変更。				
124	18KJ 20	N-64°E	1.27×1.03×0.75	(土師杯・椀1, 同費・遺2)	

1号土坑



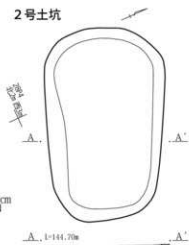
1号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロックを多く含む。

1号土坑出土遺物



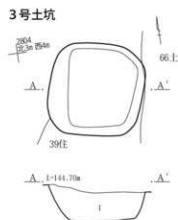
2号土坑



2号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロックを多く含む。やわらかい。

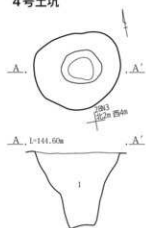
3号土坑



3号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを多く含む。

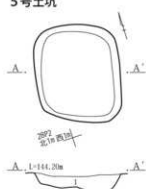
4号土坑



4号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックをやや多く含む。白色軽石を少量含む。

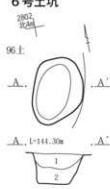
5号土坑



5号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを多く含む。

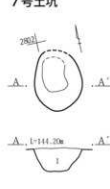
6号土坑



6号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを少量含む。
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ロームブロックを非常に多く含む。礫を少量含む。

7号土坑



7号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックをやや多く含む。

8号土坑



8号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックをやや多く含む。

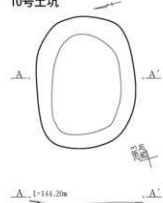
9号土坑



9号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックをやや多く含む。白色軽石を少量含む。

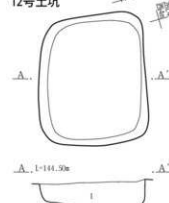
10号土坑



10号土坑

1. 褐色土(10YR4/4) ローム粒を多く含む。やわらかい。

12号土坑

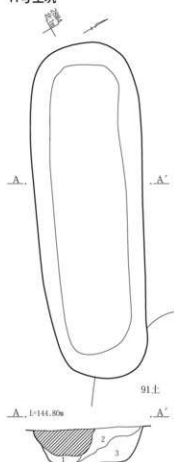


12号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを多く含む。

第86図 1～10・12号土坑平面断面図、1号土坑出土遺物

11号土坑



11号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロックをやや多く含む。やわらかい。
2. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを含む。やわらかい。
3. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを多く含む。やわらかい。

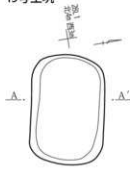
14号土坑



14号土坑

1. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ロームブロック、白色軽石をやや多く含む。

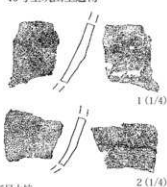
15号土坑



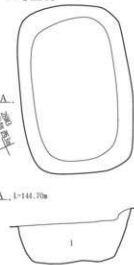
15号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックをやや多く含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2) ロームブロックをわずかに含む。

15号土坑出土遺物



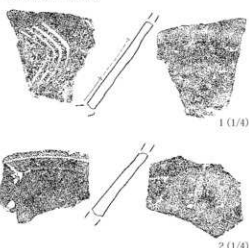
17号土坑



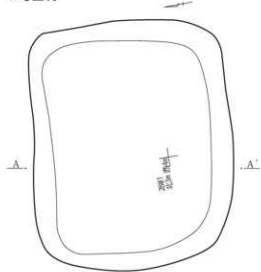
17号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロックを多く含む。やわらかい。

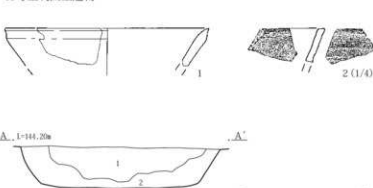
17号土坑出土遺物



18号土坑



18号土坑出土遺物



18号土坑

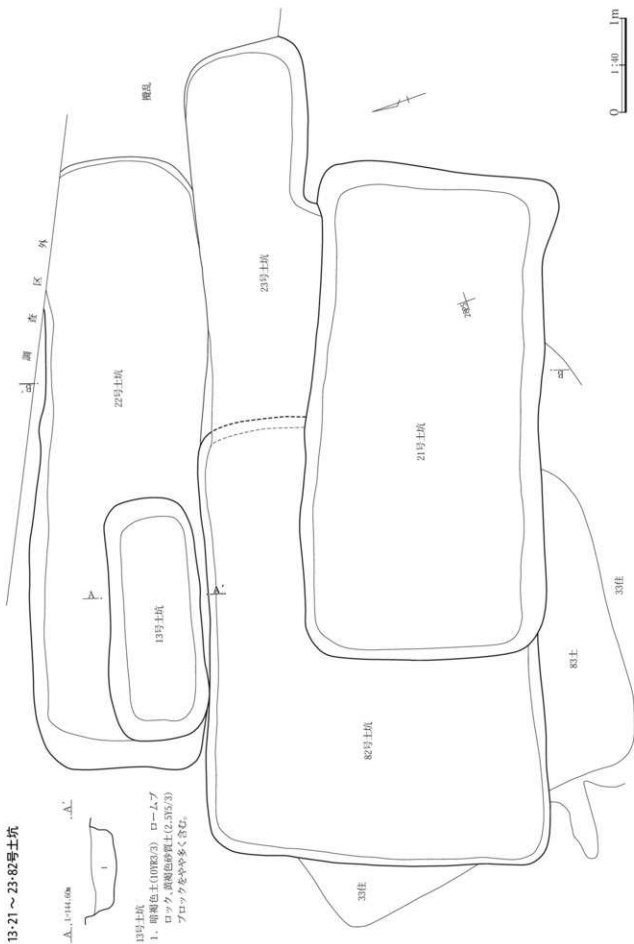
1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロック、礫をやや多く含む。
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ロームブロック、礫を多く含む。

0 1:3 10cm

0 1:4 10cm

0 1:40 1m

第87図 11・14・15・17・18号土坑断面図、15・17・18号土坑出土遺物



13・21～23・82号土坑

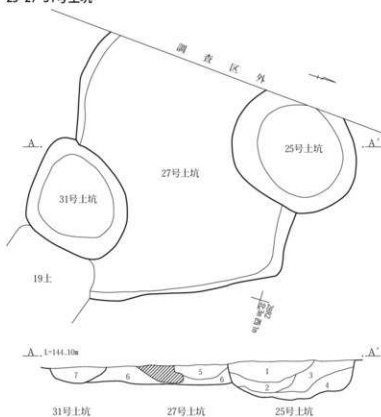
第888図 13・21～23・82号土坑平面断面図

第4章 瓦子遺跡の調査の成果

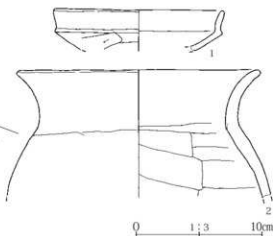


第89図 21 ~ 23号土坑断面図、19・20・24・26号土坑平断面図、21・22号土坑出土遺物

25・27・31号土坑



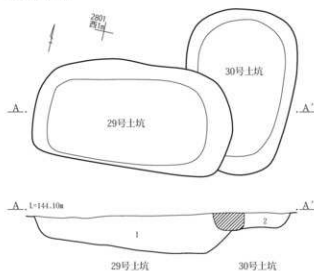
27号土坑出土遺物



25・27・31号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックをやや多く含む。灰、焼土粒をわずかに含む。25号土坑。
2. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒を少量含む。灰をわずかに含む。25号土坑。
3. 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロックをやや多く含む。25号土坑。
4. 黒褐色土(10YR2/3) ロームブロックを多く含む。やや粘性がある。25号土坑。
5. 黒褐色土(10YR2/3) ローム粒を少量含む。27号土坑。
6. 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロックをやや多く含む。やや締まりあり。27号土坑。
7. 褐色土(10YR4/6) ロームブロックを多く含む。31号土坑。

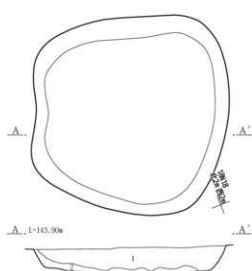
29・30号土坑



29・30号土坑

1. 褐色土(10YR4/4) ロームブロックを非常に多く含む。29号土坑。
2. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロック、黒褐色土ブロックをやや多く含む。30号土坑。

32号土坑



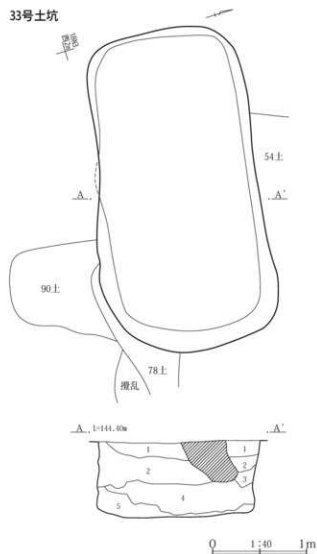
32号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックをやや多く含む。炭化物粒をわずかに含む。
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム粒を多く含む。

0 1:40 1m

第90図 25・27・29～32号土坑平面断面図、27号土坑出土遺物

33号土坑

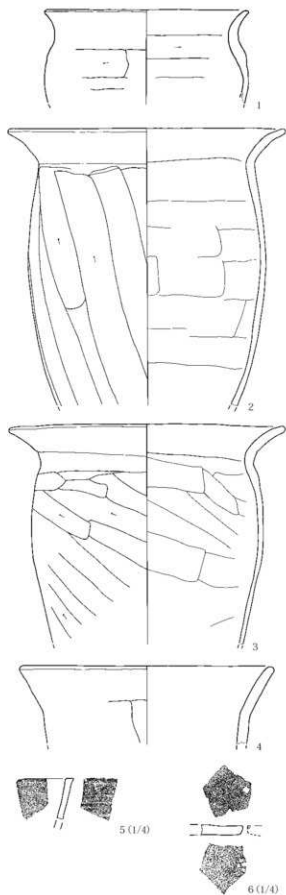


33号土坑

1. 黒褐色土(10YR2/3) 白色軽石を少量含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを少量含む。焼土粒、炭化物粒をわずかに含む。
3. 明黄褐色土(10YR6/6) ロームを主体とし暗褐色土ブロックを少量含む。
4. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを多く含む。焼土粒、炭化物粒を少量含む。
5. 明黄褐色土(10YR6/6) ロームを主体とし、暗褐色土ブロックをやや多く含む。

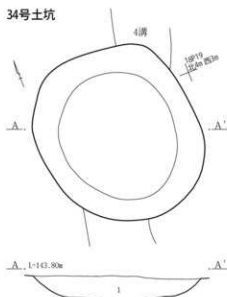


33号土坑出土遺物

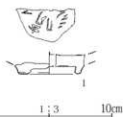


第91図 33号土坑平面図、出土遺物

34号土坑



34号土坑出土遺物



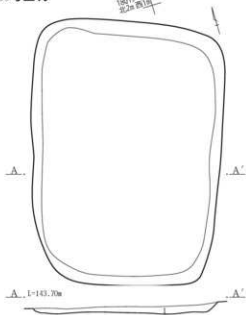
34号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロック、黄褐色砂質土を含む。

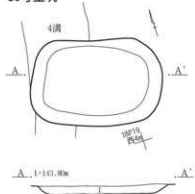
35号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロック、黄褐色砂質土を含む。

35号土坑



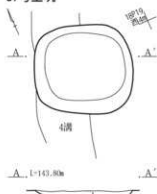
36号土坑



36号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロック、黄褐色砂質土を含む。

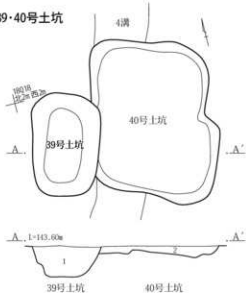
37号土坑



37号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロック、黄褐色砂質土を含む。

39・40号土坑

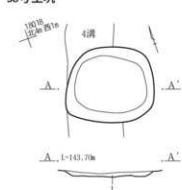


39号土坑 40号土坑

39・40号土坑

1. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ロームブロックを多く含む。39号土坑。
2. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロック、黄褐色砂質土を含む。40号土坑。

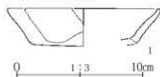
38号土坑



38号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロック、黄褐色砂質土を含む。

38号土坑出土遺物



41号土坑



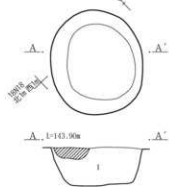
41号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロック、黄褐色砂質土を含む。41号土坑。
2. 褐色土(10YR4/4) ローム粒を多く含む。4号溝。



第92図 34～41号土坑平面図、34・38号土坑出土遺物

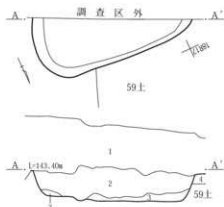
42号土坑



42号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロックを多く含む。

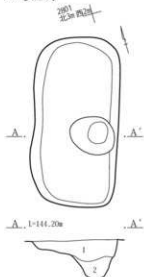
46号土坑



46号土坑

1. 表土
2. 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロックをやや多く含む。
3. 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロックを多く含む。
4. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを少量含む。59号土坑。

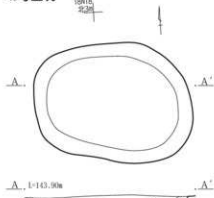
48号土坑



48号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロックを少量含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2) ロームブロックをやや多く含む。古い時期のピットか。

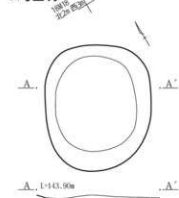
43号土坑



43号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロックを含む。
2. 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロックを多く含む。

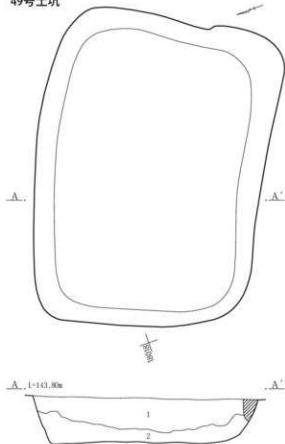
44号土坑



44号土坑

1. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ロームブロックをやや多く含む。
2. 褐色土(10YR4/4) ロームブロックを多く含む。

49号土坑



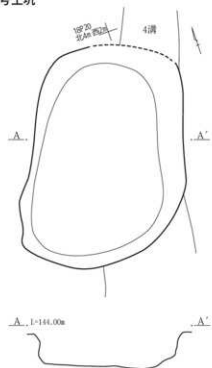
49号土坑

1. 褐色土(10YR4/4) ロームブロックを多く含む。
2. 褐色土(10YR4/4) ロームブロックを多く含む。1層に比べロームブロックが大きい。

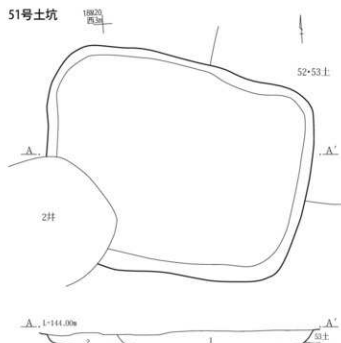
0 1:40 1m

第93図 42～44・46・48・49号土坑平面断面図

50号土坑



51号土坑



51号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロックを多く含む。炭化物粒をわずかに含む。
2. 褐色土(10YR4/4) ロームブロックを非常に多く含む。炭化物粒をわずかに含む。

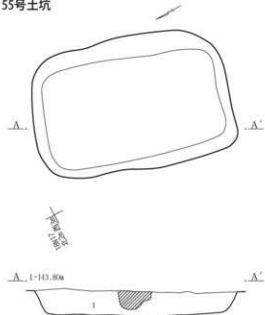
52・53号土坑



53号土坑

1. 褐色土(10YR4/4) ロームブロックを非常に多く含む。

55号土坑



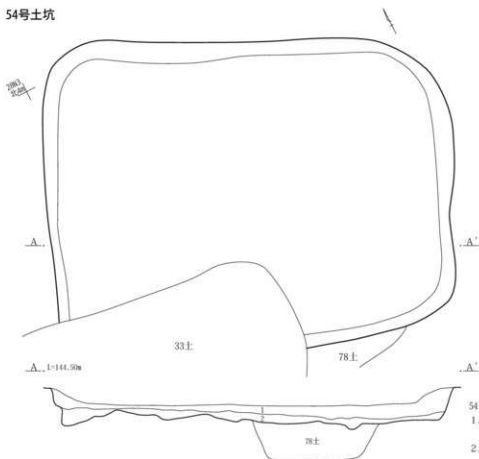
55号土坑

1. 褐色土(10YR4/4) ロームブロックを非常に多く含む。

0 1:40 1m

第94図 50～53・55号土坑平面断面図

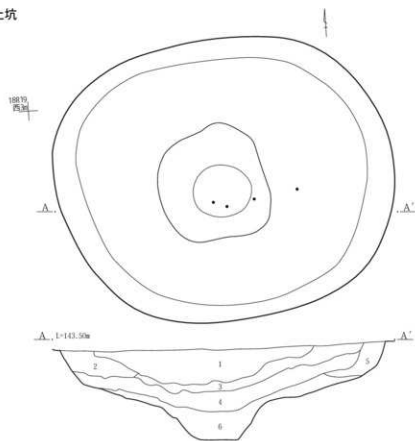
54号土坑



54号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを少量含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを多く含む。

56号土坑



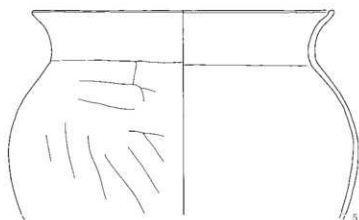
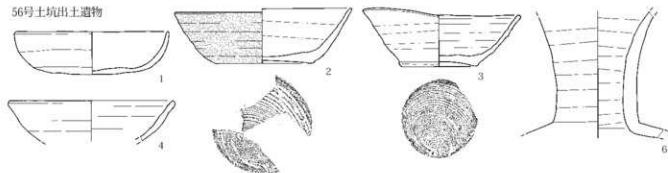
56号土坑

1. 黒褐色土(2.5Y3/2) ローム粒、軽石を少量含む。
2. オリーブ褐色土(2.5Y4/3) ローム粒を含む。
3. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒をやや多く含む。
4. 黒褐色土(2.5Y3/2) ローム粒、軽石を含む。
5. オリーブ褐色土(2.5Y4/3) ローム粒を含む。
6. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒、軽石を含む。

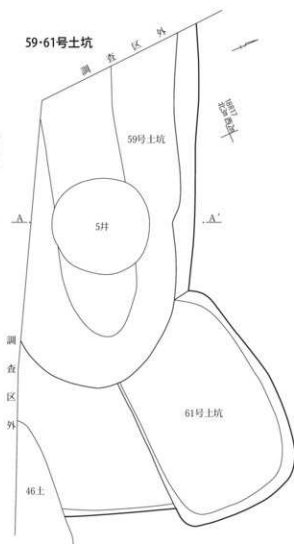
0 1:40 1m

第95図 54・56号土坑平面断面図

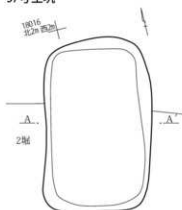
56号土坑出土遺物



59-61号土坑



57号土坑



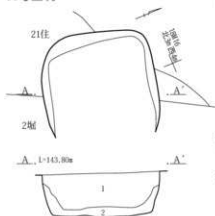
▲A, l=103.60m ▲A'



57号土坑

1. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ロームブロックを非常に多く含む。炭化物をわずかに含む。
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 1層に比べロームブロックが大きく炭化物を含まない。
3. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを少量含む。やや粘性あり。

58号土坑



58号土坑

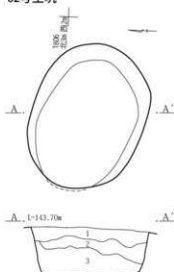
1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを多く含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを少量含む。

59号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3)ロームブロックを少量含む。

第96図 57～59・61号土坑平面図、56号土坑出土遺物

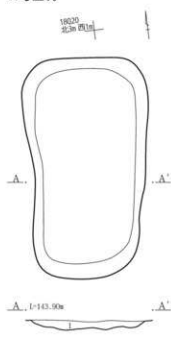
62号土坑



62号土坑

1. 黄褐色ローム土(2.5Y5/4) 軽石、小礫(φ 5mm)を含む。以下3層まで全体にやや砂質。
2. 黄褐色ローム土(2.5Y5/3) 軽石、小礫(φ 5mm)を含む。
3. ロームブロック、黄褐色ローム土、灰白色シルトブロックの混合。黄灰色土粒、小礫(φ 5~10mm)を含む。

63号土坑



63号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックをやや多く含む。

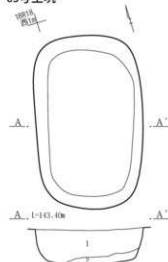
64号土坑



64号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックをやや多く含む。

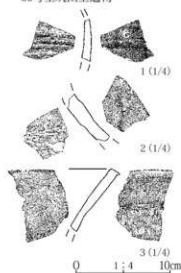
65号土坑



65号土坑

1. 褐色土(10YR4/4) ロームブロックを多く含む。
2. 褐色土(10YR4/4) ロームブロックを非常に多く含む。

66号土坑出土遺物

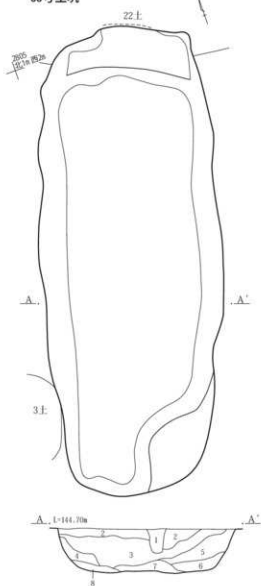


66号土坑

1. 黄灰色土(2.5Y4/1) 軽石、ローム粒をわずかに含む。
2. 暗黄灰色土(2.5Y4/2) 軽石、ローム粒を含む。
3. 暗黄灰色土(2.5Y5/2) ローム粒をやや多く含む。
4. 暗黄灰色土(2.5Y5/2) ローム粒を多く含む。
5. 黄灰色土(2.5Y5/1) ローム粒を含む。
6. 暗黄灰色土(2.5Y4/2) ローム粒をやや多く含む。小礫(φ 5mm)を含む。やや砂質。
7. 黄灰色砂質土(2.5Y6/1) 小礫(φ 5mm)を含む。
8. 黄褐色土(2.5Y5/3) ローム粒を多く含む。やや砂質。

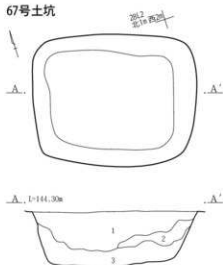


66号土坑



第97図 62～66号土坑平面図、66号土坑出土遺物

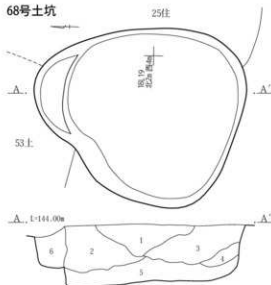
67号土坑



67号土坑

1. にぶい黄色土(2.5Y6/4) ローム小ブロック、灰黄色シルト小ブロック、小礫(φ 5~10mm)、軽石を多く含む。
2. 黄褐色土(2.5Y5/4) ローム小ブロック、灰黄色シルト小ブロックを多く含む。小礫(φ 5~10mm)、軽石を含む。
3. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) ローム小ブロック、灰黄色シルト小ブロック、小礫(φ 5~10mm)、軽石を多く含む。

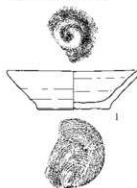
68号土坑



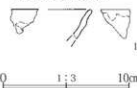
68号土坑

1. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 軽石、少量のローム粒を含む。
2. 黄褐色土(2.5Y5/3) ローム粒を多く含む。軽石、ロームブロック、灰白色シルトブロックを少量含む。
3. オリーブ褐色土(2.5Y4/3) ローム粒、ローム小ブロックをやや多く含む。軽石を含む。
4. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒、ローム小ブロックを少量含む。
5. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) ローム粒、シルト粒を多く含む。小礫(φ 10~20mm)、軽石を含む。
6. にぶい黄色土(2.5Y6/4) ローム上主体の上。小礫(5~10mm)と暗灰黄色土を含む。

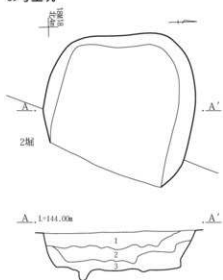
68号土坑出土遺物



73号土坑出土遺物



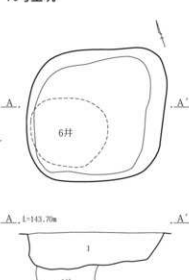
69号土坑



69号土坑

1. 黄灰色土(2.5Y4/1) 軽石、小礫(φ 5mm)、ローム粒を含む。
2. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 軽石、小礫(φ 5mm)、ローム粒を含む。
3. にぶい黄色土(2.5Y6/3) やや砂質。ローム粒を多く含む。小礫(φ 5mm)を含む。

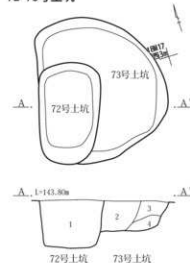
70号土坑



70号土坑

1. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) ローム小ブロック、灰白色シルト小ブロックを非常に多く含む。

72・73号土坑



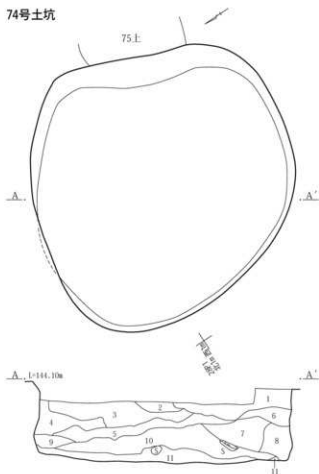
72・73号土坑

1. 黒褐色土(2.5Y3/2) ローム粒を多く含む。72号土坑。
2. 黄灰色土(2.5Y4/1) ローム粒を含む。73号土坑。
3. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒、ロームブロックを含む。73号土坑。
4. 暗灰黄色土とローム上の混土。73号土坑。

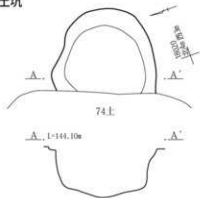


第98図 67~70・72・73号土坑平面断面図、68・73号土坑出土遺物

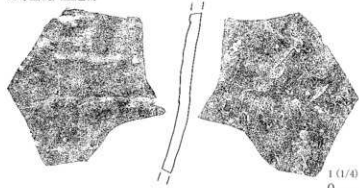
74号土坑



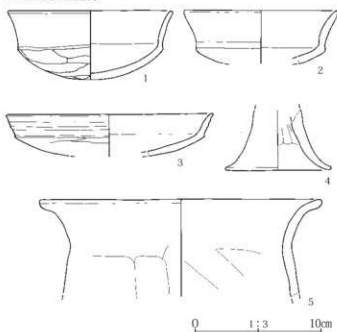
75号土坑



75号土坑出土遺物



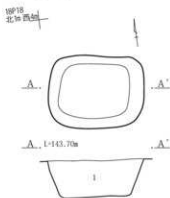
74号土坑出土遺物



74号土坑

1. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 軽石、ローム粒を少量含む。
2. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒、ロームブロックを多く含む。
3. 黄灰色土(2.5Y4/1) ローム粒を含む。
4. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) ローム粒を多く含む。
5. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒を含む。
6. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) ローム粒をやや多く含む。小礫(φ 5~10mm)を含む。
7. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒を含む。
8. 黄褐色ローム土(2.5Y5/4) 暗灰黄色土を含む。
9. 灰黄色砂質土(2.5Y6/2)
10. 黄灰色土(2.5Y4/1) ローム粒、ロームブロックを少量含む。軽石をまばらに含む。
11. にぶい黄色ローム土(2.5Y6/4) 暗灰黄色土を多く含む。

76号土坑



76号土坑

1. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ロームブロックを非常に多く含む。黄褐色砂質土ブロックをやや多く含む。

0 1:4 10cm

0 1:40 1m

第99図 74～76号土坑断面図、74・75号土坑出土遺物

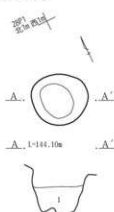
77号土坑



77号土坑

1. 褐色土(10YR4/4) ロームブロックを非常に多く含む。黄褐色砂質土ブロックを少量含む。

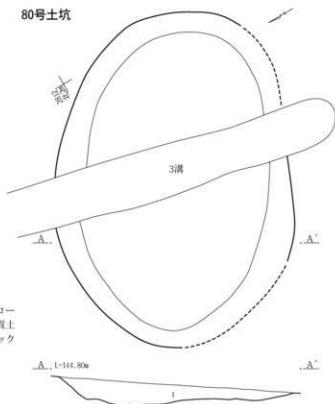
79号土坑



79号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロック、黄褐色砂質土を多く含む。焼土ブロックをやや多く含む。

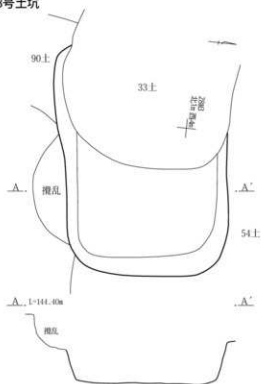
80号土坑



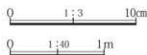
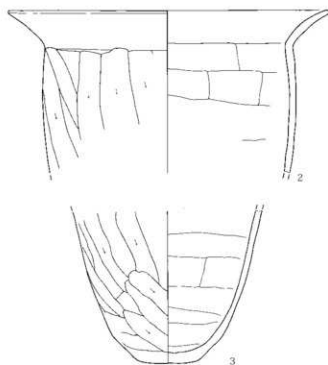
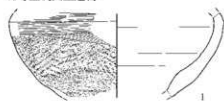
80号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロック、白色軽石を少量含む。焼土粒、炭化物をわずかに含む。

78号土坑

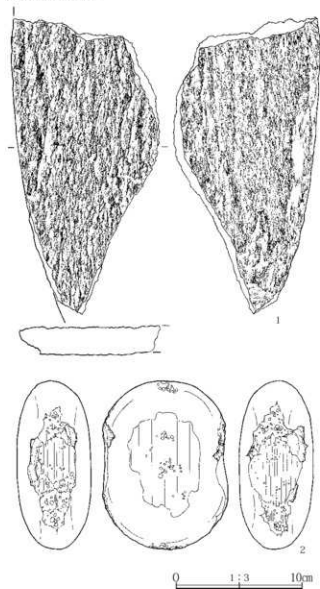


78号土坑出土遺物

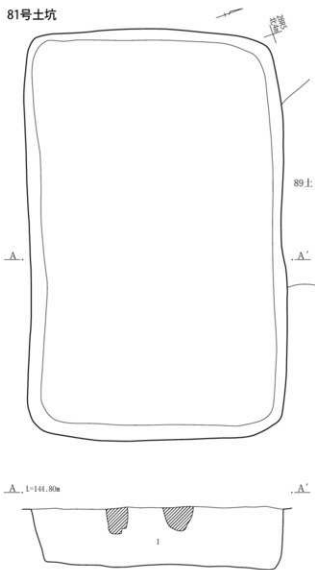


第100図 77～80号土坑平面図、78号土坑出土遺物

80号土坑出土遺物



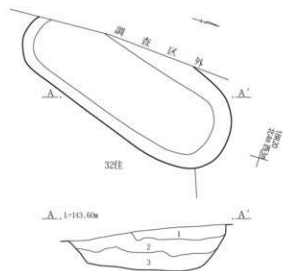
81号土坑



81号土坑

1. 褐色土(101R4/4) ロームブロック、黄褐色砂質土ブロックを多く含む。

84号土坑

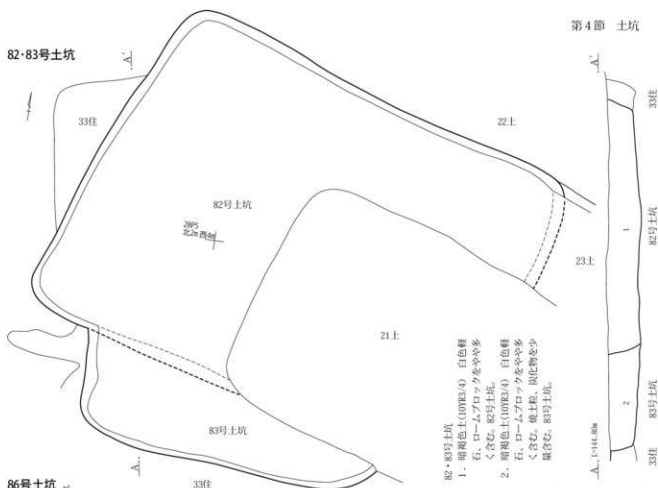


84号土坑

1. 黄褐色土(101R5/6) ローム土を主体とし暗褐色土ブロックをわずかに含む。
 2. 黒褐色土(101R2/2) ロームブロックを少量含む。
 3. 暗褐色土(101R3/3) ロームブロックを多く含む。

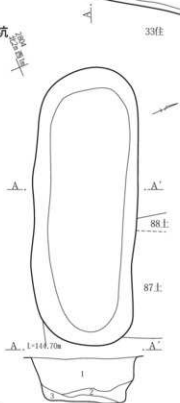
第101図 81・84号土坑平断面図、80号土坑出土遺物

82・83号土坑



82・83号土坑
 1. 暗褐色土(10YR3/4) 白色軽石、ロームブロックをやや多く含む。82号土坑。
 2. 暗褐色土(10YR3/4) 白色軽石、ロームブロックをやや多く含む。坑土層、炭化物を少量含む。83号土坑。

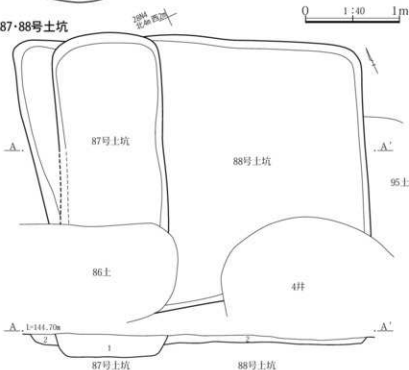
86号土坑



86号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを多く含む。灰白色シルトブロックをやや多く含む。白色軽石、炭化物粒をわずかに含む。
2. にぶい黄褐色土(10YR5/4) 灰白色シルトブロック、ローム粒を多く含む。炭化物粒をわずかに含む。
3. 黒褐色土(10YR2/3) ロームブロック、灰白色シルトブロックを少量含む。

87・88号土坑



87・88号土坑

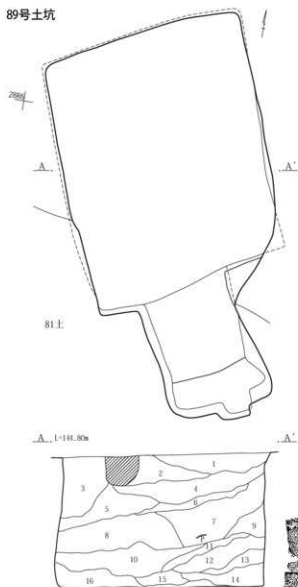
1. 褐色土(10YR4/4) ロームブロックをやや多く含む。白色軽石を少量含む。87号土坑。
2. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックをやや多く含む。白色軽石、炭化物粒をわずかに含む。88号土坑。

87号土坑出土遺物

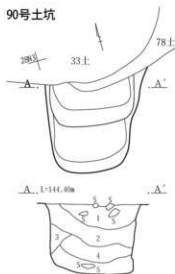


第102図 82・83・86～88号土坑平面図、87号土坑出土遺物

89号土坑



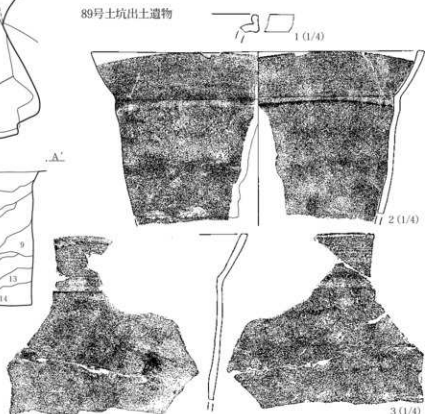
90号土坑



89号土坑

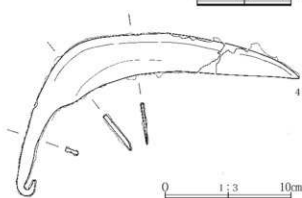
1. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム粒を多く含む。白色軽石をわずかに含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒をやや多く含む。白色軽石をわずかに含む。
3. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒をやや多く含む。ロームブロック、白色軽石をわずかに含む。
4. 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒を多く含む。ロームブロックを少量含む。
5. 黒褐色土(10YR2/2) ロームブロックをわずかに含む。
6. 黒褐色土(10YR3/2) ロームブロックを少量含む。焼土粒をわずかに含む。
7. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒を多く含む。ロームブロックを少量含む。焼土粒をわずかに含む。
8. 黒色土(10YR2/1) ロームブロックをわずかに含む。
9. 褐色土(10YR4/4) ローム粒を非常に多く含む。
10. 黒褐色土(10YR2/2) ロームブロックを少量含む。
11. 黒褐色土(10YR3/2) ロームブロックをやや多く含む。
12. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒をやや多く含む。ロームブロックを少量含む。
13. 暗褐色土(10YR3/2) ロームブロックを少量含む。
14. 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロックを非常に多く含む。やや粘性あり。
15. 褐色土(10YR4/4) ロームを主体とし黒褐色土ブロックを少量含む。
16. 黒色土(10YR2/1) ロームブロックを多く含む。粘性あり。

89号土坑出土遺物



90号土坑

1. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 礫、ローム粒をやや多く含む。
2. 明黄褐色土(10YR6/6) ロームを主体とし暗褐色土ブロックをやや多く含む。
3. 明黄褐色土(10YR6/6) ロームを主体とし暗褐色土ブロックをわずかに含む。
4. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒、炭化物粒をやや多く含む。
5. 明黄褐色土(10YR6/6) ロームを主体とし黄褐色砂質土ブロック(2.5Y5/3)を多く含む。

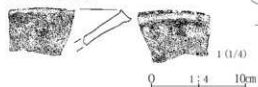


第103図 89・90号土坑断面図、89号土坑出土遺物

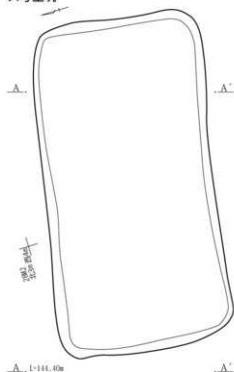
90号土坑出土遺物



93号土坑出土遺物



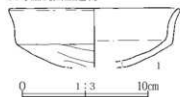
94号土坑



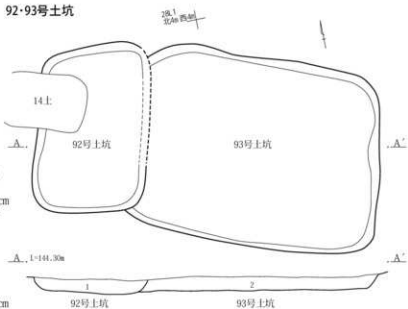
94号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロックを多く含む。

94号土坑出土遺物



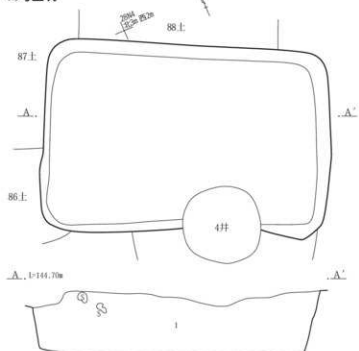
92・93号土坑



92・93号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを多く含む。炭化物粒をわずかに含む。92号土坑。
2. 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロックを非常に多く含む。93号土坑。

95号土坑

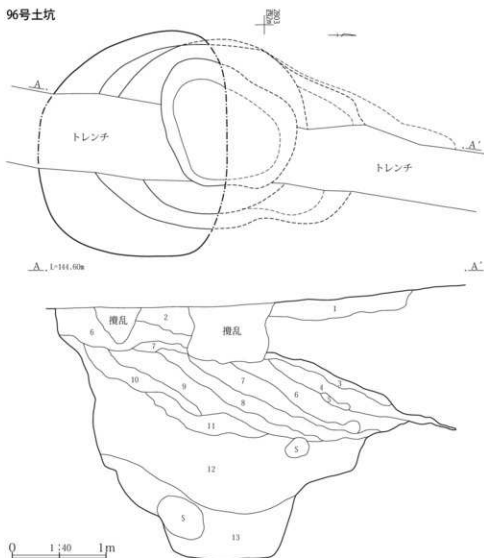


95号土坑

1. 褐色土(10YR4/4) ロームブロックを非常に多く含む。黄褐色砂質土ブロックを少量含む。

第104図 92～95号土坑平面図、90・93・94号土坑出土遺物

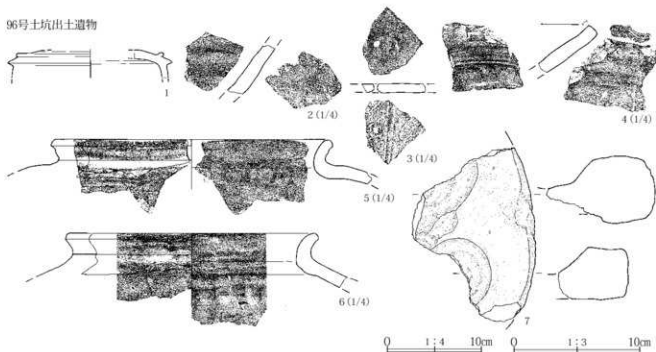
96号土坑



96号土坑

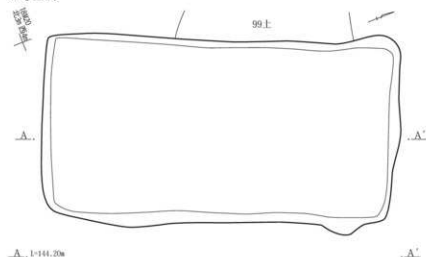
1. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 小礫、粗砂粒を含む。浅い明の遺構。
2. 灰白色シルト(10YR8/1) 小礫、粗砂粒を含む。地山が崩れた上。
3. 黒褐色砂質土(10YR3/1) 小礫と、天井部から崩れ落ちた灰白色シルトブロックを含む。
4. 褐灰色砂質土(10YR4/1) 小礫と、天井部から崩れ落ちた灰白色シルトブロックを多く含む。
5. 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 小礫を含む。
6. にぶい黄褐色土(10YR5/3) 砂粒、ロームブロック、シルトブロックを含む。
7. 黒色土(10YR2/1)ブロックと黄褐色ローム(10YR5/6)ブロック、にぶい黄褐色土(10YR5/3)ブロックの混上。
8. 黄褐色ローム土(10YR5/6) にぶい黄褐色土(10YR5/3)ブロックを含む。
9. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 黄褐色ローム(10YR5/6)ブロックを含む。
10. 灰黄褐色土(10YR5/2) にぶい黄褐色土(10YR4/3)ブロック、黄褐色ローム(10YR5/6)ブロックを含む。
11. 褐灰色土(10YR4/1) 礫、砂粒を含む。
12. 褐灰色砂質土(10YR5/1) 礫、砂粒を多く含む。シルト分の多い層、砂粒の多い層が互層になって堆積している。
13. 褐灰色砂質シルト(10YR6/1) シルト分の多い層、砂粒の多い層が互層になって堆積している。

96号土坑出土遺物



第105図 96号土坑平断面図、出土遺物

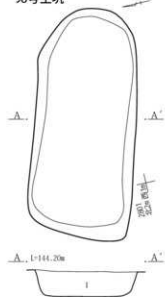
97号土坑



97号土坑

1. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ロームブロックを非常に多く含む。灰白色シルトブロックを少量含む。

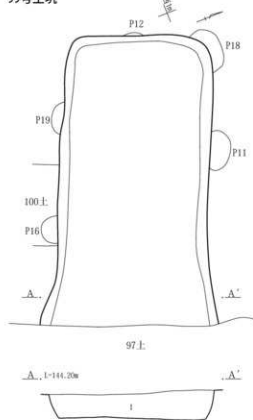
98号土坑



98号土坑

1. 褐色土(10YR4/4) ロームブロックを多く含む。灰白色シルトブロックをわずかに含む。

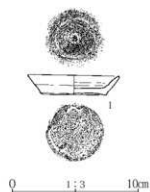
99号土坑



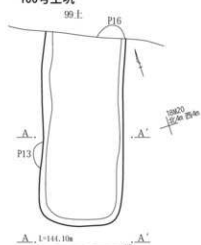
99号土坑

1. 褐色土(10YR4/4) ローム粒を多く含む。黄褐色砂質土ブロックを少量含む。

97号土坑出土遺物



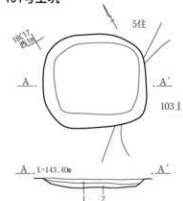
100号土坑



100号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを多く含む。

101号土坑



101号土坑

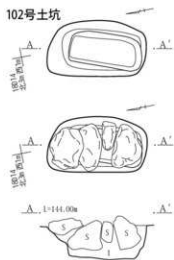
1. 黒褐色土(10YR3/2)
2. 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロックを含む。



第106図 97～101号土坑平面図、97号土坑出土遺物

第4章 瓦子遺跡の調査の成果

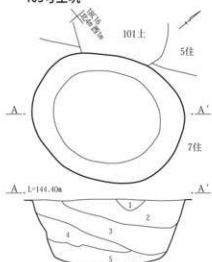
102号土坑



102号土坑

1. 褐色土と細かいロームブロックの混土。

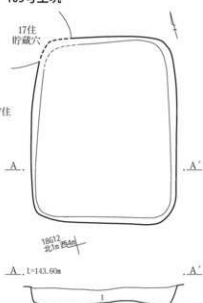
103号土坑



103号土坑

1. にぶい黄色ローム土(2.5Y6/4) ローム粒、ローム小ブロック主体。
2. 黄灰色土(2.5Y4/1) ローム小ブロック、軽石を少量含む。
3. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム小ブロックをやや多く含む。
4. 黄灰色土(2.5Y4/1) ローム小ブロックを含む。
5. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒、ローム小ブロックをやや多く含む。

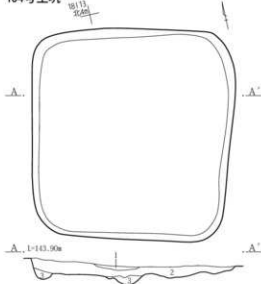
105号土坑



105号土坑

1. 褐色土(10YR4/4) ロームブロックを多量に含む。

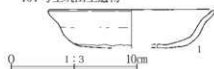
104号土坑



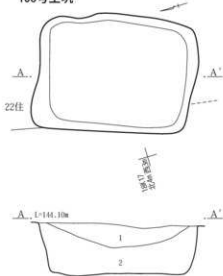
104号土坑

1. 黄褐色土(2.5Y5/3) ローム粒を多く含む。
2. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 軽石、ローム粒を含む。焼土を少量含む。
3. 明黄褐色ローム土(2.5Y6/6) ロームの崩れた土。暗灰黄色土を含む。

104号土坑出土遺物



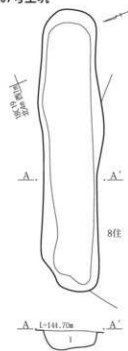
106号土坑



106号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) 地山のロームブロック、白色粘質土ブロックを含む。
2. 褐色土(10YR4/6) 地山のロームブロック、白色粘質土ブロックを多量に含む。

107号土坑

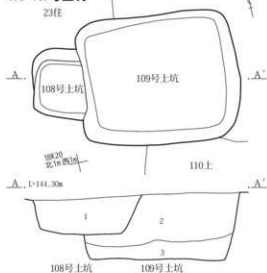


107号土坑

1. 風褐色土(10YR2/2) ロームブロックを少量含む。

第107図 102～107号土坑平面図、104号土坑出土遺物

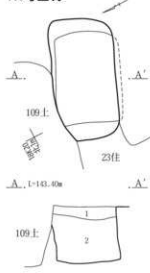
108・109号土坑



108・109号土坑

1. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒、ローム小ブロックを多く含む。底面に炭化物の薄い層(厚さ5mm)が入る。108号土坑。
2. オリーブ褐色土(2.5Y4/3) ローム粒、ローム小ブロックを多く含む。109号土坑。
3. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) ローム粒、ローム小ブロックを多く含む。109号土坑。

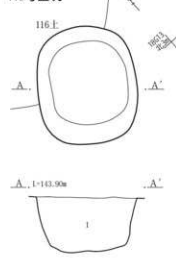
110号土坑



110号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロック、白色軽石を少量含む。
2. 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロックを多く含む。焼土ブロックをわずかに含む。

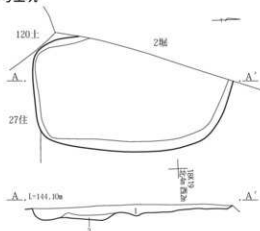
113号土坑



113号土坑

1. 褐色土(10YR4/4) 細かいロームブロックを多量に含む。

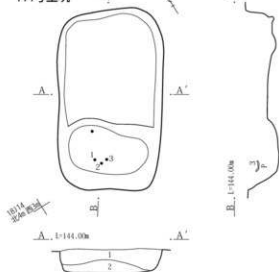
111号土坑



111号土坑

1. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム小ブロックを含む。
2. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム小ブロック、焼土、炭化物を含む。

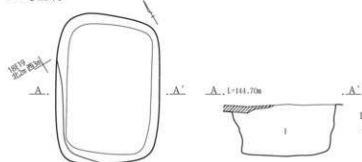
114号土坑



114号土坑

1. 黄褐色土(2.5Y5/3) ローム粒、黒色土粒を含む。ローム小ブロック、灰白色シルトブロックを少量含む。
2. 明黄褐色ローム土(2.5Y6/6) 地山のロームが落ち込んだ上。

115号土坑



115号土坑

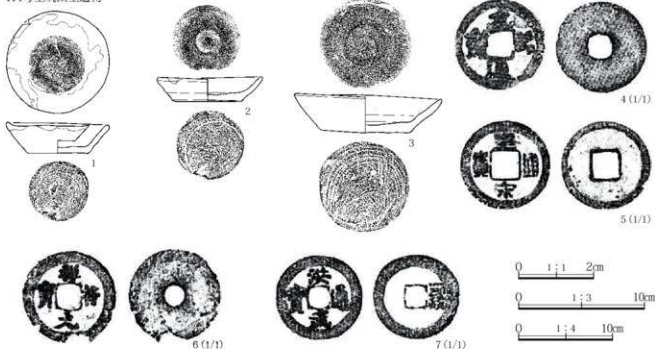
1. 黒褐色土(2.5Y3/2) ローム粒、ローム小ブロックを含む。軽石を少量含む。

第108図 108～111、113～115号土坑断面図

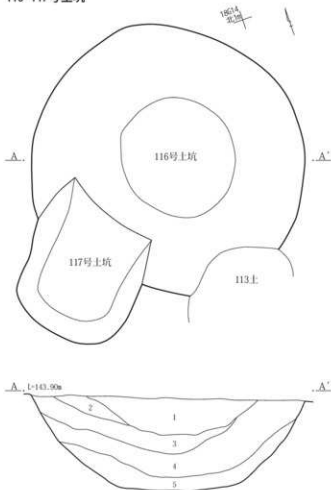
0 1:40 1m

第4章 丑子遺跡の調査の成果

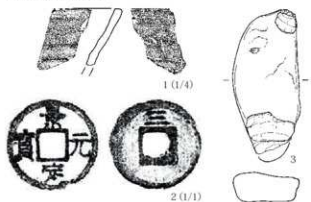
114号土坑出土遺物



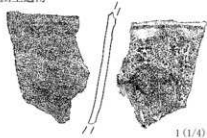
116・117号土坑



116号土坑出土遺物



117号土坑出土遺物



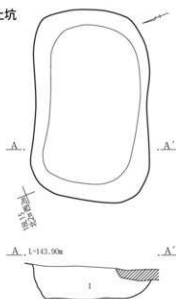
116号土坑

1. 黒色土(10YR2/1) φ5~10mmのAs-C, Hr-FAに伴う軽石を含む。
2. 褐色土(10YR4/4) ロームブロックを含む。
3. 黒褐色土(10YR3/2) 細かいロームブロックを含む。
4. 暗褐色土(10YR3/3) 細かいロームブロックを多量に含む。
5. 黒褐色土(10YR3/2) 細かいロームブロックを含む。



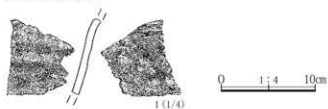
第109図 116・117号土坑平面図、114・116・117号土坑出土遺物

118号土坑

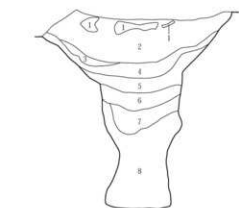
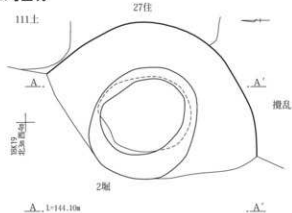


118号土坑
1. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒、
軽石、小礫(φ 5mm)を含む。

118号土坑出土遺物

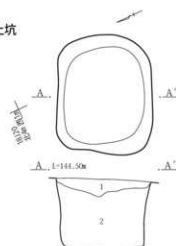


120号土坑



120号土坑
1. 灰黄褐色土(10YR6/2) ローム下層の泥炭堆植物の二次堆積。
2. 黒褐色土(10YR3/2) ロームブロックを含む。
3. 黒褐色土(10YR2/2) ロームブロックを含む。
4. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを含む。
5. 褐色土(10YR4/4)とロームブロックの混土。褐色土主体。
6. 褐色土とロームブロックの混土。ローム主体。
7. 褐色土(10YR4/4) ロームブロックを含む。
8. 褐色土とロームブロックの混土。

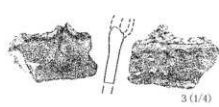
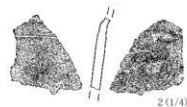
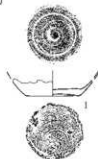
124号土坑



124号土坑
1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブ
ロックを少量含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブ
ロックを多く含む。



120号土坑出土遺物



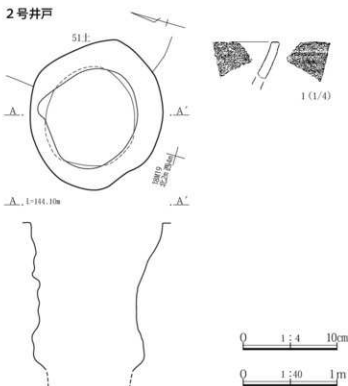
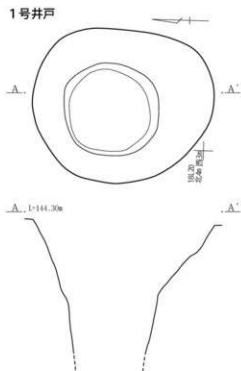
第110図 118・120・124号土坑平面断面図、118・120号土坑出土遺物

第5節 井戸

井戸は調査区全域に散在して12基見つかった。その他、120号土坑も井戸の可能性がある。出土遺物が少なく、時期の特定は困難なものが多いが、明らかな近代以降の遺物は出土しておらず、埋没時期は近世かそれ以前に遡るものと思われる。特に1～10号井戸の10基は館内部となる位置にあり、それに関わる可能性が高いので注目される。なお、作業上の危険のため、ほとんどの井戸は完掘しなかったが、10号井戸だけは重機を用いて南半部を掘削し、底面まで調査した。地下水は底面まで掘削しなかったこともあり、いずれの井戸でも確認できなかったが、底面まで掘削した10号井戸でも水は湧出しなかった。本遺跡は白川扇状地上にあり、もともと地下水までは深いと思われるので、あるいは地下水の豊富な時期のみに用いた、季節的な井戸であるかもしれない。ちなみに井戸を調査したのは2月から3月にかけてであり、この地域では湛水期にあたる。

1号井戸(第111図、PL.36-7)

調査区中央やや北西、18区L20グリッドと28区L1グ



第111図 1・2号井戸平面図、2号井戸出土遺物

リッドにまたがった位置にある。確認面では1.92×1.64mの楕円形だが、下に行くにしたがってすぼまり、約1m下では1.00×0.98mのほぼ円形となり、そこから下は緩やかにすぼまりながら掘られている。壁の凹凸は少なく、ほぼ直線的である。深さは1.40mまで確認した。埋土はロームブロックを多く含む暗褐色土(10YR3/3)で、人為的に埋められたものと思われる。出土遺物はなく、埋没時期は特定できない。

2号井戸(第111図、第37表、PL.36-8)

調査区中央やや西、18区M19グリッドにある。51号土坑と重複し、本井戸が新しい。確認面では1.61×1.42mの歪んだ楕円形で、壁はやや凹凸があり、緩やかにすぼまって掘られている。深さは1.56mまで確認し、そこでは1.04×0.92mの楕円形である。埋土はロームブロックと礫を少量含む黒褐色土(10YR3/2)であり、人為的に埋められたものと思われる。出土遺物は少ないが、中世の在地系土器の内耳鍋と思われる破片1点を掲載した。その他小破片として、土師器杯・椀類3点、同費・壺類2点、近世の国産焼締陶器1点、同在地系焙烙・鍋類4点が出土している。出土遺物から、埋没年代は近世以降と考えられる。

3号井戸(第112図、PL.37- 1)

調査区南西隅近く、18区Q16グリッドにある。確認面では1.10×0.98mの楕円形だが、急速に狭まり、0.25m下では0.77×0.70mのほぼ円形となる。それ以下は壁はほぼ垂直に掘られている。深さは1.55mまで確認した。埋土はロームブロックを多く含む暗褐色土(10YR3/3)であり、人為的に埋められたものと思われる。出土遺物は少なく、掲載できるものはない。中世在地系土器の片口鉢・内耳鍋類の小破片が1点出土しているのみであり、埋没年代は中世以降と考えられる。

4号井戸(第112図、第37・38表、PL.37- 2)

調査区北西部、28区N3・4グリッドにある。95号土坑と重複し、本井戸が新しい。確認面では2.10×1.95mの不整な円形であるが、急速に狭まり、深さ0.70～0.80mで径0.80mの円形となり、以下はほぼ垂直になる。深さは1.85mまで確認した。埋土はロームブロックを多く含む暗褐色土(10YR3/3)で人為的に埋められたものと思われるが、上部には礫が多く含まれ、中には最大長0.60

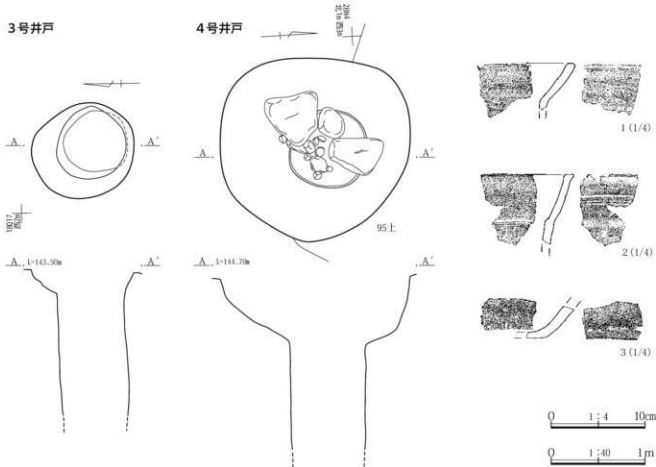
mに及ぶものもあった。出土遺物は在地系土器内耳鍋を3点掲載した。1は15世紀後半～16世紀初頭、2は16世紀代、3は中世のものである。その他小破片として、古代の土師器杯・椀類6点、同裏・壺類17点、須恵器裏・壺類1点、近世在地系土器焙烙・鍋類2点が出土している。出土遺物から埋没年代は近世以降と考えられる。

5号井戸(第113図、PL.27- 4)

調査区南西隅、18区R17グリッドにある。59号土坑と重複し、本井戸が古いことは断面で確認できた。59号土坑底面では1.03～1.05mの円形で、徐々に狭まりながら掘られている。深さ1.70mまで確認したが、そこでは0.69×0.65mのほぼ円形であった。埋土の上部は比較的細かく分層できたが、それ以下はロームブロックを多く含む黒褐色土(10YR2/3)で埋まっており、人為的に埋められたものと思われる。出土遺物はごく少なく、土師器裏・壺類の小破片が1点のみ出土しただけである。重複する土坑からも遺物が出土していないので、埋没時期の特定は困難である。

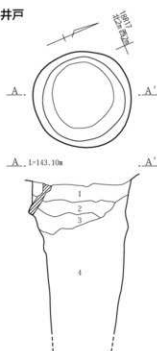
3号井戸

4号井戸



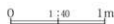
第112図 3・4号井戸断面図、4号井戸出土遺物

5号井戸

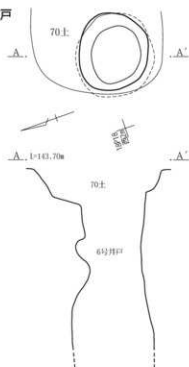


5号井戸

1. 黒褐色土(10YR2/3) ロームブロックをやや多く含む。
2. 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロックを多く含む。
3. 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロックを多く含む。黒褐色土ブロックを少量含む。
4. 黒褐色土(10YR2/3) ロームブロックを多く含む。



6号井戸



第113図 5・6号井戸平面断面図

6号井戸(第113図、PL.31-7)

調査区南西隅近くの18区P17・18グリッドにある。70号土坑と重複し、本井戸が古いことは断面で確認した。70号土坑底面では0.82×0.72mの楕円形で、それ以下は垂直に近い角度で掘られているが、壁には凹凸があり、深さ1.00m以下では逆に広がっている。70号土坑底面から1.60mの深さまで確認したが、ここでは0.92×0.83mの楕円形になっている。埋土はごくわずかに灰白色シルト小ブロックを含むほかは混じりけの少ない黒褐色土(2.5Y3/1)であり、人為的に埋められたものと思われる。出土遺物は小破片ばかりで、土師器杯・椀類3点、同表・壺類5点、須恵器甕・壺類1点、近世国産焼締陶器1点が出土している。近世陶器の出土を重視すれば、埋没年代は近世以降ということになる。

7号井戸(第114図、第38表、PL.37-3・4.63)

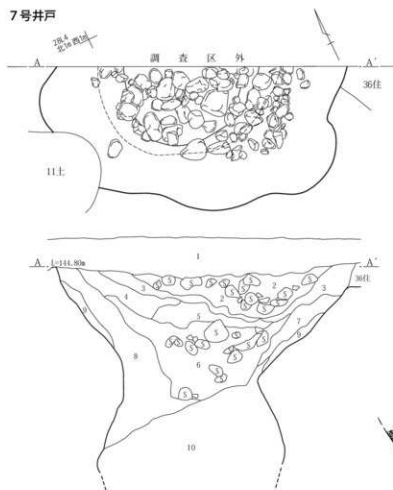
調査区北東壁中央やや西寄りの28区K・L3・4グリッドにあり、北半分が調査区外となる。36号住居、11号土坑と重複し、本井戸は36号住居よりも新しく、11号土坑よりも古い。確認面では最大径3.10mの不整形円だが、徐々に狭まり、深さ1.10mの部分で径1.40m程度になったあと、また広がっていく。深さは確認面から2.10mまで確認した。埋土は、上半部は細かく分層できたが、下半部は明黄褐色ローム土(2.5Y6/6)で一気に埋められて

おり、人為的に埋められたものと思われる。上半部には多くの礫を含んでいたが、特に組まれているような部分はなく、埋めた時に投げ込まれたものであろう。出土遺物はやや多く、掲載したのは16世紀代と思われる在地系土器の内耳鍋1点、中世の在地系土器の火鉢2点のほか、敲石1点、石臼1点である。その他、小破片として土師器高坏1点、同表・壺類1点、須恵器甕・壺類3点、中世以降の時期不詳土器類4点、板碑1点が出土している。埋没年代は近世以降のものが出土していないことを重視すれば、16世紀代にまで遡ることができる。

8号井戸(第114図、PL.37-5)

調査区中央付近、18区K20グリッドにある。23号住居、2号堀と重複し、23号住居よりも新しく、2号堀よりも古い。確認時には1.10×0.85mの楕円形であったが、上部がわずかに広がっている以外はほぼ垂直に掘られている。深さは1.80mまで確認した。埋土はローム粒や礫を含む黒褐色土であり、人為的に埋められたものと思われる。出土遺物はごく少なく、土師器甕・壺類の小破片が1点出土しているのみである。埋没年代は2号堀よりも古いことから、15、16世紀以前に遡る可能性があるが、出土遺物がないので、それより細かく時期を絞り込むことは困難である。

7号井戸



7号井戸

1. 表土 黄灰色土(2.5Y5/1)、軽石を含む。
2. 黄灰色土(2.5Y4/1) 礫(φ5～20cm)を多く含む。
3. 黒褐色土(2.5Y3/2) 粒子細かく、まじりけが少ない。
4. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) ロームブロック、黄白色シルトブロック(2.5Y6/1)を多く含む。
5. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 黄白色シルトブロックをわずかに含む。
6. 黄灰色土(2.5Y4/1) 礫(φ5～30cm)を多く含む。
7. オリーブ褐色土(2.5Y4/3) ローム粒を多く含む。
8. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム粒を少量含む。下部に、にぶい黄色シルトブロック(2.5Y6/3)を含む。
9. 黄褐色土(2.5Y5/3) ローム粒を多く含む。
10. 明黄褐色ローム土(2.5Y6/6) 灰白色シルトや暗灰黄色土が層状に入る部分があるが、全体に一気に埋めているらしい。



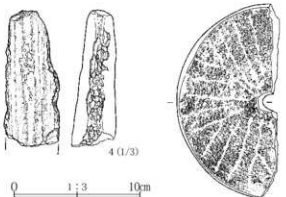
1 (1/4)



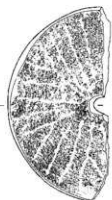
2 (1/4)



3 (1/4)



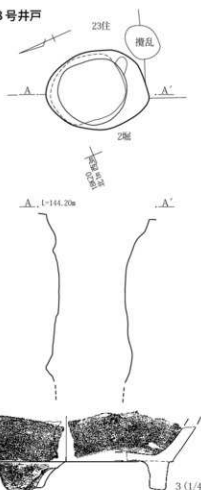
4 (1/3)



5 (1/6)



8号井戸



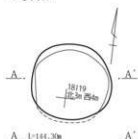
9号井戸(第115図、PL.37～6)

調査区中央付近、18区119グリッドにある。24号住居と重複し、本井戸が新しい。確認面では0.88×0.80mのほぼ円形で、そのままほぼ垂直に掘られている。深さは

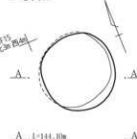
1.00mまで確認したところで大きな礫にあたり、掘り下げはそこで断念した。出土遺物はなく、埋没年代は確定できない。

第114図 7・8号井戸平面図、7号井戸出土遺物

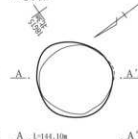
9号井戸



10号井戸



11号井戸



12号井戸



10号井戸

1. 黒色土(10YR2/1) As-Cを含む。
2. 黒褐色土(10YR3/2) ロームブロックを含む。
3. 黒褐色土(10YR3/2) とロームブロックの混土。
4. 黒褐色土(10YR3/2)
5. 黄褐色土(2.5Y5/4) 多量のロームブロックを含む。
6. 黒色土(10YR2/1)
7. 黒褐色土(10YR3/2)

8. 黒色土(10YR2/1)

9. 褐色土(10YR5/1) 灰色シルトを含む。
 10. 灰白色シルト(10YR7/1)
 11. 褐色土(10YR4/1) 灰色シルトを含む。
- ローマ数字 (IV~VIII) は基本土層 (第9図4) の4~8に一致。ただし、基本土層にはIX・Xはない。その土層は以下の通りである。
- IX. 灰色粗粒洪水砂
X. 灰色シルト

第115図 9～12号井戸断面図

0 1:40 1m

10号井戸(第115図、PL.38-1・2)

調査区南東部、18区F15グリッドにある。確認面では0.81×0.76mのほぼ円形である。この井戸については、南半分を重機で掘り下げ、底面まで発掘した。壁はほぼ垂直であり、深さは2.08mである。この井戸が掘られている土層は、先述のように白川扇状地堆積物であり、それは灰色ないし灰黄色シルトを主体とした、水を通にくい層が多いが、この井戸はシルトの間の灰色粗粒洪水砂層まで掘られていた。この層は10cm程度の厚さだったが、おそらくこれが透水層であると考えられ、とすれば、ほかの井戸もこの層まで掘られている可能性が高いと思われる。先述のように、調査時は渇水期に当たるので、この層からの湧水はなかったが、地下水が豊富な季節には湧水があるものと考えられる。埋土は比較的細かく分層できたが、自然埋没とは思えず、人為的に埋められたものと考えられる。出土遺物はなく、埋没年代は確定できない。

11号井戸(第115図、PL.37-7)

調査区南東部、18区G15グリッドにあり、10号井戸とはわずか1.40mしか離れていない。確認面では0.85×0.80mのほぼ円形で、壁はほぼ垂直に掘られている。深さは1.40mまで確認した。埋土は10号井戸同様、比較的細かく分層できたが、ロームブロックを含む黒褐色土ないし褐色土で埋没しており、人為的に埋められたものと考えられる。出土遺物は少なく、土師器高坏の小破片が2点出土しているのみであり、埋没年代は確定できない。

12号井戸(第115図、PL.37-8)

調査区南東部の中央、18区C14・15グリッドにあり、東側の一部が調査区外となる。13号住居と重複し、本井戸が新しい。確認面では、長径が2m程度、短径1.60mの楕円形だが、急激に狭くなるように掘られている。深さは1.65mまで確認したが、そこでは径0.68mの円形となっている。出土遺物はなく、埋没年代の確定はできない。

第6節 堀

堀と名付けた遺構は、調査区中央から南西にかけて存在する大規模な溝である。後述するように、規模や時期などから考えて、中世の館の堀として機能していたものと思われるので、溝ではなく、あえて「堀」という名称を付した。この堀は表土除去後の遺構確認において、重複する遺構の中で最も新しいものと判断されたため、最初に調査を行った。

1・2号堀(付図1、第図116～118、第38・39表、PL.38-3・41-1～4, 63・64)

平面形状は横になった逆F字形であり(第116図)、調査の便宜上、外側のL字形の部分を1号堀、途中から北に延びる部分を2号堀と名付けたが、これは後述するように、切り合い関係などを考慮したものではない。

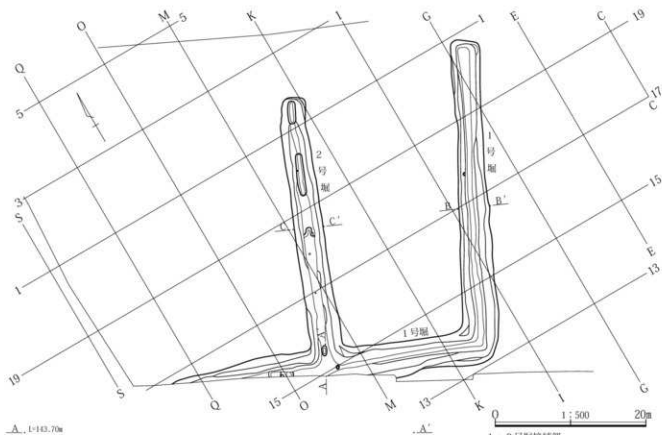
1号堀は調査区南西辺に近い走向で北西-南東に直線的に延び、東でほぼ直角に屈曲して、やはり直線的に北東へと延びる。北西-南東走向の部分は、西側で調査区外へとはずれてしまうので、全長約43mを調査できたのだが、西側の崖面(上細井五十嵐遺跡との境となっている崖)で、この堀の延長部と思われる断面を確認でき、そのまま北西方向へと延びて崖まで達していることが判明した。この部分の走行方向はN-69°-Wである。断面は底面の狭い逆台形であり、確認面における上幅は4.04～4.70m、下幅は0.42～0.58mであり、底面はほぼ平坦で凹凸に乏しい。2号堀との接続部では底面がやや深く広がっているが、この部分は南西部が調査区外となっているため、幅などは不明である。深さはピット状に深くなる箇所を除いて1.20～1.76mであり、2号堀との接続部が最も深く、その北西側は浅い。南西部は1.62～1.68mでほぼ同じ深さである。底面の標高は、調査できた北西端、南東端ではほぼ同じで、その間に位置する2号堀との接続部が最も深く、その標高差は0.44mである。

南西-北東部分は全長43.20mであり、走行方向はN-27°-Eで、北西-南東部分とのなす角度は96°である。上幅は3.20～4.78mで南西ほど広い。下幅は0.52～1.52mで逆に北東端部が最も広く、底面はほぼ平坦である。

断面は逆台形で、深さは0.86～1.62mであり、南西端が最も深い。底面の標高は、北東端が143.74m、南西端の屈曲部が142.28mなので、その標高差は1.46mあるが、それは全体の地形が北から南に向かって下がっていることで生じたものであり、意図的に南を深く掘っているわけではないであろう。

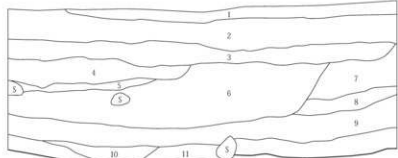
2号堀は1号堀屈曲部の西側約21m(溝心-心で計測)から北東に延びる堀であり、1号堀北壁から計測して全長33.6mである。走行方向はN-23°-Eであり、1号堀北西-南東部との角度は92°で、直角に近い。上幅は3.10～4.28mで南ほど広い傾向にある。下幅は0.46～1.51mとやや一定しない。底面は浅い土坑状に深くなっている部分もあるが、ほとんどの部分は平坦である。断面は逆台形で、深さは、土坑状の部分を除いて、1.23～1.47mであり、さらに1号堀との接続部は1.76mと深くっており、南ほど深い傾向にある。標高は北東端が142.76m、南西端の接続部で141.86mであり、標高差は0.90mであり、これは1号堀同様、周囲の傾斜に影響を受けたものと思われる。

これら2条として調査した堀の新旧関係であるが、平面確認では、切り合いなどは認められなかった。接続部に設定したA-A'セクションでは2号堀埋土を切っているような土層が観察できた(4～6層が7層以下を切っている)が、それが堀だとすると、その底面はかなり浅く、1号堀には直接つながらないことは明らかである。おそらくこの部分では、堀の掘り直しが行われたか、あるいは新しい時期の別の遺構が掘り込まれたかのいずれかの可能性が考えられると思われる。この部分では最上層にAs-Aを含む層が堆積しており、近世後期になっても何らかの理由で掘り下げられたことがあったことが分かるので、後者の可能性、つまり、新しい時期に別の遺構が掘り込まれた可能性が高いのではないかと考えられる。その浅い遺構については、平面で確認できなかったので性格は不明である。さらに、1・2号堀の底面をみると、その標高はほぼ同じ高さで連続しており、堀の境に段差などは認められない。そのため、両者は同時に掘削されたものとするのが妥当であろう。また、出土遺物は、1号堀が少なく、両者を比べるのは困難であるが、特に両者に時期差を認めることはできない。以上のことから、この1・2号堀は同時存在の可能性が高いものと



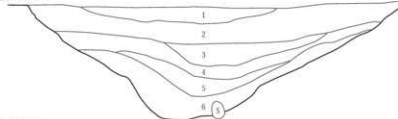
A, L=143.70m

A'



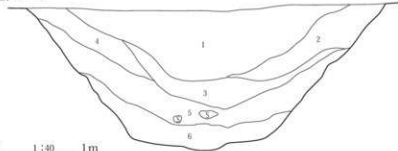
B, L=144.20m

B'



C, L=144.00m

C'



0 1:40 1m

- 1・2号堀接続部
1. 黒褐色土: ϕ 1~10mmのks-Aを多量に含む。
 2. 褐色土
 3. 黄褐色土
 4. 褐色土: ϕ 1~5mmの礫を含む。
 5. 黒褐色土と地山の褐色粘質土との混上。
 6. 褐色土: ϕ 5~20mmの礫を含む。
 7. 褐色土と地山の褐色粘質土との混上で、褐色粘質土主体。
 8. 黒褐色土と地山の褐色粘質土との混上で、黒褐色土主体。炭化物を含む。
 9. 黒褐色土と地山の褐色粘質土との混上。
 10. 黒褐色土
 11. 褐色粘質土

1号堀

1. 黒褐色土: 細かいロームブロックを含む。
2. 褐色土: 細かいロームブロックを多量に含む。
3. 暗褐色土
4. 暗黄褐色土: 大きなロームブロックを含む。
5. 褐色土: 上位に炭化物を含む。
6. 黄褐色土: ロームブロックを含む。

2号堀

1. 褐色土と黄褐色ロームブロックの混上。
2. 黒褐色土: ϕ 1~5mmの白色軽石、ロームブロックを含む。
3. 褐色土と黄褐色ロームブロックの混上で、ロームブロック主体。
4. 2と類似。
5. 黒褐色土と黄褐色ロームブロックの混上。
6. 灰黄褐色粘質土。ロームブロックを含む。

第116図 1・2号堀平面断面図

1号堀出土遺物



1(1/4)



3(1/4)



4(1/4)



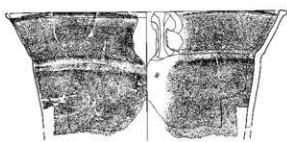
6(1/4)



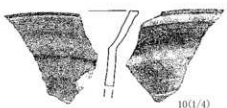
8(1/4)



9(1/4)



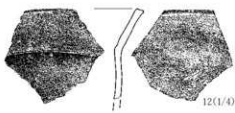
7(1/4)



10(1/4)



11(1/4)



12(1/4)



13(1/4)



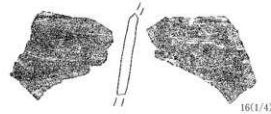
15(1/4)



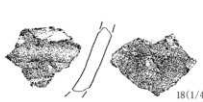
17(1/4)



14(1/4)



16(1/4)



18(1/4)



19

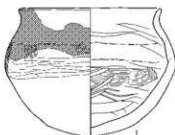
20



0 1:3 10cm

0 1:4 10cm

2号堀出土遺物



1

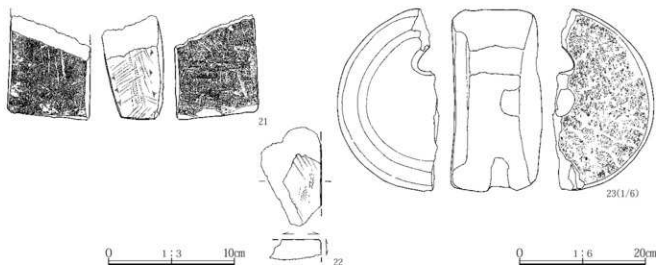


2



5(1/4)

第117图 1号堀、2号堀出土遺物(1)



第118図 2号堀出土遺物(2)

思われる。

ただし、2号堀は、その断面(C-C'セクション)を見ると、褐色土ないし黒褐色土と、ロームブロックの混土で埋まっている部分が多く、人為的に埋められたものと思われる。それに対し、1号堀には(B-B'セクション)そのような特徴が見られず自然埋没と考えられ、その点が異なっている。このため、2つの堀は同時に存在したとしても、埋没時期は異なっているものと思われる。

1号堀の出土遺物は少なく、掲載できたのは片口鉢と思われる焼締陶器1点のみで、これは15世紀前半のものと思われる。その他小破片としては土師器杯・椀類2点、同裏・壺類9点、須恵器裏・壺類1点、近現代の陶磁器と時期不明の土器の小破片が出土しているが、近現代の陶磁器は攪乱からの混入であろう。2号堀はやや多く、掲載できたのは、土師器裏1点、肥前磁器の小碗1点、常滑陶器の壺か裏2点、在地系土器片口鉢2点、同内耳鍋11点、同器種不明1点、同皿を加工した内盤状製品2点、砥石2点、石臼1点である。土師器裏が古代であるのと、肥前磁器の小碗が江戸時代であるほかは、すべて中世のもので、5の片口鉢が14世紀中頃～後半と古いのが、その他、年代の判明するものは15世紀～16世紀中葉のものが多い。その他に小破片として土師器杯・椀類11点、同高杯3点、同裏・壺類39点、同増1点、須恵器杯・椀類2点、同裏・壺類1点、近現代の陶磁器2点、近世の焙烙か鍋と思われるものが3点出土しているが、近現代のものは混入と思われる。以上のように、堀の埋土から出土する遺物はほとんどが中世のもので、そのなかでも

15世紀～16世紀中葉のものが多いことから、この時期が堀の存続年代と考えると良いと思われる(出土遺物の年代観については、193ページにあげた参考文献による)。

この堀の性格としては、その規模、形態と、中世という時代から考えて、館の外郭を囲む堀と考えるのが妥当であろう。それについて詳細は、第7章の総括で考察することにする。

第7節 溝

溝は全域で4条調査している。いずれも傾斜の通り北東から南西の方向であるが、4条とも細く、途中で途切れているため、長い距離にわたって水を流す目的のものではない。

1号溝(第119図、PL.41-5)

調査区北隅近くにある。北北東から南南西に緩やかに湾曲する溝で、南端は調査区西辺となるが、この南端部分はここで西に屈曲してさらに調査区外に延びるか、あるいはここで途切れるような形態となっている。北端は途切れている。重複する遺構はない。調査できた長さは8.90m、幅0.38～0.56m、深さ0.10～0.14mである。走行方向は両端を結ぶとN-16°-Eで、等高線にほぼ直交して掘られており、両端の底面の標高差は0.26mなので傾斜度は2.9%となるが、埋土には水の流れた形跡はない。断面形状は浅い逆台形か椀形で、A-A'セクションを実測した部分では、上面に焼土・炭化物を含む

薄い層が見られるが、同じような層は確認面で複数ヶ所見られたので、あるいは削平されてしまった部分には広い範囲で堆積していたのかもしれない。出土遺物はなく、時期は特定できない。

2号溝(第120図、PL.41-6)

調査区北東辺の中央やや西寄りにある。東にほとんど同じ規模・形態の3号溝が平行しており、この2条が一組になっているものと思われる。いずれも北側は調査区外へと延びている。両者間の距離は、内側の上端間で計測して2.15～2.35m離れている。

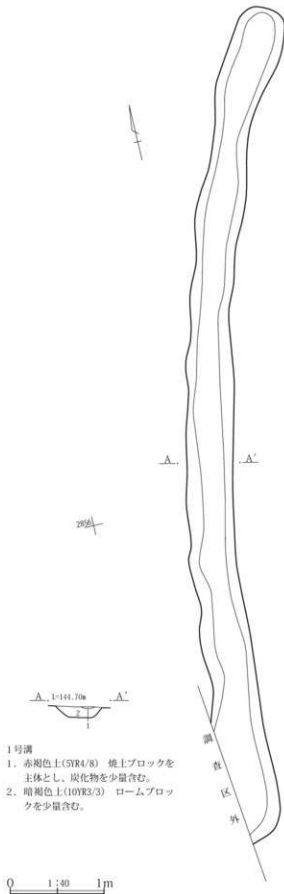
2号溝の規模は調査できた部分で長さ6.65m、幅は0.60～0.67mとほぼ一定している。ほぼ直線的に延び、断面形状は深いU字形で、底面は平坦であり、整った形状の溝である。深さは0.50m前後で一定しているが、南端のみやや深くなり0.61mである。走行方向はN-13°-Eで等高線にほぼ直交し、南北両端の底面の標高差は0.34mであり、傾斜度は5.1%である。

出土遺物はないが、次の3号溝と並行しているため、同時期のものであると考えられる。

3号溝(第120図、PL.42-1)

前述の通り2号溝の東に平行する溝である。80号土坑と重複し、本溝が新しいことは平面・断面で確認した。調査できたのは長さ6.30m分である。幅は0.46～0.59mで2号溝よりもやや狭い。ほぼ直線的に延び、断面形状は深いU字形で底面は平坦であり、3号溝と同様整った形状である。深さは0.38～0.56mであり、南北両端の標高差は0.32m、傾斜度は5.1%で2号溝と等しい。走行方向も2号溝と同様N-13°-Eである。

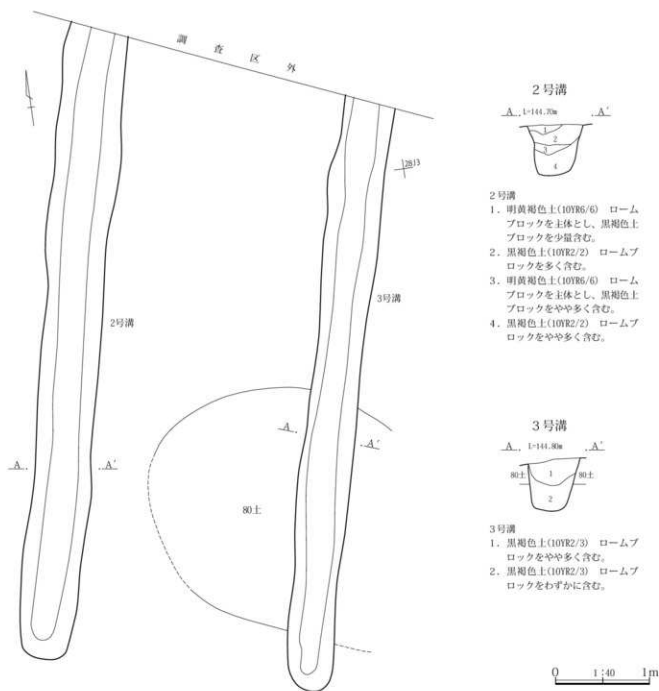
出土遺物はやや多いが、掲載できるものはない。小破片として、土師器杯・椀類9点、同糞・壺類28点、須恵器杯・椀類1点、近世の国産施釉陶器1点、同在地系土器の焙烙・銅類7点、同皿1点が出土している。近現代の遺物も陶磁器3点、瓦2点があるが、この付近は攪乱が多く入っているため、混入の可能性もある。そのため、本溝の年代は近世以降と考えられ、平行する2号溝も同じ時期のものだと判断される。なお、本溝よりも古い80号土坑からは板碑と石製品が出土しているが、時期は特定できない。



第119図 1号溝断面図

1号溝

1. 赤褐色土(SYR4/8) 焼土ブロックを主体とし、炭化物を少量含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを少量含む。



第120図 2・3号溝平面断面図

これら2・3号溝の性格は、平行していることから道の側溝である可能性がまず考えられるが、調査できた長さがわずか6m程度であり、断定することは控えたい。

4号溝(第121図、第39表、PL.42-2.64)

調査区南西隅にある細く浅い溝である。34、36～38、40、41、50号土坑という7基の土坑と重複していて、いづれよりも古いことは断面で確認した。南端部では2号堀と重複するが、わずかな部分であり、新旧関係は把握

できなかつた。南西の調査区外から北北東に延びるが、36号土坑以北でやや北に向きを変え、さらに34号土坑以北では方向が大きく変化する。50号土坑以北では浅くなり、確認できなくなる。走行方向は、36号土坑以南でN-17°E、36号土坑と34号土坑の間でN-11°E、34号土坑以北でN-21°Eである。全長は調査区境から北端の途切れる部分まで直線で計測して22.25m、幅は南端部の不自然に狭くなっている部分を除いて0.40～1.02m、深さは南部では0.10～0.12mだが、中央から

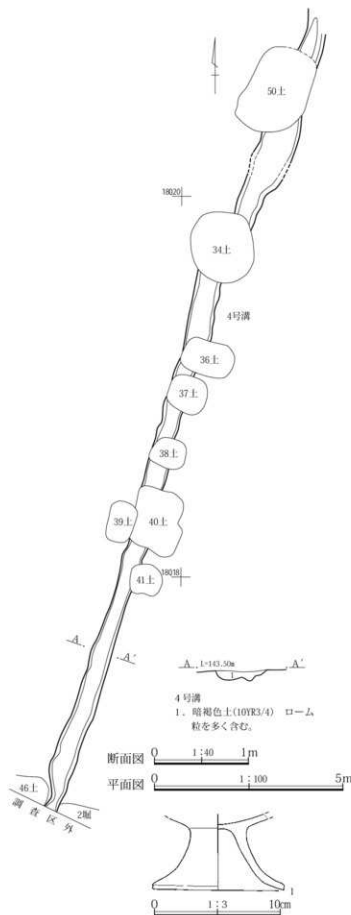
北部はやや浅く、0.05～0.09mのところが多である。

出土遺物は少なく、掲載するのは土師器小型高杯1点のみである。その他小破片として土師器杯・椀類13点、同裳・壺類14点、同埴1点、須恵器杯・椀類1点、同裳・壺類1点のほか、近世の在来系土器の焙烙・銅類4点、同皿1点が出土している。本溝を切って掘られている土坑では、遺物が出土するのは34・38号土坑であり、そこからは中世の遺物が出土している。本溝の時期は、近世遺物も5点出土しているものの、それ以外は古代のものであり、本溝より新しい34・38号土坑からは中世の遺物が出土することから、本溝は古代に属する可能性が強いものと判断される。確認面には浅い攪乱が数多く入っていたため、近世の遺物は混入であると思われる。

第8節 ピット

ピットは調査区中央やや北西、2号堀のすぐ西側に19基が集中して見つかった。各ピットの計測値などは第8表にあげたとおりである。径30～50cm程度のやや不整な円形のものが多いが、明らかに方形のものもあり、本来方形であったものはもっと多かったと思われる。深さは18cmと浅いものもあるが、最深で93cmのものもあるなど、しっかりとしたものが多い。土坑として調査したもののうち、7・8号は浅いのでピットに分類することは難しいが、48号土坑の底のピット状の部分や79号土坑はかなり深いので、本来ピットに分類すべきものであったかもしれない。それを数に入れば、合計21基ということになる。残念ながらピットの数が少なく、配置も規則的ではないので、掘立柱建物として把握することはできなかったが、深くしっかりとしたピットが多いことから、この付近に掘立柱建物があった可能性は強い。とすれば、この位置が堀の内側ということから考えて、館の一部を形成する建物がここにあったものと考えることができよう。また、99・100号土坑の壁に沿っているようなピット(11～13・16・18・19号ピット)があり、これらは土坑と建物との有機的な関係を感じさせるもので、館の構造を考える上では注目すべき点であろう。

この他の部分では、削平が深くまで及んでしまっているためか、顕著なピットを見つけることができなかった。



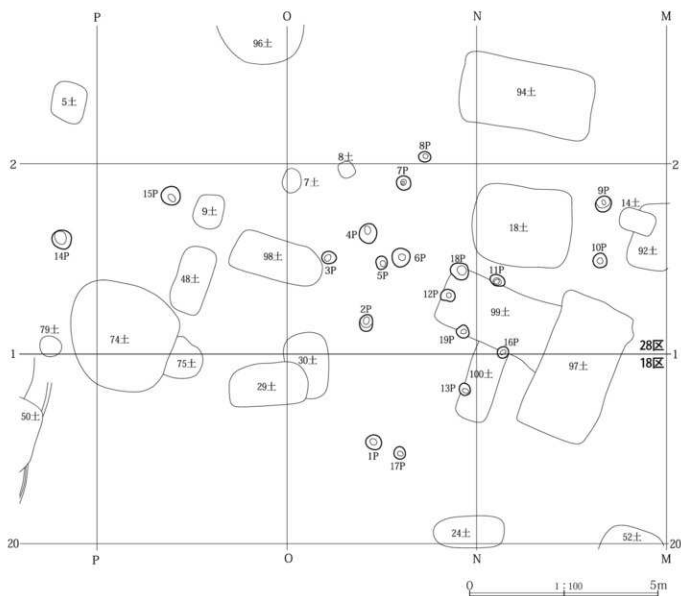
第121図 4号溝断面図、出土遺物

第4章 丑子遺跡の調査の成果

第8表 ビット一覧表

番号	グリッド	大きさ(cm)		備考
		長径×短径×深さ		
1	18区N20	43×40×36		
2	28区N1	45×35×34		
3	28区N1	40×34×18		
4	28区N1	54×47×54		
5	28区N1	36×32×46		
6	28区N1	51×50×36		
7	28区N1	42×39×50		
8	28区N2	33×28×46		
9	28区M1	45×41×36		
10	28区M1	40×39×52		

番号	グリッド	大きさ(cm)		備考
		長径×短径×深さ		
11	28区M1	43×34×62		99土と重複。
12	28区N1	39×30×56		99土と重複。
13	18区N20	34×30×56		100土と重複。
14	28区P1	54×52×93		
15	28区O1	53×51×41		
16	18区M20・ 28区M1	34×30×28		99・100土と重複。
17	18区N20	35×31×28		
18	28区N1	50×45×78		99土と重複。
19	28区N1	36×34×50		99土と重複。



第122図 ピット群平面図

第9節 遺構外出土の遺物

丑子遺跡では遺構外からも多くの遺物が出土している。ここでは各時代の遺物について、ある程度の大きさに復元できたものを中心に掲載した。

縄文時代の土器は合計で67片が出土(その時期別内訳は第9表)し、そのうち22点を掲載した。石器は合計で12点(第10表)が出土し、そのうち石鏃2点、打製石斧4点を掲載した。剥片については、石材別の組成一覧を第11表として掲載した。

土師器は杯2点、鉢1点、甕1点のほか、土製品として白玉1点を掲載した。その他小破片は数多く、土師器杯・椀類177点、同高杯17点、同甕・壺類672点、同埴1点、同皿1点、同ミニチュア土器1点、須恵器杯・椀類15点、同甕・壺類28点、同蓋3点、同瓶類10点、埴輪1点、灰釉陶器杯2点が出土している。

中・近世の陶磁器・土器は、古瀬戸瓶子と思われるもの1点、瀬戸・美濃陶器丸皿1点、常滑陶器甕2点のほか、在地系土器15点を掲載した。これらは13世紀末～16世紀代のもので、特に15世紀後半～16世紀のものが多い。

第9表 遺構外出土縄文土器分類表

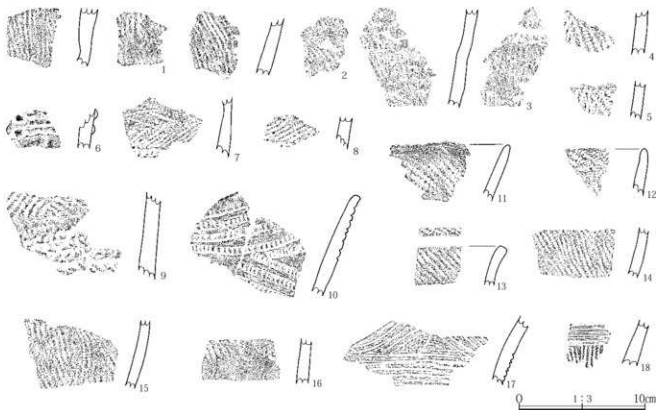
条痕文系	3
花柄下層	2
黒山	5
黒皿・有尾	12
諸磯 a	10
諸磯 b	3
諸磯 c	2
加曾利 E 3	3
加曾利 E	7
堀之内	4
不明	16
総計	67

第10表 遺構外出土石器器種別石材組成一覧

石材	石鏃	打製石斧	石核	加工痕ある剥片	合計
黒色頁岩	1	4	1	1	7
珪質頁岩	1			1	2
細粒輝石安山岩		3			3
合計	2	7	1	2	12

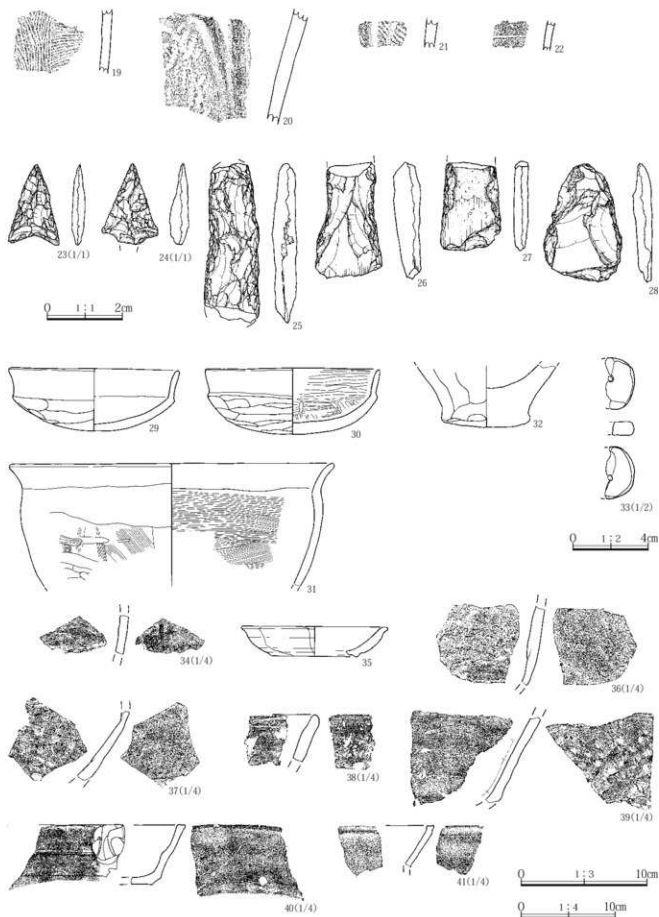
第11表 遺構外出土剥片石材組成一覧

石材	出土点数	総重量 (g)
黒色頁岩	18	533.8
頁岩	4	51.3
珪質頁岩	2	20.4
黒色安山岩	2	42.4
黒曜石	1	0.4
細粒輝石安山岩	1	1.5
合計	28	649.8

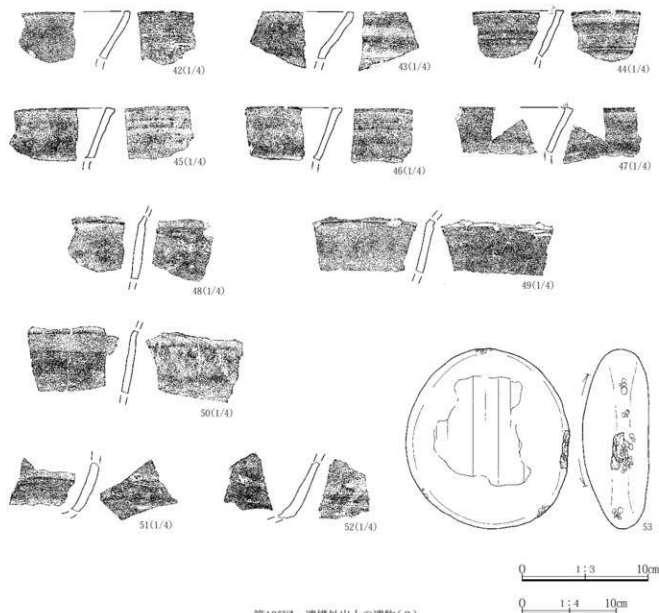


第123図 遺構外出土の遺物(1)

第4章 庄子遺跡の調査の成果



第124図 遺構外出土の遺物(2)



第125図 遺構外出土の遺物(3)

その他小破片として、中世では在地系土器片口鉢が16点、近世では、中国磁器1点、国産の施釉陶器21点、焼締陶器2点、在地系土器の焙烙・鍋類64点、皿14点、燧が・火鉢類2点が出土している。

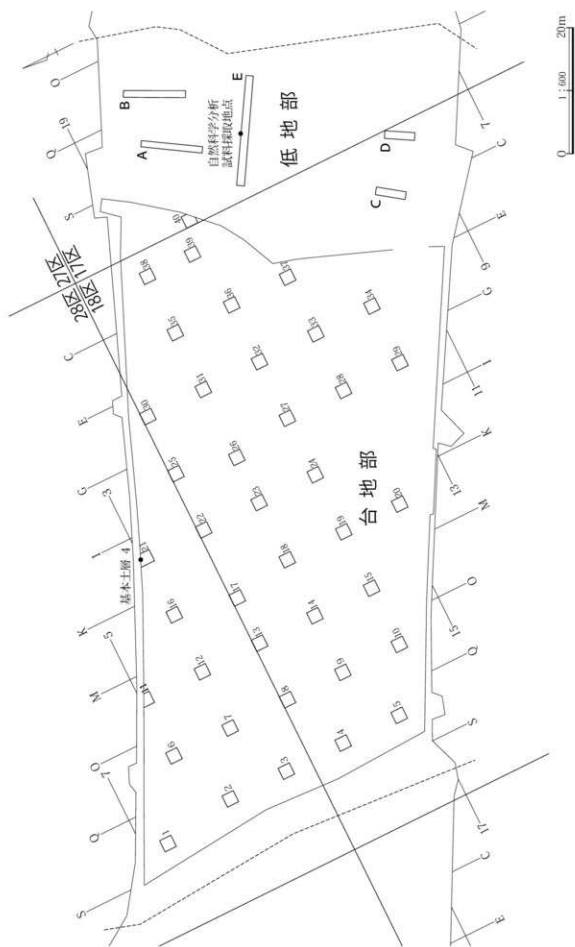
第10節 旧石器時代の調査

庄子遺跡の台地部には広い範囲にロームが残っていたため、遺構の調査が終了した後、旧石器時代の調査を行った。調査は、10m×10mの範囲ごとに2m×2mの試掘坑1ヶ所を設定し、その中をジョレンなどを用いて慎重に掘り下げ、遺物などが出土すれば周囲を掘り広げると

いう方法で行った。もちろん、上面の遺構によって既にロームがかなり削られてしまった場所については、試掘坑の場所を適宜移動したり、省略したりした。掘り下げた深さは、白川扇状地堆積物の上面までである。設定した試掘坑の配置は第126図の通りであり、合計40ヶ所、調査面積の合計は160m²（対象面積の約2.6%相当）である。

以上のようにして行った調査の結果、旧石器時代の遺物・遺構は全く出土しなかった。

なお、本遺跡のロームの堆積状況は第9図の基本土層4に示したとおりである。



第1268図 丑子遺跡旧石器時代調査坑・低地部トレンチ配置図

第5章 上細井五十嵐遺跡の調査の成果

第1節 成果の概要

上細井五十嵐遺跡は、5ページで述べたようにA～C区の3区に分けて調査しているが、地形的にはやや複雑な位置に立地している。東側のA区は、東に隣接する丑子遺跡とは高さ約3mの崖で明瞭に画され、全体に浅く広い谷地形となっている。ここには中央にAs-Bが堆積しており、その下面に水田が存在することが確認された。

B区は全体としては西へ向かって高くなる地形であるが、中央には旧河道が入り、大きな転石が数多く存在するため、遺構は南北のやや高い部分のみ存在した。その西側は谷地形となり、遺構は存在しない。さらに西側にあるC区は、西に隣接する天王遺跡へと続く登り傾斜の斜面となり、遺構が存在する。

このような地形の中で調査し以下に報告する遺構は、竪穴住居5軒、土坑10基、溝4条、水田1面である。なお、丑子遺跡と本遺跡とを画する崖に沿って、すなわちA区の東辺に沿った部分には、南北方向の自然河川跡が埋もれていることが判明したが、トレンチ調査の結果、埋土から近世や近代の遺物が出土することから、それ以後に埋没した新しい河川であることが判明した。そのため今回は遺構として取り上げず、近世の出土遺物のみ第6節で取り上げることにした。

竪穴住居はB区とC区とに存在する。C区のC-1号住居は黒浜・有尾式、諸磯a式の土器が出土し、縄文時代前期中葉～後葉のものと思われるものである。竪穴住居はこの1軒しか見つかっていないが、周囲の包含層から出土した土器も同時期のものしか出土しておらず、近傍に別の住居があったとしても同時期のものと思われる。集落としては短期間であった。その他の4軒は平安時代のものである。ただし、C-3号住居は出土遺物がほとんどなく、住居の形態で平安時代と判断したものである。残る3軒の住居、すなわちB-1号、B-2号、C-2号の3軒は、出土遺物からいずれも10世紀後半のものであり、この時期の集落がやはり短期間、B区からC区にかけて存在していたことが分かるが、散在的な

分布状態である。

土坑はB区で6基、C区で4基を調査した。B-1号土坑からは江戸時代の在地系皿が4点出土し、あるいは墓であるかもしれない。近くにあるB-2号土坑からは遺物は出土しないものの焼土が散っているのがみられ、これも同時期の墓である可能性がある。B-6号土坑からは縄文時代中期加曾利E式の土器と石器が出土し、周囲の包含層からも同時期の土器が多数出土していることから、付近に同時期の集落があった可能性が高い。縄文時代前期のC-1号住居の近くにあるC-2号土坑からは諸磯a式の土器、C-4号土坑からは石器が出土しているため、これらの土坑も住居と同時期である可能性がある。その他、C-3号土坑からは古墳時代後期の杯が出土している。

溝はA区で1条、C区で3条を今回報告している。A-3号溝はAs-B以前に遡る可能性があるものであるが、底面の傾斜が地形と逆になっており、区画溝と考えられる。C区の3条のうち、1号と2号は近世以降のものであるが、ごく短い範囲しか調査できておらず、流水の痕跡も見つかっていないので、用途は分からない。4号は時期不明の溝であるが、途中で途切れているため、何らかの区画に関わる可能性がある。

水田はA区で見ついている。ここは浅く広い谷地形で、東西両端を除いた中央部に広くAs-Bが1次堆積しており、その下面で水田が見つまっている。明瞭な畦はなかったが、As-B残存範囲の東半分、わずかな段差がほぼ東西南北方向に延びているのが確認され、緩やかな棚田状に水田が造成されていたものと思われる。As-B残存範囲の東端には、南北方向に溝の痕跡が見られるので、ここに給用水の溝が通っていたと思われるが、ごく浅いもので不明瞭な状態であった。南半部にはAs-Bが残っていない部分が細長く東西に延びているが、これは大畦の痕跡の可能性も考えられる。なお、この水田部分ではプラントオパール分析を行っている。As-B下面とともに、その下層からもイネのプラントオパールが見つかっており、この部分の開田時期はAs-B降下よりもかなり遅ることが判明している。

第2節 竪穴住居

竪穴住居はB区2軒、C区3軒の、合計5軒を調査した。これらのうち、C区のC-1号住居のみは縄文時代前期のものであり、残りの4軒は平安時代のものである。B区は5ページで前述したように、中央部分に旧河道があり、そのため住居は南北に離れて存在しているだけである。いずれも10世紀後半のもので、C区のC-2号住居も同様であり、この付近にその時期の集落が存在したことが分かる。C区は西隣の天王遺跡から続く台地が東の谷に向かって下がる斜面に当たっており、その斜面に竪穴住居が作られている。

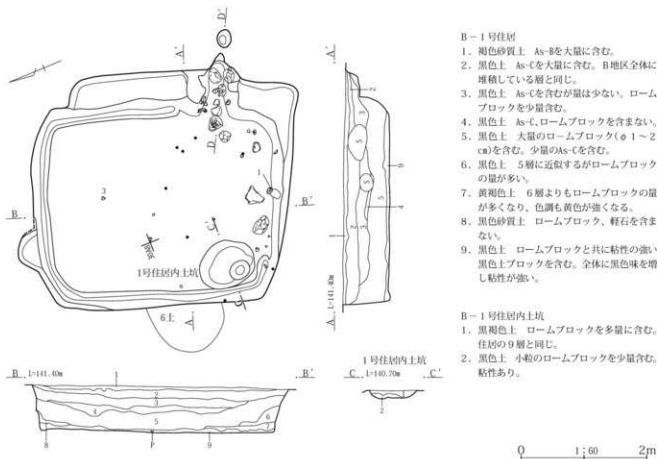
B-1号住居(第127・128図、第42表、PL.43-1~4,65)

B区の南西側調査範囲にある。この部分では、住居の北側から住居がある付近が高くなっており、そこから南西、東方向に向かって下がっている。すなわち、住居は緩やかな尾根の上の部分にあることになる。

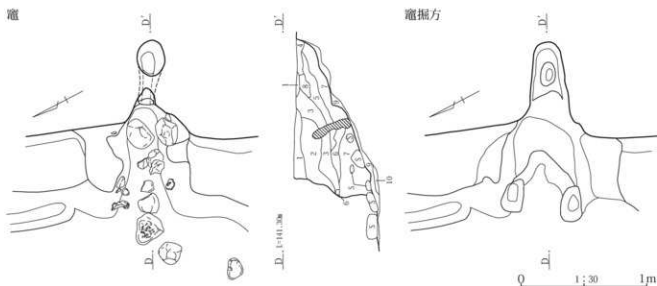
位置 29区T7・8、30区A7・8。 **重複遺構** 北西壁に6号土坑が重複する。本住居が新しい。 **形状** 長方形だが、竪のある南東辺にはテラス状の段がある。

主軸方位 N-110°-E。 **規模** 3.76×4.10m。

床面積 テラス状の部分を除いて10.42㎡、テラス状部分を入れると12.54㎡である。 **壁高** 66~71cm。テラス状の部分は12~23cm。 **埋没土** As-C軽石を含む黒色土で主に埋没している。埋没土中には最大長60cmにも及ぶ自然礫が混入している。特に大きな礫は覆土中へ上層に含まれているので、埋没する過程で周囲から混入したものと考えられる。 **床面** 掘方はなく、地山を直接床面としている。 **柱穴** 確認できなかった。 **竪** 南東壁の南寄りにある。掘方平面図を見ると、焚き口部分の両脇に浅いビット状の凹みがあり、これは石を立てて焚き口を作っていた痕跡と思われる。とすれば、この竪は袖を作らず、テラス状の部分に燃焼部を作り、煙道が壁の外側に張り出す構造だと思われる。煙道部分は天井部を作っていたと思われる焼土(D-D'セクションの8層)が残り、煙道のトンネルが残存していた。全長は



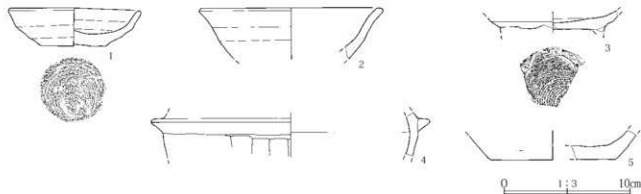
第127図 B-1号住居平面断面図



B-1号住居竈

1. 黒色土 As-Cを含むが、周辺のAs-C含有の黒色土より量が少なく色調も淡い。
2. 黒色土 As-Cと小粒のロームブロックを少量含む。焼土・炭化物は少ない。
3. 黒色土 2層に類似するがロームブロックが多くなる。若干の焼土粒を含む。

4. 黄灰色土 ロームブロックと焼土を含む。
5. 黒褐色土 焼土(少量)と大粒のロームブロックを含む。
6. 黄色土 ロームブロックが主体。天井部が落ちたものか。
7. 黒色土 ロームブロックを含まない。焼土粒はほとんどない。
8. 赤色土 焼土。天井部の残り。良好に焼けている。
9. 黒色土 若干の焼土粒を含むが基本的には均一の上。掘方。
10. 赤褐色土 ローム面が焼土化している。掘方。



第128図 B-1号住居竈平面断面図、出土遺物

142cm、焚き口幅は石の据え付け痕の内法を計測すると30cm、燃焼部の幅は25cm、壁外への張り出しは70cmである。竈内と前面には長さ10～25cmの礫があり、中には赤く焼けているものもあるので、これらは竈の構築材であった可能性が高い。それらの中には縄文時代の多孔石もあったが、それは本章第6節(170ページ)で取り上げる。貯蔵穴 調査範囲内では確認できなかった。南西隅にはやや不整な楕円形の土坑(1号住居内土坑、長径92cm、短径74cm)があったが、9～14cm程度の浅さしかなく、貯蔵穴とは認めがたい。ただし、この土坑の埋没土は住居の埋没土と共通するので、住居使用時には存在していたものである。周溝 南東壁の竈北側から北東・北西壁にかけて存在する。幅15～20cm、深さ2～6cm

の比較的明瞭な周溝である。掘方 存在しない。遺物 遺物は全体に少ない。掲載したのはいずれも須恵器で杯1点、椀2点、羽釜2点である。このうち1の須恵器杯は南西壁際から出土したが、床面からは50cm浮いている。3の須恵器椀は中央やや北東寄りから出土したが、これもやはり床面から45cmも浮いた高さから出土している。他はいずれも覆土からの出土である。その他、小破片として土師器杯・椀類2点、同壺・壺類3点、須恵器杯・椀類5点、同内面磨きの内黒椀2点、同蓋1点、同皿1点、同壺・壺類1点、同上釜17点が出土している。時期 床面直上から良好な遺物が出土していないので、やや不確実ではあるが、時期は10世紀後半と考えられる。

B-2号住居(第129・130図、第42表、PL.43-5~8,65)

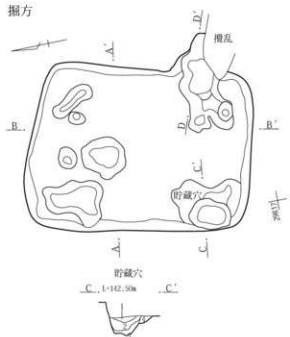
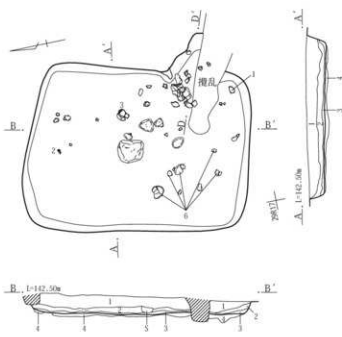
B区の北側調査範囲の北西隅付近にある。この付近は南西に向かって下がる緩やかな斜面である。

位置 29区Q・R17。 **重複遺構** 重複遺構はないが、竈部分に攪乱がかり、大きく破壊されてしまっている。

形状 北東辺にやや歪みがあるが、南北方向に長い長方形である。 **主軸方位** N-112°-E。 **規模** 2.58×3.52m。 **床面積** 7.73㎡。 **壁高** 19~31cm。 **埋没土** As-Cを含む黒色土で主に埋没している。 **床面** 全体に浅い掘方を、ロームブロックと黒色土ブロックの混土で埋め戻して床面とする。床面は平坦で固く締まっている。特に竈前は固い。 **柱穴** 確認できなかった。

竈 南東壁の南端近くにある。攪乱により南側半分を破壊されている。北側にはごく短い袖が残るものの、燃焼部の大部分は壁の外に設けられているものと思われる。全長は北側の袖先端から計測して85cmと推定され、その

うち60cmが住居外に張り出している。 **貯蔵穴** 床面では確認できなかったが、掘方調査で南西隅から不整形円形の小土坑が見つかり、これが貯蔵穴であると思われる。長径は67cm、短径は48cm、深さは床面から計測して31cmである。 **周溝** 確認できなかった。 **掘方** 全体に浅いが、北部には土坑状に12~13cm深く掘っている部分がある。底面は細かい凹凸が見られる。 **遺物** 遺物は竈内から竈前にかけての位置を中心として、ほぼ全体に散在して出土しているが、床面直上出土の遺物はほとんどない。掲載遺物はいずれも須恵器で、椀3点、大型椀2点、土釜2点である。4・5の椀、7の土釜は竈内から出土している。その他、小破片として土師器甕・壺類2点、須恵器杯・椀類5点、同羽釜・土釜類11点が出土している。 **時期** 出土遺物から10世紀後半のものと考えられる。



B-2号住居

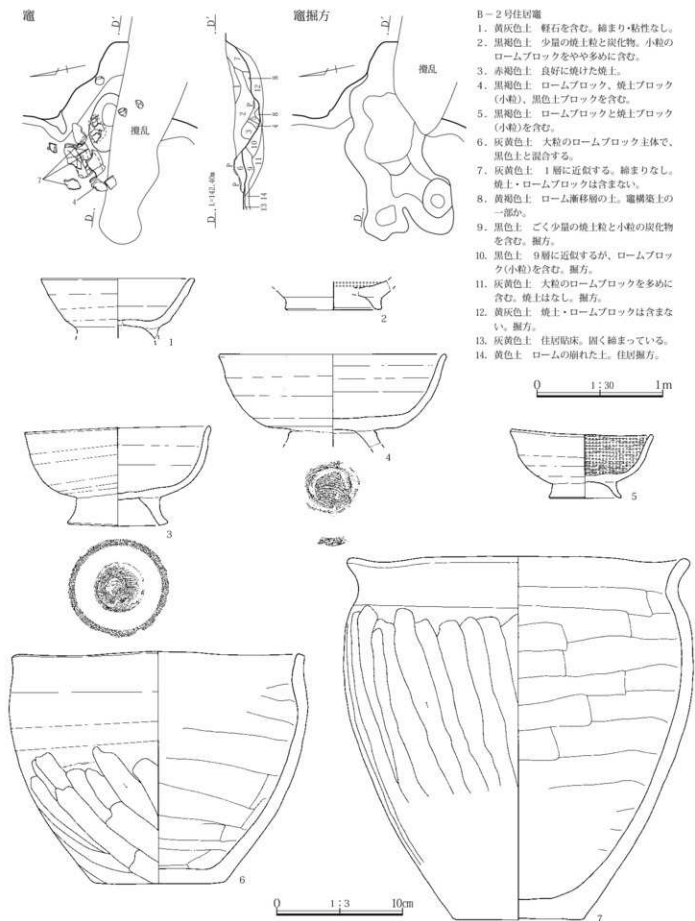
1. 黒色土 As-Cを含む。締まり・粘性なし。
2. 黒色土 1層よりAs-Cの量が少なくなる。締まり・粘性なし。
3. 黒褐色土 ロームブロックを混入する。粘性なし。締まりあり。
4. 黒褐色土 上面は固く締まっており住居全体に及ぶ。特に竈前が顕著。φ2cmのロームブロックと黒色土ブロックの混入土。掘方。

B-2号住居貯蔵穴

1. 黒褐色土 ロームブロックを混入する。粘性なし。締まりあり。
2. 黒色土 ロームブロックを少量含む。軽石を多めに含む。
3. 黄褐色土 大粒のロームブロックを多量に含む、その分黄色味が強くなる。
4. 黒褐色土 小粒のロームブロックを含む。



第129図 B-2号住居平面断面図



第130図 B-2号住居竪断面図、出土遺物

C-1号住居(第131・132図、第12・13・42・43表、PL.44-1~4.65)

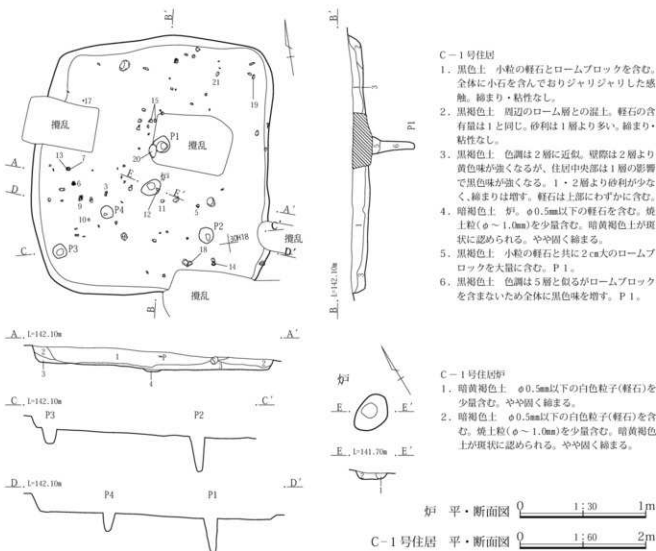
C区は西隣の天王遺跡から続く台地が、東の谷にむかって下がる場所にある。C-1号住居はその東向き斜面に存在する縄文時代の住居である。重複する遺構はないが、複数の攪乱によって破壊されている部分がある。

位置 30区G・H17・18。 **重複遺構** なし。 **形状** やや歪んだ長方形である。 **主軸方位** 長軸方向で計測してN-11°-E。 **規模** 中央付近で計測して4.10×3.75m。 **床面積** 攪乱で破壊された部分を復元すると、推定12.90㎡。 **壁高** 6~30cm。 **埋没土** 黒色土・黒褐色土で埋没しているが、最下層を除いて小石を含み、ジャリジャリとしている。同様な土は4号土坑にも見られ、本遺跡の縄文時代の特徴と思われる。 **床面** 表面はほぼ平坦だがあまり固くない。表面の高さは東

に向かってわずかに下がっている(A-A'セクションやエレベーション図参照)が、これは東にある谷の影響で、住居廃絶後から現在までの間に若干の地盤沈下や地滑りがあったためとも考えられ、当初のものではない可能性もある。 **柱穴** 柱穴の可能性のあるピットは中央に1基、南半部に3基見つかっているだけで不規則であり、どのような構造の住居なのか、判断としない。それぞれの大きさは以下の通り(長径×短径×深さ、cm)。

- P 1 28×25×67(攪乱底面で計測)
- P 2 25×22×55
- P 3 23×21×25
- P 4 21×19×30

炉 住居中央付近に焼土をわずかに含んだ凹みがあり、ここが炉であると考えられる。ただし、焼土の量は少なく、それだけからみればあまり使用頻度が高かったとは

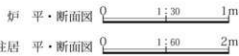


C-1号住居

1. 黒色土 小粒の軽石とロームブロックを含む。全体に小石を含んでおりジャリジャリした感触。締まり・粘性なし。
2. 黒褐色土 周辺のローム層との混生。軽石の含有量は1と同じ。砂利は1層より多い。締まり・粘性なし。
3. 黒褐色土 色調は2層に近似。壁層は2層より黄色味が強くなるが、住居中央部は1層の影響で黒色味が強くなる。1・2層より砂利が少なく、締まりは増す。軽石は上部にわずかに含む。
4. 暗褐色土 炉。φ0.5mm以下の軽石を含む。焼土粒(φ~1.0mm)を少量含む。暗黄褐色土が現状に認められる。やや固く締まる。
5. 黒褐色土 小粒の軽石と共に2cm大のロームブロックを大量に含む。P1。
6. 黒褐色土 色調は5層と似るがロームブロックを含まないため全体に黒色味を増す。P1。

C-1号住居炉

1. 暗黄褐色土 φ0.5mm以下の白色粒子(軽石)を少量含む。やや固く締まる。
2. 暗褐色土 φ0.5mm以下の白色粒子(軽石)を含む。焼土粒(φ~1.0mm)を少量含む。暗黄褐色土が現状に認められる。やや固く締まる。



第131図 C-1号住居平断面図、炉平断面図

思えない。いわゆる地床炉であり、凹みは長径34cm、短径23cmの楕円形で、深さは6cmである。遺物 全体に散在して出土している。床面直上から出土するものはごく少なく、土器も小破片のものばかりなので、住居の埋没過程で流れ込んだ遺物がほとんどを占めるものと考えられる。土器は合計46点(黒浜・有尾36点、諸磯a 10点)が出土し、そのうち16点を掲載した。1～14が黒浜・有尾式であり、15・16が諸磯a 式のものである。石器は16点が出土し、そのうち5点を掲載した。石鏃1点、打

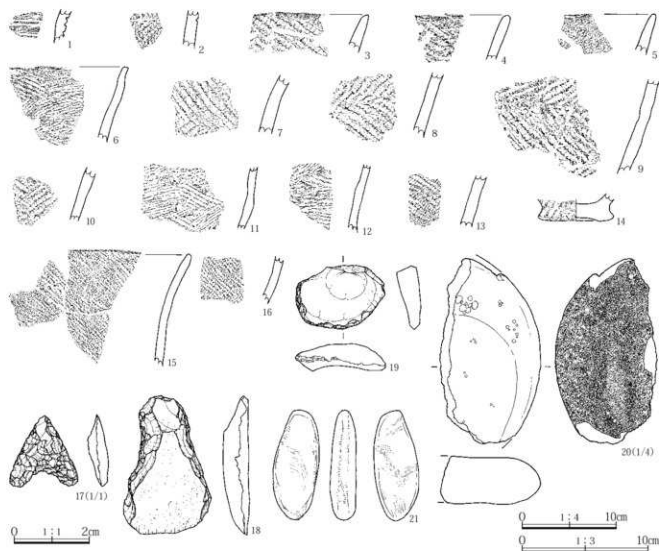
製石斧1点、加工痕ある剥片1点、石皿1点、石製研磨具1点である。石器と剥片の石材組成は第12・13表に示したとおりである。所見 本遺跡では唯一の縄文時代の住居である。出土遺物は流れ込みの可能性が強く、住居に確実に伴うものはないので時期決定は困難であるが、住居の形態も含めて、前期中葉～後葉のものであると思われる。本章第6節「遺構外出土の遺物」でも触れるように、C区からは黒浜・有尾式と諸磯a 式しか出土していないので、比較的短期間の集落であったらしい。

第12表 C-1号住居石器種別石材組成一覧

石材	石鏃	削器	打製石斧	加工痕ある剥片	石皿	石製研磨具	合計
黒色頁岩		4	1	6			11
頁岩				1			1
黒曜石	1						1
粗粒輝石安山岩					1		1
変質安山岩				1		1	2
合計	1	4	1	8	1	1	16

第13表 C-1号住居剥片石材組成一覧

石材	個数	総重量(g)
黒色頁岩	19	531.9
頁岩	3	6.5
合計	22	538.4



第132図 C-1号住居出土遺物

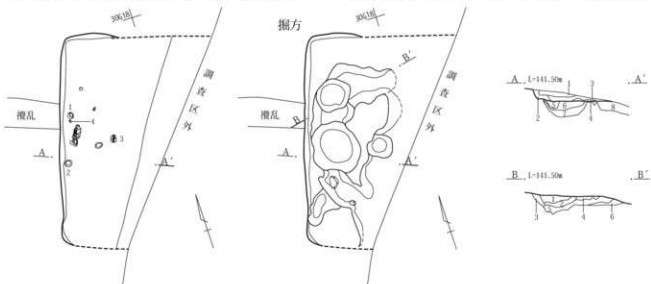
C-2号住居(第133図、第43表、PL.44-5~7,66)

C区の調査区東辺にあり、半分以上が段差で破壊されている。この部分は東に向かって下がる斜面が急傾斜となる部分であり、そのため、埋没土も三角形に残っているにすぎない。

位置 30区F・G17。 **重複遺構** なし。 **形状** 南東部の半分以上が調査区外となり、ここで段差が作られて破壊されているが、方形であると思われる。北西辺は残っているが、この辺は直線的に延び、両端の隅部はほぼ直

角をなしているので、方形だとすれば歪みの少ない形状であると思われる。 **主軸方位** 北西辺の方向を計測すると、N-19°E。 **規模** 北西辺近くしか残っていないので、この部分で計測すると、長さ3.43mである。

床面積 推定範囲(第133図の破線の部分)も含めて計測すると、残存部分で5.57㎡。 **壁高** 最も残っている部分で17cm。 **埋没土** A-A'セクション図の部分では上層に顕著な焼土層があるが、これは部分的であり、しかも上層に限定されるので、この住居に直接関係するも

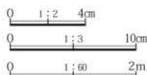
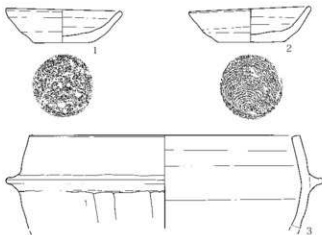


C-2号住居(A-A')

1. 焼土 よく焼けた焼土であるが上部に限定される。
2. 黒褐色土 ロームブロックを含むが焼土はない。
3. 黒色土 小粒のロームブロックを少量含む。焼土はない。
4. 黒色土 ロームブロック等を含まない。掘方。
5. 黄褐色土 大粒のロームブロックを多量に含む。炭化物少量含む。床下土坑。
6. 黒色土 ロームブロックを含まない均一の上。床下土坑。
7. 黒色土 6層より色調は黒く、ロームブロックを含む。特に底面近くが多い。床下土坑。
8. 黒色土 ロームブロックを含む。特に上部に多い。掘方。

C-2号住居床下土坑(B-B')

1. 黒色土 焼土粒子と小粒の炭化物を含む。
2. 赤褐色土 大量の焼土だけで構成される。
3. 黒色土 上部に大粒のロームブロックを含む。全体に小粒のロームブロックと焼土粒子を含む。
4. 黒色土 焼土、黒色土ロームブロックを含まない。
5. 黄褐色土 小粒のロームブロックを大量に含み、ボソソとして締まりなし。
6. 黄褐色土 下部ローム層の上が主体で、黒色土をブロック状に含む。

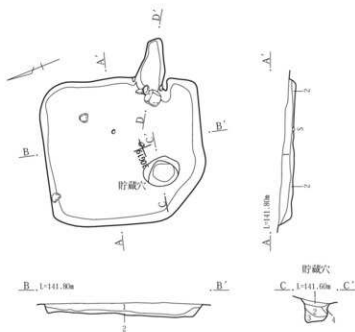


第133図 C-2号住居平面断面図、出土遺物

のではない。その下層は焼土を含まない黒色土や黒褐色土で埋没している。床面 掘方は土坑状に掘られている部分が多く、それらを埋め戻して床面としている。床面表面は平坦だが、あまり硬化していない。柱穴 掘方調査でも確認できなかった。竈 確認できなかった。東側にあるものと思われる。貯蔵穴・周溝 確認できなかった。掘方 掘方には土坑状の掘り込みがいくつか見られ、凹凸が顕著である。それぞれの埋没土を見ると、何回かに分けて掘削・埋没したようであり、竈の構築などに用いるローム土などを掘削した可能性が考えられる。B-B'セクションにみるように、中層に大量の焼土を含む部分もあり注目されるが、焼土の性格は不明である。遺物 遺物は北西壁中央付近に集中し、床面からやや浮いた高さから出土している。掲載したのは、須恵器小皿2点、同羽釜1点、鉄製品(刀子)である。このうち2の小皿は焼土(A-A'セクションの1層)中から出土している。その他小破片として、土師器甕・壺類2点、須恵器杯・椀類5点、同羽釜・土釜類11点が出土している。時期 出土遺物からみて10世紀後半のものと思われる。

C-3号住居(第134・135図、PL.44-8~45-2)

C区の調査区東辺近くで、傾斜が緩い場所にある小型の住居である。



第134図 C-3号住居平面断面図

位置 30区F・G18・19。重複遺構 なし。形状 長方形の一つの角(南西隅)を切り取ったような形状である。主軸方位 N-111°-E。規模 2.36×2.52m。床面積 4.51㎡。壁高 8~24cm。埋没土

As-Cと思われる軽石を含む黒色土で埋没している。軽石は上層ほど多い。床面 地山を直接床面としている。平坦であるが、東に向かってわずかに傾斜している。

柱穴 確認できなかった。竈 南東壁の南端近くにある。全長100cm、幅67cm、燃焼部幅30cmである。両袖は短く、燃焼部の大部分は住居外にあり、壁外に64cm張り出している。焚き口部分には4個の礫がある。両脇にある2個(掘方の図に見られるもの)は袖の先端付近に位置するため、焚き口の一部を成していた石と考えることができるが、通常焚き口の両脇に据えられる石としてはやや小さいため、断定はできない。覆土には多くの焼土を含むので、よく使用されていたことが分かる。貯蔵穴

住居南西隅にある土坑が貯蔵穴と思われる。59×45cmの楕円形で、深さは48cmである。埋土は黒色土で住居の埋没土とほぼ共通し、住居使用時には開口していたものと思われる。周溝 確認できなかった。掘方 なし。遺物 遺物は須恵器甕・壺類の小破片が1点出土しているのみである。時期 出土遺物がないので時期は不明であるが、住居の形態からみて平安時代のものである。

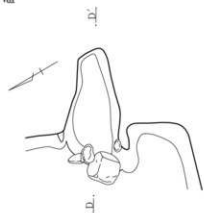
C-3号住居

1. 黒色土 大粒の軽石を多めに含む。
2. 黒色土 軽石の量が1層より少なくなる。
壁際にロームブロックを含む。

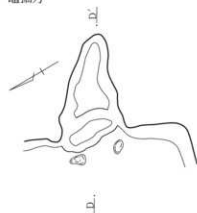
C-3号住居貯蔵穴

1. 黒色土 ロームブロック等の混入なし。軽石も含まない。
2. 黒色土 1層に小粒のロームブロックを少量含む。
3. 黒色土 ロームブロックの含有が多くなる。
1・2層と比べやや明るい色調。
4. 黄褐色土 ロームブロック主体。壁の崩落に伴うブロックと考えられる。

竈



竈掘方



0 1:30 1m

C-3号住居竈

1. 黒色土 焼土粒子をブロック状に含む。
2. 赤褐色土 全体に褐色を呈し焼土ブロック(大粒)を多く含む。
3. 赤褐色土 焼土ブロックが主体。
4. 淡黒色土 焼土粒を若干含む。
5. 赤褐色土 小粒の焼土粒子をまんべんなく含む。
6. 淡褐色土 焼土粒を若干含むが量は少ない。
7. 赤褐色土 焼土ブロックを多く含む。
8. 黒色土 小粒の焼土粒を少量含む。

第135図 C-3号住居竈平面断面図

第3節 土坑

調査した土坑はB区4基、C区4基の計10基である。いずれも削平を受けているようで浅い。それぞれのデータは第14表にまとめたとおりである。

B区では南側に4基の土坑がある。B-1号土坑(第136図、第43表、PL.45-3,66)は不整形の土坑である。人骨の出土はないが、近世の在地系土器皿が4点まるとまって出土しているので、墓の可能性もある。土器の周囲には焼土が見られたが、その東にあるB-2号土坑(第136図、PL.45-4)にも焼土が点在しているため、これも墓の可能性を考慮することができよう。ただし、B-2号土坑からは縄文土器の小破片2点が出土したのみで、近世の遺物が出土しているわけではない。B-5号土坑(第137図、PL.45-7)は遺物がなく時期・用途とも不明である。B-6号土坑(第137図、第43表、PL.45-8,66)は東半部をB-1号住居に壊されている。加曽利E式の土器3点と打製石斧1点、台石1点を掲載したが、その他縄文土器の小破片10点が出土している。これらの遺物から縄文時代中期の土坑と思われる。B区からは遺構外からも加曽利E式の土器が多く出土しており(170ページの第15表参照)、この付近に同時期の住居が存在していたことを窺わせる。

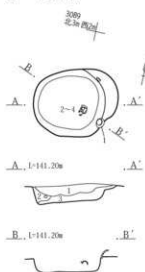
B区の北側には2基の土坑がある。B-3号土坑(第136図、PL.45-5)、B-4号土坑(第136図、PL.45-6)とも不整形の土坑で遺物が出土しないため、時期・用途共に不明である。

C区には4基の土坑がある。C-2号土坑(第137図、第43表、PL.46-2,66)は不整形の楕円形で、諸磯a式の縄文土器片1点が出土している。C-4号土坑(第138図、第44表、PL.46-4,66)は浅い円形の土坑で、縄文時代の石器2点が出土している。これらの遺物から、この両者はC-1号住居(縄文時代前期中葉～後葉)に近い時期のものである可能性が高いと思われる。C-3号土坑(第138図、第44表、PL.46-3,66)は円形で深いので、ピットに近い形状である。7世紀代の土師器杯1点が出土している。本遺跡ではこの時代の遺物は少なく、遺構もこれのみである。C-1号土坑(第137図、PL.46-1)は遺物が出土せず、平面形・断面形共に不整形であり、時期・用途共に不明である。

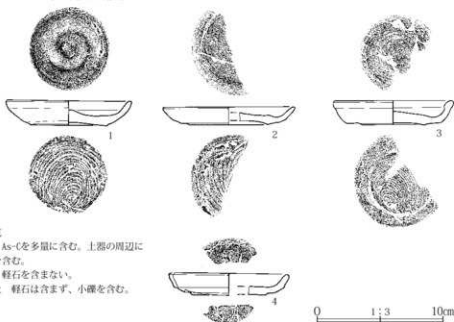
第14表 上細井五十嵐遺跡土坑一覧表

番号	所在グリッド	主軸方位	大きさ (m)	備考 () 内は小破片のため未掲載の遺物数
			長辺×短辺×深さ	
B-1	30区 B 9	N-62°-E	0.91×0.72×0.18	近世皿4 (同1)
B-2	30区 A・B 8・9	N-3°-W	1.08×0.92×0.12	(縄文土器2)
B-3	29区 Q15	N-64°-W	1.10×0.76×0.26	
B-4	29区 P15	N-88°-E	0.95×0.67×0.28	
B-5	30区 A 9	N-0°	0.78×0.67×0.37	
B-6	30区 A 7・8	N-84°-E	[0.77]×1.12×0.38	B-1 住より古い。縄文土器3、打製石斧1、台石1 (縄文土器10)
C-1	30区 H19	N-70°-W	1.60×1.40×0.38	
C-2	30区 G17・18	N-5°-W	1.66×1.14×0.49	縄文土器1
C-3	40区 H 2	N-4°-W	0.53×0.48×0.49	土師杯1
C-4	30区 G19	N-25°-E	2.45×2.18×0.23	打製石斧1、加工痕ある剥片1

B-1号土坑



B-1号土坑出土遺物

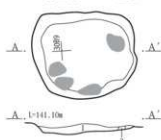


B-1号土坑

1. 黒色土 As-Cを多量に含む。土器の周辺に焼土粒を含む。
2. 黒色土 軽石を含まない。
3. 黒褐色土 軽石は含まず、小礫を含む。

0 1:3 10m

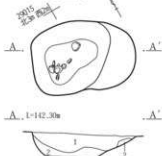
B-2号土坑



B-2号土坑

1. 黒色土 As-Cを含む。
2. 赤褐色土 よく焼けた焼土。單付近に数ヶ所存在する。

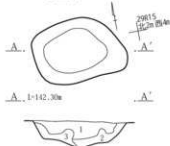
B-3号土坑



B-3号土坑

1. 黒色土 軽石と小礫を含む。黒色土ロームブロックは含まない。
2. 黒褐色土 ロームブロックを含む。小礫は含まない。

B-4号土坑



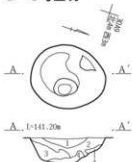
B-4号土坑

1. 黒色土 軽石を少量含み小礫を多く含む。全体にザラザラしている。
2. 褐色土 小礫はなく均一な土層。
3. 黄褐色土 大粒のロームブロックを含み全体的に黄色味が強い土層。

0 1:40 1m

第136図 B-1～4号土坑平面図、B-1号土坑出土遺物

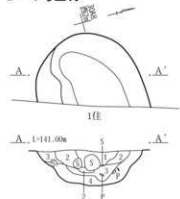
B-5号土坑



B-5号土坑

1. 黒色土 ロームブロックの混入なし、均一な土層。
2. 黒褐色土 ロームブロックを含み、やや色調が明るくなる。
3. 褐色土 全体的に明るい色調。
4. 黄褐色土 ローム層を基調とし黒色土ブロックを含む。軟質で下部ローム層とは区別できる。

B-6号土坑

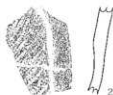


B-6号土坑

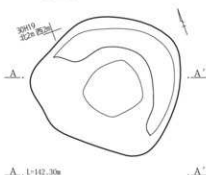
1. 黒色土 軽石・ロームブロックを含まない均一な土層。
2. 黒褐色土 ロームブロック(大粒)を少量含み1層より明るい色調。縮まりも増す。
3. 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。
4. 黒褐色土 多量の炭化物を含みロームブロックの量も多い固く引き締まっている。下部のローム層とは明確に分離できる。



B-6号土坑出土遺物



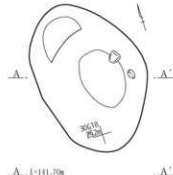
C-1号土坑



C-1号土坑

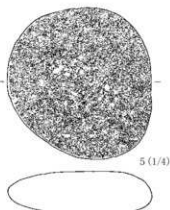
1. 黒褐色土 軽石を少量含む。縮まり・粘性なし。
2. 黒色土 1層より軽石の量が多くなり全体的に黒色味を増す。縮まりあり。粘性なし。
3. 黒褐色土 φ2cmのロームブロックを大量に含む。軽石は含まない。縮まりあり。粘性なし。
4. 黄色土 ロームブロック主体で黒色土ブロックを含む。縮まりあり。粘性なし。

C-2号土坑



C-2号土坑

1. 淡黒色土 軽石を少量含む。全体的に淡い色調であるが小粒の黒色土をブロック状に含む。縮まり・粘性なし。
2. 黒褐色土 小粒の軽石とφ1~2cmのロームブロックを含む。全体に小礫を多く含む。1号住居の覆土に似る。縮まりあり。粘性なし。
3. 黒褐色土 2層に類似するが全体的に褐色味が強くなる。縮まりあり。粘性なし。
4. 黒褐色土 3層に大粒のロームブロックを含んだ土層。縮まり・粘性なし。

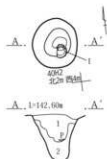


C-2号土坑出土遺物



第137図 B-5・6、C-1・2号土坑断面図、B-6・C-2号土坑出土遺物

C-3号土坑



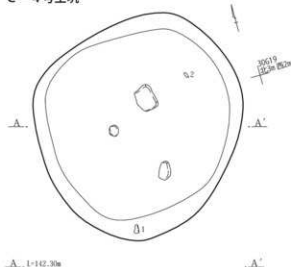
C-3号土坑

1. 黒色土 多量の軽石を含む。締まりあり。粘性なし。
2. 黒色土 軽石は含まず均一な土層。締まりあり。粘性なし。

C-3号土坑出土遺物



C-4号土坑

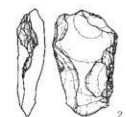
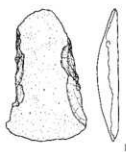


C-4号土坑

1. 黒色土 小粒の軽石とロームブロックを少量含む。締まり・粘性なし。小礫を多く含むジャリジャリしており1号住居の覆土と似る。
2. 黄褐色土 大粒のロームブロックを主体とし黒色土ブロックが混在する。軽石は含まない。



C-4号土坑出土遺物



第138図 C-3・4号土坑断面図、出土遺物

第4節 溝

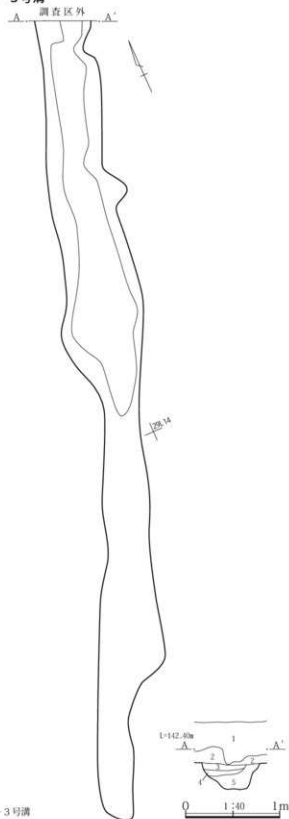
溝は調査当初、A区で3条、C区で4条の計7条と考えたが、そのうちA-1号溝、A-2号溝としたものは、整理作業の結果、近現代にまで下るものであることが判明したことから、本報告では取り上げないこととした。また、C-3号溝としたものは、調査途中で遺構ではないことが判明したため欠番とした。ここで報告するのは、A区で1条、C区で3条の溝である。また、A区では他に水田に関わると思われる溝も見つかっているが、それは第5節で取り上げる。

A-3号溝(第139図、PL.46-5)

A区北西隅にある溝である。この付近では、A区に広く堆積しているAs-Bは削平されて残っていない。長さ8.46mで、北側は調査区外へと延びている。走行方向は

ごくわずかに蛇行しているが、北端と南端とを結ぶとN-21°-Eである。上幅は0.32～0.87mである。南半部は痕跡程度の残存度であるため、深さは1～3cm程度であるのに対し、北半部は深く北端部で25cmとなり、底面の標高は北側の方が低い。しかし、この周辺の傾斜は北西から南東に向かって低くなっており、逆になっている。溝としてはごく一部を調査しただけと考えられるので詳細は分らないが、以上のことから見て、水を流した溝ではなく、区画などに関わるものと思われる。しかし、埋没土は大部分が砂礫であり、洪水などによって埋没したと考えられる。遺物は須恵器の小破片(椀1点、羽釜1点)が出土したのみで掲載できるものはなく、溝の時期を特定することはできない。この付近はAs-Bが削平されているので、それとの前後関係も把握できないが、埋土に明らかなAs-Bが見られないことと、中世以後の遺物が出土しないことを重視すれば、As-B以前の溝である可能性がある。

A-3号溝



A-3号溝

1. 表土
2. 旧耕作土 水田の耕作土
3. 黒褐色砂質土 水分の影響で鉄分が含まれる黒色土。
4. 淡黒色土 軽石を少量含む。
5. 褐色砂層 As-5ではなく川砂と思われる。細かな砂で上部は褐色、下部は更に細かくなり明るい砂層となる。

第139図 A-3号溝断面図

C-1号溝(第140図, PL.46-6・7)

C区南端付近を横断する溝である。弓状に湾曲し、北端は調査区外となり、南端は後世の掘削で分断されている。調査区内には7.70m分が掛かっている。走行方向は、 $N-3^{\circ}-E$ から $N-37^{\circ}-W$ へと緩やかに変化する。上幅は南ほど広く、南端部で1.68m、北端部で0.56mである。断面は浅い椀ないし皿状で、深さも南ほど深く、南端付近で0.20m、北端では0.11mである。底面の標高は、北端で141.69m、南端付近で141.40mなので、その差は0.29mとなり傾斜度は3.8%である。埋土には砂は含まれず、流水があったかどうかは不明である。調査した範囲の中央付近には、埋土の中層に石が多く含まれていたが、特に人為的に組まれたような様子はなく、流れ込みであろう。出土遺物は少なく、掲載できるものはない。小破片として近世の在地系土器の焙烙か鍋が3点出土している。この遺物から、この溝の埋没年代は近世以降である。

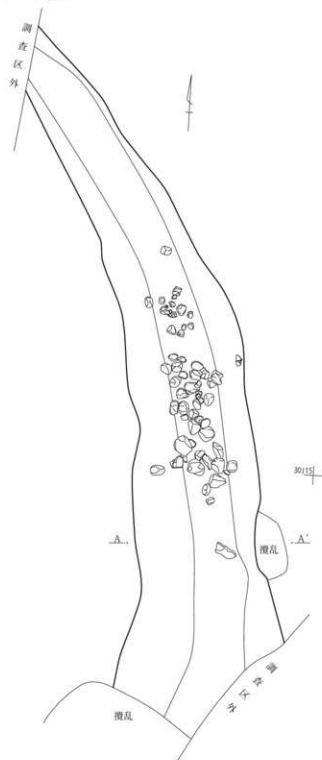
C-2号溝(第140図, PL.46-6・47-1・2)

C区南端付近にあり、1号溝の北東側に並行しているが、こちらは北端が途切れて、南端は後世の掘削で分断されている。調査できた長さは6.00mで、走行方向は $N-14^{\circ}-W$ である。幅は南ほど広く、南端で1.55m、北端付近で0.70mである。断面は途中で稜をもつ椀ないし皿状で、深さは北端付近で0.05m、南端で0.33mである。底面の標高は北端付近で141.82m、南端付近で141.39mであり、その差0.43m、傾斜度7.2%で、かなり急である。埋土に砂粒などは含まれず、流水があったかどうかは不明である。遺物は少なく、掲載できるものはない。小破片として土師器甕・壺類1点、近世の在地系土器の焙烙か鍋が2点出土しているのみである。遺物から埋没年代はC-1号溝同様、近世以降である。

C-4号溝(第141図, PL.47-3)

C区の北部にあり、北東-南西方向の細い溝である。南側は途切れ、北側は調査区外に延びている。調査できたのは21.00mである。走行方向は緩やかに湾曲し、南端付近は $N-44^{\circ}-E$ 、北端付近は $N-24^{\circ}-E$ である。幅は狭く、0.26~0.62mである。断面は椀状ないし逆台形で、深さは0.05~0.22mで北半部が深い。溝の延

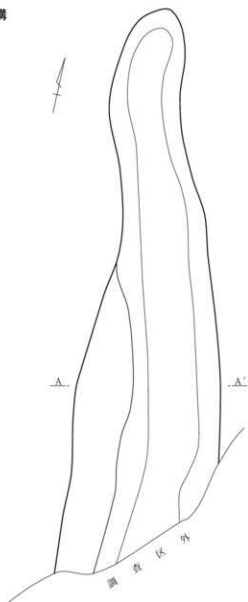
C-1号溝



C-1号溝

1. 黒褐色土 小粒のロームブロックを多く含む。締まり・粘性なし。
2. 黒色土 小粒のロームブロックを含み1層より黒い。ロームブロックの量も1層より多い。締まり・粘性なし。

C-2号溝



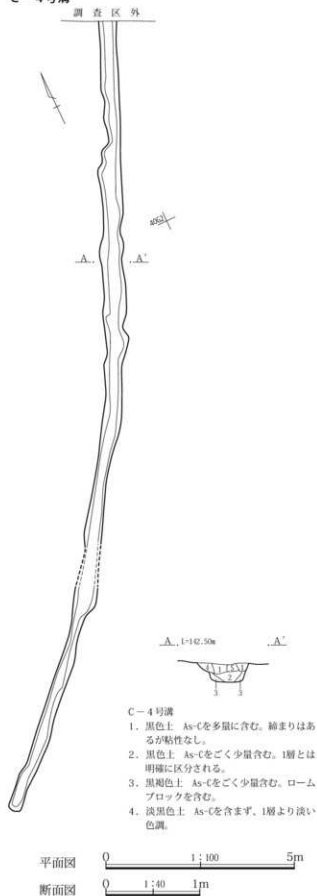
C-2号溝

1. 黒色土 締まり・粘性なし。軽石を少量含む。
2. 黒褐色土 1層より明るい色調。軽石を含まない。
3. 黄褐色土 軽石やロームブロックを含まない均一な土層。
4. 黄褐色土 3層に近似する。少量のロームブロックを含む。

0 1:40 1m

第140図 C-1・2号溝平面断面図

C-4号溝



第141図 C-4号溝平面断面図

びる方向は等高線とほぼ並行しており、底面の標高は北端で142.18m、南端で142.16mで、その差はわずかでしかない。南端が途切れていることから、水を流したものととは考えられない。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

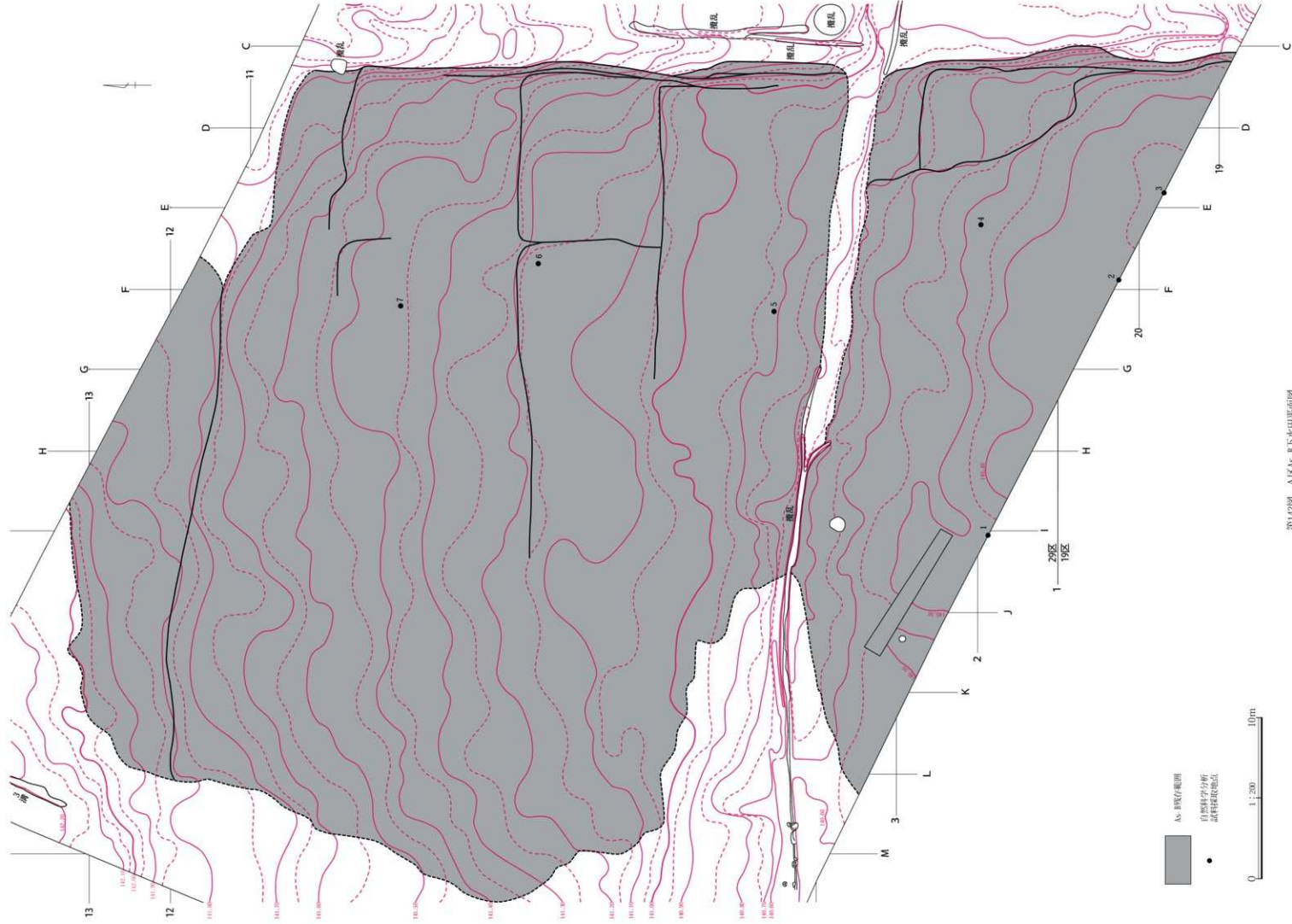
第5節 水田

A区では中央付近に広くAs-Bが一次堆積しており、その下面で、残りは非常に悪いものの、水田跡が見つまっている。

A区は東側の庄子遺跡との間に高さ約3mの崖があり、その西側は南北方向の浅く広い谷となり、西端部ではB区に向かって緩やかに高まっていく地形となっている。As-Bはその谷の中央のやや低い部分に、最大幅約50mの範囲に残っていた(第142図)。As-Bの厚さは厚いところで10～15cmあり、火山灰を含めてユニットがかなり良好な状態で残っていた。

As-Bの下面には黒色の粘質土が広がっており、調査時にはこれが水田の耕作土であると考えたが、水田跡に特有の畦畔などは確認できず、水田としてはかなり不明瞭な状態であった。ただし、特に東端部付近で等高線が直角に曲がっているところがあることから分かるように、人工的な造成の痕跡が認められる部分があること、東西南北にはほぼ一致する方向にわずかな段差が認められる部分があることなどから、それらを水田区画に伴うものと考えて、この面が水田跡であることは間違いないと判断して調査した。その後この面でプラントオパール分析を実施したところ、イネのプラントオパールが検出されたので、水田であることは確認できている(第6章第3節参照)。

As-Bが残存する範囲は第142図にトーンで示した範囲であり、東西約50m、南北約70mである。北側はその範囲が狭まっているので、調査区外にはほとんど延びていない可能性があるが、南側はさらに調査区外へ続いている。今回水田として推定し報告する範囲は、このAs-B残存範囲と一致する範囲である。東側は南北方向にはほぼ一直線になっているが、この部分には段差があって、それを境として東が高くなっている。この東側の部分では、トレンチ調査の結果小河川の跡が埋没しており、出土遺



物からその埋没年代は、近代まで下ることが判明している。段差の部分には、後述するように、給水用と考えられる溝がみられるので、この部分の区画はAs-B下面水田当時のものであると考えられ、とすれば水田の東限はこの段差までになるであろう。西側は明瞭な段差などはなく、As-Bが徐々になくなっていく状態であるため、水田はさらに西に広がっていた可能性があるが、その当否は不明である。As-B下面の標高は、北端の最も高いところで142.00m、南東端近くの最も低いところで140.31mであり、その標高差は1.69mである。単純に計算するとその傾斜度は約2.4%となるので、緩やかとはいさかやかなり傾斜があることが分かる。ただし、後世の地盤沈下の影響などもあるであろうから、これが水田耕作時の傾斜と即断するのは危険であるが、傾斜地に設けられた水田であることは注意すべき点である。

前述したとおり、水田面には明瞭な畦畔は残っていない。ただし、南半部で東西方向に細くのびるAs-Bが残存していない部分は、大畦が後世の削平によってなくなってしまった部分と推定できるのではないだろうか。現状では高まりなどはみられず、逆に下り傾斜がやや強くなってしまっているが、その細く延びる形状は、畦状の遺構の存在を示していると思われる。

その他の区画に関わる遺構としては、これも前述したとおり、わずかな段差が東西南北方向に見られ、これが水田区画の痕跡と考えることができる。それは東半分特に顕著で、それによって水田は7、8段程度に分けられていたようである。最も上、つまり北側にある段差のみは、南東-北西方向にやや傾き、しかも蛇行しているが、これは先ほど述べた大畦と推定されるラインと似た方向であり、地形の制約を受けた方向であろう。その他の段差は、東西南北にほぼ一致する方向をとるところが多い。南東部のみやや不整な方向となるが、これも地形の制約と思われる。残りの最もよい北東部で見ると、東西南北方向の直線的な段差で区画された水田が3段分残

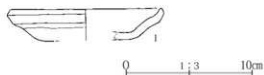
されている。最も北東部では、ほぼ正方形の区画が南北に2区画見られ、北側は南北約11m、東西約10m、南側は南北約9m、東西約10mという大きさで、比較的小さな区画である。この区画の小ささは、斜面という制約を受けているためと思われるが、その他の部分では南北方向の段差が確認できなかったため、全体としてどのような大きさの区画であったかは不明である。

この2区画にしても、現状ではその区画内かなりの標高差がみられる。両者とも北東隅が高く、南西隅が低い、その標高差は、30～40cm程度もある。水田耕作時には周囲に畦畔が設けられたとしても、無視しがたい標高差であり、これはやはり前述したとおり、後世の沈下などを考慮した方がよいと思われる。もちろん推測の域を出ないが、水田を造成した当時はもう少し標高差が小さかったと考えた方が妥当であろう。

As-Bが残る範囲の東端は、Cラインの0.5～1.5m西に沿ってほぼ南北方向の直線的な段差となっている。その高さは10～20cmあり、明瞭である。この段差の部分には、幅0.3～1.2mの溝状の凹みが見られる。この凹みは浅くやや不明瞭で、特に北側では途切れているようにも見えるが、これが給水用の溝の痕跡であると思われる。断面観察でも明瞭な掘り込みが確認できなかったので、本来の溝の規模は不明であるが、この部分に水を流し、西側の水田に向かって分水していたと考えられる。

As-B下面の水田のさらに下層では、トレンチ調査によっても明瞭な水田面は確認できなかったが、調査区南壁に設けたトレンチではAs-B下水田耕作土である黒色粘質土の下層に、間層を挟んで黒色粘質土(As-Cを含む)が堆積している部分があり、この層位にも水田跡が存在する可能性が考えられた。そのため、この部分でもプラントオパール分析を実施したが、その結果、ここからもイネのプラントオパールが検出された。そのため、A区にはより古い水田が存在していたことが判明したが、As-Cを含む黒色粘質土は部分的に残っているだけであり、しかもその上に良好な被覆層は存在せず、面として明瞭に把握できるものではなかったため、面的な調査は行わなかった。

以上、痕跡程度の残存状態ではあるが、As-Bの下面に水田が存在したことはプラントオパール分析の結果からも確認されており、それは、基本的にほぼ東西南北方向



第143図 A区As-B下水田出土遺物

の段差によって区画された棚田状のものであったと考えられ、一部は地形に制約された形態をしていたらしい。給水は東端部に溝を設け、それによって行っていたと推定される。プラントオーバー分析では、キビ属も検出されていることから、この部分あるいは近傍でキビの栽培がなされていた可能性もある。この水田の開田時期は不明であるが、その下層には間層を挟んでさらに古い水田が存在することがほぼ確実であり、この谷部分ではある程度長期間にわたって水田耕作が行われていた。周辺に見られる古墳時代以降の集落の食料生産の一部がここで行われていたであろう。

なお、水田面からは第143図に掲載したような土師器杯の小破片が1点出土している。

第6節 遺構外出土の遺物

上細井五十嵐遺跡からは遺構外からも多くの遺物が出土している。それらのうち、ある程度の大きさに復元できたものを中心として以下に掲載する(第144～147図、第15～17・44～47表、PL.66～68)。

A区からは、縄文時代の遺物は時期不明の土器2点と、剥片2点しか出土しておらず、それらは小破片なので掲載はしていない。東端部にある旧河川は、最も新しい遺物には近代のものがあるため、最終的な埋没年代は近代と考えられるが、ここでは江戸時代の遺物として、肥前陶器碗1点、京・信楽系陶器?1点、瀬戸・美濃陶器片口鉢1点、在地系土器の鍋1点、同焙烙2点、砥石1点、石臼1点を掲載した。その他の遺構外の遺物は、土師器高杯1点、同壺1点、須恵器碗1点、同高杯1点といっ

た古代の土器の他、中近世の遺物として、瀬戸・美濃陶器の筒形香炉1点、瀬戸陶器のすり鉢1点、在地系土器の片口鉢2点、石鉢1点を掲載した。

B区では縄文時代の土器が合計209点出土し、そのうちの34点を掲載した。加曾利E式の土器が多いが、160ページで前述したとおり、この区には加曾利E式の土器が出土した土坑が1基あり、付近にこの時期の住居が存在していた可能性がある。石器は27点、剥片は68点が出土しており、そのうち石器8点を掲載した。古代～中・近世の土器、陶磁器は、古瀬戸の緑釉小皿1点を掲載した。

C区では縄文時代の土器304点が出土し、そのうちの17点を掲載した。石器は1点、剥片は22点が出土しているが、掲載した遺物はない。この区では前期の住居が見つかっており、そのため土器の出土も多く見られるが、出土しているのはすべて前期のものである。その他、古代唐中近世の土器、陶磁器は、古瀬戸の平碗と思われるもの1点を掲載した。

なお、縄文土器の型式別の出土数、石器器種別の石材組成、剥片の石材組成については、第15～17表にまとめたとおりである。

第15表 遺構外出土縄文土器分類表

	燕 系 文 系	桑 原 文 系	黒 浜 ・ 有 尾	諸 磯 a	諸 磯 b	加 曾 利 E 3	加 曾 利 E 4	不 明 E	計
A区	0	0	0	0	0	0	0	2	2
B区	7	1	7	21	2	124	17	12	209
C区	0	0	60	33	0	0	0	0	93
合計	7	1	67	54	2	124	17	12	304

第16表 遺構外出土石器器種別石材組成一覧

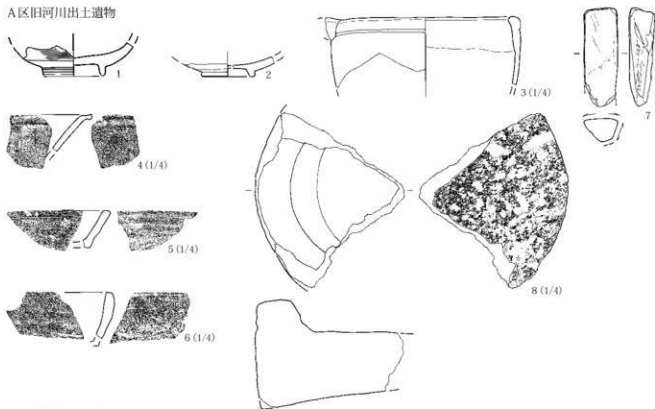
石材	削器	打製石斧	石核	加工前ある剥片	磨石	スタンプ型石器	多孔石	合計
黒色頁岩	1	1	2	13				17
頁岩				2				2
珪質頁岩				1				1
砂岩			1					1
黒色安山岩			1	2				3
チャート				1				1
ホルンフェルス	1							1
粗粒輝石安山岩		1		1				2
粗粒輝石安山岩					1		1	2
石英閃緑岩						1		1
変質玄武岩		1						1
合計	2	3	4	20	1	1	1	32

※加工前ある剥片のうち、黒色頁岩の2点、黒色安山岩の2点、粗粒輝石安山岩の1点はC区出土。それ以外はすべてB区から出土している。

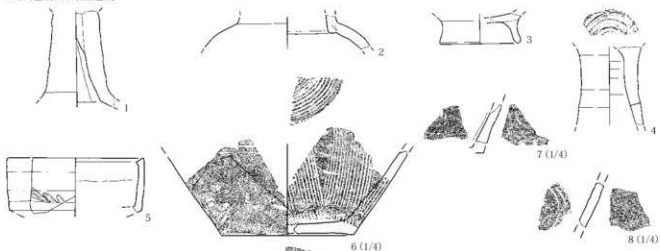
第17表 遺構外出土剥片石材組成一覧

区	石材	出土点数	総重量(g)
A	頁岩	1	2.8
	粗粒輝石安山岩	1	3.3
	黒色頁岩	48	907.3
	黒色安山岩	9	135.1
B	頁岩	4	21.7
	珪質頁岩	1	20.7
	黒曜石	1	0.5
	ホルンフェルス	1	80.9
	砂岩	1	213.8
	粗粒輝石安山岩	3	27.4
C	黒色頁岩	18	426.7
	珪質頁岩	1	35.8
	ホルンフェルス	2	23.4
	粗粒輝石安山岩	1	18.5

A区旧河川出土遺物



A区遺構外出土遺物



B区遺構外出土遺物(1)



第144図 A区旧河川・遺構外出土遺物、B区遺構外出土遺物(1)

B区遺構外出土遺物(2)



第145図 B区遺構外出土遺物(2)

B区遺構外出土遺物(3)

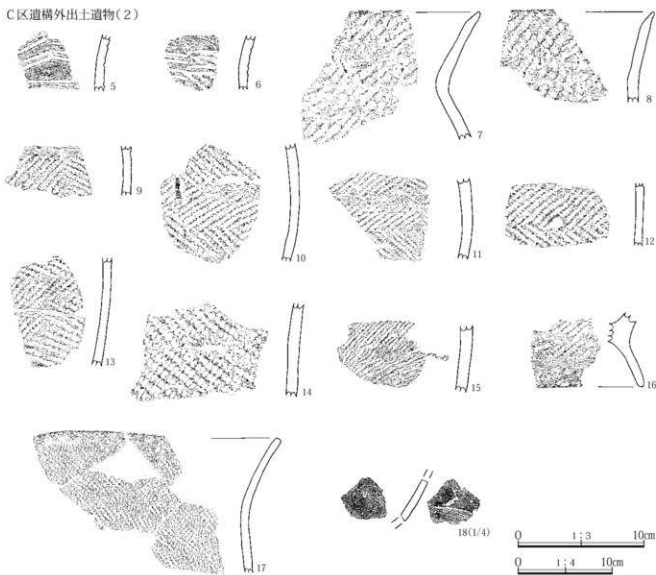


C区遺構外出土遺物(1)



第146図 B区遺構外出土遺物(3)、C区遺構外出土遺物(1)

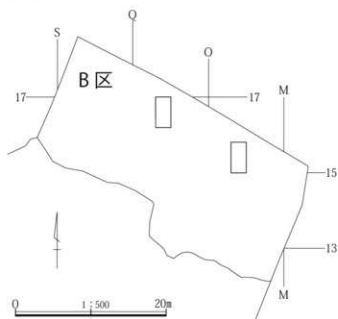
C区遺構外出土遺物(2)



第147図 C区遺構外出土遺物(2)

第7節 旧石器時代の調査

B区の北側ではロームが良好に残っていたので、旧石器時代の調査を実施した。トレンチの設置箇所はB区北側の中でも標高が高い北端に近い部分で、第148図のような配置で2ヶ所設定した。トレンチは長さ4m、幅2mであり、約1m下の砂層まで掘り下げた。その土層は19ページ以下の基本土層で述べたとおりである。調査の結果、遺構、遺物は出土しなかった。



第148図 上細井五十嵐遺跡旧石器時代調査トレンチ配置図

第6章 自然科学分析

第1節 丑子遺跡の自然科学分析

丑子遺跡では、東側の低地部においてテフラとプラントオバールの分析という、2種類の自然科学分析を実施した。実施地点は第126図右端に示したとおりであり、その地点の土層は第9図の基本土層5に示してある。8ページ、21ページで前述したように、低地部ではAs-B下面に水田の存在が予想されていたが、トレンチによる調査を行ったところ、As-Bは確認したものの、その下面は傾斜がきついので、この地点には水田は存在しないものと判断された。そのため、この部分の全面調査は行わなかったが、この低地部の一部に水田が存在した可能性は否定できないため、トレンチの断面から試料を採取し、プラントオバール分析を実施した。その結果、以下に掲載するように、As-B下面のほか複数の層からイネのプラントオバールが検出されたので、この低地部では各時代に水田耕作が行われていたことが判明した。おそらく、上流部などの一部で水田が営まれていたものと思われる。また、As-Bのさらに下層(第9図基本土層の11層、第149図のXI層)にはテフラが含まれているのが肉眼で観察できたが、この付近にも水田の存在が推定されるため、その年代を把握する必要があり、その分析も実施した。分析は株式会社火山灰考古学研究所に委託して実施し、以下、テフラ分析、プラントオバール分析の順にその分析結果を掲載する。

1 丑子遺跡におけるテフラ分析

(1)はじめに

関東地方北西部に位置する赤城火山とその周辺には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺に分布する火山のほか、中部地方や中国地方さらには九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が数多く降灰している。とくに後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログなどに収録されており、遺跡などで調査分析を行いテフラを検

出することで、地形や地層の形成年代さらには遺物や遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

丑子遺跡の発掘調査区でも、層位や年代が不明な土層が認められたことから、発掘調査担当者により採取された試料を対象に、テフラ検出分析を行って、土層の層序や層位さらに年代に関する資料を収集することになった。

(2)テフラ検出分析

分析試料と分析方法

テフラ粒子の相対的な両特徴を把握するテフラ検出分析の対象となった試料は、東側低地部のXI層の2点である。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置を用いながら、ていねいに泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で、テフラ粒子の量や色調などを観察。

分析結果

テフラ検出分析の結果を第18表に示す。東側低地部XI層(1)には、岩片が多く含まれているほか、軽石や火山ガラスが少量含まれている。軽石は、さほど発泡の良くない白色軽石(最大径2.8mm)と、スポンジ状に比較的良く発泡した灰白色軽石(最大径3.3mm)の2種類で、火山ガラスはこれら軽石の細粒物である。前者の斑品には角閃石や斜方輝石、後者の斑品には斜方輝石や単斜輝石が認められる。

東側低地部のXI層(2)には、軽石や火山ガラスが比較的多く含まれている。軽石は、やはりさほど発泡の良くない白色軽石(最大径6.3mm)と、スポンジ状に比較的良く発泡した灰白色軽石(最大径6.8mm)の2種類で、火山ガラスはこれら軽石の細粒物である。前者の斑品には角閃石や斜方輝石、後者の斑品には斜方輝石や単斜輝石が認められる。トレンチのNo.11層下位と比較すると、軽石の量が多く、また粒径も粗い。

(3)考察

第18表 テフラ検出分析結果

分析地点・試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
	量	色調	最大径	量	形態	色調
東側低地部・XI層(1)	*	白, 灰白	2.8, 3.3	*	pn	白, 灰白
東側低地部・XI層(2)	**	白, 灰白	6.3, 6.8	**	pn	白, 灰白

****: とくに多い, ***: 多い, **: 中程度, *: 少ない, bw: パブル型, pn: 軽石型。

量や粒径に違いはあるものの、いずれの試料にも、それぞれ起源が同じと考えられる2種類の軽石が含まれている。テフラ検出分析で認められたテフラ粒子のうち、灰白色軽石やその細粒物である灰白色軽石型ガラスについては、その特徴から、4世紀初頭に浅間火山から噴出したと推定されている浅間C軽石(As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 友廣, 1988, 若狭, 2000)に由来すると考えられる。

一方、斑晶に角閃石が認められる白色軽石や、その細粒物である白色の軽石型ガラスは、その特徴から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名ニツ岳浅川テフラ(Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)、あるいは6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名ニツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)に由来すると考えられる。テフラの分布と本遺跡の位置関係から、前者の可能性がより高いように思われる。いずれにしても、これら2試料が採取された層は少なくともHr-FAより上位と考えられる。

(4) まとめ

丑子遺跡において採取された2試料について、テフラ検出分析を実施した。その結果、浅間C軽石(As-C, 4世紀初頭)、および榛名ニツ岳浅川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)あるいは榛名ニツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 6世紀中葉)に由来すると考えられる軽石や火山ガラスを検出できた。

文献

- 新井房夫(1962)関東東地北西部地域の第四紀編年, 群馬大学紀要自然科学編, 10, p. 1-79.
 新井房夫(1979)関東東地北西部の縄文時代以降の示標テフラ層, 考古学ジャーナル, no. 157, p. 41-52.
 荒牧重雄(1968)浅間火山の地質, 地質研専報, no. 45, 65p.
 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス, 東京大学出版会, 276p.
 町田 洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス, 東京大学出版会, 336p.
 坂口 一(1986)榛名ニツ岳紀勢A・FP層下の土師器と気土器, 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p. 103-119.

早田 勉(1989)6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害, 第四紀研究, 27, p. 297-312.

友廣哲也(1988)古土師器出現期の様相と浅間山C軽石, 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」, p. 325-336.

若狭 徹(2000)群馬の弥生土器が終わるとき, かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動くー古墳が成立する頃の土器の交流」, p. 41-43.

2 丑子遺跡におけるプラント・オパール分析

(1) はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO₂)が蓄積したものであり、植物が枯れたあとでも微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで水田跡(稲作跡)の検証や探査が可能である(杉山, 2000)。

(2) 試料

分析試料は、低地部基本土層のⅢ層からⅩ層までの層準から発掘調査担当者により採取された7点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

(3) 分析法

プラント・オパール分析は、ガラスピース法(藤原, 1976)を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- 2) 1gに対し直径約40μmのガラスピースを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射(300W・42kHz・10分間)による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスピース個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当

する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10-5g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山, 2000)。

(4) 分析結果

水田跡(稲作跡)の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ムギ類(穎の表皮細胞)、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な6分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を第19表および第149図に示した。

(5) 考察

水田跡(稲作跡)の検討

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山, 2000)。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

低地部基本土層では、Ⅲ層(試料1)からⅫ層(試料7)までの層準について分析を行った。その結果、Ⅲ層(試料1)、Ⅳ層(試料2)、Ⅹ層(試料4)、Ⅺ層(試料5、試料6)、Ⅻ層(試料7)からイネが検出された。このうち、Ⅲ層(試料1)とⅣ層(試料2)では密度が3,600個/gおよび4,300個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

Ⅹ層(試料4)、Ⅺ層(試料5、試料6)、Ⅻ層(試料7)では、密度が700~1,500個/gと比較的低い値であるが、As-B直下のⅩ層(試料4)については、直上をテフラ層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かった

こと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

堆積環境の推定

ヨシ属は湿地的なところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境(乾燥・湿潤)を推定することができる。

イネ以外の分類群では、全体的にタケ亜科が多く検出され、ヨシ属、ススキ属なども認められた。なお、Ⅹ層ではヨシ属も多くなっている。おもな分類群の推定生産量によると、Ⅹ層ではヨシ属が卓越しており、Ⅵ層でもヨシ属が優勢である。その他の層準ではおおむねタケ亜科が優勢であり、Ⅲ層とⅣ層ではイネも多くなっている。

以上のことから、各層準の堆積当時は、おおむねヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して調査地点もしくはその近辺で水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところには、竹笹類をはじめススキ属なども生育していたと考えられる。As-B直下のⅩ層では、何らかの原因によってヨシ属が繁茂する湿地的な状況になっていた可能性が考えられる。

(6) まとめ

プラント・オパール分析の結果、Ⅲ層とⅣ層ではイネが比較的多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、As-B直下のⅩ層およびその下位のⅪ層、Ⅻ層でも、稲作が行われていた可能性が認められた。各層準の堆積当時は、おおむねヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して調査地点もしくはその近辺で水田稲作が行われていたと推定される。

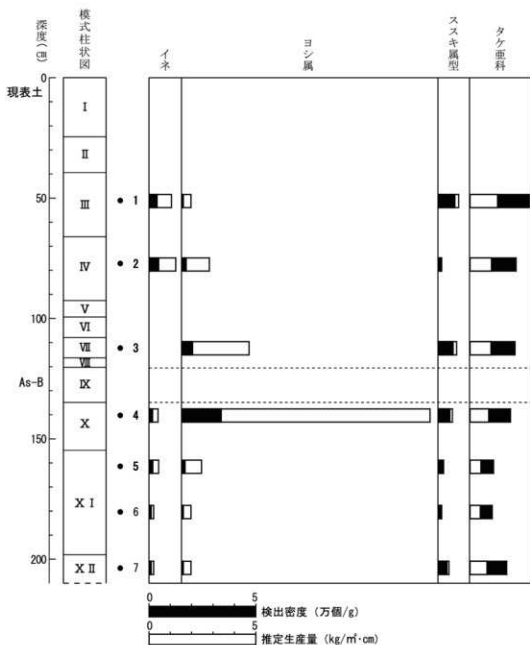
文献

- 杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール)、考古学と植物学、同成社、p.189-213。
藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-、考古学と自然科学、9、p.15-29。
藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田跡の探査-、考古学と自然科学、17、p.73-85。

第19表 子遺跡におけるプラント・オパール分析結果

検出密度(単位: ×100個/g)		地点・試料						
分類群	学名	低地部・基本土層						
		1	2	3	4	5	6	7
イネ	<i>Oryza sativa</i>	36	43		14	15	7	7
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	7	21	51	188	15	7	7
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	80	14	72	56	22	14	42
タケ亜科	<i>Barbusoideae</i>	275	214	209	188	110	104	170

推定生産量(単位: kg/m ² ・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出								
イネ	<i>Oryza sativa</i>	1.06	1.26		0.41	0.43	0.20	0.21
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.46	1.35	3.19	11.84	0.93	0.44	0.45
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.99	0.18	0.90	0.69	0.27	0.17	0.53
タケ亜科	<i>Barbusoideae</i>	1.32	1.03	1.01	0.90	0.53	0.50	0.82



第149図 子遺跡におけるプラント・オパール分析結果

第2節 亘子遺跡と東田之口遺跡の火山灰分析

この火山灰分析は、亘子・上細井五十嵐両遺跡の立地する白川扇状地の形成年代の一端を明らかにするために行ったものである。亘子遺跡台地部の基本土層(第9図4)で8層とした層以下には、白川扇状地堆積物と思われる厚い水成堆積物が認められ、これが遺跡の基盤となっているが、亘子遺跡の西にある崖面の南西端(第6図と第8図にその位置を●印で示した)ではその堆積物の全体が露頭として観察でき、しかもその下位には火山灰を含むと思われる土層が観察できた。また、同時期に調査を行っていた東田之口遺跡の旧石器調査の7号トレンチ(やはり第6図に位置を示した)ではこの水成堆積物の上に火山灰を含む層があり、とすれば、両地点の火山灰を分析・比較することでこの水成堆積物の年代をある程度絞ることが可能と考えられた。以上の目的で火山灰分析を株式会社火山灰考古学研究所に委託して実施した。以下、その分析結果を掲載する。なお、この分析は東田之口遺跡の調査時にその一環として行ったことから、刊行済みの「東田之口遺跡」(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、2011)に既に結果を収録している(第4章第4節1「東田之口遺跡と亘子遺跡の火山灰分析」)が、亘子遺跡の資料も用いているため今回再録することにしたものである。

1 はじめに

関東地方北西部に位置する赤城山麓とその周辺には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺に分布する火山のほか、中部地方や中国地方さらには九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が数多く降灰している。とくに後期更新世以降以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログなどに収録されており、遺跡などで調査分析を行いテフラを検出することで、地形や地層の形成年代さらには遺物や遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

赤城山麓の台地上に位置する東田之口遺跡の発掘

調査区や露頭でも、層位や年代が不明なテフラや土層が認められたことから、地質調査を実施して土層やテフラの記載を行うとともに、採取した試料を対象にテフラ検出分析と火山ガラスの屈折率測定を行って、土層の層序や層位さらに年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、亘子遺跡西露頭および東田之口遺跡7号トレンチ(150-635)の2地点である。

2 土層の層序

(1) 亘子遺跡西露頭

台地の断面が認められた西露頭では、本遺跡が位置する扇状地を構成する堆積物を観察できた(第150図)。ここでは、露頭の下部にテフラ層を多く含む腐植質堆積物が認められた。それは、下位より黄灰色細粒軽石層(層厚3cm以上、軽石の最大径2mm)、黒泥層(層厚1cm)、黄灰色粗粒火山灰層(層厚2cm)、黒褐色泥層(層厚1cm)、黄灰色粗粒火山灰層(層厚3cm)、黒泥層(層厚2cm)、白色細粒火山灰層(層厚0.8cm)、黒泥層(層厚5cm)、灰色粗粒火山灰層(層厚1cm)、黒泥層(層厚1cm)、細粒軽石混じり色黄灰色粗粒火山灰層(層厚9cm、軽石の最大径2mm)、黒泥層(層厚2cm)、黄灰色細粒軽石層(層厚10cm、軽石の最大径5mm、石質岩片の最大径2mm)、黒褐色泥層(層厚1cm)、白色砂質細粒火山灰層(層厚1cm)、黒泥層(層厚0.8cm)、灰色粗粒火山灰層(層厚1cm)、黒泥層(層厚5cm)、黄灰色粗粒火山灰層(層厚1cm)、黒泥層(層厚1cm)、紫灰色シルト層(層厚6cm)、黒泥層(層厚1cm)からなる。

その上位には、成層した厚い水成堆積物が認められる。それは、下位より層理が発達した桃灰色砂質シルト層(層厚13cm)、砂がちの灰色泥流堆積物(層厚78cm、礫の最大径38mm)、層理が発達した灰色砂層(層厚11cm)、垂円礫層(層厚64cm、礫の最大径115mm)、黄白色軽石を少量含む灰色砂層(層厚41cm、軽石の最大径11mm)、桃色シルト層(層厚5cm)、層理が発達した灰色砂層(層厚14cm)、黄灰色砂層(層厚5cm)、灰色砂層(層厚12cm)、礫混じり灰色砂層(層厚19cm、礫の最大径13mm)、褐色リモナイト層(層厚2cm)、粗粒の黄白色軽石を特徴的に含む灰色泥流堆積物(層厚61cm、軽石の最大径43mm、礫の最大径22mm)からなる。その上位には、灰褐色土(層厚38cm以上)が形

成されている。

(2) 東田之口遺跡7号トレンチ(150-635)

台地上に位置する7号トレンチ(150-635)では、下位より灰白色シルト質砂層(層厚4cm以上)、黄色がかった白色細粒軽石に富む黄色砂質土(層厚21cm、軽石の最大径3mm)、褐色リモナイト層(層厚0.9cm)、黄白色細粒軽石を少量含む褐色土(層厚17cm、軽石の最大径2mm)、灰色礫混じり灰色砂層(層厚28cm、礫の最大径3mm)、黄褐色土(層厚19cm)、黄色軽石層(層厚11cm、軽石の最大径6mm、石質岩片の最大径2mm)、灰褐色土(層厚6cm)が認められる(第151図)。

3 テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

西露頭および7号トレンチ(150-635)において採取した試料のうちの15試料を対象に、テフラ粒子の相対的な特徴を把握するテフラ検出分析を実施した。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
 - 2) 超音波洗浄装置を用いながら、ていねいに泥分を除去。
 - 3) 80℃で恒温乾燥。
 - 4) 実体顕微鏡下で、テフラ粒子の量や色調などを観察。
- (2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第20表に示す。西露頭では、分析対象のいずれの試料からも軽石やスポンジ状や繊維束状に発泡した火山ガラスを多く検出できた。また、いずれの試料にも、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が認められる。

最下位の試料10には、とくに多くの灰白色や白色を呈する比較的良く発泡した軽石(最大径5.4mm)が含まれている。試料9、試料8、試料6には、灰白色の軽石型ガラスがとくに多く含まれている。このうち、試料8にはスポンジ状に良く発泡した軽石(最大径2.6mm)、試料5には比較的良く発泡した灰白色軽石(最大径3.2mm)が少し含まれている。試料4には、比較的粗粒の比較的良く発泡した灰白色軽石(最大径10.2mm)がとくに多く含まれている。火山ガラスとしては、その細粒物である灰白色軽石型ガラスのほかに、白色の軽石型ガラスも少量含まれている。試料1には、灰白色や白色の軽石型ガラスが

多く含まれている。

一方、7号トレンチ(150-635)では、砂層から採取された試料10をのぞいて軽石や火山ガラスを検出できた。この中では、試料20に比較的多くの透明のバブル型ガラスが認められる。細粒軽石に富む土層から採取された試料18や試料16には、灰白色、灰色、無色透明の分厚い中間型ガラスのほか、白色や透明の軽石型ガラスが含まれている。これらは、試料14で比較的多いようにもみえる。さらに、試料6や試料4でも同様な傾向にあるが、軽石層から採取された試料1には、スポンジ状や繊維束状に発泡した無色透明や白色の軽石型ガラスが含まれている。また、この試料では多くの斜長石が認められる。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

特徴的なテフラ粒子が認められた試料のうち、7号トレンチ(150-635)の試料18に含まれる火山ガラスについて、指標テフラとの同定精度を向上させるために、温度変化型屈折率測定法により屈折率(n)の測定を行った。測定には、京都フィッシュン・トラック社製RIMS2000を使用した。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を第21表に示す。7号トレンチ(150-635)の試料18に含まれる火山ガラス(18粒子)の屈折率(n)は、1.500-1.502である。

5 考察

西露頭で認められたテフラ層は、いずれも層位や岩相などから約1.9～2.4万年前¹⁾に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group、新井、1962、町田・新井、1992、2003、早田、1996など)と考えられる。

一方、7号トレンチ(150-635)の試料18が採取された土層中に多く含まれるテフラ粒子は、層位、火山ガラスの形態、色調などから、約1.7万年前¹⁾と約1.6万年前¹⁾に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第1軽石(As-0k1、中沢ほか、1984、早田、1996)と浅間大窪沢第2軽石(As-0k2、中沢ほか、1984、早田、1996、As-0k1と合わせて仮に浅間大窪沢テフラ群: As-0k Groupとする)に由来すると思われる。火山ガラスの屈折率からは、前者の可能性がより高いと考えられる。この地点で最上部付近に認められ

る黄色軽石層については、層相や含まれる火山ガラスの特徴などから、約1.3～1.4万年前^{*)}に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石群(As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992, 2003)と考えられる。

なお、本地点の最下部の試料20に少量含まれる無色透明のバブル型ガラスについては、その特徴から、As-BP Groupの下位にある、約2.4～2.5万年前^{*)}に南九州の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976, 2003, 松本ほか, 1986, 村山ほか, 1991, 池田ほか, 1995)に二次的に由来するものと考えられる。

以上のことから、本遺跡では、As-BP GroupとAs-Ok Groupの間と、As-Ok GroupとAs-YPの間に水成堆積物が挟まれていると考えられる。とくに下位の堆積物が厚く、本遺跡の位置する台地をつくっていると思われる。今後さらに周辺でも地形地質の調査を実施して、これら水成堆積物の層厚分布や成因に関する資料の収集が望まれる。

6 まとめ

東田之口遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、火山ガラスの屈折率測定を行った。その結果、下位より、浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 約1.9～2.4万年前^{*)}、浅間大窪沢軽石群(As-Ok Group, 約1.6～1.7万

年前^{*)}、浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 約1.3～1.4万年前^{*)}などの指標テフラを検出できた。As-BP GroupとAs-Ok Groupの間と、As-Ok GroupとAs-YPの間には水成堆積物が認められ、とくに厚い前者については本遺跡の位置する台地を構成していると考えられる。

*1 放射性炭素(14)年代。ATとAs-YPの較正年代については、約2.6～2.9万年前と約1.5～1.65万年前と考えられている(町田・新井, 2003)。

文献

- 新井房夫(1962)関東東地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p. 1-79.
 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.
 荒牧重雄(1968)浅間火山の地質。地研研報, no.45, 65p.
 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・小林哲夫(1995)南九州。始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流。中の炭化樹木の加速器14'年代。第四紀研究, 34, p.377-379.
 町田 洋・新井房夫(1976)広域に分布する火山灰-始良Tn火山灰の発見とその意義-。科学, 46, p.339-347.
 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
 町田 洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス。東京大学出版会, 336p.
 松本英二・前田保夫・竹村忠二・西田史郎(1987)始良Tn火山灰(AT)の14'年代。第四紀研究, 26, p.79-83.
 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田高登・平 朝彦(1993)四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討-タンデロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の14'年代。地質報, 99, p.787-798.
 中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦(1984)浅間火山。黒曜-前期のテフラ層序。日本第四紀学会講演要旨集, no.14, p.69-70.
 早田 勉(1996)関東地方-東北地方南部の示標テフラの諸特徴-とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて-。名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.

第20表 テフラ検出分析結果

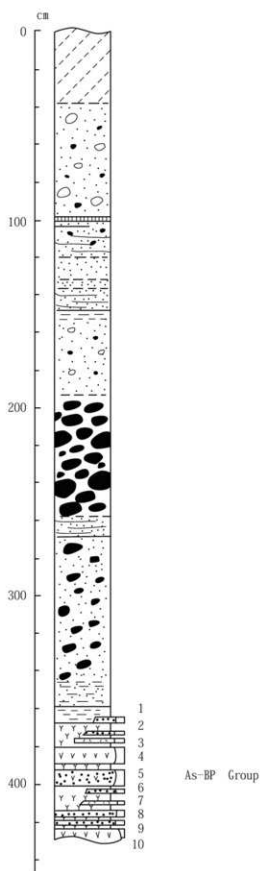
地点名	試料	軽石・スコリア			火山ガラス			
		量	色調	最大径	形態	色調		
庄子遺跡西露頭	1	***			***	pn(sp,fb)	灰白>白	
	4	****	灰白	10.2	**	pn(sp,fb)	灰白>白	
	5	*	灰白	3.2	****	pn(sp,fb)	灰白	
	6				****	pn(sp,fb)	灰白	
	8	*	灰白	2.6	****	pn(sp,fb)	灰白	
	9				****	pn(sp,fb)	灰白	
	10	****	灰白>白	5.4	**	pn(sp,fb)	灰白,白	
	東田之口遺跡7号トレンチ(150-635)	2				*	pn(sp,fb)	透明,白
		4				*	pn(sp,fb),nd	透明,白,灰
		6				*	pn(sp),nd	透明,灰
10								
14					**	pn(sp,fb),nd	白,透明,灰白,灰	
16					*	pn(sp,fb),nd	白,透明,灰白,灰	
18					*	nd, pn(sp,fb)	灰白,灰,白,透明	
20					*	bw	透明	

****: とくに多い, ***: 多い, **: 中程度, *少ない, 最大径の単位は, mm, bw: バブル型, nd: 中間型, pn: 軽石型, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状。

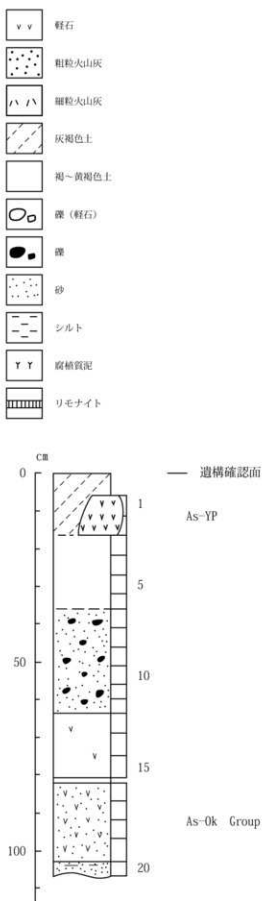
第21表 屈折率測定結果

地点名	試料	火山ガラス	
		屈折率(n)	測定点数
東田之口遺跡7号トレンチ(150-635)	18	1,500-1,502	18

測定は温度変化型屈折率測定装置(RIMS2000)による。



第150図 子子遺跡西露頭の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号



第151図 東田之口遺跡7号トレンチ(150-635)の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

第3節 上細井五十嵐遺跡の自然科学分析

上細井五十嵐遺跡では、A区のAs-B下面で水田と思われる遺構が調査されている。しかしこの面で見つかった遺構は、水田跡に特有の畦畔に囲まれているわけではなく、緩やかな棚田状を呈しており、しかもその段差が平坦化してしまっている部分も多いことから、一区画の水田を明瞭に把握できるところがほとんどなく、そのため、水田であると断定することに些か躊躇するような遺構であった。また、As-B水田耕作土よりも下層には、明瞭な水田面は確認できなかったが、調査区南壁のトレンチでは、21ページで前述したように、As-Cを含む黒褐色粘質土(泥質土)が見られることから、As-Bを遡る水田面の存在も想定される。以上のことを確認するため、植物珪酸体(プラントオパール)分析を実施した。また、当時の植生を明らかにして生産域の特徴を把握するため、花粉分析も実施した。これらの分析はバリノ・サーヴェイ株式会社へ委託し実施した。以下、その分析結果を掲載する。

はじめに

上細井五十嵐遺跡(前橋市上細井町所在)は、赤城山南西麓に形成された白川扇状地の扇端部付近に位置し、南に流下する沢や小河川によって形成された狭小な開析谷内に立地する。

本遺跡の発掘調査では、西暦1108年(天仁元年)に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B; 新井, 1979)の降下軽石層の下位に黒色泥質土が確認され、この黒色泥質土上面からは、畦畔は不明瞭であるが、一定区域を有する棚田状を呈する遺構が検出されている。

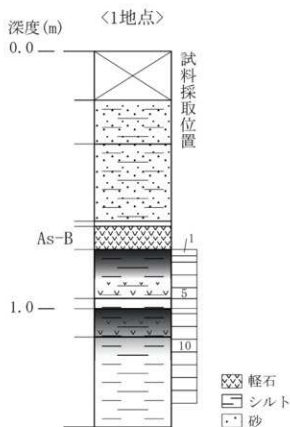
本報告では、狭小な開析谷内より検出された棚田状を呈する遺構の性格、とくに、生産域としての利用状況の検討を目的として、自然科学分析調査を実施する。

1 試料

本分析では、上記した分析目的を考慮し、開析谷内における堆積物の累重状況の確認のため調査区南壁(1地点)を対象に観察を行っている。以下に、観察所見を記す。

また、第152図に模式柱状図を示す。

1地点は、現地表面から深度約146cmを測る土層断面が作成されている。最下位はやや幅広の管状酸化鉄が発達する淡暗灰色泥質土であり、上位に向かって漸移的に暗色化する。暗色化が顕著となる上部は黒色泥質土であり、径約5mm程度の灰色を呈する軽石の濃集が認められる。最上部の層厚2~3cmは、軽石の混入は認められない。この黒色泥質土上位には、レンズ状に白色軽石が混じる黄灰色泥質土が堆積する。同様の堆積物は側方にもわずかに認められるが、不連続である。また、黄灰色泥質土が認められない地点においても、上・下位の堆積物の基質は同様であるが、混入物および土色等の特徴から不整合の堆積物と推定される。黄灰色泥質土上位には軽石混じり灰色泥質土が堆積し、上位に向かって漸移的に暗色化し、上部は黒色泥質土となる。なお、この黒色泥質土では、少量ではあるが炭化物の混入も認められる。黒色泥質土上位にはAs-Bが堆積する。As-B上位には痕跡的ながら軽石混じりの黒色泥質土が認められ、さらに上位には軽石および砂混じりの灰色泥質土が堆積する。軽



第152図 1地点模式柱状図および試料採取位置

石および砂混じりの灰色泥質土は、土色や孔隙、酸化鉄の発達状況等から複数のユニットに分けられ、As-B降灰以降の堆積物の発達と擾乱が窺われる。灰色泥質土上位は、現地表面を構成する表土の灰色泥質土が堆積する。

なお、軽石の混入が認められた黒色泥質土(1地点 試料番号8・9)、黄灰色泥質土(1地点 試料番号6)、灰色泥質土(1地点 試料番号4・5)については、軽石および砂分を抽出し、その形態や特徴の観察を行っている。その結果、黒色泥質土(1地点 試料番号8・9)における軽石は、浅間C軽石(As-C:新井,1979)、黄灰色泥質土の軽石は榛名ニッ岳伊香保テフラ(Hr-FP:新井,1979;早田,1989)、灰色泥質土の軽石はHr-FPとAs-Cが混在することが確認された。なお、各試料には、無色透明のスポンジ状に発泡した軽石火山ガラスは認められなかったことから、榛名ニッ岳渋川テフラ(Hr-FA)の混入については不明である。

以上の堆積物の観察所見から、調査区南壁3箇所(1~3地点)、棚田状を呈する遺構の検出域内4箇所(4~7地点)の計7地点を試料採取地点として選定し、1地点ではAs-B下位より厚さ5cm(一部2.5cm)連続で土壌試料(試料番号1~14)を採取し、2・3地点ではAs-B下位の黒色泥質土、灰色泥質土より層位毎に土壌試料(2地点 試料番号1~2、3地点 試料番号1~3)を採取している。一方、4~7地点は、いずれもAs-B下位より検出された遺構面に相当する黒色泥質土より土壌試料を採取している。

これらの試料のうち、1地点 試料番号1、7と2地点 試料番号1の土壌試料3点を対象に花粉分析・イネ属同定、1地点 試料番号1、3、7の土壌試料3点と、2・3・5~7地点のAs-B直下の棚田状を呈する遺構検出面に相当する土壌試料5点の計8点を対象に植物珪酸体分析を行う。

2 分析方法

(1) 花粉分析・イネ属同定

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、節別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9、濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集

する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。

イネ属同定はノマルスキー微分干渉装置を用い、検出されるイネ科花粉の表面微細構造・発芽孔の肥厚状況・粒径などを考慮し、中村(1974)を参考にしてイネ属と他のイネ科に分類する。結果は花粉分析と合わせて図表に示す。

(2) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2004)の分類に基づいて同定・計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。各分類群の含量は100単位で表示する。合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に100単位として表示する。また、各分類群の植物珪酸体含量を図示する。

3 結果

(1) 花粉分析・イネ属同定

結果を第22表に示す。表中で複数の種類を「-」で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。いずれの試料も検出される花粉化石数は少なく、わずかに検出された花粉化石の保存状態も悪い。検出された種類は、木本花粉ではコナラ属アカガシ亜属、草本花粉ではイネ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節、マメ科、ヨモギ属、キク亜科がわずかに認められるのみである。また、各試料からは栽培種のイネ属花粉は認められなかった。

第22表 花粉分析結果

分類群	試料名		
	1地点		2地点
	1	7	1
木本花粉			
コナラ属アカガシ亜属	-	1	-
草本花粉			
イネ属	-	-	-
他のイネ科	7	4	1
サナエタデ属-ウナギツタミ節	-	-	1
マメ科	-	1	-
ヨモギ属	19	14	5
キク亜科	-	1	1
不明花粉	-	1	-
シダ類胞子			
他のシダ類胞子	23	14	31
合計			
木本花粉	0	1	0
草本花粉	26	20	8
不明花粉	0	1	0
シダ類胞子	23	14	31
総計(不明を除く)	49	35	39

(2) 植物珪酸体分析

結果を第23表、第153図に示す。各試料からは植物珪酸体が見出されるが、いずれも保存状態が悪く、表面に多数の微小孔(溶食痕)が認められる。以下に、各地点の産状を述べる。

1) 1地点

1地点の植物珪酸体含量は約37.4万~23.9万個/gであり、黒~黒灰色を呈する試料番号3で最も高い。

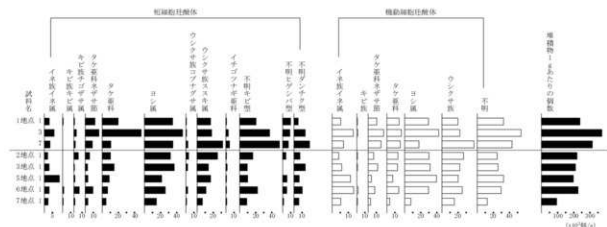
As-Cが混入する黒色泥質土(試料番号7)の植物珪酸体含量は約31.5万個/gである。栽培植物のイネ属の葉部に形成される短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が見出される。その含量は、短細胞珪酸体は約3,500個/g、機動細胞珪酸体は約7,100個/gである。栽培種のイネ属を除く分類群では、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、チゴザサ属等が認められ、これらの分類群ではヨシ属やススキ属を含むウシクサ族の含量が高い傾向にある。

本地点の3試料中で最も植物珪酸体含量が高い試料番号3では、試料番号7と同様に、栽培植物のイネ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が見出される。その含量は、短細胞珪酸体は約6,000個/g、機動細胞珪酸体は約1.3万個/gと、下位試料の試料番号7よりも高い。また、栽培種を除く分類群も、下位試料と同様の分類群が見出され、キビ族の機動細胞珪酸体も見出される。これらの分類群では、ヨシ属の含量が高い傾向にある。

As-B直下の黒色泥質土(試料番号1)の植物珪酸体含量は約24.0万個/gである。下位の2試料と同様に栽培植物のイネ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が見出される。その含量は、短細胞珪酸体は約3,000個/g、機動細胞珪酸体は約5,300個/gである。栽培種を除く分類群で

第23表 植物珪酸体含量

分類群	試料名							(個/g)
	1地点			2地点		3地点	5地点	6地点
	1	3	7	1	1	1	1	1
イネ科葉部短細胞珪酸体								
イネ属イネ属	3,000	6,000	3,500	2,100	2,900	9,300	3,000	2,300
キビ族キビ属	800	-	-	-	-	-	1,500	700
キビ族チゴザサ属	800	3,000	1,800	5,500	700	1,300	6,700	1,300
タケ亜科ネザサ節	12,100	17,100	9,800	5,500	2,900	3,300	9,600	3,300
タケ亜科	19,700	48,300	10,600	10,300	14,700	8,700	6,700	4,700
ヨシ属	34,900	47,300	35,300	32,200	36,900	21,300	25,900	15,000
ウシクサ族コブナグサ属	800	1,000	2,600	3,400	2,200	-	2,200	1,000
ウシクサ族ススキ属	16,700	18,100	31,800	25,300	14,000	16,700	11,100	6,700
イチゴツナギ亜科	800	3,000	4,400	700	1,500	700	700	1,000
不明キビ型	20,500	37,200	49,400	16,400	9,600	10,000	22,200	9,000
不明ヒゲシハ型	9,900	9,100	7,100	4,100	-	5,300	5,200	1,300
不明ダンチク型	5,300	14,100	19,400	7,500	14,000	6,700	10,400	900
イネ科葉部機動細胞珪酸体								
イネ属イネ属	5,300	13,100	7,100	4,100	5,900	11,300	13,300	5,300
キビ族	800	1,000	-	700	700	-	1,500	700
タケ亜科ネザサ節	10,600	19,100	15,900	6,800	11,800	4,000	8,100	3,000
タケ亜科	15,200	18,100	16,800	13,700	13,300	7,300	14,800	3,700
ヨシ属	29,600	42,300	17,700	30,100	31,700	39,400	29,600	7,600
ウシクサ族	19,700	22,100	39,700	26,700	22,100	20,000	25,100	15,300
不明	32,600	54,300	43,200	24,700	25,800	32,700	29,600	12,300
合計								
イネ科葉部短細胞珪酸体	125,200	204,300	174,800	113,000	99,500	83,400	105,000	47,100
イネ科葉部機動細胞珪酸体	113,900	170,100	140,300	106,900	111,300	114,700	122,000	47,900
総計	239,100	374,400	315,100	219,900	210,800	198,100	227,100	95,000



第153図 植物珪酸体含量

は、ザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、チゴザサ属のほか、キビ属およびキビ族も検出される。なお、キビ属には、栽培種のほか野生種が含まれ、現段階では判別は困難である。これらの分類群では、下位試料と同様にヨシ属の含量が高い傾向にある。

2) 2地点

As-B下位の黒色泥質土(試料番号1)の植物珪酸体含量は約22.0万個/gである。栽培植物のイネ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が検出される。その含量は、短細胞珪酸体は約2,100個/g、機動細胞珪酸体は約4,100個/gである。栽培種を除く分類群は、ザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、チゴザサ属等が検出されるほか、キビ族の機動細胞珪酸体も検出される。これらの分類群では、ヨシ属やススキ属を含むウシクサ族の含量が高い傾向にある。

3) 3地点

As-B下位の黒色泥質土(試料番号1)の植物珪酸体含量は約21.1万個/gである。2地点と同様に、栽培植物のイネ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が検出される。その含量は、短細胞珪酸体は約2,900個/g、機動細胞珪酸体は約5,900個/gである。栽培種を除く分類群も、2地点と同様の組成を示し、ヨシ属やススキ属を含むウシクサ族の含量が高い傾向にある。

4) 5地点

As-B下位の黒色泥質土(試料番号1)の植物珪酸体含量は約19.8万個/gである。栽培植物のイネ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が検出される。その含量は、短細胞

珪酸体は約9,300個/g、機動細胞珪酸体は約1.1万個/gである。栽培種を除く分類群は、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、チゴザサ属が検出され、ヨシ属やススキ属を含むウシクサ族の含量が高い傾向にある。

5) 6地点

As-B下位の黒色泥質土(試料番号1)の植物珪酸体含量は約22.7万個/gである。栽培植物のイネ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が検出される。その含量は、短細胞珪酸体は約3,000個/g、機動細胞珪酸体は約1.3万個/gである。栽培種を除く分類群では、1地点 試料番号1と同様にザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、チゴザサ属が検出されるほか、キビ属およびキビ族も検出される。これらの分類群では、この他の地点と同様に、ヨシ属やススキ属を含むウシクサ族の含量が高い傾向にある。

6) 7地点

As-B下位の黒色泥質土(試料番号1)の植物珪酸体含量は約9.5万個/gである。栽培植物のイネ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が検出される。その含量は、短細胞珪酸体は約2,300個/g、機動細胞珪酸体は約5,300個/gである。栽培種を除く分類群は、1地点 試料番号1や5地点と同様にザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、チゴザサ属のほか、キビ属およびキビ族が検出される。これらの分類群では、ヨシ属やススキ属を含むウシクサ族の含量が高い傾向にある。

4 考察

(1) 土地利用

開析谷内より検出された棚田状を呈する遺構に相当する堆積物とその下位の堆積物を対象に行った植物珪酸体分析の結果、As-Cが多量混じる黒色泥質土およびAs-B下位の黒色泥質土のいずれからも栽培植物のイネ属が検出された。その含量は、As-Cが混じる黒色泥質土における短細胞珪酸体は約2,900個/g、機動細胞珪酸体は約5,900個/g、As-B下位の黒色泥質土における短細胞珪酸体は約9,300～2,100個/g、機動細胞珪酸体は約13,300～4,100個/gであった。

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(機動細胞由来)が試料1g当たり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われた可能性が高いと判断されている(杉山,2000)。この点を参考とすると、As-Cが混じる黒色泥質土やAs-B下位の黒色泥質土におけるイネ属の機動細胞珪酸体は、同程度あるいはそれよりも高い含量を示すことから、稲作の可能性が指摘される。

赤城山麓域に形成された開析谷の埋積物を対象とした分析調査は、本遺跡東方に位置する二之宮千足遺跡や勝沢境遺跡等で実施されている。このうち、二ノ宮千足遺跡では、As-C降灰以降からAs-B降灰時まではヨシ属を含むイネ科やホタルイ属を含むカヤツリグサ科等の生育する低湿地であり、これを利用した泥炭地水田の可能性が推定されている(有限会社古環境研究所,1992;バリノ・サーヴェイ株式会社,1992)。一方、勝沢境遺跡A地区では、As-B降灰下位の黒色シルトからは栽培植物のイネ属が検出されたが、機動細胞珪酸体含量は約2,400～1,100個/gと低かったことから稲作の可能性を支持するに至っていない(バリノ・サーヴェイ株式会社,2009MS)。本地域における開析谷の利用については、資料の蓄積段階であるが、本遺跡の開析谷内では稲作の可能性が示唆される。また、分析試料数が少ない点で課題が残るが、確認されたテフラとその噴出年代を参考とすると4～6世紀頃(石川ほか,1979;町田・新井,2003)においても稲作が行われていた可能性もある。

なお、今回の分析調査では、棚田状を呈する遺構に相当するAs-B下位の黒色泥質土(1・6・7地点 試料番号

1)よりキビ属の植物珪酸体が検出された。また、キビ属を含むキビ族もAs-B下位の黒色泥質土およびその下部に相当する暗灰色泥質土より確認されており、いずれもAs-C軽石が混じる黒色泥質土より上位の土層から検出されるという傾向が指摘される。キビ属には栽培種・野生種が含まれるが、栽培種に由来するものであればキビの栽培・利用の可能性もある。

(2) 古植生

古墳時代～古代末(As-B降灰以前)の堆積物を対象に行った花粉分析(イネ属同定)の結果、花粉化石はほとんど検出されず、古植生の検討には至らなかった。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている(中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998など)。今回の分析調査で僅かに検出された花粉化石をみると、いずれも保存状態が悪く、花粉外膜が破損・溶解しているものが多く認められたことから、堆積時に取り込まれた花粉・シダ類胞子等は経年変化により分解・消失したと推定される。

わずかに検出された種類をみると、木本類ではコナラ属アカガシ亜属、草本類ではイネ科やサナエタデ節・ウナギツカミ節、マメ科、ヨモギ属、キク亜科が認められた。草本類は、いずれも開けた明るい場所を好む人里植物を多く含む分類群であることから、周辺にこれらの人里植物が生育する草地が見られたと考えられる。また、植物珪酸体分析では、各試料でヨシ属が優占し、ネザサ節、ススキ属、コブナグサ属、チゴザサ属等を伴うという組成を示した。このうち、ヨシ属は、水湿地に生育する1年草であり、チゴザサ属やコブナグサ属にも水湿地に生育する種類が含まれることから、これらは開析谷内や周辺の湿潤な場所に生育したと考えられる。また、ススキ属やネザサ節は、明るく開けた場所に生育することから、開析谷周辺や周辺域の森林の林縁等に生育したと考えられる。なお、植物珪酸体群集の層位的変化においては、ススキ属が上位試料でやや減少するという特徴も看取されるが、大きな変化は認められないことから開析谷周辺は同様のイネ科植生が継続したと考えられる。

引用文献

- 新井房夫,1979,関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層,考古学ジャーナル,157,41-52.
近藤謙三,2004,植物ケイ酸体研究,ペドロジスト,48,46-64.

第6章 自然科学分析

- 石川正之助・井上唯雄・梅沢重昭・松本浩一,1979,火山堆積物と遺跡1,考古学ジャーナル,159,3-40.
- 町田 洋・新井厨夫,2003,新編 火山灰アトラス,東京大学出版会,336p.
- 三宅 尚・中越信和,1998,森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態,植生史研究,6,15-30.
- 中村 純,1967,花粉分析,古今書院,Z32p.
- 中村 純,1974,イネ科花粉について,とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として,第四紀研究,13,187-193.
- パノノ・サーヴェイ株式会社,1992,二之宮千足遺跡の古環境解析,「二之宮千足遺跡 一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(自然科学・分析編)」,財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第125集,建設省・群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,60-111.
- パノノ・サーヴェイ株式会社,2009MS,勝沼遺跡A区の自然科学分析,7p.
- 早田 勉,1989,六世紀における種名火山の二回の噴火とその災害,第四紀研究,27,297-312.
- 杉山真二,2000,植物珪酸体(プラント・オパール),辻 誠一郎(編著)「考古学と自然科学3 考古学と植物学」,同成社,189-213.
- 徳永重元・山内輝子,1971,花粉・胞子,「化石の研究法」,共立出版株式会社,50-73.
- 有限会社古環境研究所,1992,プラント・オパール分析調査報告,「二之宮千足遺跡 一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(自然科学・分析編)」,財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第125集,建設省・群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,50-60.

第7章 総括

本文で述べたように、丑子遺跡・上細井五十嵐遺跡では多くの遺構が調査できた。これらの遺構と周辺の地形との関係は、第154図に示したとおりである。ここでは調査の成果と意義についてまとめ、総括とした。

1 丑子遺跡の調査の成果と意義

丑子遺跡は東端部の低地部(南北方向の谷)と、西側の台地部に分かれる。低地部ではトレンチ調査を行ったところ、As-Bの純層が堆積しているのを確認したが、その下面の傾斜は非常に強く、平坦な面が見られなかったため、この場所に水田はないと判断した。しかし、近接する低地部で水田が営まれていた可能性は残るため、プラントオーバー分析を実施した。その結果は第6章第1節に掲載した通りであり、As-B下面だけではなく、その上下の層からもイネのプラントオーバーが検出された。そのため、遺跡に近接するどこかでは、複数の時代の水田跡が存在することが判明した。上武道路は赤城南麓を東西に横断するので、南北方向の谷が何本も調査区に掛かるが、水田が確認されたところは、本書で取り上げる上細井五十嵐遺跡の他はほとんどない。その意味では本遺跡の低地部で水田の存在が確認されたのは貴重な例と言える。上細井五十嵐遺跡はかなり広い低地部に水田が作られるが、本遺跡はごく狭い谷である。このような谷でも水田が営まれているのである。おそらく谷部にあるごく狭い平坦地に小規模な水田が作られていたと思われる。それがこの付近の集落の食料生産の一端を担っていたのであろう。このような状況は、水田が確認されていない他の谷地形でも、多かれ少なかれ同様であったと考えられる。

台地部では縄文時代から近世に及ぶ、多数の遺構・遺物が見つかった。調査した遺構の数は、竪穴住居40軒、竪穴状遺構2基、土坑111基、井戸12基、堀2条、溝4条、ピット19基であり、比較的多様な遺構を調査することができた。

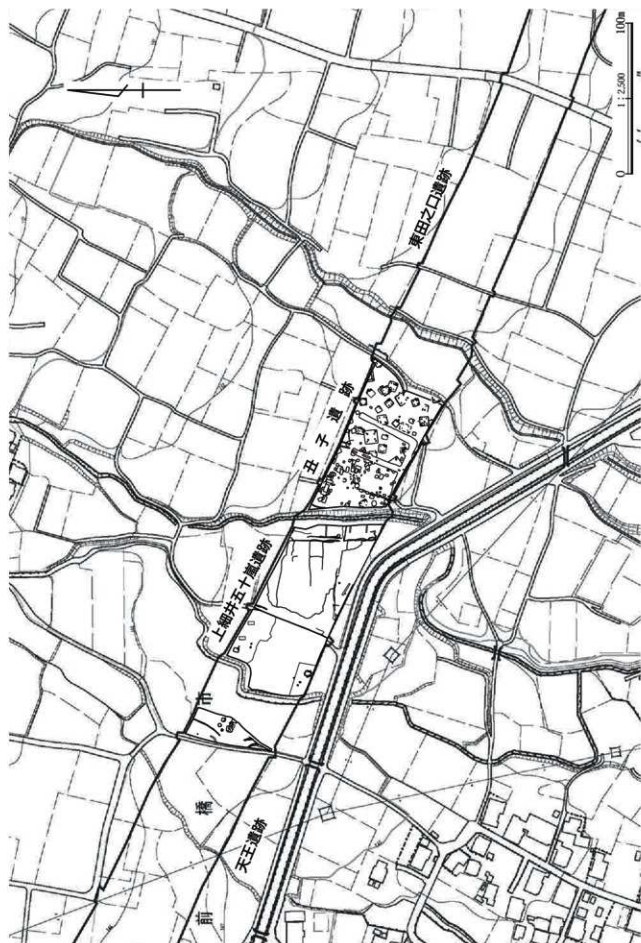
縄文時代は前期を中心とした少数の土器片と石器が出土しているのみで、遺構はない。しかし、前橋市教育委員会によって行われた上細井北遺跡群の調査では、北側

隣接地で前期諸磯C式の竪穴住居1軒が調査されているので、この遺跡に人が住み始めたのはそれが最初となる。

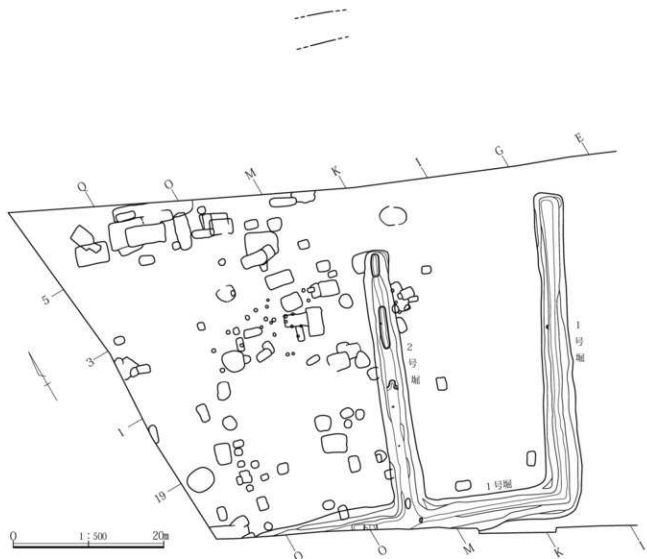
しかし、その後長くこの地に人が住んだ形跡はない。次に遺構が見られるのは弥生時代後期の樽式土器の時代であり、調査区内ではこの時代の竪穴住居が1軒見られる。その後は数は少ないものの、住居が継続して作られるようになる。今回の調査によって見つかった竪穴住居は40軒で、それらの年代は、弥生時代1軒、古墳時代33軒、奈良時代3軒、平安時代1軒、不明2軒である。比較的長期間にわたって集落が続いているといえるが、その中心は古墳時代中～後期で、この時期に27軒が集中しており、その前後の住居は少ない。

このように、古墳時代後期を中心とした時期にピークを迎えるのは、東隣にある東田之口遺跡も同様である。東田之口遺跡では68軒という多数の竪穴住居を調査したが、そのうち5世紀と思われるもの4軒、8世紀に下る可能性のあるもの1軒があるほかはすべて古墳時代後期の6～7世紀のものであり、かなり短期間に営まれた集落であることが判明している。この東田之口遺跡に比べれば、丑子遺跡の集落の存続期間は長いと言えるが、奈良・平安時代の住居はわずか4軒であり、古墳時代後期との差は大きい。このように、古墳時代後期に急に大集落となり、その後短期間のうちに衰退しているのが、東田之口遺跡・丑子遺跡の特徴である。赤城南麓地域では、芳賀東部団地遺跡のように、奈良・平安時代にも大集落として存続している遺跡もあるし、また、上武道路の調査においても、本遺跡の西側に位置するいくつかの遺跡では奈良・平安時代の住居が見ついている。それらと比較する時、本遺跡の様相は際だっていえる。本遺跡と東田之口遺跡の集落は、律令国家成立直前にピークを迎え、ちょうど成り立ちに急激に衰退している。そのような政治的激動期と連動するような集落の盛衰は、この地域の古代史を考える上で注目すべき点である。

平安時代の遺構は、先述のように竪穴住居1軒があるだけだが、東端の低地部には平安時代末のAs-B下水田が見られるので、この地が全くの無人の地になってしまったわけではない。



第154図 丑子遺跡・上細井五十嵐遺跡と周辺の地形(前橋市視形図(平成21年測図、富士見地区は平成23年測図)を使用)



第155図 丑子遺跡の館に関連する遺構

続く中世には、15～16世紀に館が築かれている。この館の存在は、1・2号堀という大規模な堀が、調査区内に逆F字形で掛かっていることから知ることができたものである。館に関係すると思われる遺構は第155図の通りである。この逆F字形の堀は、館の南辺、東辺となっているものと思われる。西辺は本遺跡の西端を南北に走る、比高差約3mの崖であろう。南辺の西延長部は西の崖にまで延びていることを崖面で確認している。東辺は2本の堀が平行することから、この面が館正面で、北側の途切れている部分が館への入り口であると思われる。そのさらに北は調査区外になってしまうので、館の南北の規模は知ることができないと思われた。ところが、調査区の北側で、本遺跡の調査と同時期に実施されていた区画整理事業において、道路建設のために地面が掘り下

げられていたところを観察したところ、堀と思われる痕跡が東西に横断していることを偶然発見した。それは幅3.8mの規模をもち、南辺とほぼ同じ方向であることから、これが館の北辺であると思われる。とすれば、この館の大きさは、堀の外側で計測して、南北約70m、東西は北辺で約85m、南辺で約50mとなる。堀の中からは15～16世紀中葉を中心とした時期の遺物が出土しているので、これが館の存続期間の一端を示していると思われる。

館内部の施設としては、ピットと土坑、井戸が見つまっている。ピットは堀の内側に集中して見つかっており、これが館の建物を構成するものと思われるが、残念ながら残りが悪く、建物として把握することはできなかった。土坑は中近世の遺物を出土するものが多く含まれ、かな

りの数が館に伴うと思われる。特に主軸方向が堀と平行ないしは直交するものは、この館に伴う可能性が高い。個々の土坑がどのような役割をもっていたのかは不明であるが、物の貯蔵や廃棄などに関わる物であろう。井戸も存続時期を明確に把握することができないので、12基のうちのどれが館に伴うものなのか、特定することは難しいが、堀の内側に位置するものは館に伴う可能性が高い。

このような中世末の館と思われるものは、東隣の東田之口遺跡でも見つかっている。そちらでは中世の遺構の残りが悪く、明確な堀も見つかっていないが、近接する位置に館が併存していたことは確かである。この地域には、崩城、大胡城など、戦国時代の城があり、それに関わる支城、砦、遠堀などが濃密に分布する。本遺跡と東田之口遺跡の館も、それらの城郭群の一翼を担っていたのではないだろうか。もちろん本遺跡の館は、堀と崖とに囲まれているとはいえ、外形が正方形で全体に小規模であり、防衛的機能は高いとは言えないであろうが、そのような歴史的環境下で一定の機能を果たしていた施設だと思われるのである。

なお、本遺跡と東田之口遺跡が立地しているのは、白川が形成した扇状地であるが、この堆積物は本遺跡の西側の崖面において観察することができる。そこでは成層した水成堆積物として把握でき、3m以上の厚さがある。そして、その下層には火山灰を含む層を観察できた。また、東田之口遺跡では、旧石器時代の調査において、この白川扇状地堆積物の上層に、やはり火山灰を含む層を確認している。とすれば、両者の火山灰を分析・同定することで、白川扇状地堆積物の年代をある程度絞り込むことができるはずである。そのような意図のもと、両地点で火山灰分析を実施し、その結果は第6章第2節に掲載した。

分析の結果、扇状地堆積物の下層の火山灰はAs-BPグループであり、上層の火山灰はAs-0kグループであることが判明した。そのため、この扇状地堆積物の年代は、As-BP(約1.9～2.4万年前)からAs-0k(約1.6～1.65万年前)の間にあることになり、本遺跡ののる白川扇状地の形成年代をある程度把握することができた。

2 上細井五十嵐遺跡の調査の成果と意義

上細井五十嵐遺跡は、低地と低台地と谷が繰り返すやや複雑な地形にあり、そのため、数は少ないものの多様な遺構が見られる。調査できた遺構は、竪穴住居5軒、土坑10基、溝4条、水田1面であり、それらの年代は、縄文時代前期から中近世という、幅広い時代にわたっている。

この遺跡でも人が住み始めるのは縄文時代前期であり、丑子遺跡と共通する。見つけたのは竪穴住居1軒で、西端のC区にある。C区は西隣の天王遺跡に続く傾斜地にあり、この区の遺構はこの住居に限らず、天王遺跡の中の遺構と共に理解すべきであろう。

弥生時代は遺物も出土せず、古墳時代は土坑1基とわずかな遺物が出土するだけである。次に遺構が見られるのは平安時代であり、竪穴住居が4軒ある。そのうち1軒は時期不明であるが、残り3軒は10世紀代のものであり、B区、C区に散在して存在する。この時期の竪穴住居は丑子遺跡や東田之口遺跡にはない。次に述べるA区の水田に関連する住居かもしれない。

その後の遺構としては、東の低地部=A区で見ついている水田跡である。ここにはAs-Bが良好な状態で堆積しており、その下面に棚田状の形態の水田が見つかった。その面の水田の開田時期は不明であるが、下層には間層を挟んでより古い水田があることがプラントオパール分析の結果判明している。その分析の結果は第6章第3節のとおりであるが、そのため、この部分では古くから水田が営まれていたことが判明した。先述したとおり、この地域の上武道路に関連する調査で水田が見つかったのは珍しく、当時の生業を知る上で貴重な成果であると思われる。

遺物観察表 凡例

遺物観察表(第24表～第47表)は、縄文土器・弥生土器、古墳時代～古代の土器、中近世の土器・陶磁器、石器・石製品とで表の形式、記述が異なる。また記述では略号などを多く用いた。そのうち注意が必要なものについて、以下にその凡例を掲げる。

出土位置 出土位置を挿図にドットで示してある遺物については、遺構内のおおよその出土位置を記述し、同時に床面とのレベル差を+○(cm)、-○(cm)と示す。cmは略。±0や床面にわずかにめり込んでいる場合は「床直」と記述する。

計測値 土器・陶磁器は基本的に口径・底径・器高を計測し、古墳時代～古代の土器の場合はそれぞれ「口」・「底」・「高」と略している。その他、「脚底」=脚部の底径、「孔」=孔の径などを用いた場合がある。ただし縄文土器・弥生土器はいずれも小破片であるため、計測値を示せるものはなかった。石製品・金属製品などでは長さ・幅・厚さなどを計測しているが、形状により異なるので表中に計測位置を明示した。単位はすべてcmである。重さを計測した場合もあり、その場合の単位はgである。なお○は推定値、□は残存値を表す。

胎土 土器は夾雑物を記述する。古墳時代～古代の土器では、砂粒の場合は2mm以下を細砂粒、2mm以上を粗砂粒とする。その他、軽石、角閃石、輝石、石英、片岩、小礫などの混入を記述する。中近世の在地系土器についてはA・Bで区別するが、Aは片岩に由来する雲母状に光る鉱物を含むもの、Bはそれを含まないものを示している。弥生土器・縄文土器は、細砂粒、粗砂粒、白色粒、黒色粒などの混入を記述し、縄文時代前期の土器の場合は繊維の混入を明示した。

焼成 古墳時代～古代の土器については、土師器の場合は「良好」か「やや不良」かを区別し、須恵器の場合は「還元焰」か「酸化焰」かを区別して記入している。縄文土器・弥生土器は「良好」か「ふつう」かを区別している。中近世の土器・陶磁器は特にこの項目を設けず、記述する必要がある場合は成形・整形の特徴の項目に記述する。

色調 『新版標準土色帖1999年版』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修)に準拠した。

中近世の土器・陶磁器の年代 次の文献によっている。

- | | |
|--------|---|
| 在地片口鉢 | 星野守弘「軟質陶器」『新編高崎市史 資料編3 中世I』高崎市 1996 |
| 内耳鍋 | 秋本太郎「上野と周辺地域との関係-在地土器の分布論を中心に」『海なき国々のモノとヒトの動き-16～17世紀における内陸部の流通-』内陸遺跡研究会 2005 |
| 在地系土器皿 | 木津博明「上野国に於ける在地生産土器について」『中近世土器の基礎研究』V 中世土器研究会 1989 |
| 常滑 | 中野晴久「常滑窯」、『編年表』『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世・常滑系』愛知県 2012 |

出土遺物観察表

第24表 出土遺物観察表(土子遺跡1)

1号住居出土土師器								
検出番号 図版番号	No	器 種	類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第108図 PL.51	1	土師器 鉢	丸	北側付近+8 3/4	□ 13.6 高 7.4 底 4.7	細砂粒/良好/赤	体部外面は斜めのヘラ磨きで、赤色塗彩。内面は横のヘラ磨きで塗布りか。	底部がドーナツ状に厚減
第108図	2	土師器 襷	丸	口縁部片	□ 9.0	細砂粒/良好/にぶい赤褐色	口縁部から胴部外面に丁寧な横の撫で後、斜めの粗いヘラ磨き。口縁部内面は斜めのヘラ磨き。	内面吸炭
4号住居出土土師器								
検出番号 図版番号	No	器 種	類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第132図 PL.51	1	土師器 高杯	脚	貯蔵穴内 胴部片	底 14.6	細砂粒/良好/灰黄褐色	胴部外面は縦のヘラ磨き、内面は撫で。	
第132図	2	土師器 襷	丸	貯蔵穴内 口縁部片	□ 13.0	細砂粒/良好/にぶい黄褐色	口縁部は横撫で、体部外面上半は撫で、下半は縦のヘラ撫で。内面は横の撫で。	体部外面に輪積み痕
5号住居出土土師器								
検出番号 図版番号	No	器 種	類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第161図	1	土師器 杯	丸	履上 口縁部片	□ 13.0	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	内面及び口縁部外面は塗布り
第161図	2	土師器 杯	丸	履上 口縁部片	□ 12.8	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/にぶい赤褐色	厚手の作りで、口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	内外面は塗布りか
第161図	3	土師器 襷	丸	履上 口縁部片	□ 13.8	細砂粒/良好/明赤褐色	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
第161図 PL.51	4	土師器 高杯	脚	履上 脚部		細砂粒・軽石/良好/にぶい黄褐色	胴部外面は縦のハケ目(1cmに5本)、内面は撫で。	
第161図	5	土師器 襷	丸	履上 胴部片	□ 11.8	細砂粒・軽石/良好/にぶい赤褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のヘラ削り、内面は縦の撫で。	
第161図 PL.51	6	土師器 襷	丸	履上 胴部→底部	底 5.9	細砂粒・軽石/良好/にぶい赤褐色	胴部外面は斜めのヘラ削り、内面は横のヘラ撫で。	胴部外面の一部にハケ目残存
第161図 PL.51	7	土師器 襷	丸	電左袖 完形	□ 19.6 高 37.1 底 4.6	細砂粒・粗砂粒/良好/黄褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	内面に帯状の凹みとハゼ
第161図 PL.51	8	土師器 襷	丸	履上 口縁→胴部下半	□ 19.2	細砂粒・粗砂粒/良好/明赤褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	内面ハゼ
第161図 PL.51	9	土師器 襷	丸	履上 電左袖外直流、履上 胴部→底部	底 3.6	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい赤褐色	胴部外面は縦のヘラ削り、内面は斜めから縦のヘラ撫で。底部ヘラ削り	
6号住居出土土師器								
検出番号 図版番号	No	器 種	類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第191図 PL.51	1	土師器 杯	丸	履上 3/4	□ 12.4 高 5.4	細砂粒/良好/明赤褐色	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	底部の一部に煤付着
第191図 PL.51	2	土師器 杯	丸	貯蔵穴・電左袖 1/3	□ 12.4 高 5.0	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
第191図	3	土師器 杯	丸	履上 口縁部片	□ 13.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で後、斜射放射ヘラ磨き	
第191図 PL.51	4	土師器 襷	丸	貯蔵穴埋土上、履上	□ 13.2	細砂粒・粗砂粒/良好/明黄褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのヘラ削り、内面は横のヘラ撫で。	
第191図	5	土師器 襷	丸	履上 口縁部片	□ 17.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は撫で、内面も撫で。	
第191図 PL.51	6	土師器 襷	丸	貯蔵穴埋土上、P.4、履上 口縁→胴部	□ 14.8	細砂粒・粗砂粒/良好/明黄褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のヘラ削り、内面は撫で。	
7号住居出土土師器								
検出番号 図版番号	No	器 種	類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第211図 PL.52	1	土師器 杯	丸	履上 口縁→体部片	□ 11.2	細砂粒・軽石/良好/にぶい黄褐色	口縁部は横撫で。体部は撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面はヘラ磨き後、黒色処理	
第211図 PL.52	2	土師器 杯	丸	伊西床直、南隅 5 口縁→底部片	□ 12.6	細砂粒・粗砂粒・軽石/角閃石/良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面はヘラ磨き、内面吸炭	
第211図 PL.52	3	土師器 高杯	丸	伊西床直+4、履上 3/4	□ 17.4 高 14.3 脚 11.8	細砂粒・粗砂粒・軽石・角閃石/良好/明赤褐色	口縁部は横撫で。体部外面下半はハケ目(1cm7本)、内面下半もハケ目。胴部外面は撫で。胴部外面はハケ目(1cmに7本)、内面は撫で。	胴部内面に輪積み痕明瞭
第211図 PL.52	4	土師器 高杯	丸	南西壁段、履上、12住3層 杯部	□ 17.5	細砂粒・粗砂粒/角閃石・軽石/良好/にぶい黄褐色	杯部内外面は丁寧な横撫で、斜めのヘラ磨き。杯底部は雑なヘラ磨き。	内外面に赤色塗彩
第211図 PL.52	5	土師器 高杯	丸	伊西床直、南隅+5 1/2	□ 16.2	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/にぶい黄褐色	杯部内外面は撫で。	内外面に赤色塗彩。杯部の内面厚減
第211図	6	土師器 高杯	丸	履上 杯部片	□ 19.8	細砂粒・軽石/良好/明赤褐色	口縁部内外面は横撫で後、縦のヘラ磨き。	

第25表 出土遺物観察表(土子遺跡2)

7号住居出土土器部(続き)

種別番号 図版番号	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第21図 Pl.52	7	土器器 高杯	覆土 杯部	□ 16.5	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。体部外面は縦のハケ目(1cmに12本)、内面は横のハケ目(1cmに12本)。	内面に輪状の痕
第21図 Pl.52	8	土器器 高杯	覆土・12住覆土 杯部	□ 18.0	細砂粒・粗砂粒/角閃石・軽石/良好/にぶい赤褐色	口縁部は横撫で。体部内面は斜めの撫で。	杯部内面のハゼ顕著
第21図 Pl.52	9	土器器 高杯	東隅+24、覆土 杯部	□ 17.3	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/浅黄橙	杯部外面は撫で後、縦のへら磨き。底部はハケ目(1cmに8本)後、へら削り。内面は横から斜めのハケ目後、斜めのへら磨き。	
第21図 Pl.52	10	土器器 高杯	覆土 杯部	□ 17.0	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/赤	杯部外面は撫で、底部はへら削り磨き。内面は斜めのへら磨き。	
第21図 Pl.52	11	土器器 高杯	覆土 杯部	□ 15.8	細砂粒・軽石/良好/にぶい黄橙	口縁部横撫で。杯部外面は斜めの撫で、下端は横の撫で。内面は縦のへら磨き。	
第21図 Pl.52	12	土器器 高杯	P3付近+5、覆土 杯部	□ 17.0	細砂粒・軽石/良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。体部内面は縦のへら磨き。	口縁部から体部外面に付着。
第22図 Pl.52	13	土器器 高杯	東隅+22、覆土 杯部	□ 16.5	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/明赤褐色	杯部外面は撫で。内面は放射状のへら磨き。	
第22図 Pl.52	14	土器器 高杯	貯蔵穴北床直、覆土 脚部	底 15.0	細砂粒・粗砂粒/良好/赤橙	脚部外面は撫で。基部外面は縦の粗いへら磨き。内面は撫で。	脚部内面に輪状の痕
第22図 Pl.52	15	土器器 高杯	南東壁際+4、覆土 脚部		細砂粒・軽石/良好/浅黄橙	脚部外面は縦のハケ目(1cmに7本)、内面は指先の撫で。	
第22図 Pl.52	16	土器器 高杯	炉西床直、覆土 脚部	脚部 底 13.8	細砂粒・角閃石/良好/にぶい黄橙	脚部内外面は撫で。	
第22図 Pl.52	17	土器器 高杯	覆土 脚部	脚部 底 10.0	細砂粒/良好/にぶい黄橙	脚部外面は縦のへら磨き。内面は撫で。	
第22図 Pl.52	18	土器器 高杯	P4付近+8、覆土・103土坑 体部下下～脚部		細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/にぶい黄橙	杯底部及び脚部外面は撫で。脚部横撫で。内面は撫で。	杯内面に剥離顕著
第22図 Pl.52	19	土器器 鉢か	北東壁際床直 口縁一部欠	□ 11.4 高 6.5 底 4.6	細砂粒/良好/にぶい黄橙	体部は内外面撫で。	内外面赤色塗彩。底部摩滅。体部外面下下に帯状に付着。
第22図	20	土器器 鉢か	覆土 口縁部	□ 12.8	細砂粒・軽石・軽石/良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。体部外面は斜めのへら撫で。内面は横のへら撫で。	
第22図	21	土器器 鉢か	覆土 口縁部		細砂粒・軽石/良好/にぶい黄橙	折り返し口縁で、指先の押さえた痕跡。体部外面は斜めの撫で。内面は横の撫で。	
第22図	22	土器器 碗	覆土 口縁～体部片	□ 11.0	細砂粒・軽石/良好/にぶい赤褐色	口縁部は横撫で。体部外面は撫で。内面はへら撫で。	
第22図	23	土器器 碗か	覆土 口縁～体部片	□ 10.4	細砂粒・角閃石/良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。体部外面は撫で。内面は撫で後、斜めの粗いへら磨き。	内外面赤色塗彩。口縁部から体部外面に付着。
第22図 Pl.52	24	土器器 台付鉢	中央+1 完形	□ 15.3 高 17.5 底 13.9	細砂粒・軽石/良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。体部外面上半は撫で、下半は縦のハケ目(1cmに7本)、内面は横のへら撫で。脚部外面は撫で、一部にハケ目の痕跡。内面は撫で。	鉢部外面に煤が付着し、ふきこぼれ痕
第22図 Pl.53	25	土器器 盃	東隅+2 口縁～体部片	□ 9.8	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/にぶい黄橙	口縁部外面は横、頸部は縦、胴部外面は横のへら磨き。頸部内面はへら撫で。	外面及び口縁部内面は赤色塗彩
第22図 Pl.53	26	土器器 盃	南東壁中央付近+1 口縁～体部片	□ 13.6	細砂粒・軽石/良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。頸部外面は縦のハケ目後、撫で消す。口縁部内面は斜めのへら磨き。胴部内面は撫で。	外面及び口縁部内面は赤色塗彩
第22図 Pl.52	27	土器器 盃	貯蔵穴北東+1 口縁～胴部	□ 13.3	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/にぶい黄橙	口縁部外面は横、頸部内外面は縦、胴部外面は斜めのへら磨き。内面は横のへら撫で。	口縁部から胴部外面に付着
第22図 Pl.52	28	土器器 盃	覆土 口縁部	□ 16.4	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部外面、胴部外面は縦のへら磨き。口縁部内面は横のへら磨き。胴部内面は横の撫で。	
第22図 Pl.52	29	土器器 盃	炉西+8～18、南 部中央床直 3/4	□ 16.8 高 20.3 底 7.4	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦から横のハケ目(1cmに7本)、内面は横のへら撫で。	胴部外面中に煤付着。上半にふきこぼれ痕。底部上好底

7号住居出土石製品

種別番号 図版番号	No	器種 形・素材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第22図 Pl.53	30	石製模造品 勾玉	覆土	2.7	1.8	0.5	2.3	孔は片無穿孔(径1.5mm)され、背面側の孔周辺は穿孔時に弾け残る窪み。表面とも未研磨部分を残し、雑な作り。	滑石

8号住居出土土器

種別番号 図版番号	No	器種 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第24図	1	土器器 杯か	覆土 口縁部	□ 14.0	細砂粒・粗砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。内面は撫で後、斜めのへら磨き。底部は手持ちへら削り。	粉っぽい胎土

出土遺物観察表

第26表 出土遺物観察表(土子遺跡3)

8号住居出土土師器(続き)

検出番号 図版番号	No	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎上/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第24図	2	土師器 器台か	覆土 脚部		細砂粒・粗砂粒・角 閃石/良好/ぶい 黄褐色	脚部外面は覆のヘラ磨き、内面は覆の撫で。	
第24図	3	土師器 壺か	覆土 胴部片		細砂粒・粗砂粒/良 好/褐色	胴部内外面は撫で。	内外面は厚減
第24図	4	土師器 壺	覆土 口縁部片	口 19.5	細砂粒/良好/ぶい 黄褐色	口縁部は横撫で。胴部外面上位は覆のヘラ削り。	口縁部外面に 輪積み痕
第24図 PL.53	5	土師器 壺	貯蔵穴・ 胴部下位～底部	底 4.6	細砂粒・粗砂粒/良 好/ぶい褐色	胴部外面は斜め、下端は横のヘラ削り。内面は斜めのヘ ラ撫で。	内外面の器面 厚減

9号住居出土土師器・土製品

検出番号 図版番号	No	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎上/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第27図	1	土師器 鉢か	甕石袖+4、甕内 口縁部片	口 14.6	細砂粒・粗砂粒・軽 石/良好/褐色	口縁部は横撫で。底部内外面は撫で。	
第27図 PL.53	2	土師器 鉢	覆土 口縁・底 部一部欠	口 13.6 高 7.2 底 4.9	細砂粒・粗砂粒/良 好/褐色	口縁部は横撫で。体部上半は撫で、下半は横のヘラ削り。 内面は横の撫で、底部ヘラ削り。	
第27図 PL.53	3	土師器 鉢か	甕方 体部～底部	底 4.0	細砂粒・粗砂粒・軽 石/良好/赤褐色	体部外面は撫で、内面は横から覆のヘラ磨き。	内外面に赤色 塗彩
第27図	4	土師器 高杯	覆土 口縁片	口 18.8	細砂粒・軽石/良好 /褐色	杯部外面は撫で後、斜めのヘラ磨き。内面は放射状のヘラ 磨き。	内面下半は赤 褐色
第27図	5	土師器 壺	甕左前側方、甕 内口縁～体部片	口 7.2	細砂粒・角閃石・軽 石/良好/褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は撫で、内面はヘラ撫で。	胴部内外面に 接合痕
第27図 PL.53	6	土師器 壺	甕前+6、覆土、 甕内、甕方 3/4	口 16.0 高 25.0 底 7.2	細砂粒・粗砂粒・軽 石/良好/褐色	口縁部横撫で。胴部外面は横から斜めのヘラ磨き、下端は 斜めのヘラ磨き。内面は横のヘラ撫で。	
第27図 PL.53	7	土師器 壺	甕内 底部	底 6.7	細砂粒・粗砂粒・軽 石/良好/赤褐色	胴部外面は覆のヘラ磨き、内面は斜めのヘラ磨き。	内面ハゼ
第27図 PL.53	8	土師器 甕	甕右側+6、覆土 1/4	口 17.4 高 25.9 底 9.0	細砂粒・粗砂粒/濁 褐色	口縁部は横撫で。頸部外面はハケ目(1cmに7本)で、内面 はハケ目後撫で。体部外面は斜めのヘラ磨き。下半はハケ 目後ヘラ撫で。内面は横のヘラ撫で後、一部は覆のヘラ磨 き。下半はハケ目(1cmに7本)。	内面下半は赤 褐色
第27図 PL.53	9	土師器 甕	甕前床直、甕内 +15、覆土 3/4	口 20.6 高 27.6 底 8.8	細砂粒・粗砂粒・軽 石/良好/明黄褐色	口縁部横撫で。胴部から胴部外面上半は斜めの、中位は横 のヘラ撫で、下半は覆のヘラ削り。内面は斜めのヘラ撫で。	内外面に輪積 み痕
第27図 PL.53	10	土師器 甕	覆土 下半部		細砂粒・粗砂粒/良 好/浅黄褐色	体部外面は撫で、内面は斜めのヘラ撫で、一部にハケ目(1 cmに6本)、穿孔部は撫で。	
第28図 PL.53	11	土製品 支脚か	甕左前側方 断面一部欠	頂 8.5 高 10.8 底 6.3	細砂粒・粗砂粒/良 好/明黄褐色	高杯脚部の作りで、断面は貼付された形跡はない。上端は わずかに突出し、裏面に熱によると思われるハゼが見られる。	上端縁辺部に 覆付着
第28図 PL.53	12	土製品 粘土塊	甕右+4 完形	長 12.1 厚 3.0 幅 12.0 さ	細砂粒・粗砂粒・軽 石/良好/灰黄褐色	上面は指先の撫で、下面は扁平状圧痕。	

10号住居出土土師器

検出番号 図版番号	No	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎上/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第29図 PL.54	1	土師器 杯	P 1 内 口縁一部欠	口 13.3 高 4.8	細砂粒・粗砂粒・軽 石/良好/褐色	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面はヘラ磨き。	口縁部外面に 塗彩か
第29図 PL.54	2	土師器 杯	甕内 底部中央欠損	口 13.2	細砂粒・石英/良好 /暗赤褐色	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	口縁部外面に 覆付着
第29図 PL.54	3	土師器 杯	甕内+3 底部中央欠損	口 13.0	細砂粒/良好/明赤 褐色	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
第30図 PL.54	4	土師器 甕	甕西北床直 3/4	口 24.1 高 27.4 底 8.8	細砂粒・粗砂粒・石 英・軽石/良好/明 黄褐色	口縁部は横撫で。体部外面は覆のヘラ削り。内面は横のヘ ラ撫で。	

11号住居出土土師器

検出番号 図版番号	No	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎上/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第32図 PL.54	1	土師器 杯	甕内支脚石上 3/4	口 11.9 高 5.0	細砂粒・粗砂粒・石 英・軽石/良好/ぶ い褐色	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	内面に「X」の 刻書
第32図 PL.54	2	土師器 杯	覆土 1/4	口 11.6 高 5.1	細砂粒・粗砂粒/良 好/褐色	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	粉っぽい胎土
第32図 PL.54	3	土師器 鉢	貯蔵穴北東+14、 貯蔵穴内、覆土 口縁部～胴部	口 15.2	細砂粒・粗砂粒・軽 石/良好/褐色	口縁部は横撫で。体部外面は覆のヘラ削り。内面は横の撫 で。	
第32図	4	土師器 手捏む	覆土 1/5	底 5.0	細砂粒/良好/ぶい 黄褐色	内外面共に撫で。	外面に輪積み 痕

12号住居出土土師系土器・土師器

検出番号 図版番号	No	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎上/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第34図 PL.54	1	土師系土 器	P 5、甕上 口縁～頸部	口 13.8	粗砂粒/良好/濁 褐色	折返し口縁で、胴部に縞帯波状文を巡らせる。外内面ナデ。	

第27表 出土遺物観察表(土器跡4)

12号住居出土土器類(焼き)

調査番号 図版番号	No	種 器 類	出土位置 残存率	計 測 値	胎上/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第34図 PL.54	2	土師器 高杯	住居中央3層、 甕上 杯部	□ 18.2	細砂粒・粗砂粒・石 英・軽石/良好/明 赤褐色	口縁部は横撫で、体部中位は斜めのへら削り、下位はハケ目(1cmに6本)後撫で。内面はへら磨き。	
第34図 PL.54	3	土師器 高杯	甕上 杯部片	□ 19.8	細砂粒・軽石/良 好/橙	口縁部は横撫で、体部外面上位はハケ目後撫で、中位はハケ目(1cmに5本)、下位は横のへら削り。内面はハケ目(1cmに5本)。	
第34図 PL.54	4	土師器 高杯	甕上 杯部	□ 16.9	細砂粒・粗砂粒・軽 石/良好/明赤褐色	口縁部は横撫で、体部中位は横のへら磨き、内面は横のへら撫で。	脚は杯のソケット部分から剥離
第34図 PL.54	5	土師器 高杯	甕上 杯部	□ 17.0	細砂粒・粗砂粒・軽 石/良好/明赤褐色	口縁部は横撫で、体部下半はへら磨き。	内面のハズレ著
第34図 PL.54	6	土師器 高杯	甕上 杯部片	□ 15.8	細砂粒/良好/に ぶい黄褐色	外面は斜めのへら磨き、内面は撫で。	内外面に赤色 塗彩
第34図 PL.54	7	土師器 高杯	住居中央3層、 甕上 杯部	□ 15.9	細砂粒・粗砂粒・軽 石/良好/にぶい黄 褐色	口縁部は横撫で、体部中位は横のへら撫で。	内面のハズレ著
第34図 PL.54	8	土師器 高杯	住居中央3層 杯部片	□ 15.8	細砂粒・軽石/良 好/にぶい黄褐色	口縁部は横撫で、体部外面はハケ目(1cmに6本)後撫で、内面は粗いへら磨き。	
第34図 PL.54	9	土師器 高杯	甕上 杯底部片		細砂粒・軽石/良 好/にぶい黄褐色	杯部外面上位はハケ目(1cmに6本)、中位は横のへら磨き、下位は縦のへら削り。内面はへら磨き。	
第34図 PL.54	10	土師器 高杯	甕上 脚部	脚 底 15.2	細砂粒・軽石/良 好/浅黄褐色	脚部外面は撫で、裾部はへら磨き。内面は撫で。	脚部内面に輪 積み痕著
第34図 PL.54	11	土師器 高杯	甕上 脚部	脚 底 12.0	細砂粒・軽石/良 好/浅黄褐色	脚部内外面は撫で、裾部は横撫で。	脚部内面に輪 積み痕著
第34図 PL.54	12	土師器 高杯	甕上 脚部	脚 底 12.6	細砂粒・軽石/良 好/にぶい黄褐色	脚部外面は撫で、裾部は粗いへら磨き。内面は撫で。	
第34図 PL.54	13	土師器 高杯	甕上 脚部	脚 底 11.0	細砂粒・軽石/良 好/にぶい黄褐色	脚部外面は縦のへら撫で、裾部は横撫で。内面は撫で。	脚部内面に輪 積み痕著
第35図 PL.55	14	土師器 鉢	甕上 1/3	□ 11.0 高 5.3	細砂粒・粗砂粒/良 好/赤褐色	口縁部は横撫で、体部外面上半は撫で、下半は横のへら削り。底部は手持ちへら削り。内面はへら撫で。	
第35図 PL.55	15	土師器 鉢	甕上 口縁～体部片	□ 14.3	細砂粒・軽石/良 好/にぶい黄褐色	口縁部は横撫で、体部外面は斜めのへら撫で。内面はハケ目(1cmに10本)。	
第35図 PL.55	16	土師器 鉢	甕上 杯部片	□ 15.4	細砂粒・軽石/良 好/明赤褐色	口縁部は横撫で、体部外面は撫で、内面はへら撫で。	
第35図 PL.55	17	土師器 鉢	住居中央2層、 甕上 完形	□ 11.8 高 7.9 底 4.2	細砂粒・粗砂粒・ 軽石/良好/にぶい 黄褐色	口縁部は横撫で、体部外面は横のへら撫で、内面は横の撫で。	体部下端は摩 滅
第35図 PL.55	18	土師器 鉢	住居内部3層 口縁一部欠	□ 10.2 高 8.1 底 2.6	細砂粒・軽石/良 好/明赤褐色	口縁部は横撫で、体部外面上半は撫で、下半は横のへら撫で。内面上半は横のへら撫で、下半は縦の撫で。	体部外面下半 は摩滅、上半 に復付着
第35図 PL.55	19	土師器 鉢か	甕上 口縁部片	□ 12.8	細砂粒・角閃石/良 好/にぶい黄褐色	口縁部は横撫で、体部外面は撫で、内面は横のへら撫で。	
第35図 PL.55	20	土師器 鉢か	甕上 口縁部片	□ 16.8	細砂粒・軽石/良 好/にぶい黄褐色	口縁部は横撫で、体部内外面は斜めのへら撫で。	甕付着
第35図 PL.55	21	土師器 鉢か	甕上 口縁～体部片	□ 9.8	細砂粒/良好/に ぶい橙	口縁部は横撫で、体部外面は横のへら撫で、内面は撫で。	内外面に輪積 み痕、内面に 顕著
第35図 PL.55	22	土師器 鉢	甕上 口縁～体部片	□ 9.8	細砂粒・角閃石/良 好/にぶい黄褐色	口縁部は横撫で、体部外面下半は横のへら撫で、内面は撫で。	体部内外面に 輪積み痕
第35図 PL.55	23	土師器 鉢	住居中央3層、 甕上 口縁～体 部片		細砂粒・軽石/良 好/にぶい橙	体部内外面は撫で。	体部外面中位 は剥離
第35図 PL.55	24	土師器 台付鉢	甕上 1/4		細砂粒・軽石/良 好/にぶい黄褐色	脚部外面はハケ目後撫で、下半は横のへら撫で。内面は横の撫で。	
第35図 PL.55	25	土師器 皿	住居中央3層 底 3/4	□ 8.5 高 10.9 底 2.2	細砂粒・軽石/に ぶい赤褐色	口縁部外縁を有し、外縁より上位は横撫で、下位は撫で、脚部外面及び底部は撫で、口縁部内面下位はハケ目(1cmに9本)。内面はへら撫で。	胴部に黒炭
第35図 PL.55	26	土師器 皿	住居中央3層 体部一部欠	□ 11.8 高 15.6	細砂粒・粗砂粒・ 軽石/良好/にぶい 黄褐色	口縁部は横撫で、縦のへら磨き。体部外面は横のへら磨き、内面は撫で。	口縁部及び体 部外面に復付 着
第35図 PL.55	27	土師器 皿	住居中央3層、 甕上 3/4		細砂粒・粗砂粒・ 軽石/良好/にぶい 黄褐色	口縁部は外面は撫で、内面は斜めのハケ目(1cmに6本)。体部外面上半は横のハケ目(1cmに8本)、下半は横の細かなへら撫で。内面は撫で。	体部外面に煤 付着
第35図 PL.55	28	土師器 皿	甕上 口縁～胴部	□ 18.5	細砂粒・粗砂粒・ 輝石・軽石/良好/ 橙	口縁部は横撫で、胴部外面はハケ目(1cmに11本)後、斜めから横のへら撫で。胴部中位は横のへら磨き。内面は横から斜めのへら撫で。	
第35図 PL.55	29	土師器 皿	甕上 胴部～底部	底 5.6	細砂粒・粗砂粒・ 軽石/良好/にぶい 橙	胴部外面は斜めのへら撫で。内面はハケ目(1cmに6本)。	底部及び胴部 外面下端は摩 滅
第36図 PL.55	30	土師器 皿	甕上 胴部～底部	底 7.5	細砂粒・粗砂粒・ 軽石/良好/にぶい 橙	胴部外面は斜めのへら撫で、中位に横のへら削り。内面は斜めのへら撫で。	内面に細かな ハズレ著
第36図 PL.55	31	土師器 皿	住居中央・南部 3層 1/4	底 14.3	細砂粒・粗砂粒/良 好/にぶい黄褐色	外面中位は斜め、下位は横のへら撫で、下端は横の細かなへら撫で。内面は撫で。	底部周辺は摩 滅

出土遺物観察表

第28表 出土遺物観察表(土子跡跡5)

12号住居出土土師器(続き)

神原番号 図版番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第36図 PI.56	32	土師器 甕	甕上 肩部片			細砂粒・粗砂粒/良好/明赤褐色	外面はヘラ削り、内面はヘラ撫で。	内面ハゼ
第36図 PI.56	33	土師器 甕	甕上 胴部～底部	底	8.8	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/にぶい黄褐色	胴部外面は縦から斜めのヘラ磨き、下端は横のヘラ削り。底部周辺はヘラ削り。内面はヘラ撫で。	
第36図 PI.56	34	土師器 甕	甕上 1/3	口	10.8 高 11.6 底 6.2	細砂粒・軽石/良好/にぶい黄褐色	口縁部は横撫で、胴部外面上半は撫で、下半は斜めのヘラ撫で。内面は横のヘラ撫で。	
第36図 PI.56	35	土師器 甕	甕上 1/4	口	12.6	細砂粒・軽石/良好/にぶい黄褐色	口縁部は横撫で、胴部外面上半は撫で、下半は斜めのヘラ撫で。内面は横から斜めのヘラ撫で。	
第36図 PI.56	36	土師器 甕	甕上 口縁～胴部	口	12.7	細砂粒・軽石/良好/赤褐色	口縁部は横撫で、胴部外面は整形不明。内面は横のヘラ撫で。	外面の粗れ顕著
第36図 PI.56	37	土師器 甕	住居中央3層 4/5	口	18.4 高 25.6 底 6.8	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/浅黄褐色	口縁部は横撫で、胴部外面上半は斜めのヘラ撫で、下半は斜めのヘラ削りで、中にハケ目(1cmに8本)を残す。底部はヘラ削り。胴部内面上半は撫で、下半は斜めのヘラ撫で。	胴部外面中に復付着。内外面に輪積み痕
第36図 PI.56	38	土師器 甕	住居中央3層 1/4	底	4.8	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/にぶい黄褐色	胴部外面は縦の粗いヘラ磨き。内面は横から斜めのヘラ撫で。	胴部外面上半はハゼ
第36図	39	土師器 甕	甕上 口縁部片	口	16.0	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/灰褐色	口縁部は横撫で、胴部外面は縦のハケ目(1cmに6本)。胴部内面は縦のハケ目。	口縁部外面に復付着
第37図	40	土師器 甕	甕上 口縁部片	口	19.2	細砂粒・軽石/良好/にぶい赤褐色	口縁部は横撫で、胴部外面上半は斜めのヘラ撫で、内面は横のヘラ撫で。	口縁部外面に復付着
第37図	41	土師器 甕	甕上 口縁部片	口	17.0	細砂粒・軽石/良好/にぶい褐色	口縁部は横撫で、胴部外面上半はハケ目(1cmに4本)。	口縁部外面に輪積み痕
第37図	42	土師器 甕	甕上 口縁部片	口	18.8	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/褐色	口縁部は横撫で、胴部外面は撫で。	
第37図	43	土師器 甕	住居南部3層 口縁部片	口	21.8	細砂粒・粗砂粒/良好/明赤褐色	口縁部外面は斜めのハケ目(1cmに5本)、内面は撫で。	口縁部内面に剥離
第37図	44	土師器 甕	甕上 口縁部片	口	28.5	細砂粒・角閃石/良好/にぶい黄褐色	口縁部は横撫で。	内面の剥離顕著
第37図 PI.56	45	土師器 甕	甕上 胴部～底部	底	8.0	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/明黄褐色	胴部外面は斜めのハケ目(1cmに8本)。	底部及び内面摩滅
第37図	46	土師器 甕か	甕上 底部片			細砂粒・軽石/良好/にぶい黄褐色	外面はヘラ磨き、内面はヘラ撫で。	復成前の小孔一カ所

13号住居出土土師器

神原番号 図版番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第40図	1	土師器 杯	貯蔵穴内 口縁～底部片	口	11.8	細砂粒/良好/にぶい黄褐色	口縁部は横撫で、底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
第40図	2	土師器 杯	貯蔵穴内 口縁部片	口	15.8	細砂粒・粗砂粒・角閃石・軽石/良好/明赤褐色	口縁部は横撫でで有段。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	

15号住居出土土師器

神原番号 図版番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第42図 PI.56	1	土師器 高杯	貯蔵穴北床直 脚部	脚 底	13.4	細砂粒・軽石/良好/褐色	外面は撫で一部ハケ目(1cmに7本)、内面はハケ目と撫で。	
第42図 PI.56	2	土師器 台付費か	西部-3 台部	底	8.0	細砂粒・軽石/良好/にぶい黄褐色	外面は縦のヘラ磨き、内面は撫で。	
第42図 PI.56	3	土師器 甕	西部+10 4/5	口	13.4 高 15.5	細砂粒・石英/良好/褐色	口縁部から胴部外面は丁寧なヘラ磨き。底部は手持ちヘラ削り。胴部内面は斜めの粗いヘラ磨き。	

16号住居出土土師器

神原番号 図版番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第43図 PI.56	1	土師器	西辺壁床直 完形	口	14.6 高 4.7	細砂粒/良好/褐色	口縁部は横撫で、底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	粉っぽい粘土

17号住居出土土師器・須恵器

神原番号 図版番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第46図 PI.56	1	土師器 杯	庵西壁際+6・ +12 3/4	口	13.0 高 4.8	細砂粒・粗砂粒・角閃石・軽石/良好/褐色	口縁部は横撫で、底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
第46図 PI.56	2	土師器 杯	甕上 口縁～体部	口	11.8	細砂粒/良好/にぶい黄褐色	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	内外面塗着りか、外面摩滅
第46図	3	土師器 杯	甕上 口縁～体部	口	13.0	細砂粒・粗砂粒/良好/黒褐色	口縁部は横撫で、底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	内外面塗着り
第46図	4	土師器 台付費	甕上 台部			細砂粒・角閃石・軽石/良好/にぶい黄褐色	胴部外面は縦のヘラ撫で、内面は撫で。	
第46図	5	土師器 甕	甕上 台部片	脚 底	7.6	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい赤褐色	胴部外面は縦のヘラ削り、内面は撫で。	
第46図 PI.56	6	土師器 甕	甕内床直 口縁部～胴部	口	19.4	細砂粒・粗砂粒・輝石/良好/褐色	口縁部は横撫で、胴部外面は斜めのヘラ削り、内面は横のヘラ撫で。	内外面の離

第29表 出土遺物観察表(土子遺跡6)

17号住居出土土師器・須恵器(続き)

種別番号 図版番号	No	種器 種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第46図 PL-57	7	土師器 甕	甕西面直 上縁部片	□ 22.4	細砂粒・粗砂粒/良 好/ぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のへら削り。内面は撫で。	
第46図 PL-57	8	土師器 甕	P4埋土 胴部~底部	底 9.0	細砂粒・粗砂粒・軽 石/良好/橙	胴部外面は斜めから横のへら削り。底部へら削り。内面は横撫で。	胴部外面下端から底部にかけ黒度
第46図	9	須恵器 盥か	覆土 口縁部片		細砂粒/濃土焼/灰	口ロク整形。外面はクシ状波状文	

17号住居出土石製品

種別番号 図版番号	No	器形 形態・素材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第46図 PL-57	10	石製模造品 刷形	甕前床面	[3.9]	2.0	0.5	4.5	背面側に筋が明瞭に見られ、表現上の省略化傾向はない。磨けば光沢を帯び、暗緑色を呈する良質石材を用いる。	滑石

18号住居出土土師器・須恵器

種別番号 図版番号	No	種器 種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第47図 PL-57	1	土師器 杯	甕前床直 1/4	□ 12.8 高 4.5	細砂粒・粗砂粒・軽 石・石英/良好/明 赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削り。内面上半は横、下半は放射状のへら磨き。	内面は黒色処理か
第47図 PL-57	2	土師器 杯	甕前床直 3/4	□ 11.6 高 4.7	細砂粒・粗砂粒/良 好/黄橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削り。内面は撫で。	粉っぽい胎土
第47図	3	須恵器 杯	覆土 口縁~底部片	□ 10.6	細砂粒・角閃石/酸 化塩/橙	口ロク整形(右回転)。底部及び胴部は手持ちへら削り。	
第47図 PL-57	4	土師器 把手付台付 鉢	甕北西前床直 1/2	□ 11.8	細砂粒・粗砂粒・軽 石/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。体部外面は縦のへら撫で。内面は横の撫で。	把手は斜めに胴部外面は割離

19号住居出土土師器

種別番号 図版番号	No	種器 種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第48図 PL-57	1	土師器 杯	覆土 1/3	□ 13.6 高 4.3	細砂粒・粗砂粒/良 好/明赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削り。内面は撫で。	内面厚減
第48図 PL-57	2	土師器 甕	口縁~胴部	□ 12.0	細砂粒/良好/ぶい 黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のへら削り。内面は横の撫で。	

20号住居出土土師器

種別番号 図版番号	No	種器 種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第49図	1	土師器 高杯か	甕方 胴部破片		細砂粒・粗砂粒/角 閃石/良好/ぶい 黄橙	胴部外面は縦のへら撫で。内面は撫で後、斜めのへら磨き。	
第49図	2	土師器 鉢	貯蔵穴 口縁部片		細砂粒・粗砂粒・軽 石/良好/オリーブ 黒	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削り。内面は撫で。	外面吸灰
第49図 PL-57	3	土師器 甕	貯蔵穴 口縁~胴部	□ 17.9	細砂粒・片岩/良好 /ぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のへら削り。内面は横の撫で後、縦のへら撫で。	

22号住居出土土師器

種別番号 図版番号	No	種器 種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第53図 PL-57	1	土師器 杯	甕方 2/3	□ 13.4 高 4.7	細砂粒・軽石/良好 /灰黄褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削り。内面は撫で。	内外面は漆塗りか。内面に細かなハズレ
第53図	2	土師器 杯	覆土 3/4	□ 11.8	細砂粒・石英/良好 /オリーブ黒	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削り。内面は撫で。	内外面は黒色処理
第53図	3	土師器 甕	甕内 口縁~胴部	□ 18.8	細砂粒・粗砂粒・軽 石/良好/橙	口縁部は横撫で。内面に凹線をめぐらせる。胴部外面に縦のへら削り。内面は撫で。	

22号住居出土石製品

種別番号 図版番号	No	器形 形態・素材	出土位置	径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第53図 PL-57	4	石製模造品 白玉	東埋障中央 床直	0.9	0.6	0.7	上下両端は粗く研磨する程度で、雑な作り。側面には縦位の粗い線条が残る。	滑石

23号住居出土土師器

種別番号 図版番号	No	種器 種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第54図	1	土師器 杯	覆土 口縁片	□ 13.3	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削り後、間に撫での部分を残す。内面は撫で。	

24号住居出土土師器

種別番号 図版番号	No	種器 種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第58図 PL-57	1	土師器 盥か	覆土 1/2	□ 12.3 高 5.7	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横撫で。底部外面は撫で。内面上半に横のハゲ目(1cmに10本)。	内面の一部に煤付着
第58図 PL-57	2	土師器 高杯	甕部?、甕上 脚部片	脚 径 13.2	細砂粒・粗砂粒/良 好/橙	胴部外面は縦のへら撫で。底部は横撫で。内面は撫で。	

出土遺物観察表

第30表 出土遺物観察表(土子遺跡7)

24号住居出土土師器(焼き)

神岡番号 図取番号	No	器 形	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第58図 PL.57	3	上師器 高杯	甕 内 底部分	口 14.4	14.4 高	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい黄褐色	胴部外面は縦のへう磨き、底部は横撫で。内面は撫で。	
第58図 PL.57	4	上師器 鉢	北堂跡床直 4/5	口 10.4 高	7.6	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/にぶい黄褐色	口縁部は横撫で、体部外面は撫で、底部は手持ちへう削り。内面はへう磨き。	体部内面は細かなへう磨き
第58図 PL.57	5	上師器 鉢	貯蔵穴底から 完形	口 13.0 高	9.6	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/にぶい黄褐色	口縁部は横撫で、内面に横のハケ目(1cmに7本)。胴部外面は縦の粗い撫で、内面は横のハケ目後、横のへう削り。	口縁部から底部に黒斑
第58図 PL.58	6	上師器 鉢	貯蔵穴土上層 口縁1/2欠損	口 11.7 高	10.9	細砂粒・軽石/良好/褐色	口縁部は横撫で、体部外面は縦の粗い撫で、底部へう削り。内面は横から縦の指先の撫で。	体部下半にリング状に突起。体部内外面に輪積み痕
第58図 PL.58	7	上師器 附か	貯蔵穴底面 完形	口 11.0 底	15.5 2.0	細砂粒・軽石/良好/浅黄褐色	口縁部から胴部外面上半はハケ目(1cm 8本)、下半は撫で、内面はハケ目。	内外面に輪積み痕顕著。胴部内面下端に接合痕。
第58図 PL.58	8	上師器 壺	甕土 口縁→胴部			細砂粒/良好/浅黄褐色	頸部から胴部外面は撫で、頸部内面は横のハケ目(1cmに9本)、胴部内面は撫で。	
第58図 PL.58	9	上師器 御付小壺	北堂跡床直 4/5	御 径	8.6	細砂粒/良好/浅黄褐色	胴部外面上半及び下半は、斜めのへう撫で。胴部外面は縦のへう磨き。胴部内面上半は横、下半は斜めのへう磨き。	
第58図 PL.58	10	上師器 台付壺	甕土 台部	御 径	7.5	細砂粒・軽石/良好/にぶい黄褐色	胴部外面は斜めのへう撫で。端部は横撫で、内面は撫で。	
第58図 PL.58	11	上師器 甕	甕1 床直へ+3 口縁→胴部	口 17.6		細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/にぶい黄褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のハケ目(1cmに8本)。内面厚減	
第58図	12	上師器 壺	甕土 口縁片	口 16.3		細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/にぶい黄褐色	口縁部内外面はハケ目(1cmに7本)後、撫で。	
第58図	13	上師器 甕	甕土 口縁片	口 19.4		細砂粒/良好/にぶい黄褐色	口縁部内外面は縦のハケ目(1cmに9本)後、撫で。胴部外面は撫で。	
第59図 PL.58	14	上師器 甕	北堂跡床直 口縁→胴部	口 17.6		細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/褐色	口縁部は横撫で、胴部外面はハケ目(1cmに9本)後、斜めのへう撫で。口縁部内面は横のハケ目(1cmに9本)、胴部内面は横のへう撫で。	口縁部外面に輪積み痕
第59図	15	上師器 甕	甕土 口縁片	口 14.5		細砂粒/良好/にぶい赤褐色	口縁部は横撫で、胴部外面は縦のハケ目(1cmに5本)。内面は撫で。	
第59図	16	上師器 甕	甕土 口縁片	口 16.6		細砂粒/良好/浅黄褐色	口縁部は横撫で、胴部外面は縦のへう削り。内面は撫で。	
第59図	17	上師器 甕	甕土 底部	底 7.0		細砂粒・粗砂粒/良好/褐色	胴部外面は縦のへう撫で、内面は木杵状工具によるへう撫で。	
第59図	18	上師器 甕	甕土 底部	底 5.7		細砂粒・軽石/良好/にぶい黄褐色	胴部内外面はハケ目(1cmに6本)。底部はへう削り。	
第59図 PL.58	19	上師器 甕	甕土 底部	底 6.6		細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/にぶい黄褐色	厚手で粗雑な作り。胴部外面はへう削り。	底部側面に布の圧痕
第59図	20	上師器 手持ね	甕土 底部分	底 5.0		細砂粒/良好/にぶい黄褐色	胴部外面は縦の撫で、内面は横のへう撫で。	
第59図	21	上師器 壺	甕土 胴部			細砂粒・軽石・軽石/良好/にぶい黄褐色	胴部外面は斜めのハケ目(1cmに7本)、下半は横のへう削り。内面は横のへう撫で。	胴部内面に輪積み痕顕著

24号住居出土石製品

神岡番号 図取番号	No	器 形	種類	出土位置	径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石 材
第59図	22	逆輪 逆輪形	逆輪	北西部床直	3.9	1.0	20.9	背面側に刀子状工具による整形痕、背面側に離輪回転整形痕が残る。輪孔径は9mmを測る。	蛇紋岩

25号住居出土須恵器

神岡番号 図取番号	No	器 形	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第60図	1	須恵器 杯	甕土 口縁部分	口 11.5		細砂粒・粗砂粒/還元焼/灰	口縁口整形(右回転)。	

27号住居出土土師器

神岡番号 図取番号	No	器 形	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第62図 PL.58	1	土師器 杯	東堂跡中央+4、 床直 3/4	口 12.4 高	3.1	細砂粒・軽石/良好/明赤褐色	口縁部は横撫で、底部へう削り、間に撫での部分が残る。内面は撫で。	
第62図 PL.58	2	土師器 甕	甕土 胴部下半～底部	底 4.8		細砂粒・粗砂粒/良好/赤褐色	胴部外面は斜めのへう削り、内面は撫で。	

28号住居出土須恵器

神岡番号 図取番号	No	器 形	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第64図 PL.58	1	須恵器 杯	貯蔵穴底から +21 口縁一部欠	口 12.8 高	3.9 7.2	細砂粒・粗砂粒/還元焼/灰	口縁口整形(右回転)。底部回転へう削り	内外面に火押

第31表 出土遺物観察表(土子遺跡8)

28号住居出土須臾器(焼き)

種別番号 図版番号	No	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第64図 PL.58	2	須臾器 杯	貯蔵穴底から9 4/5	口 13.4 高 3.0 底 8.0	細砂粉/還元焼/灰 白	ロコ口整形(右回転)。底部回転ヘラ削り	内外面に火 傷。底部に 「中」の墨書

28号住居出土石製品

種別番号 図版番号	No	器 形 種 類 ・ 素材	出土位置	径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石 材
第64図 PL.58	3	紡錘 定台形	北壁際中央 掘方	4.7	1.5	52.2	表面とも刀子状工具による整形痕は残る。裏面側の縁が敲打されているが、理由は不明。軸孔径は8mmを測る。	蛇紋岩

29号住居出土土師器

種別番号 図版番号	No	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第66図	1	土師器 杯	覆土 1/4	口 10.1 高 3.5	細砂粉/にぶい黄 橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	内面にハゼ
第66図	2	土師器 杯	覆土 口縁→底部片	口 11.0	細砂粉・軽石/良好/ 橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	粉っぽい胎 土。内外面摩 滅
第66図 PL.59	3	土師器 甕	南東隅上 口縁→胴部片	口 22.8	細砂粉・軽石/良好/ にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	
第66図 PL.59	4	土師器 甕	甕内、覆土 口縁→胴部片	口 26.0	細砂粉・粗砂粉・軽 石/良好/にぶい黄 橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のヘラ削り。内面は撫で。	

31号住居出土土師器

種別番号 図版番号	No	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第67図	1	土師器 甕	甕内 口縁部片	口 15.2	細砂粉/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のヘラ削り。内面は撫で。	

32号住居出土土師器

種別番号 図版番号	No	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第69図 PL.59	1	土師器 杯	覆土 口縁→底部	口 13.6	細砂粉・軽石/良好/ にぶい黄橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	底部外面に黒 斑
第69図	2	土師器 鉢か	甕内 口縁→体部片	口 11.8	細砂粉・粗砂粉・石 英/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で後、黒色処理。	
第69図 PL.59	3	土師器 甕	2号貯蔵穴 胴部→底部	底 7.6	細砂粉・粗砂粉/良 好/明黄橙	胴部外面は斜めのヘラ削り。内面は撫で。	底部は摩滅
第69図 PL.59	4	土師器 甕	2号貯蔵穴理 上 4/5	口 16.4 高 13.4 底 6.4	細砂粉・粗砂粉・軽 石/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。体部外面は縦のヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。底部はヘラ削り。	体部外面に黒 斑

33号住居出土土師器

種別番号 図版番号	No	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第71図 PL.59	1	土師器 杯	覆土 1/2	口 12.2 高 4.8	細砂粉・粗砂粉/良 好/にぶい黄橙	口縁部外面及び内面にヘラ磨き後、内面を黒色処理。底部は手持ちヘラ削り。	形跡は後田型 に類似
第71図 PL.59	2	土師器 甕	甕内、貯蔵穴 3/4	口 9.2 高 13.0 底 5.2	細砂粉・粗砂粉・軽 石/良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は撫で。底部周辺はヘラ削り。内面は撫で。	胴部外面上 半は摩滅
第71図	3	土師器 鉢	覆土 口縁部片	口 12.0	細砂粉・角閃石/良 好/にぶい橙	口縁部は横撫で。体部外面は横のヘラ撫で。内面は木口状工具による横のヘラ撫で。	
第71図 PL.59	4	土師器 鉢	覆土 3/4	口 22.6 高 11.0 底 8.8	細砂粉・粗砂粉・軽 石/良好/にぶい橙	体部外面は粗い撫で。内面は横のヘラ撫で。口縁部のみが片口状に突出しているが、変形によるものか	体部外面の輪 積み痕顕著

34号住居出土土師器

種別番号 図版番号	No	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第72図 PL.59	1	土師器 杯	覆土 口縁→部欠	口 11.7 高 4.1	細砂粉/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	粉っぽい土
第72図	2	土師器 杯	覆土 口縁部	口 14.0	細砂粉/良好/にぶ い橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	口縁部外面及 び内面は漆塗 りか
第72図	3	土師器 杯	覆土 口縁部片	口 12.4	細砂粉/良好/赤褐	口縁部は横撫で。外縁及び口唇部に凹線を添わせる。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
第72図 PL.59	4	土師器 杯	南壁際・甕上 7/8	口 11.4 高 4.1	細砂粉/良好/明赤 褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	内外面は漆塗 りか
第72図	5	土師器 甕か	甕内 口縁→胴部片	口 11.0	細砂粉/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面に凹線を2条添わせる。胴部外面は縦のヘラ削り。内面は撫で。	
第72図 PL.59	6	土師器 台付甕	南部・30 台部	脚 8.0	細砂粉/良好/にぶ い橙	胴部外面は縦のヘラ削り。端部は撫で。内面は指先の撫で。	
第72図 PL.59	7	土師器 鉢	南西部床直 3/4	口 24.7 高 14.3 底 6.9 孔 1.4	細砂粉・粗砂粉・軽 石/良好/にぶい黄 橙	口縁部は横撫で。体部は横から斜めのヘラ削り。底部もヘラ削り。内面は撫で。	底部に内側に 焼成後に穿 孔。体部に黒 斑
第72図 PL.59	8	土師器 甕	南部・13・25 口縁→胴部片	口 20.0	細砂粉・粗砂粉/良 好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦から斜めのヘラ削り。内面は撫で。	内外面は摩滅 整形は不明

出土遺物観察表

第32表 出土遺物観察表(子土遺跡9)

35号住居出土土師器・須恵器・灰輪陶器

種別番号 図版番号	No	種器 類種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第74図 PL.60	1	土師器 杯	覆土 1/3	口 11.8 高 4.5 底 7.2	細砂粒/良好/明赤 褐色	口縁部は横撫で、体部撫で。底部は砂底で周辺及び体部下 端は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
第74図 PL.60	2	土師器 杯	掘方 口縁～体部片	口 13.0 高 4.0 底 7.8	細砂粒/良好/明赤 褐色	口縁部は横撫で。体部撫で。内面も撫で。	
第74図 PL.60	3	須恵器 杯	東北西掘方 前1/3	口 13.0 高 3.9 底 6.2	細砂粒・粗砂粒・軽 石・石英/還元/ 灰白	口縁部整形(右回転)。底部は回転系切り無調整。	口縁部の一部 を除き焼し
第74図	4	須恵器 杯か	掘方 口縁部片	口 13.8	細砂粒・片岩/還元 焼/灰白	口縁部整形(回転方向不明)。	体部内面に黒 書、文字不明。
第74図 PL.60	5	須恵器 椀	覆土 体部下～底部	底 6.7	細砂粒・角閃石/還 元焼/灰白	口縁部整形(右回転)。高台は底部回転系切り後の付け高台 で、端部に凹線が走る。	体部外面に煤 付着
第74図 PL.60	6	須恵器 杯	北東部味直 杯	底 7.0	細砂粒・粗砂粒/還 元焼/灰白	口縁部整形(右回転)。高台は底部回転系切り後の付け高台 で、貼付部から分離。	
第74図	7	灰輪陶器 椀か	覆土 口縁～体部	口 14.8	細砂粒/還元焼/灰 白	口縁部整形(右回転)。施釉技法は不明	平潰
第74図 PL.60	8	灰輪陶器 椀	覆土 底部片	底 8.4 高 台 7.9 径	細砂粒/還元焼/灰 白	口縁部整形。高台は三日月高台で付け高台。施釉技法は不 明。	見込み部に重 ね焼き跡。底 部割離。東直
第74図	9	灰輪陶器 瓶	覆土 口縁部片	口 10.8	細砂粒/良好/灰白	口縁部整形。施釉技法不明。	内面の施釉 が厚い
第74図 PL.60	10	土師器 甕	南東部 口縁～胴部	口 19.0	細砂粒・粗砂粒・片 岩/良好/橙	口縁部は横撫で。肩部外面は横、下半は縦のヘラ削り。内 面は横のヘラ撫で。	口縁部外面に 輪積み痕。胴 部内面に接合 痕、外面に煤 付着
第74図 PL.60	11	土師器 甕	東北西掘方 口縁～胴部	口 18.8	細砂粒・軽石/良好 /にぶい赤褐色	口縁部は横撫で。肩部外面は横、胴部は縦のヘラ削り。内 面は横のヘラ撫で。	胴部内面に接 合痕
第75図 PL.60	12	土師器 甕	東北西掘方 口縁～胴部片	口 19.2	細砂粒/良好/明赤 褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めから縦のヘラ削り。内面 は横のヘラ撫で。	胴部外面に輪 積み痕。胴部 内面に接合痕
第75図 PL.60	13	土師器 甕	掘内 口縁～胴部片	口 18.0	細砂粒/良好/明赤 褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのヘラ削り。内面は横の ヘラ撫で。	内外面に輪積 み痕
第75図	14	土師器 甕	東北西掘方 口縁部片	口 18.6	細砂粒・粗砂粒/良 好/橙	口縁部は横撫で。肩部外面は横のヘラ削り。内面は斜めの ヘラ撫で。	
第75図 PL.60	15	須恵器 甕	北西部・8 口縁部片	口 16.6	細砂粒/還元焼/灰 白	胴部外面にクシ書き波状文	内面に融着物

36号住居出土土師器

種別番号 図版番号	No	種器 類種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第76図 PL.61	1	土師器 杯	南東壁際+13 口縁/1/4欠	口 13.8 高 4.9 底 7.2	細砂粒・粗砂粒・軽 石/良好/にぶい黄 褐色	口縁部は横撫で。外縁部と口唇部に凹線を添わせる。底 部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	内面は未焼 りか
第76図 PL.61	2	土師器 杯	中央+7、覆土 1/3	口 13.4 高 3.8 底 7.2	細砂粒・粗砂粒・軽 石/良好/にぶい黄 褐色	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	内外面は厚 焼
第76図 PL.61	3	土師器 甕	中央+7、覆土 3/4	口 18.0 高 24.3 底 6.3	細砂粒・粗砂粒・軽 石/良好/にぶい黄 褐色	口縁部は横撫で。胴部外面上は縦のヘラ撫で。下半は斜 めのヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	胴部外面上 面に輪積み 痕。胴部内 面下半に接 合痕。
第77図 PL.61	4	土師器 甕	中央+6 ~ +9 口縁～胴部	口 16.6	細砂粒・粗砂粒・片 岩/良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は横から斜めのヘラ削り。内面 は横のヘラ撫で。	内面吸炭

38号住居出土土師器

種別番号 図版番号	No	種器 類種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第80図	1	土師器 高杯	覆土 杯底部片	口 19.8	細砂粒・角閃石/良 好/にぶい黄褐色	杯体部外面は斜めのヘラ磨き。底部から胴部は撫で	杯内面ハ ズレ
第80図	2	土師器 甕	覆土 口縁部片	口 19.8	細砂粒・粗砂粒/良 好/にぶい黄褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のヘラ削り。内面は横の撫 で。	
第80図	3	土師器 甕	覆土 底部片	底 5.8	細砂粒・粗砂粒・ 角閃石/軽石/良好 /にぶい黄褐色	胴部外面は撫で。内面はハゲ目(1cmに5本)。	底部中央上 げ底
第80図	4	土師器 盃か	覆土 底部片	底 6.9	細砂粒・粗砂粒・軽 石/良好/にぶい黄 褐色	胴部外面下端は縦のヘラ磨き。内面は横のヘラ磨き。	

39号住居出土土師器

種別番号 図版番号	No	種器 類種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第81図 PL.60	1	土師器 杯	貯蔵穴底から+3 2/3	口 12.9	細砂粒・輝石・軽石 /良好/にぶい黄褐色	口縁部は横撫で。中位に一条の凹線が走る。底部は手持 ちヘラ削り。内面は撫で。	内面及び口縁 部外面に塗 漆あり
第81図 PL.60	2	土師器 杯	掘方 3/4	口 12.5 高 4.4	細砂粒・粗砂粒・軽 石/良好/明赤褐色	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	口縁部外面の 一部に煤付 着

第33表 出土遺物観察表(土子跡跡10)

39号住居出土土師器(焼き)

種別番号 図版番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第81図 PL.60	3	土師器 杯	圓方 1/3		口 11.2 高 4.8	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削り。内面は横撫で。	
第81図 PL.60	4	土師器 杯	圓方 口縁-底部片		口 11.6	細砂粒・角閃石/良好/にぶい赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削り。内面は撫で。	内面吸炭
第81図 PL.60	5	土師器 杯	口縁7成から7 口縁-底部3/4		口 11.0 高 4.7	細砂粒・粗砂粒・石英/還元橙/灰	口縁口整形(左回転)。口唇部内面に内縁が巡る。底部回転へら削り。	
第81図 PL.60	6	土師器 広口盥	圓方 1/4		口 17.6	細砂粒・粗砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は横から斜めのへら削り。内面は横の横撫で。	

41号住居出土赤土土器

種別番号 図版番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第82図 PL.61	1	赤土土器 壺	貯破穴 胴部片			粗砂粒・白色粒/良好/黄橙	1~5は同一個体。胴部本體横文を横位に8ないし9帯部らせ、3帯単位の縦位の縞横文で8分割する。縦位縞横文の下端には、刺突を充填した内形貼付を2個づつ配する。胴部はミガキ。内面はナデで、僅かにハケ目が残る。	赤土後期(樽式)
第83図 PL.61	2	赤土土器 壺	貯破穴 胴部片			粗砂粒・白色粒/良好/黄橙	1~5は同一個体。胴部本體横文を横位に8ないし9帯部らせ、3帯単位の縦位の縞横文で8分割する。胴部はミガキ。内面はナデで、僅かにハケ目が残る。	赤土後期(樽式)
第83図 PL.61	3	赤土土器 壺	41号住居 胴部片			粗砂粒・白色粒/良好/黄橙	1~5は同一個体。胴部本體横文を横位に8ないし9帯部らせ、3帯単位の縦位の縞横文で8分割する。胴部はミガキ。内面はナデで、僅かにハケ目が残る。	赤土後期(樽式)
第83図 PL.61	4	赤土土器 壺	貯破穴 胴部片			粗砂粒・白色粒/良好/黄橙	1~5は同一個体。胴部本體横文を横位に8ないし9帯部らせ、3帯単位の縦位の縞横文で8分割する。胴部はミガキ。内面はナデで、僅かにハケ目が残る。	赤土後期(樽式)
第83図 PL.61	5	赤土土器 壺	貯破穴 胴部片			粗砂粒・白色粒/良好/黄橙	1~5は同一個体。胴部本體横文を横位に8ないし9帯部らせ、3帯単位の縦位の縞横文で8分割する。胴部はミガキ。内面はナデで、僅かにハケ目が残る。	赤土後期(樽式)

1号土坑出土中近世陶磁器

種別番号 図版番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第86図	1	常滑陶器 円盤状土製品 (意か装)		埋土 完形	4.4	4.3	1.2	-	にぶい 橙	断面は灰白色。器表はにぶい橙。体部片の周囲を細かく打ち欠いて円盤状に整形。	中世。

15号土坑出土中近世土器

種別番号 図版番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第87図	1	在地系土器 内耳鍋		埋土 体部下位片	-	-	-	B	黒褐	断面は橙色。器表は黒褐色。外面は煤付着。体部下位は内湾。外面下半は復削り。	2と同一個体か。中世。
第87図	2	在地系土器 内耳鍋		埋土 体部下位片	-	-	-	B	黒褐	断面は橙色。器表は黒褐色。外面は煤付着。体部下位は内湾。外面下半は復削り。	1と同一個体か。中世。

17号土坑出土中近世土器

種別番号 図版番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第87図	1	在地系土器 片口鉢		埋土 体部片	-	-	-	B	灰	還元炎。口縁部は横撫で。体部内面は丁寧な撫で、内面に幅広の4本一単位すり目を曲線状に入れた。間隔はすり目単位幅とほぼ等間隔。内面は使用により器表摩滅するが、下部のはうが著しい。	15世紀後半~16世紀末。
第87図	2	在地系土器 片口鉢か		埋土 体部片	-	-	-	B	灰	還元炎。口縁部は横撫で。体部内面は丁寧な撫で、体部外面は撫で。体部は外反。内面に使用痕は認められない。	中世。

18号土坑出土中近世陶磁器・土器

種別番号 図版番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第87図	1	古瀬戸 平碗		埋土 口縁部片	(16.0)	-	-	-	灰白	器原はやや厚く、口縁部は僅かに内湾。口縁端部は尖り気味。内外面に灰焼。	14世紀末~15世紀前半。
第87図	2	在地系土器 内耳鍋か		埋土 口縁部片	-	-	-	B	灰、黒褐	断面は灰白色。内面器表は灰色。外面器表は黒褐色。口縁端部外面は外方に僅かに突き出る。	中世。

21号土坑出土土製品

種別番号 図版番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第89図	1	土製品 土鉢	埋土 完形		長 3.6 厚 1.7 中 1.6	細砂粒/良好/にぶい黄橙	各面撫で。端面面取り。	孔径0.4 重さ11.0g

22号土坑出土中近世陶磁器

種別番号 図版番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第89図	1	常滑陶器 壺		埋土 口縁部片	-	-	-	-	にぶい 赤褐	断面は灰白色。器表はにぶい赤褐色。口縁端部は上方に立ち上がるが、下部は欠損。	13世紀中頃~後半。

27号土坑出土土師器

種別番号 図版番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第90図	1	土師器 杯	埋土 口縁-底部片		口 13.2	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削り。内面は撫で。	口縁部外面及び内面は塗塗りか

出土遺物観察表

第34表 出土遺物観察表(丸子遺跡11)

27号土坑出土土師器(焼き)

種別番号 図版番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第91図 PL-62	2	土師器 甕	理土 口縁部片		□ 18.8	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦の撫で。内面は横のへら撫で。	

33号土坑出土土師器

種別番号 図版番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第91図 PL-62	1	土師器 甕	理土 口縁部片		□ 15.7	細砂粒・粗砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は横のへら削り。胴部内面は横のへら撫で。	
第91図 PL-62	2	土師器 甕	理土 口縁→胴部		□ 21.5	細砂粒・粗砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のへら削り。内面は横のへら撫で。	
第91図 PL-62	3	土師器 甕	理土 口縁→胴部		□ 21.4	細砂粒・粗砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は横、胴部外面は斜めのへら削り。内面は斜めのへら撫で。	
第91図	4	土師器 甕	理土 口縁部片		□ 19.4	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/明黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のへら削り。内面は撫で。	

33号土坑出土中近世土器

種別番号 図版番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第91図	5	在地系土器 内耳鍋か	理土 口縁部片		-	-	-	A	灰	還元炎。口縁部内面は明瞭な稜をなし、外面は斜め上方に小さく突き出る。	中世。
第91図	6	在地系土器 内耳鍋か切落	理土 底部片		-	-	-	-	灰白、黒	断面は浅黄褐色。内面器表は黒色。外面器表は灰白色。器壁は厚い。内径5mmの焼成後補修孔1箇所が残る。	中世以降。

34号土坑出土中近世陶磁器

種別番号 図版番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第92図	1	龍泉窯系青磁 碗か	理土 底部片		-	(4.6)	-	-	灰～灰白	底部内面に文字。器壁は薄く、内面から高台内側に青磁輪。高台底部も施釉。貫入が入る。	中世。

38号土坑出土中近世土器

種別番号 図版番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第92図	1	在地系土器 皿	理土 1/8		(12.0)	-	-	-	B にぶい 橙	体部外反。	中世。

56号土坑出土土師器・須恵器

種別番号 図版番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第96図 PL-62	1	土師器 杯	理土	1/2	□ 12.0	細砂粒/良好/にぶい赤黒	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削り。で、間に撫での部分を残す。内面は撫で。	
第96図 PL-62	2	須恵器 杯	理土 完形		□ 13.8 底 8.1	細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰	ロク口整形(右回転)。底部は回転系切り無調整。	体部外面は焼し
第96図 PL-62	3	須恵器 杯	理土 完形		□ 12.2 底 6.2	細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰	ロク口整形(右回転)。底部は回転系切り無調整。	
第96図 PL-62	4	須恵器 杯	理土 口縁部片		□ 13.0	細砂粒・小礫/還元焰/灰	ロク口整形(右回転)	
第96図 PL-62	5	土師器 甕	理土 口縁→胴部		□ 23.6	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は横から斜めのへら削り。	
第96図 PL-62	6	須恵器 皿	理土 口縁部			細砂粒/還元焰/灰	ロク口整形(右回転)	胴部内外面に自然釉

66号土坑出土中近世陶磁器・土器

種別番号 図版番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第97図	1	古瀬戸 瓶類	理土 体部片		-	-	-	-	灰白	外面に鉄輪。内面は無釉で轆轤目顯著。	中世。
第97図	2	常滑陶器 湯か甕	理土 肩部片か		-	-	-	-	赤灰	断面は明瞭灰色。内面器表は赤灰色。外面は自然釉がかかる。	中世。
第97図	3	在地系土器 片口鉢	理土 口縁部片		-	-	-	-	灰黄	口縁部は内耳鍋と同様であるが、内面に段差や屈曲部が認められない。口縁部外面は小さく突き出る。内面口縁部下にすり目僅かに残る。	15世紀後半～16世紀。

68号土坑出土中近世土器

種別番号 図版番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第98図 PL-62	1	在地系土器 皿	理土 1/2		(10.5)	5.5	3.1	-	灰白～ 橙	灰白色から橙色。外面底部直上は短く直立し、体部から口縁部は直線的に開く。底部左回転系切無調整。	中世。

73号土坑出土中近世陶磁器

種別番号 図版番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第98図	1	古瀬戸 緑釉小皿	理土 口縁部片		-	-	-	-	灰白	口縁部外面の轆轤目が顯著。口縁部小さく外反。残存部内面から口縁部外面に灰釉。	14世紀後半～15世紀初頭。

第35表 出土遺物観察表(土子遺跡12)

74号土坑出土土師器

種別番号 図取番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第999図 PL-62	1	土師器 杯	理土 1/3		口 12.8 高 5.4	細砂粒/良好/赤褐色	口縁部は横撫で、底部は手持ちへら削り。内面は撫で。	
第999図	2	土師器 杯	理土 口縁部~体部片		口 12.0	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で、底部は手持ちへら削り。内面は撫で。	内面にわずかに厚付着。粉っぽい胎土
第999図	3	土師器 皿	理土 口縁部~底部片		口 16.0	細砂粒/良好/にぶい赤褐色	口縁部は横撫で、内縁より二段を形成。底部は手持ちへら削り後、へら磨き。内面は撫で。	
第999図	4	土師器 台付費か	理土 台付片		脚底 8.0	細砂粒/良好/にぶい赤褐色	器部外面は撫で、内面は指先で撫で。	粉っぽい胎土
第999図	5	土師器 費	理土 口縁部片		口 22.0	細砂粒・粗砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で、胴部外面は縦のへら撫で、内面は斜めのへら撫で。	

75号土坑出土中近世陶磁器

種別番号 図取番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第999図	1	常滑陶器	理土 体部片	-	-	-	-	-	灰白	内面は板状工具による横位撫で。外面は板状工具による斜位撫で。接合部外面に叩き目。	中世。

78号土坑出土土師器・須恵器

種別番号 図取番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第1000図	1	須恵器 皿	理土 口縁部片			細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰	環状整形。胴部上半はカキ目、下半は平行叩き。	
第1000図	2	土師器 費	理土 口縁部~胴部片		口 25.0	細砂粒・粗砂粒/角閃石/良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のへら削り、内面は横のへら撫で。	
第1000図 PL-62	3	土師器 費	理土 胴部~底部		底 4.8	細砂粒・粗砂粒/良好/橙	胴部外面は斜めのへら削り、内面は横のへら撫で。	

80号土坑出土石製品

種別番号 図取番号	No	器 形態・素材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石 材
第1011図 PL-62	1	板碑	覆土	[23.3]	[11.6]	[2.4]	921.7	板碑下部破片。裏面側には焼熱してヌスが付着、整形に伴う工具痕は確認できない。	黒色片岩
第1011図 PL-62	2	石製品 楕円扁平費	覆土	13.3	10.0	5.8	1228.4	表裏面とも摩耗するほか、両側縁の敲打・摩耗が著しい。側縁の摩耗は意図的であり、丁寧に磨き整形されている。	粗粒輝石安山岩

87号土坑出土中近世土器

種別番号 図取番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第102図	1	在地系土器 内耳鍋か	理土 口縁部片	-	-	-	-	-	黒褐色	断面はにぶい赤褐色。器表は黒褐色。口縁部は僅かに内湾。	中世。

89号土坑出土中近世陶磁器・土器

種別番号 図取番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第103図	1	国産焼締陶器 費	理土 口縁部片	-	-	-	-	-	にぶい赤褐色	断面は灰白色。器表はにぶい赤褐色。口縁部は外反して若干下がった後に上方に立ち上がる。端部は内面にやや肥厚。	13世紀第2~4半期か。
第103図 PL-63	2	在地系土器 内耳鍋	理土 1/5		(35.0)	-	-	A	褐色	還元炎。器厚はやや薄い。体部はやや内湾し、口縁部下で外反。口縁部は内湾気味に開く。胴部内面は明瞭な稜をなすが、段は不明瞭。口縁部内外面はゆるい稜をなす。端部上面は僅かに内湾。残存部下端から4.5cmほどの範囲の内面器表に砂が目立つ。断面も同じ範囲で砂が目立ち、体部下位に砂を多く混入した粘土を使用する。体部外面上半は撫で、下半は撫削り。	体部下位に砂を多く含む粘土を使用。15世紀後半~16世紀初頭?
第103図 PL-63	3	在地系土器 内耳鍋	理土 口縁部~体部片		-	-	-	A	黒	断面は褐色。器表はオリーブ黒に近い黒色。体部はやや内湾し、口縁部下で外反。口縁部は直線的に開く。口縁部内外面はゆるい稜をなす。胴部内面は明瞭な稜をなすが、段は不明瞭。残存部下端から4cmほどの内面器表に砂が目立ち、断面も砂が多く観察される。	体部下位に砂を多く含む粘土を使用。15世紀後半~16世紀初頭?

89号土坑出土鉄器

種別番号 図取番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特徴・状態
第103図 PL-63	4	鉄製品	鎌	理土	ほぼ円形	-	-	-	幅広の鎌で先端付近で折れている。跡により詳細は不明であるが、現状で見ると、図示した態が傾斜する片刃と考えられる。

90号土坑出土中近世陶磁器

種別番号 図取番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第104図	1	常滑陶器 台か費	理土 体部片	-	-	-	-	-	褐色、黒褐色	断面は灰白色。内面器表は褐色。外面器表は黒褐色。	中世。

出土遺物観察表

第36表 出土遺物観察表(土子遺跡13)

93号土坑出土中近世陶磁器										
神岡番号 図版番号	No	種 類 器 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第104図	1	常滑陶器 片口鉢	埋土 口縁部片	-	-	-	-	にぶい 赤褐色	断面は灰色、器表はにぶい赤褐色。口縁部付近のみ横撫で。外面は板状工具による縦位撫で。口縁部内外面は突き出る。端部上面は窪む。	B類、15世紀前半。
93号土坑出土鉄貨										
神岡番号 図版番号	No	種 類	銭貨名	出土位置	残存率	縦径 (cm)	横径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
第104図	2	鉄貨	景祐元寶	埋土	1/4	-	-	-	-	真書。北宋、1034年初鑄。
94号土坑出土土師器										
神岡番号 図版番号	No	種 類 器 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴				備 考
第104図	1	土師器 杯	埋土 口縁～体部片	口 13.4	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちへう削り。内面は撫で。				器内及び底部の一部発泡
94号土坑出土中近世土器										
神岡番号 図版番号	No	種 類 器 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第104図	2	在地系土器 内耳甕か	埋土 底部片	-	-	-	B	黒	断面は褐色。外面器表は黒色。体部外面下端から底部外面の器表は褐色。器壁はやや厚い。体部外面下位は塊削り。体部外面は下端以下を除き煤付着。	中世。
第104図	3	在地系土器 片口鉢か	埋土 口縁部片	-	-	-	B	灰黄褐色	口縁部内面は断面三角形状に突き出る。口縁部外面は僅かに突き出る。	14世紀後半頃～15世紀前半頃。
96号土坑出土須恵器										
神岡番号 図版番号	No	種 類 器 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴				備 考
第105図	1	須恵器 刻須恵の蓋か	埋土 口縁部片		細砂粒/還元焼/灰	ロコロ整形。突部はシャープな作り。				
96号土坑出土中近世土器										
神岡番号 図版番号	No	種 類 器 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第105図	2	在地系土器 片口鉢	埋土 体部片	-	-	-	-	灰	還元内。内面に輪軸目状の凹凸。使用により、内面の器表は平滑となる。	中世。
第105図	3	在地系土器 内耳甕か焙烙	埋土 底部片	-	-	-	B	灰白～黒	断面中央は褐色。器表付近は灰白色。外面器表は煤の付着により黒色。底部に内径5mmの縦軸孔を内側からあける。	中世以降。
第105図	4	在地系土器 片口鉢	埋土 片口部片	-	-	-	B	浅黄褐色 灰	断面と外面器表は灰色。口縁部から内面器表は浅黄褐色。口縁部は内面に突き出すが、突出部は欠損。	14世紀後半頃。
第105図	5	在地系土器 甕	埋土 口縁部片	(28.8)	-	-	B	暗灰	断面は灰赤色。器表付近は灰白色。器表は暗灰色。肩部は張り、口縁部は短く外反。口縁部外面はゆるい稜をなす。	中世。
第105図	6	在地系土器 甕	埋土 口縁部片	(26.0)	-	-	B	暗灰～灰黄	断面はにぶい赤褐色。器表付近は灰色から灰白色。器表は暗灰色から黄褐色。肩部は張り、口縁部は短く外反。口縁部外面はゆるい稜をなす。	中世。
96号土坑出土石製品										
神岡番号 図版番号	No	器 種 形 態 ・ 素 材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況		石 材
第105図	7	石製品 盤状鏝	埋土	[13.7]	[9.8]	5.3	566.1	背面側2ヶ所を掘斗状に窪ませる。孔内面は敲打したのち、平滑に整形されている。		粗粒輝石安山岩
97号土坑出土中近世土器										
神岡番号 図版番号	No	種 類 器 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第106図	1	在地系土器 皿	埋土 3/4	(7.2)	5.0	1.5	B	橙	小型の皿。体部から口縁部は直線的に開くが、口縁部は僅かに外反気味。底部左回転糸無調整。	15世紀前半～中頃。
104号土坑出土土師器										
神岡番号 図版番号	No	種 類 器 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴				備 考
第107図	1	土師器 杯	埋土 口縁～体部片	口 13.0	細砂粒/良好/にぶい赤褐色	口縁部は横撫で。体部撫で。底部は手持ちへう削り。内面は撫で。				
114号土坑出土中近世土器										
神岡番号 図版番号	No	種 類 器 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第109図	1	在地系土器 皿	埋土-17 宍形	8.0	4.8	2.4	B	明赤褐色	小型の皿。器高はやや高く、体部は外反する部分と直線的に立ち上がる部分がある。底部左回転糸無調整。体部内面から口縁部外面に油煙付着。14世紀後半。	体部内面から口縁部面に油煙付着。体部内面から口縁部外面に油煙付着。14世紀後半。

第37表 出土遺物観察表(土子遺跡14)

114号土坑出土中近世土器(続き)

神岡番号 図版番号	No	種 類 器 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第10906 PL.63	2	在地系土器 皿	埋土+18 ほぼ完形	8.1	5.4	1.9	B	橙	3と同様な胎土・焼成。小型の皿。底径がやや大 きく、体部と口縁部は直線的に開く。口縁部 一面所に油煙付着。底部左回転糸切無調整。	口縁端部に油 煙付着。15世 紀前半。
第10906 PL.63	3	在地系土器 皿	埋土+20 ほぼ完形	11.4	7.2	3	B	橙	2と同様な胎土・焼成。中型の皿。底径がやや大 きく、体部と口縁部は直線的に開く。底部左回 転糸切無調整。底部外面に筋状の厚痕。	15世紀前半。

114号土坑出土銭貨

神岡番号 図版番号	No	種 類	銭貨名	出土位置	残存率	縦径 (cm)	横径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
第10906 PL.63	4	銭貨	□二通寶か	埋土	完形	23.59	24.37	0.95～ 1.06	2.73	銭文不明で判読不可能。回読の□二通寶か。
第10906 PL.63	5	銭貨	皇宋通寶	埋土	完形	23.06	23.88	1.00～ 1.12	2.05	真書。北宋。1038年初鑄。
第10906 PL.63	6	銭貨	祥符元寶	埋土	一部欠	-	24.51	1.36～ 1.47	3.39	北宋。1008年初鑄。方孔の枠は明瞭であるが、枠内は円孔 となる。
第10906 PL.63	7	銭貨	洪武通寶	埋土	完形	22.84	23.12	1.32～ 1.53	3.81	背右一銭。明。1368年初鑄。

116号土坑出土中近世土器

神岡番号 図版番号	No	種 類 器 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第10906	1	在地系土器 内耳鍋	埋土 口縁部片	-	-	-	B	にぶい 黄橙～ 灰	口縁部下でゆるく外反し、口縁部は内湾気味に開く。	15世紀後半 か。

116号土坑出土銭貨

神岡番号 図版番号	No	種 類	銭貨名	出土位置	残存率	縦径 (cm)	横径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
第10906	2	銭貨	景定元寶	埋土	完形	24.12	24.43	1.30～ 1.35	2.85	背「三」。南宋。1260年初鑄。

116号土坑出土石製品

神岡番号 図版番号	No	種 類 形態・素材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石 材
第10906 PL.63	3	敲石 扁平礫	埋土	[11.4]	5.4	2.3	205.0	小口部上端に敲打痕、及び敲打に伴う剥離面がある。器体 下半部を破損する。	珉質頁岩

117号土坑出土中近世土器

神岡番号 図版番号	No	種 類 器 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第10906	1	在地系土器 内耳鍋	埋土 体部片	-	-	-	B	黒褐、 にぶい 褐	断面内側は橙色。断面外側は褐色色。内面器表は にぶい褐色。外面器表は黒褐色。外面は煤付着。 外面上部に口縁部の横痕で認められる。	中世。

118号土坑出土中近世土器

神岡番号 図版番号	No	種 類 器 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第11006	1	在地系土器 内耳鍋	埋土 体部片	-	-	-	B	灰黄褐、 黒褐	口縁部下は外反。屈曲部内面は明瞭な稜をなす。 残存部分が少なく段は不明。外面に煤付着。外面上 位は撫で。下位は掘削り。	中世。

120号土坑出土中近世土器

神岡番号 図版番号	No	種 類 器 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第11006 PL.63	1	在地系土器 皿	埋土 底部完	-	4.5	-	B	にぶい 褐	底部左回転糸切無調整。底部内面に螺旋状の輪 目残る。	中世。
第11006	2	在地系土器 内耳鍋	埋土 体部片	-	-	-	B	灰	外面に煤付着。口縁部下で外反。内面に内耳下部 が残る。	中世。
第11006	3	在地系土器 内耳鍋	埋土 体部片	-	-	-	B	灰	外面に少量煤付着。外面上位は撫でで、接合痕残 る。外面下位は掘削り。口縁部下は外反。	中世。

2号井戸出土中近世土器

神岡番号 図版番号	No	種 類 器 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第11106	1	在地系土器 内耳鍋か	埋土 口縁部片	-	-	-	B	灰、黒	断面は明赤褐色。内面器表は灰色。外面器表は黒 色。外面に煤付着。口縁部はやや内湾。	中世。

4号井戸出土中近世土器

神岡番号 図版番号	No	種 類 器 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第11206	1	在地系土器 内耳鍋	埋土 口縁部片	-	-	-	B	にぶい 橙	断面はにぶい褐色。器表は灰オリブ色。口縁部 下で外反し、口縁部上位でやや内湾。断面上位は 内傾し、断面内面は明瞭な稜をなす。	15世紀後半～ 16世紀初頭?
第11206	2	在地系土器 内耳鍋	埋土 口縁部片	-	-	-	B	褐色	断面から内面器表は褐色。外面器表は煤付着し黒 褐色。器厚はやや厚い。口縁部下で外反し、内面 は明瞭な稜を成す。口縁部内面は明瞭な稜をな し、外面は外反するよう突き出る。	16世紀前半～ 後半?

出土遺物観察表

第38表 出土遺物観察表(土子跡跡15)

4号井戸出土中近世土器(続き)

種別番号 図版番号	Na	種 器 類 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備考
第112図	3	在地系土器 内耳鍋	埋土 底部片	-	-	-	B	褐色	断面から内面器表は褐色、外面器表は覆付着し黒褐色。体部の器壁は厚い。外面から底部外面同様に透孔あり。丸底か。	中世。

7号井戸出土中近世土器

種別番号 図版番号	Na	種 器 類 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備考
第114図	1	在地系土器 内耳鍋	埋土 口縁部片	-	-	-	B	にぶい 黄	外面に少量覆付着。口縁部は外方に突き出る。端部上面は平坦。	16世紀。
第114図	2	在地系土器 火鉢	埋土 口縁部片	-	-	-	B	褐色	断面は褐色。器表は褐色。口縁部下で緩く外反。口縁部は内外に突き出すが、内面側の突き出しが大きい。口縁部付近内面に焼成前の貫通しない乳1箇所。	中世。
第114図	3	在地系土器 火鉢	埋土 底部片	-	-	-	B	橙～赤	断面と器表は同じ色の部分が多く、褐色から赤色。一部は断面が暗灰色。器表付近はにぶい黄褐色。器表は黒色から褐色。内面は撫で、体部外面は横位磨き。底部外面は砂状皮で脚を貼り付ける。脚は1箇所残存。	中世か。

7号井戸出土石製品

種別番号 図版番号	Na	器種 形態・素材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第114図 PL.63	4	敲石 棒状物	覆土	10.6	4.4	3.5	190.2	両側面に敲打痕・摩耗痕が著しく、激しく使い込まれている。器体下半を大きく欠損する。	黒色片岩
第114図 PL.63	5	石臼 臼白	覆土	径 30.0		10.7	7800.0	6分割。良く使われており、切目が磨り減る。上端部が若干欠片が削り、変形している。	粗粒輝石安山岩

1号堀出土中近世陶磁器

種別番号 図版番号	Na	種 器 類 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備考
第117図	1	焼前陶器 片口縁か	埋土 口縁部片	-	-	-	-	にぶい 赤褐～ 褐色	口縁部は横撫で。口縁部内面は小さく突き出し。外面は大きく突き出す。外面口縁部下は窪む。	B類。15世紀前半。

2号堀出土土師器

種別番号 図版番号	Na	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第117図 PL.63	1	土師器 裏	埋土 1/2	口 11.0 高 10.1	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい黄褐色	口縁部は横撫で、胴部外面は縦のハゲ目(1cmに8本)か中位は横のヘラ磨き、下半は撫で。胴部内面は横のハゲ目とヘラ撫で。	胴部内面に輪軸目。口縁部から胴部上半外面に覆付着

2号堀出土中近世陶磁器・土器

種別番号 図版番号	Na	種 器 類 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備考
第117図	2	肥前編器 小碗	埋土 1/5	-	(3.0)	-	-	灰白	高台脇と高台外面に側線。	江戸時代。
第117図	3	常滑編器 密か豊	埋土 体部片	-	-	-	-	褐色	内面は板状工具による横位撫で。外面は板状工具による縦位撫で。	中世。
第117図	4	常滑編器 密か豊	埋土 底部片	-	-	-	-	橙	断面は灰白色。器表は褐色。	中世。
第117図	5	在地系土器 片口縁	埋土 口縁部片	(28.0)	-	-	B	にぶい 橙、灰 褐色	断面は褐色。内面器表はにぶい褐色。外面器表は灰褐色。口縁部は内湾するように立ち上がり、端部は丸みを帯びる。	14世紀中頃～後半頃。
第117図	6	在地系土器 片口縁か	埋土 口縁部片	-	-	-	B	黒	断面は黒褐色。器壁はやや厚く、口縁部下で緩く外反。口縁部内面は突き出る。突出部上面の器表は摩滅。	中世。
第117図 PL.63	7	在地系土器 内耳鍋	埋土 上半部片	(29.6)	-	-	B	褐色	器壁は厚い。断面中央は褐色。器表付近は褐色。器表は褐色。外面口縁部下で外反し、外反部外面は帯状に窪む。屈曲部内面は明瞭な段をなす。口縁部内面は僅かに肥厚し、外面は屈曲するように突き出る。端部上面は幅広く窪む。内耳の粘土結は細い。内耳下部に直径3mmほどの補修孔が1箇所残存。体部外面の一部は貫孔あり。	体部上位に補修孔。16世紀前半～中葉？。
第117図 PL.63	8	在地系土器 内耳鍋	埋土 口縁部片	-	-	-	B	黒	断面は浅黄褐色。器表は黒色。口縁部から口縁部下内面に粘土を貼り付けて内耳とする。口縁部内面は段をなす。耳部上位内面に左側面に断面が弧状を呈する摩滅が認められ、粗状の吊り手が付けられていた可能性が高い。	内耳に吊り手摩滅痕。15世紀か。
第117図 PL.63	9	在地系土器 内耳鍋	埋土 口縁部片	-	-	-	B	黒	断面はにぶい黄褐色。器表は黒色。口縁部から口縁部下内面に粘土を貼り付けて内耳とする。口縁部内面は段をなす。耳部上位内面に断面が弧状を呈する摩滅が認められ、粗状の吊り手が付けられていた可能性が高い。	内耳に吊り手摩滅痕。15世紀か。
第117図	10	在地系土器 内耳鍋	埋土 口縁部片	-	-	-	B	灰	還元焼。口縁部下で外反し。口縁部は内湾気味に細く、屈曲部内面は段をなす。ゆるい段をなす。口縁部は水平に広がるように突出。端部上面はやや窪む。	16世紀前半～中葉？。

第39表 出土遺物観察表(土子遺跡16)

2号墓出土(中近世陶磁器・土器(続き))

種別番号 図版番号	No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第117図	11	在地系土器 内耳鍋	埋土 口縁部片	-	-	-	A	灰	還元炎。口縁部下で湾曲気味に外反し、口縁部は直線的に開く。口縁端部は水平に広がるように突出。端部上面は僅かに窪む。	16世紀前半～中葉?
第117図	12	在地系土器 内耳鍋	埋土 口縁部片	-	-	-	B	暗灰黄、 にぶい 橙	断面中央は暗灰色。器表付近はにぶい橙色。内面器表はにぶい橙色。外面器表は暗灰黄色。口縁部下で外反し、口縁部は直線的に開く。屈曲部内面は低い段をなす。口縁部外面は小さく突き出る。端部上面はやや窪む。	15世紀末 ～16世紀中 葉?
第117図	13	在地系土器 内耳鍋	埋土 口縁部片	-	-	-	B	灰黄濁	厚い部分の断面はにぶい赤褐色。他は黄灰色。器壁はやや厚い。口縁部下で外反し、口縁部はやや内湾。屈曲部内面は低い方明確な段をなす。口縁端部は内側に凹む。	15世紀後半 か。
第117図	14	在地系土器 内耳鍋	埋土 口縁部片	-	-	-	B	灰	還元炎。器壁は薄く、口縁部はやや内湾。	15世紀後半 ～16世紀初 頭?
第117図	15	在地系土器 内耳鍋	埋土 体部片	-	-	-	A	にぶい 黄橙、 暗濁	断面は橙色。内面器表はにぶい黄橙色。外面器表は暗褐色。残存部上位外面に口縁部下屈曲部が残る。屈曲部内面にやや低い方明瞭な段が認められる。体部外面中位以上は撫で、下位は削削りて接合痕残る。体部下位の器壁はやや厚い。	中世。
第117図	16	在地系土器 内耳鍋	埋土 体部片	-	-	-	B	灰	還元炎。外面器表は黒褐色に変色。器壁はやや厚い。口縁部下は外反。屈曲部内面は明確な段をなす。外面に接合痕残る。	中世。
第117図	17	在地系土器 内耳鍋	埋土 体部片	-	-	-	B	灰	器壁薄く還元炎。残存部内面に内耳貼り付け痕残る。口縁下部内面は段をなさない。段の無は不明。	中世。
第117図	18	在地系土器 不詳	埋土 体部片	-	-	-	B	灰黄濁、 橙	断面から内面器表は橙色。内面器表は灰黄濁色。内外面は撫で。器壁は厚い。火鉢類か。	中世。
第117図 PL.63	19	在地系土器 円盤状製品(皿)	埋土 完形	5.3	4.8	0.8	B	灰黄濁	断面は黒色。器表は灰黄濁色。皿の底部を円形に打ち欠き、割れ口を推して円盤状に整形。底部左回転糸切無調整。	中世か。
第117図 PL.63	20	在地系土器 円盤状製品(皿)	埋土 完形	4.0	4.0	0.8	B	橙	断面部の両縁を細かい嵌打で整形。底部左回転糸切無調整。	中世か。

2号墓出土石製品

種別番号 図版番号	No.	種 器 類 種	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石 材
第118図 PL.64	21	砥石 切り砥石	覆土	[8.2]	6.6	[4.8]	340.1	裏面側を除く各面を使用。左側面の使用頻度が高く、摩耗が激しい。右側面に方ならしげ。裏面には整形痕が見える。	粗粒輝石安山 岩
第118図 PL.64	22	砥石 切り砥石	覆土	[7.8]	[5.1]	[1.6]	58.2	背面側・右側面に使用面が見える。教材は細粒・緻密で仕上げ砥石として使用されたものか。	貝質粘板岩
第118図 PL.64	23	石臼 上臼	覆土	径 28		13.8	7100.0	6分割。磨しく抱え込まれ、著しく片減る。刻み目もやや減りが著しく、管理は不十分。供損口・芯棒受け・挽き手穴が残る。	粗粒輝石安山 岩

4号墓出土土師器

種別番号 図版番号	No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第121図 PL.64	1	土師器 高杯	埋土 1/4	底 10.2	細砂粒/良好/橙	製部内外面に撫で、端部に内縁が巡る。	

遺蹟外出土縄文土器

種別番号 図版番号	No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第123図 PL.64	1	縄文土器 深鉢	12住覆土 胴部片		繊維/ふつつ/橙	胴部の表裏面に条痕を施す。	条痕文系
第123図 PL.64	2	縄文土器 深鉢	5住覆土 胴部片		繊維/ふつつ/橙	胴部の表裏面に条痕を施す。	条痕文系
第123図 PL.64	3	縄文土器 深鉢	6住覆土 胴部片		繊維/ふつつ/橙	胴部の表裏面に条痕を施す。	条痕文系
第123図 PL.64	4	縄文土器 深鉢	1住覆土 胴部片		繊維/ふつつ/橙	胴部に縦長となるL RとR Lによる引状縄文を施す。	花積下層1式
第123図 PL.64	5	縄文土器 深鉢	1住覆土 胴部片		繊維/ふつつ/橙	胴部に縦長となるL RとR Lによる引状縄文を施す。	花積下層1式
第123図 PL.64	6	縄文土器 深鉢	1住覆土 胴部片		繊維/良好/黄橙	胴部に削れたコンパス文を横位に巡らせ、瘤状の貼付を配する。	岡山1式
第123図 PL.64	7	縄文土器 深鉢	1住覆土 胴部片		繊維/ふつつ/黄橙	胴部にL RとR Lによる引状縄文を施し、下部に環付き縄(ルーブ文)を施す。	岡山1式
第123図 PL.64	8	縄文土器 深鉢	1住覆土 胴部片		繊維/ふつつ/橙	胴部に0段多糸のL Rの縄文を施し、下部に環付き縄(ルーブ文)を施す。	岡山1式
第123図 PL.64	9	縄文土器 深鉢	12住覆土 胴部片		繊維/ふつつ/暗濁	胴部に環付き縄(ルーブ文)を幅狭多段に施し、下に0段多糸のL Rと0段多糸のR Lによる引状縄文を施す。	岡山1式
第123図 PL.64	10	縄文土器 深鉢	口縁部片		繊維/ふつつ/黄濁	波状口縁の口縁下に爪形刺突をもつ平行沈線を2条巡らせ、口縁部文様と同様の平行沈線で幾何文を描く。	有尾式
第123図 PL.64	11	縄文土器 深鉢	13住覆土 口縁部片		繊維/良好/暗濁	波状口縁の口縁下にR Lの縄文を施す。	有尾式

出土遺物観察表

第40表 出土遺物観察表(土子遺跡17)

遺構外出土縄文土器(続き)

検出番号 図取番号	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第123号 PL-64	12	縄文土器 深鉢	口縁部片		繊維/ふつう/橙	平口縁の口縁下にL RとR Lによる羽状縄文を施す。	有尾式
第123号 PL-64	13	縄文土器 深鉢	5住履土 口縁部片		粗砂粒/良好/橙	平口縁の口唇部および口縁下にR Lの縄文を施す。	諸磯a式
第123号 PL-64	14	縄文土器 深鉢	103土坑埋土 胴部片		粗砂粒・細礫/ふつう/橙	胴部にR Lの縄文を施す。	諸磯a式
第123号 PL-64	15	縄文土器 深鉢	103土坑埋土 胴部片		粗砂粒・細礫/ふつう/橙	胴部にR Lの縄文を施す。	諸磯a式
第123号 PL-64	16	縄文土器 深鉢	5住履土 胴部片		粗砂粒・細礫/ふつう/橙	胴部にO段多条のR Lの縄文を施す。	諸磯a式
第123号 PL-64	17	縄文土器 深鉢	胴部片		粗砂粒/ふつう/濁	胴部上半に平行比線で曲線的な文様を描き、その下に横位の平行比線を放射線らせる。	諸磯b式
第123号 PL-64	18	縄文土器 深鉢	19住履土 胴部片		粗砂粒/良好/黄橙	胴部に条線を横位に施し、胴部に縦位方向の条線で文様を描く。	諸磯c式
第124号 PL-64	19	縄文土器 深鉢	34住履土 胴部片		粗砂粒/ふつう/橙	胴部に条線で縦位の弧状(レンズ状)の文様を描き、区画内に横位の条線を施す。	諸磯c式
第124号 PL-64	20	縄文土器 深鉢	38住履土 胴部片		粗砂粒・細礫/ふつう/橙	胴部に比線で懸垂文を描き、区画内にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
第124号 PL-64	21	縄文土器 深鉢	56土坑埋土 胴部片		粗砂粒・細礫/ふつう/橙	胴部に比線で懸垂文を描き、区画内に蛇行懸垂文とR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
第124号 PL-64	22	縄文土器 深鉢	胴部片		粗砂粒/良好/濁	胴部上半に比線で縦位の縄文帯を区画し、区画内に縦いRの縄文を充填する。	型之内2式

遺構外出土石器

検出番号 図取番号	No	器種 形態・素材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第124号 PL-64	23	石鏃 凹基有茎鏃	12住履直	2.2	1.4	0.5	0.8	完成状態。全体的に薄く仕上がり、形状は良好。「挟り部」は浅く三角形形状を呈す。	黒色頁岩
第124号 PL-64	24	石鏃 凸基有茎鏃	1住履土	[2.1]	1.5	0.5	1.0	完成状態。やや厚く、断面三角形形状を呈す。茎の欠損内側については明らかではない。	珪質頁岩
第124号 PL-64	25	打製石斧 短冊形	表土	[12.5]	4.4	2.1	133.9	完成状態。器体上半・側縁が磨砕され、著しく摩耗する。	細粒輝石安山岩
第124号 PL-64	26	打製石斧 短冊形	91土坑	[9.2]	5.3	2.2	104.0	完成状態。装飾部は細身で、聞き気味の側縁に刃部が付く。刃部再生は不十分で、再生時に破損した可能性が高い。	黒色頁岩
第124号 PL-64	27	打製石斧 短冊形	12住履土	[7.0]	4.8	1.2	56.0	完成状態。刃部・側縁摩耗が著しい。刃部再生後、器体中央付近で破損する。	細粒輝石安山岩
第124号 PL-64	28	打製石斧 槍状	13住履土	9.3	6.2	1.6	83.1	完成状態。側縁の表面側加工は薄く平坦で、背面側加工は厚い。刃部は形状を整える程度の加工で、割線は浅い。	黒色頁岩

遺構外出土土師器・土製品

検出番号 図取番号	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第124号 PL-64	29	土師器 杯	4/5	口 13.3 高 4.9	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削り。内面は撫で。	粉っぽい胎土
第124号 PL-64	30	土師器 杯	1/4	口 13.6 高 5.2	細砂粒・粗砂粒/石英良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削り。内面は丁寧へら磨き後、黒色処理。	
第124号	31	土師器 鉢	口縁部片	口 25.3	粗砂粒・粗砂粒/石英良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。体部外面はハケ目(1cmに9本)後、横の撫で。内面は横のハケ目(1cmに9本)。	
第124号 PL-64	32	土師器 甕	底部	底 6.8	粗砂粒・粗砂粒/良好/にぶい黄橙	厚手で粗雑な作り。胴部外面は撫で。	
第124号	33	土製品 白玉か	表土 1/2	長 1.6 厚 0.75 巾 2.7 み	細砂粒/良好/にぶい赤黒	周辺は研磨。焼成前、穿孔。	

遺構外出土中近世陶磁器・土器

検出番号 図取番号	No	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備考
第124号	34	古瀬戸 瓶子か	表土 体部片	-	-	-	-	灰白	外面に滑き状の文様。外面に鉄輪。内面は無釉。輪には発色が認められ、2次被熱の可能性が高い。	13世紀末～14世紀中頃。
第124号	35	瀬戸・美濃陶器 丸皿	26号住履埋土 1/6	(11.2)	(6.8)	2.3	-	淡黄	内外面に長石釉か。口縁部は小さく外反。	17世紀中頃か。
第124号	36	常滑陶器 甕	表土 胴部片	-	-	-	-	黒、暗褐色	断面は灰白色。内面器表は黒色。外面器表は暗褐色。残存部外面上半に自然釉かかる。	中世。
第124号	37	常滑陶器 甕	表土 体部片	-	-	-	-	橙～褐色 灰	断面と器表は褐色から褐色。内面は横位撫で。外面は板状工具による縦位撫で。	中世。
第124号	38	在地系土器 片口鉢	埋土 口縁部片	-	-	-	B	灰白	口縁部は内湾気味で、先端は尖り気味。	14世紀中頃。
第124号	39	在地系土器 片口鉢	表土 体部片	-	-	-	B	黒	断面はにぶい褐色。器表は黒色。器厚は均一でやや薄い。使用により、内面下部器表は摩滅。内面下部は平滑。	中世。

第41表 出土遺物観察表(土器(続き))

遺構外出土中近世陶磁器・土器(続き)

種別番号 図版番号	No	器種 種類	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・調整等	備考
第124図	40	在地系土器 焙烙	19号住居覆土 1/10	-	-	6.3	B	褐、黒褐	断面は棕色、内面器表は褐色、口縁部から体部外面は黒褐色、底部外面は褐色。体部から口縁部は聞き気味に立ち上がる。底部内面と体部境は丸みを持ち、境は不明瞭。内面は明瞭な段をなす。内耳下端は段差直下に貼り付け、口縁部上面は平坦で、内外の角は明瞭な稜をなす。端面外面は僅かに突き出る。体部外面は丁寧な横撫でにより皺状亀裂を撫で消す。体部外面下端から底部外面周縁は鋭削り。底部外面は砂状状。	16世紀。
第124図	41	在地系土器 罎	13号住居覆土 口縁部片	-	-	-	B	灰	断面外面はにぶい褐色。断面内側から内面器表と外面器表は灰色。口縁部上位はやや内湾。口縁部内湾部内湾により突き出るように見える。外面は直下の強い横撫でにより突き出るように見える。	15世紀後半～16世紀初頭か。
第125図	42	在地系土器 内耳罎	17号住居覆土 口縁部片	-	-	-	B	灰黄～黄灰	口縁部上半はやや内湾。口縁部端面外面は丸みを持ち、端部は尖り気味。端部内面は僅かに突き出すが、上面の器表が摩滅。	15世紀後半～16世紀初頭か。
第125図	43	在地系土器 内耳罎	表土 口縁部片	-	-	-	B	褐灰	断面中央は棕色。器表付近はにぶい褐色。器表は褐色。口縁部下でゆるく外反。口縁部は直線的に際し、端部は内湾気味で内面が小さく突き出る。屈曲部内面は湾面。	15世紀後半～16世紀初頭か。
第125図	44	在地系土器 内耳罎	表土 口縁部片	-	-	-	B	にぶい 黄褐、 黒褐	断面は明赤褐色。内面器表はにぶい黄褐色。外面は黒褐色。口縁部は内湾気味で端部外面は稜をなす。端部上面はほぼ水平で小さく窪む。口縁部内面器表は摩滅。	15世紀末～16世紀中葉か。
第125図	45	在地系土器 内耳罎	表土 口縁部片	-	-	-	B	にぶい 橙	器壁はやや厚く、口縁部は直線的に開く。口縁部上部上面は平坦で、外面は厚みを持って突き出る。	16世紀前半～後半?
第125図	46	在地系土器 内耳罎	表土 口縁部片	-	-	-	B	にぶい 橙	器壁はやや厚く、口縁部は直線的に開く。口縁部上部上面は平坦で、外面は厚みを持って突き出る。内面口縁部下は低い明瞭な段をなす。	16世紀前半～後半?
第125図	47	在地系土器 内耳罎	17号住居覆土 口縁部片	-	-	-	B	黄褐、 黒	断面は棕色、内面器表は黄褐色。外面器表は黒褐色。外面は煤付着。口縁部はゆるく外反。口縁部上面は窪み、端部内面角の器表は摩滅。端部外面は斜め上方に小さく突き出る。	16世紀か。
第125図	48	在地系土器 内耳罎	17号住居覆土 体部片	-	-	-	B	灰、黒 褐	断面は赤褐色。内面器表は灰色。外面器表は黒褐色。外面に煤付着。口縁部下で外反し、内面は幅広い段をなす。	中世。
第125図	49	在地系土器 内耳罎	21号住居覆土 体部上位片	-	-	-	B	黒	断面は棕色。器表は黒色。外面に煤付着。口縁部下は外反し、内面は明瞭な稜をなす。段は幅広い。	中世。
第125図	50	在地系土器 内耳罎	表土 体部上位片	-	-	-	B	灰黒	断面は灰黄色。内面器表は灰色。外面器表は灰黄褐色。口縁部下は外反。	中世。
第125図	51	在地系土器 内耳罎	25号住居覆土 体部下位片	-	-	-	B	褐灰、 黒、灰 黄褐	断面は浅黄褐色。内面器表は褐灰色。外面上半は黒色。下半は灰黄褐色。残存部は内湾。外面は鋭削りち撫で。	中世。
第125図	52	在地系土器 内耳罎	表土 体部下位片	-	-	-	B	灰褐、 黒	断面内平から内面器表は灰褐色。断面外平から外面器表は黒色。外面下端は鋭削り。体部下位は開く。	中世。

遺構外出土石製品

種別番号 図版番号	No	器種 形態・素材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第125図 PL.64	53	磨石 南門扁平磨	表土	14.2	12.9	5.2	1366.4	表裏面とも強く磨面が摩耗するほか、側縁に鋭打痕がある。焼熟して全体が煤ける。	粗粒輝石安山岩

出土遺物観察表

第42表 出土遺物観察表(上細井五十嵐遺跡1)

B-1号住居出土須恵器

種別番号 図版番号	No	種類 種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第128図 PL.65	1	須恵器 杯	南西端中央 +50 完形	口 10.3 高 3.0 底 5.2	細砂粒・粗砂粒・ 軽石/酸化塩・良 好/にぶい黄褐色	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り無調整。	
第128図	2	須恵器 椀か	覆土 口縁部破片	口 14.2	細砂粒・粗砂粒/ 酸化塩・良好/に ぶい褐色	ロクロ整形、回転方向不明	
第128図	3	須恵器 椀	北東部中央+45 底部破片	底 8.2	細砂粒・軽石/選 元塩・良好/灰オ リーブ	ロクロ整形、回転右回り。高台は底部回転糸切り後の貼付。	
第128図	4	須恵器 羽釜	覆土 跨部破片		細砂粒/酸化塩・ 良好/にぶい赤褐色	跨貼付。胴部下平は縦方向へのヘラ削り。内面は横のヘラナデ。	
第128図	5	須恵器 羽釜	覆土 底部破片	底 9.8	細砂粒・粗砂粒/ 酸化塩・良好/灰 黄褐色	胴部下平は横方向へのヘラ削り。底部ヘラ削り。	底部に付着物

B-2号住居出土須恵器・黒色土器

種別番号 図版番号	No	種類 種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第130図 PL.65	1	須恵器 椀	南端+22 1/4、高台部欠	口 12.0 底 6.4	細砂粒・小礫/酸 化塩・良好/にぶ い黄褐色	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部切り離しは不明。	
第130図	2	黒色土器 椀	北東部中央+7 底部破片	底 7.4	細砂粒/酸化塩・ 良好/にぶい黄褐色	ロクロ整形、回転方向不明。高台は底部回転糸切り後の貼付、高台端部に窪み。内面黒色処理の痕跡。	内面剥離
第130図 PL.65	3	須恵器 大型椀	中央やや東+1 ほぼ完形	口 14.6 高 7.8 底 6.6	細砂粒・軽石/酸 化塩・良好/にぶ い褐色	ロクロ整形、回転右回り。高台は底部回転糸切り後の雄な	内面厚減
第130図 PL.65	4	須恵器 大型椀	甕内床直+9 1/2、高台端部 欠	口 17.7 底 6.5	細砂粒/酸化塩・ 良好/にぶい黄褐色	ロクロ整形、回転右回り。高台は底部回転糸切り後の雄な	貼付。
第130図 PL.65	5	須恵器 椀	甕内+1 ほぼ完形	口 11.1 高 5.4 底 5.0	細砂粒・小礫/酸 化塩・良好/にぶ い黄褐色	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部切り離しは不明。内面は丁寧なヘラ磨き後、黒色処理	
第130図 PL.65	6	須恵器 土釜	南西部+7~13 1/2	口 22.1 高 18.3 底 10.3	粗砂粒・細砂粒/ 酸化塩・良好/に ぶい黄褐色	ロクロ整形、回転右回り。胴部下平は斜めヘラ削り。内面は横方向のナデ。底部ヘラ削り。	
第130図 PL.65	7	須恵器 土釜	甕内+5~10 1/2	口 26.0 高 28.6 底 10.2	細砂粒/酸化塩・ 良好/赤褐色	口縁部横ナデ。胴部外面は縦方向へのヘラ削り。内面は横の	ヘラナデ。

C-1号住居出土縄文土器

種別番号 図版番号	No	種類 種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	文様の特徴	備考
第132図 PL.65	1	縄文土器 深鉢	覆土 胴部片		繊維/ふつう/褐色	口縁部文様に平行洗擦で文様を描く。	有尾式
第132図 PL.65	2	縄文土器 深鉢	覆土 胴部片		繊維/ふつう/黄 褐色	胴部に爪形刺突をもつ平行洗擦を巡らせ、以下にL Rの縄文を施す。	有尾式
第132図 PL.65	3	縄文土器 深鉢	南西部+21 口縁部片		繊維/ふつう/暗 褐色	平口縁の口縁下にR Lの縄文を施す。	有尾式
第132図 PL.65	4	縄文土器 深鉢	覆土 口縁部破片		繊維/ふつう/暗 褐色	平口縁の口縁下にR Lの縄文を施す。	有尾式
第132図 PL.65	5	縄文土器 深鉢	南東部+19 口縁部片		繊維/ふつう/暗 褐色	平口縁の口縁下にR Lの縄文を施す。	有尾式
第132図 PL.65	6	縄文土器 深鉢	西部+10 口縁部片		繊維/良好/暗褐色	平口縁の口縁下にLとRによる羽状縄文を施す。	有尾式
第132図 PL.65	7	縄文土器 深鉢	西壁中央付近床 直 胴部片		繊維/良好/暗褐色	胴部にL RとR Lによる羽状縄文を施す。	有尾式
第132図 PL.65	8	縄文土器 深鉢	覆土 胴部片		繊維/ふつう/褐色	胴部にO段多条のL RとR Lによる羽状縄文を施す。	有尾式
第132図 PL.65	9	縄文土器 深鉢	南西部+12 胴部片		繊維/ふつう/褐色	胴部にL RとR Lによる羽状縄文を施す。	有尾式
第132図 PL.65	10	縄文土器 深鉢	南西部+8 胴部片		繊維/ふつう/褐色	胴部にL RとR Lによる羽状縄文を施す。	有尾式
第132図 PL.65	11	縄文土器 深鉢	中央やや南+11 胴部片		繊維/良好/褐色	12と同一個体。胴部にLとRによる羽状縄文を施す。	有尾式
第132図 PL.65	12	縄文土器 深鉢	中央+23 胴部片		繊維/良好/褐色	11と同一個体。胴部にLとRによる羽状縄文を施す。	有尾式
第132図 PL.65	13	縄文土器 深鉢	西壁中央付近 +14 胴部片		繊維/ふつう/黄 褐色	胴部にR Lの縄文を施す。	有尾式
第132図 PL.65	14	縄文土器 深鉢	南東部+9 底部片		繊維/ふつう/黄 褐色	胴部下端にLの縄文を施す。	有尾式
第132図 PL.65	15	縄文土器 深鉢	中央やや北 +15、+18 口縁 部片		粗砂粒/ふつう/ 褐色	平口縁の口縁下にR Lの縄文を施す。	諸磯a式
第132図 PL.65	16	縄文土器 深鉢	覆土 胴部片		粗砂粒/ふつう/ 褐色	胴部にR Lの縄文を施す。	諸磯a式

第43表 出土遺物観察表(上畑井五十嵐遺跡2)

C-1号住居出土石器									
種目番号 図版番号	No	器種 形態・素材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石 材
第132図 PL.65	17	石鏡 円基無蓋	北西部+8	1.9	1.8	0.6	1	完成状態。形態的には鏡形鏡様で、基部を大きく切り込み、やや甲高で、断面三角形を呈する。	黒曜石
第132図 PL.65	18	打製石斧 楕円形	南東部+5	10.3	6.3	1.9	132	完成状態。表面側を平坦に、背面側を厚く加工して側縁を作出する。対部は未加工で、摩耗が著しい。早期?	黒色頁岩
第132図 PL.65	19	加工痕ある割 片 幅広割片	北東隅+3	4.7	6.6	2	58.2	割片端部に浅い小剥離痕があり、これに接するエッジの左辺側が著しく潰れる。最終的に敲打具として利用したものか。	黒色頁岩
第132図 PL.65	20	石皿 有縁	中央+11	[19.6]	[10.6]	5.8	1180.9	背面側が内湾し窪む。表面側も磨耗しているが、溝状に窪んだ部分があり、砥石として転用された可能性がある。	粗粒輝石安山岩
第132図 PL.65	21	石製研磨具 小形種状鏡	北東部+1	8.6	3.6	2	97.3	白色石材を用いるため線条痕は不明瞭だが、鏡縁部周辺が光沢を帯びている。	変質安山岩

C-2号住居出土須恵器									
種目番号 図版番号	No	種 類	器 種	出土位置	残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
第133図 PL.66	1	須恵器 小皿	北西壁際中央+5 完形	口径 9.0 高 2.6 底 4.8	2.6	細砂粒・軽石/酸 化焙・良好にふ い黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切りと思われるが摩滅のため不明。	口唇部1カ所 破壊	
第133図 PL.66	2	須恵器 小皿	北西壁際中央 +11 ほぼ完形	口径 9.4 高 2.8 底 5.2	2.8	細砂粒/酸化焙・ 良好/にふい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り無調整。	内面は円形に 変色	
第133図 PL.66	3	須恵器 羽釜	北西部中央+8 口縁部破片	口径 21.2		細砂粒・粗砂粒/ 酸化焙・良好/に ふい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。鈔付。製部外面下半は履のへら削り。内面は横のロクロナデ		

C-2号住居出土鉄製品										
種目番号 図版番号	No	種 類	器 種	出土位置	残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特徴・状態
第133図	4	鉄製品	刀子	北西壁際中 央+8	一部	-	-	-	-	刀子の一部である。

B-1号土坑出土中近世土器												
種目番号 図版番号	No	種 類	器 種	出土位置	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備 考
第136図 PL.66	1	在地系土器 皿	埋土 完形	埋土	9.8	6.0	1.9	B	浅黄橙・ 赤褐	1/3ほどがにふい赤褐色。体部から口縁部は内湾して開く。底部内面中央が盛り上がる。底部左回転系切り無調整。	江戸時代。	
第136図 PL.66	2	在地系土器 皿	埋土 1/2	埋土	(10.2)	(6.0)	1.4	B	にふい 黄橙	扁平な型。内面底部と体部間は凹状に窪む。底部左回転系切り無調整。	江戸時代。	
第136図 PL.66	3	在地系土器 皿	埋土 3/4	埋土	(9.5)	(7.3)	1.9	B	明赤褐	底部器壁は厚い。体部は水平に開いた後に加面して立ち上がる。底部内面から体部内面は強い横撫により、体部が開くと共に内面がドーナツ状に窪む。先の強い横撫により、口縁部内面に小さい段差を生じる箇所がある。底部右回転系切り無調整。	江戸時代。	
第136図	4	在地系土器 皿	埋土 1/4	埋土	(9.5)	(5.7)	1.7	B	明赤褐	底部器壁は厚い。体部は水平に開いた後に加面して立ち上がる。底部右回転系切り無調整。	江戸時代。	

B-6号土坑出土縄文土器									
種目番号 図版番号	No	種 類	器 種	出土位置	残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	文様の特徴	備 考
第137図 PL.66	1	縄文土器 深鉢	覆土 胴部片	覆土			粗砂粒・白色粒・ 黒色粒/ふつう/灰 褐	口縁部文様に太い沈線が文様を区画し、区画内にR.Lの縄文を施す。胴部には太い沈線による懸垂文とR.Lの縄文を縦位に施す。	加管利E式
第137図 PL.66	2	縄文土器 深鉢	覆土 胴部片	覆土			粗砂粒・細礫/ふ つう/橙	胴部に沈線が逆U字状の文様を描き、文様内にR.Lの縄文を縦位に施す。	加管利E式
第137図 PL.66	3	縄文土器 深鉢	覆土 口縁部片	覆土			粗砂粒・細礫/ふ つう/褐橙	内反する平口縁の口縁下にR.Lの縄文を横位に施し、以下にR.Lの縄文を縦位に施す。さらに、沈線が幅狭な逆U字状の文様を描く。	加管利E式

B-6号土坑出土石器									
種目番号 図版番号	No	器種 形態・素材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石 材
第137図 PL.66	4	打製石斧 楕円型	埋土	[6.3]	3.9	1.2	35.5	完成状態。対部摩耗が著しい。器体上半部を大きく欠く。	黒色頁岩
第137図 PL.66	5	台石 扁平種	埋土	16	15.2	4.6	1691.2	表裏面とも摩耗するほか、背面側には敲打痕がある。	粗粒輝石安山岩

C-2号土坑出土縄文土器									
種目番号 図版番号	No	種 類	器 種	出土位置	残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	文様の特徴	備 考
第137図 PL.66	1	縄文土器 深鉢	覆土 胴部片	覆土			粗砂粒/ふつう/黄 橙	胴部にR.Lの縄文を施す。	諸磯a式

出土遺物観察表

第44表 出土遺物観察表(上細井五十嵐遺跡3)

C-3号上坊出土土師器										
種別番号 図取番号	No	器種 形態・素材	出上位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調		成形・整形の特徴		備考
第138図 PL-66	1	土師器 楕円杯	埋土 1/2	口	12.8 高	5.1	細砂粒/酸化塩/やや不良/橙	口縁部横ナデで、弱い段を有する。底部手持ちへラ削り。内面はナデ。		内外面割離。底部黒斑。
C-4号上坊出土土器										
種別番号 図取番号	No	器種 形態・素材	出上位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況		石材
第138図 PL-66	1	打製石沖 筒型	埋土	9.8	5.9	1.6	93.1	両側縁を鋸向割離様に粗く割離する。刃部は素材のエッジを加工せず使用する。早期?		黒色頁岩
第138図 PL-66	2	加工組ある割片 扁広割片	埋土	8.3	5.2	2.3	98.2	裏面側面割縁を粗く加工する。加工意図については不明。		黒色頁岩
A区As-B下水田出土土師器										
種別番号 図取番号	No	器種 形態・素材	出上位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調		成形・整形の特徴		備考
第143図	1	土師器 杯	水田面 1/4、底部中央 欠	口 12.		細砂粒/酸化塩/良好/ぶい黄橙		口縁部横ナデ。内面はナデ。		
A区B区川出上中近世陶磁器・土器										
種別番号 図取番号	No	器種 形態・素材	出上位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備考
第144図 PL-66	1	肥前陶器 碗	4号トレン チ 2/3	-	4.7	-	-	灰	陶胎染付。貝殻の発色は良好で器壁は薄い。	17世紀末～18世紀中頃。
第144図 PL-66	2	京・信楽系陶器 碗	3号トレン チ 1/3	-	(4.2)	-	-	淡黄	高台内の扱りは深く、底部器壁薄。高台下部外面は小さく面取り。内面から高台部に灰輪。底部内面に直径1箇所。体部外面割れ口付近にローリング痕が認められる。	江戸時代か。
第144図	3	瀬戸・美濃陶器 片口鉢	4号トレン チ 1/3	(18.2)	-	-	-	灰白	口縁部は玉縁状をなして内湾。口縁部外面に1条の凹輪。片口部一部割れ。口縁部内面から外面に磨輪。	18世紀前半～中頃。
第144図	4	在地系土器 鍋	3号トレン チ 口縁部 片	-	-	-	B	オリブ 黒	厚い部分の断面中央は黒色。他の断面は淡黄色。内縁器表はオリブ黒で外面器表は黒色。口縁部端部は屈曲して水平に開く。ややローリングを受ける。	江戸時代。
第144図	5	在地系土器 焙烙	4号トレン チ 口縁部 ～体部片	-	-	-	B	黒	断面中央は黒色。器表付近は灰白色。器表は黒色。体部外面下位は皺状発色。	江戸時代。
第144図	6	在地系土器 焙烙	4号トレン チ 口縁部 ～体部片	-	-	-	B	黒	断面は灰白色。器表は黒色。口縁部器壁はやや厚い。ローリングにより割れ口器表が厚減。	江戸時代。
A区B区川出上土器製品										
種別番号 図取番号	No	器種 形態・素材	出上位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況		石材
第144図 PL-66	7	砥石 切り砥石	4号トレン チ	[7.7]	2.7	1.9	52.8	四面使用。背面側が研ぎ減り、右側面に深い工具痕が残る。全体的にローリングして磨滅する。		粗粒輝石安山岩
第144図 PL-66	8	石臼 上臼	4号トレン チ	径 28	-	11.2	2192.7	割み目が確認できないほど微しく使い込まれる。多孔質表面であるにしても整形は雑。ローリングによる磨滅は乏しい。		粗粒輝石安山岩
A区遺構外出土土師器・須恵器										
種別番号 図取番号	No	器種 形態・素材	出上位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調		成形・整形の特徴		備考
第144図	1	土師器 高杯	表土 脚柱部破片			細砂粒・輝石/酸化塩/やや不良/ぶい黄橙		内面に較り痕。		外面厚減
第144図	2	土師器 徳か	水田覆上 同部破片			細砂粒/酸化塩/良好/橙		外面は丁寧なナデ。		
第144図	3	須恵器 碗	水田覆上 底部破片	底	6.2	細砂粒・軽石/酸化塩/良好/ぶい橙		ロクロ整形。回転右回り。高台部貼付。底部切り離し不明。		
第144図	4	須恵器 高杯	水田覆上 脚柱部破片			細砂粒/還元塩/良好/灰		ロクロ整形。回転右回り。		三方透かし
A区遺構外出土中近世陶磁器・土器										
種別番号 図取番号	No	器種 形態・素材	出上位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備考
第144図	5	瀬戸・美濃陶器 筒形香炉	表土 1/8	(10.8)	-	-	-	灰白	口縁部上面は内傾し、端面内面は突き出る。体部外面に丸盤状工具で施文。口縁部内面から体部外面に磨輪。	18世紀後半。
第144図	6	瀬戸陶器 すり鉢	表土 1/4	-	(14.0)	-	-	浅黄	体部外面は回転削り。底部回転糸切無調整。内外面に磨輪。使用により、内面体部下位から底部内面の器表は厚減。底部外面周縁の器表も厚減。	江戸時代。
第144図	7	在地系土器 片口鉢	表土 体部下位片	-	-	-	B	灰	還元炎で器壁は薄い。使用により内面器表は厚減。	中世。

第45表 出土遺物観察表(上畑井五十嵐遺跡4)

A区遺構外出土中近世陶磁器・土器

種別番号 図版番号	No	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・文調整等	備考
第144図 PL.66	8	在地系土器 片割品	表上 体部下位片	-	-	-	B	灰・暗 灰黄	断面と外面器表は暗灰黄色。内面器表は灰色。内 面に弧状のすり目。	中世。

A区遺構外出土片割品

種別番号 図版番号	No	種類 器種・素材	出土位置	口径 (cm)	器高 (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況		石 材
第144図 PL.66	9	石鉢	埋込	18.4	14.7	-	内外面とも磨き整形する。底部外面に工具痕が残る。外面 は磨滅が著しい。彫形は直立気味で、五輪塔(水輪)を転 用した可能性も残る。		角閃石(山岩)

B区遺構外出土縄文土器

種別番号 図版番号	No	種類 器種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調	文様の特徴		備 考
第144図 PL.66	1	縄文土器 深鉢	表上 深鉢		粗砂粒/良好/黄橙	平口縁の口縁下に縦位の磨り糸文を施す。		稲荷原式
第144図 PL.66	2	縄文土器 深鉢	29IK-14 深鉢		粗砂粒/良好/黄橙	平口縁の口縁下に縦位の磨り糸文を浅く施す。		稲荷原式
第144図 PL.66	3	縄文土器 深鉢	表上 胴部片		粗砂粒/良好/黄橙	胴部に縦位の磨り糸文を施す。		稲荷原式
第144図 PL.66	4	縄文土器 深鉢	表上 胴部片		粗砂粒/良好/黄橙	胴部に縦位の磨り糸文を施す。		稲荷原式
第144図 PL.66	5	縄文土器 深鉢	表上 胴部片		粗砂粒/良好/黄橙	胴部に縦位の磨り糸文を施す。		稲荷原式
第144図 PL.66	6	縄文土器 深鉢	包含層 胴部片		繊維/ふつつ/黄橙	胴部の表裏面に条痕を施す。		条痕文系
第145図 PL.66	7	縄文土器 深鉢	包含層 胴部片		繊維/ふつつ/黄橙	胴部にL RとR Lによる羽状縄文を施す。		有尾・黒沼式
第145図 PL.66	8	縄文土器 深鉢	包含層 口縁部片		粗砂粒/白色粒/ ふつつ/黄	平口縁の口縁下にR Lの縄文を施す。		諾儀a式
第145図 PL.66	9	縄文土器 深鉢	表上 胴部片		粗砂粒/良好/黄橙	口縁部文様に条線が波状文を巡らせ、その下端を4本脚の 刺突をもつ条線を巡らせて区画し、胴部にR Lの縄文を施 す。		諾儀a式
第145図 PL.66	10	縄文土器 深鉢	表上 胴部片		粗砂粒/良好/黄橙	胴部にR Lの縄文を施す。		諾儀a式
第145図 PL.66	11	縄文土器 深鉢	包含層 胴部片		粗砂粒/ふつつ/黄	胴部にR Lの縄文を施す。		諾儀a式
第145図 PL.67	12	縄文土器 深鉢	表上 胴部片		粗砂粒/良好/黄橙	胴部にR Lの縄文を施す。		諾儀a式
第145図 PL.67	13	縄文土器 深鉢	表上 胴部片		粗砂粒/良好/黄橙	胴部にR Lの縄文を施す。		諾儀a式
第145図 PL.67	14	縄文土器 深鉢	29IK-15 口縁部片		粗砂粒/ふつつ/黄 橙	内反する平口縁の口縁部に隆帯と沈線で楕円等の文様を区 画し、区画内にL Rの縄文を施す。		加賀利E式
第145図 PL.67	15	縄文土器 深鉢	包含層 口縁部片		粗砂粒・黒色粒/ 良好/黄橙	内反する平口縁の口縁部に隆帯と太い沈線で楕円等の文様 を区画し、区画内にL Rの縄文を施す。		加賀利E式
第145図 PL.67	16	縄文土器 深鉢	表上 口縁部片		粗砂粒・黒色粒/ ふつつ/灰黄	内反する平口縁の口縁下に太い沈線を施し、以下に沈線 を描き、文様内にR Lの縄文を施す。		加賀利E式
第145図 PL.67	17	縄文土器 深鉢	包含層 口縁部片		粗砂粒・繊維/ふ つつ/黄橙	口縁部が無文様となり、胴部上半の膨らみ部に隆帯と比較 的に太い文様を描き、区画内にR Lの縄文を施す。また、 塔状把手を有する。胴部下半にはR Lの縄文を施す。		加賀利E式
第145図 PL.67	18	縄文土器 双耳壺	包含層 胴部片		粗砂粒・繊維/ふ つつ/黄橙	胴部が無文様となり、胴部上半の膨らみ部に隆帯と比較 的に太い文様を描き、区画内にR Lの縄文を施す。また、 塔状把手を有する。胴部下半にはR Lの縄文を施す。		加賀利E式
第145図 PL.67	19	縄文土器 深鉢	表上 胴部片		粗砂粒・黒色粒/ ふつつ/黄橙	胴部に沈線で懸垂文とR Lの縄文を縦位に施す。		加賀利E式
第145図 PL.67	20	縄文土器 深鉢	29IK-15 胴部片		粗砂粒・繊維/ふ つつ/黄	胴部に沈線で懸垂文とR Lの縄文を縦位に施す。		加賀利E式
第145図 PL.67	21	縄文土器 深鉢	表上 胴部片		粗砂粒・繊維/ふ つつ/黄橙	胴部に隆帯で曲線的な文様を描き、文様内にR Lの縄文を 施す。		加賀利E式
第145図 PL.67	22	縄文土器 深鉢	包含層 胴部片		粗砂粒・黒色粒/ ふつつ/黄	胴部に隆帯と沈線で曲線的な文様を描き、文様内にR Lの 縄文を縦位に施す。		加賀利E式
第145図 PL.67	23	縄文土器 深鉢	包含層 胴部片		粗砂粒・黒色粒/ ふつつ/黄	胴部に隆帯を懸垂させ、沈線で逆U字状の文様を描き、文 様内にR Lの縄文を縦位に施す。		加賀利E式
第145図 PL.67	24	縄文土器 深鉢	包含層 胴部片		粗砂粒・白色粒/ ふつつ/黄橙	胴部に隆帯と沈線で曲線的な文様を描き、文様内にR Lの 縄文を施す。		加賀利E式
第145図 PL.67	25	縄文土器 深鉢	29IK-16 胴部片		粗砂粒/良好/黄橙	胴部上半に沈線で波状ないし縦長な楕円を描き、R Lの縄 文を縦位に施す。		加賀利E式
第145図 PL.67	26	縄文土器 深鉢	29IK-16 口縁部片		粗砂粒/良好/赤褐	内反する平口縁の口縁下に太い沈線を巡らせ、以下に条線 を描き、区画内にR Lの縄文を施す。		加賀利E式
第145図 PL.67	27	縄文土器 深鉢	29IK-16 口縁部片		粗砂粒/ふつつ/黄 橙	内反する鋭い波状口縁の口縁下に隆帯と沈線で渦状の曲線 的な文様を描き、上の縄文を充満する。		加賀利E式
第145図 PL.67	28	縄文土器 深鉢	表上 口縁部片		粗砂粒・繊維/ふ つつ/黄橙	内反する平口縁の口縁下に隆帯と沈線で曲線的な文様を描 き、R Lの縄文を施す。		加賀利E式
第145図 PL.67	29	縄文土器 深鉢	29IK-16 口縁部片		粗砂粒/良好/黄橙	内反する平口縁の口縁部に隆帯と沈線で楕円等の文様を区 画し、区画内にR Lの縄文を施す。		加賀利E式

出土遺物観察表

第46表 出土遺物観察表(上畑井五十嵐遺跡5)

B区遺構外出土縄文土器(続き)

検出番号 図版番号	No	器種 種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	文様の特徴	備考
第145図 PL-67	30	縄文土器 深鉢	包含層 口縁部片		粗砂粒・黒色粒/ ふつう/黄褐色	内反する平口縁の口縁下に内形刺突を2列並べてその間を無文部とし、以下に0段多条のR.Lの縄文を縦位に施す。	加管利E式
第145図 PL-67	31	縄文土器 深鉢	表土 口縁部片		粗砂粒/良好/黄褐色	内反する鋭い波状口縁の口縁下に浅い沈線を巡らせ、以下に沈線で曲線的な文様を描く。R.Lの縄文を施す。	加管利E式
第145図 PL-67	32	縄文土器 深鉢	表土 口縁部片		粗砂粒・細粒/ ふつう/褐色	内反する鋭い波状口縁の口縁下に陰帯と沈線を巡らせ、以下にR.Lの縄文を横位および縦位に施す。	加管利E式
第145図 PL-67	33	縄文土器 深鉢	壊乱 口縁部片		粗砂粒/ふつう/褐色	内反する平口縁の口縁下に沈線を描き、以下にR.Lの縄文を縦位に施す。	加管利E式
第145図 PL-67	34	縄文土器 深鉢	表土 胴部片		粗砂粒/良好/黄褐色	胴部上半に沈線でV字状の文様を描き、文様内にL.Rの縄文を充填する。	加管利E式

B区遺構外出土石器

検出番号 図版番号	No	器種 形態・素材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	製作状況・使用状況	石材
第146図 PL-67	35	削器 幅広剥片	包含層	8.2	4.9	1.2	50.9	へら状を呈し、形制的には石斧に近い。加工は浅く部分的で、形状修正的である。	黒色頁岩
第146図 PL-67	36	打製石斧 短型型	29RS-R16	15.4	5.2	1.8	197.3	完成状態。対部摩耗するほか、両側縁とも磨打されエッジが潰れている。対部再生はなく、石斧使用の初期段階にある。	変質玄武岩
第146図 PL-67	37	打製石斧? 不明	表土	[4.0]	[5.1]	0.6	12.6	対部摩耗は明らかであり石斧とするならば、完成状態であるのは確実。石斧としては薄身で、分類が妥当か疑問が残る。	細粒輝石安山岩
第146図 PL-67	38	加工痕ある剥片 幅広剥片	包含層	10.6	7.0	2.1	150.4	素材を横位に用い、下端部に対部を作出する。加工意図は片対石斧にみるように見える。	黒色頁岩
第146図 PL-67	39	加工痕ある剥片 小形剥片	29RS-S10	2.2	1.9	0.7	4.5	表裏面とも対向する小凹痕がある。両側割縁であることは確実だが、加工意図は明らかでない。	チャート
第146図 PL-67	40	磨石 棒状磨	包含層	[17.9]	6.5	5.2	938.4	両側縁を機能部とするもので磨しく使用され、直線的な棱角が生じている。左辺・小口部が被熱剥落する。	細粒輝石安山岩
第146図 PL-67	41	スタンプ形石器 扁平磨	包含層	12.6	8.3	4.2	642.0	分割面が摩耗するほか、体部下端に磨打に伴う衝撃割痕がある。右側縁を粗く打ち欠いて「製り部」を作出する。	石英閃緑岩
第146図 PL-67	42	多孔石 河床磨	B-1住壇	21.8	23.6	10.8	7100.0	表裏面に漏斗状の孔多数を穿つ。被熱して赤化・輝けている。	粗粒輝石安山岩

B区遺構外出土中近世陶磁器

検出番号 図版番号	No	器種 種類	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・文調整等	備考
第146図	43	古瀬戸 緑釉小皿	表土 口縁部片	-	-	-	-	灰白	口縁部のみ灰釉。外面の輪軸目は顕著。	14世紀中頃～15世紀後半。

C区遺構外出土縄文土器

検出番号 図版番号	No	器種 種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	文様の特徴	備考
第146図 PL-68	1	縄文土器 深鉢	包含層 口縁部片		繊維/ふつう/褐色	波状口縁の口縁下に平行沈線を描き、口縁部文様に平行沈線で山形状の文様を描き、その下に平行沈線を放射状に施す。胴部にはL.RとR.Lによる羽状縄文を施す。	有尾式
第146図 PL-68	2	縄文土器 深鉢	包含層 口縁部片		繊維/ふつう/褐色	波状口縁の口縁下に平行沈線を描き、口縁部文様に平行沈線で山形状の文様を描く。	有尾式
第146図 PL-68	3	縄文土器 深鉢	包含層 口縁部片		繊維/ふつう/褐色	波状口縁の口縁下に平行沈線を描き、口縁部文様に平行沈線で山形状の文様を描く。	有尾式
第146図 PL-68	4	縄文土器 深鉢	包含層 口縁部片		繊維/ふつう/黄褐色	平口縁の口縁下にコンパス文を巡らせ、以下にL.Rの縄文を施す。	黒浜式
第147図 PL-68	5	縄文土器 深鉢	包含層 胴部片		繊維/ふつう/褐色	口縁部文様に平行沈線で文様を描く。	有尾式
第147図 PL-68	6	縄文土器 深鉢	包含層 胴部片		繊維/ふつう/褐色	口縁部文様に平行沈線で文様を描く。	有尾式
第147図 PL-68	7	縄文土器 深鉢	包含層 口縁部片		繊維/ふつう/暗黄褐色	胴部が大きく屈曲する平口縁。口縁下に粗いL.Rの縄文を施す。	黒浜式
第147図 PL-68	8	縄文土器 深鉢	包含層 口縁部片		繊維/ふつう/暗黄褐色	平口縁の口縁下に粗いL.Rの縄文を施す。	黒浜式
第147図 PL-68	9	縄文土器 深鉢	包含層 胴部片		繊維/ふつう/暗黄褐色	胴部にL.RとR.Lによる羽状縄文を施す。	有尾・黒浜式
第147図 PL-68	10	縄文土器 深鉢	包含層 胴部片		繊維/ふつう/褐色	胴部にL.RとR.Lによる羽状縄文を施す。	有尾・黒浜式
第147図 PL-68	11	縄文土器 深鉢	包含層 胴部片		繊維/ふつう/黄褐色	胴部にL.RとR.Lによる羽状縄文を施す。	有尾・黒浜式
第147図 PL-68	12	縄文土器 深鉢	包含層 胴部片		繊維/ふつう/褐色	胴部にL.RとR.Lによる羽状縄文を施す。	有尾・黒浜式
第147図 PL-68	13	縄文土器 深鉢	包含層 胴部片		繊維/ふつう/褐色	胴部にL.RとR.Lによる羽状縄文を施す。	有尾・黒浜式
第147図 PL-68	14	縄文土器 深鉢	包含層 胴部片		繊維/ふつう/褐色	胴部にR.Lの縄文を施す。	有尾・黒浜式

第47表 出土遺物観察表(上畑井五十嵐遺跡6)

C区遺構外出土縄文土器(続き)

種別番号 図版番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	文様の特徴	備考
第147図 PL.68	15	縄文土器 深鉢	北トレンチ 胴部片			繊維/ふつう/黄橙	胴部にLRの附加条(1本附加)を施す。	有尾・黒浜式
第147図 PL.68	16	縄文土器 深鉢	表上 底部片			繊維/ふつう/橙	底部が高台付きとなり、胴部下端にLRの縄文を施す。	有尾・黒浜式
第147図 PL.68	17	縄文土器 深鉢	包含層 口縁部片			粗砂粒/ふつう/褐 橙	平口縁の口縁下にRLの縄文を施す。	須磯a式

C区遺構外出土中近世陶磁器

種別番号 図版番号	No	種 器	類 種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	形・成調整等	備考
第147図	18	古瀬戸 平碗か		表上 体部片	-	-	-	-	淡黄	内面から外面上半に灰輪。細かい貫入が入る。	14世紀～15 世紀。

写真図版



1 遺跡周辺の航空写真(1961年・国土地理院、上が北、中央上やや左寄りが遺跡)



1 道跡上空から(上が北、中央やや右が道跡)



2 道跡遠景(西から、中央奥が道跡)



1 道跡遠景(北から、左側中央付近が道跡)



2 道跡遠景(南から、中央やや右が道跡)



1 調査区全景(上空から、左上が北)



2 調査区全景(南西から、遠景は赤城山)



1 調査区全景(北東から)



2 調査区全景(南東から、遠景は樺名山)



1 調査区全景(北西から)



2 1号住居全景(南西から)



3 1号住居掘方全景(南西から)



4 2号住居全景(北東から)



5 2号住居掘方全景(北東から)



1 2号住居貯蔵穴全景(北東から)



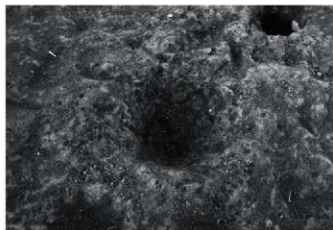
2 3号住居全景(南東から)



3 3号住居掘方全景(南東から)



4 4号住居掘方全景(南東から)



5 4号住居貯蔵穴全景(南から)



6 5号住居全景(北東から)



7 5号住居掘方全景(北東から)



8 5号住居竪全景(北東から)



1 5号住居掘方全景(北東から)



2 5号住居貯蔵穴全景(北東から)



3 6号住居全景(南西から)



4 6号住居掘方全景(南西から)



5 6号住居竈全景(南西から)



6 6号住居掘方全景(南西から)



7 6号住居貯蔵穴全景(南西から)



8 6号住居貯蔵穴遺物出土状態(北東から)



1 7号住居全景(南西から)



2 7号住居掘方全景(南西から)



3 7号住居跡全景(南西から)



4 7号住居貯蔵穴全景(北西から)



5 7号住居炭化材・遺物出土状態(南西から)



6 7号住居炭化材出土状態(北東から)



7 8号住居全景(南西から)



8 8号住居掘方全景(南西から)



1 8号住居竈全景(南西から)



2 8号住居貯蔵穴全景(南西から)



3 9号住居全景(西から)



4 9号住居掘方全景(西から)



5 9号住居竈全景(西から)



6 9号住居掘方全景(西から)



7 9号住居貯蔵穴全景(西から)



8 9号住居遺物出土状態(北西から)



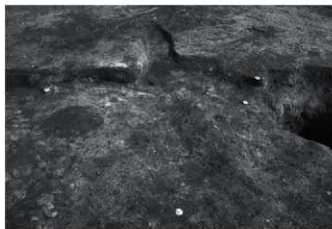
1 10号住居全景(南西から)



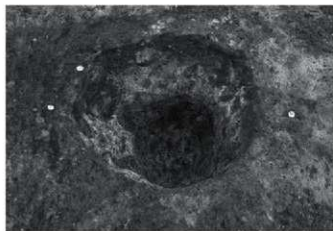
2 10号住居掘方全景(南西から)



3 10号住居竈全景(南西から)



4 10号住居竈掘方全景(南西から)



5 10号住居貯蔵穴全景(南西から)



6 10号住居遺物No. 1出土状態(南から)



7 11号住居全景(南西から)



8 11号住居掘方全景(南西から)



1 11号住居竈全景(南西から)



2 11号住居竈掘方全景(南西から)



3 11号住居貯蔵穴全景(南西から)



4 12号住居全景(南東から)



5 12号住居全景(南西から)



6 12号住居1号炉全景(南から)



7 12号住居2号炉全景(南から)



8 12号住居貯蔵穴全景(南東から)



1 12号住居断面A-A' (南東から)



2 12号住居As-C堆積状態・A-A'東端部(南東から)



3 12号住居P2断面D-D' (南東から)



4 12号住居P5全景(北西から)



5 12号住居P5上焼土(北西から)



6 12号住居P5断面H-H' (南西から)



7 13号住居全景(南西から)



8 13号住居掘方全景(南西から)



1 13号住居電全景(南西から)



2 13号住居電掘方全景(南西から)



3 13号住居貯蔵穴全景(南西から)



4 14号住居全景(南西から)



5 14号住居電全景(南西から)



6 14号住居貯蔵穴全景(南西から)



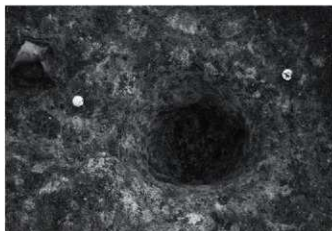
7 15号住居全景(南西から)



8 15号住居掘方全景(南西から)



1 15号住居跡全景(南東から)



2 15号住居貯蔵穴全景(北西から)



3 16号住居全景(南西から)



4 16号住居竈全景(北東から)



5 16号住居貯蔵穴全景(北東から)



6 16号住居遺物出土状態(南西から)



7 17号住居全景(西から)



8 17号住居掘方全景(西から)



1 17号住居竈全景(南から)



2 17号住居竈掘方全景(南から)



3 17号住居貯蔵穴全景(南から)



4 18号住居掘方全景(南西から)



5 18号住居竈掘方全景(南西から)



6 19号住居全景(南西から)



7 19号住居掘方全景(南西から)



8 19号住居竈掘方全景(西から)



1 20号住居掘方全景(南西から)



2 20号住居貯蔵穴全景(西から)



3 21号住居全景(北東から)



4 21号住居掘方全景(北東から)



5 21号住居貯蔵穴全景(南西から)



6 22号住居全景(西から)



7 22号住居掘方全景(西から)



8 22号住居竈全景(西から)



1 22号住居掘方全景(西から)



2 22号住居貯蔵穴全景(西から)



3 23号住居掘方全景(北西から)



4 24号住居全景(南から)



5 24号住居掘方全景(南から)



6 24号住居1号炉掘方全景(北西から)



7 24号住居1号炉遺物出土状態(北西から)



8 24号住居2号炉掘方全景(北西から)



1 24号住居2号焼土(南西から)



2 24号住居貯蔵穴遺物出土状態(西から)



3 24号住居遺物No.22出土状態(南から)



4 25号住居全景(南から)



5 25号住居全景(西から)



6 26号住居全景(南西から)



7 26号住居掘方全景(南西から)



8 26号住居竪方全景(南西から)



1 26号住居掘方全景(南西から)



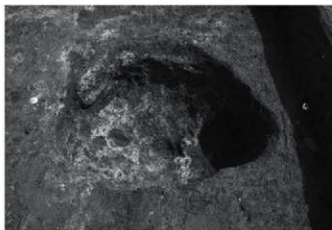
2 27号住居全景(西から)



3 27号住居掘方全景(西から)



4 27号住居掘方全景(西から)



5 27号住居貯蔵穴全景(西から)



6 28号住居全景(北西から)



7 28号住居掘方全景(北西から)



8 28号住居掘方全景(北西から)



1 28号住居貯蔵穴全景(北西から)



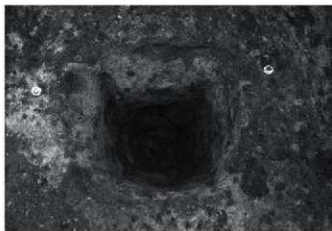
2 29号住居掘方全景(西から)



3 29号住居竈全景(西から)



4 29号住居竈掘方全景(西から)



5 29号住居貯蔵穴全景(西から)



6 31号住居全景(北西から)



7 31号住居掘方全景(北西から)



8 31号住居竈掘方全景(北西から)



1 31号住居貯蔵穴全景(北西から)



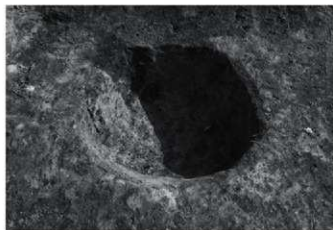
2 32号住居全景(南西から)



3 32号住居竈全景(南西から)



4 32号住居1号貯蔵穴全景(南西から)



5 32号住居2号貯蔵穴全景(南西から)



6 33号住居全景(北東から)



7 33号住居掘方全景(北東から)



8 33号住居竈全景(北東から)



1 33号住居電掘方全景(北東から)



2 33号住居貯蔵穴全景(北東から)



3 34号住居全景(南東から)



4 34号住居掘方全景(南東から)



5 35号住居掘方全景(北西から)



6 35号住居電掘全景(北西から)



7 35号住居電掘方全景(北西から)



8 36号住居全景(南東から)



1 36号住居掘方全景(南西から)



2 37号住居全景(南西から)



3 38号住居全景(南から)



4 38号住居掘方全景(南から)



5 38号住居炭化物・焼土出土状態(西から)



6 39号住居全景(東から)



7 39号住居竈全景(東から)



8 39号住居貯蔵穴全景(東から)



1 41号住居全景(南西から)



2 1号竪穴状遺構全景(東から)



3 1号竪穴状遺構掘方全景(東から)



4 2号竪穴状遺構全景(南東から)



5 2号竪穴状遺構掘方全景(南東から)



6 1号土坑全景(南西から)



7 5号土坑全景(南西から)



8 9号土坑全景(南西から)



1 2号土坑全景(南東から)



2 3号土坑全景(南西から)



3 4号土坑全景(南西から)



4 6号土坑全景(南西から)



5 7号土坑全景(南西から)



6 8号土坑全景(南東から)



7 10号土坑全景(西から)



8 11号土坑全景(北西から)



9 13号土坑全景(北西から)



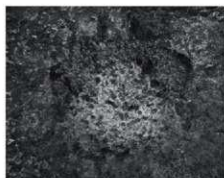
10 17号土坑全景(東から)



11 24号土坑全景(東から)



12 33号土坑全景(南東から)



13 34号土坑全景(南から)



14 35号土坑全景(南西から)



15 44号土坑全景(南西から)



1 50号土坑全景(南西から)



2 57号土坑全景(南西から)



3 58号土坑全景(北東から)



4 59・61号土坑、5号井戸全景(東から)



5 62号土坑全景(西から)



6 65号土坑全景(南西から)



7 66号土坑全景(南西から)



8 77号土坑全景(南西から)



9 86号土坑全景(南東から)



10 90号土坑全景(北から)



11 98号土坑全景(北西から)



12 99号土坑全景(北西から)



13 100号土坑全景(南西から)



14 114号土坑全景(南西から)



15 117号土坑全景(北西から)



1 12号土坑全景(南東から)



2 15号土坑全景(南東から)



3 17号土坑全景(南東から)



4 18号土坑全景(西から)



5 19号土坑全景(東から)



6 19・25・27・31号土坑全景(北東から)



7 20号土坑全景(南西から)



8 21～23号土坑全景(南東から)



1 26号土坑全景(西から)



2 32号土坑全景(南東から)



3 36号土坑全景(南西から)



4 37号土坑全景(南西から)



5 38号土坑全景(南西から)



6 39号土坑全景(南西から)



7 40号土坑全景(南西から)



8 41号土坑全景(南西から)



1 42号土坑全景(南西から)



2 43号土坑全景(南から)



3 46号土坑全景(北東から)



4 49号土坑全景(北西から)



5 51号土坑全景(南から)



6 52・53号土坑全景(南西から)



7 54号土坑全景(北東から)



8 55号土坑全景(北西から)



1 56号土坑全景(南から)



2 63号土坑全景(南から)



3 64号土坑全景(南西から)



4 67号土坑全景(北東から)



5 68号土坑全景(西から)



6 69号土坑全景(東から)



7 70号土坑、6号井戸全景(南西から)



8 72・73号土坑全景(南西から)



1 74・75号土坑全景(西から)



2 76号土坑全景(南から)



3 33・78号土坑全景(東から)



4 79号土坑全景(南西から)



5 80号土坑全景(北西から)



6 81号土坑全景(南東から)



7 82号土坑全景(南東から)



8 83号土坑全景(南東から)



1 84号土坑全景(北東から)



2 87・88号土坑全景(南西から)



3 89号土坑全景(北西から)



4 89号土坑全景(南東から)



5 89号土坑全景(南西から)



6 92・93号土坑全景(南西から)



7 94号土坑全景(南西から)



8 95号土坑全景(南西から)



1 96号土坑全景(東から)



2 96号土坑全景(北から)



3 96号土坑断面南半部(東から)



4 96号土坑断面北半部(東から)



5 96号土坑断面北端部拡大(東から)



6 97号土坑全景(南東から)



7 101号土坑全景(南西から)



8 102号土坑全景(東から)



1 102号土坑出土状態(東から)



2 103号土坑全景(南東から)



3 105号土坑全景(南西から)



4 106号土坑全景(北西から)



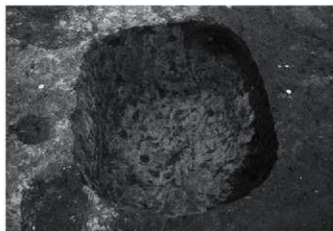
5 107号土坑全景(北西から)



6 108・109・110号土坑全景(南西から)



7 111号土坑全景(東から)



1 113号土坑全景(北東から)



2 115号土坑全景(南西から)



3 116号土坑全景(南西から)



4 118号土坑全景(北西から)



5 120号土坑全景(西から)



6 124号土坑全景(北西から)



7 1号井戸全景(南西から)



8 2号井戸全景(南から)



1 3号井戸全景(北から)



2 4号井戸全景(南西から)



3 7号井戸礫出土状態(南西から)



4 7号井戸断面(南西から)



5 8号井戸全景(北西から)



6 9号井戸全景(西から)



7 11号井戸全景(南から)



8 12号井戸全景(西から)



1 10号井戸全景(南から)



2 10号井戸断面(南西から)



3 1号堀全景(南西から)



4 館全景(上空から、左上が北)



1 館全景(南西から)



2 館全景(北東から)



1 館全景(南東から)



2 館全景(北西から)



1 1号堀全景(北東から)



2 1号堀全景(南東から)



3 2号堀全景(南西から)



4 2号堀全景(北東から)



5 1号溝全景(南西から)



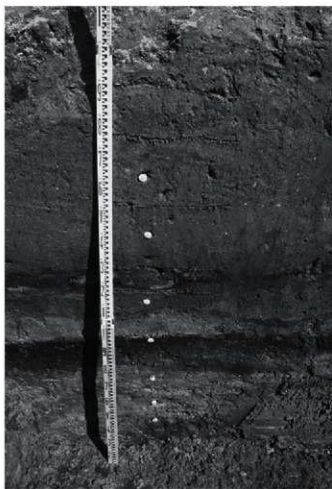
6 2号溝全景(南西から)



1 3号溝全景(南西から)



2 4号溝全景(南西から)



3 プラントオパール分析試料採取地点



4 台地部基本土層



5 旧石器調査状況(北西から)



1 B-1号住居遺物出土状態全景(北西から)



2 B-1号住居全景(北西から)



3 B-1号住居竈全景(南西から)



4 B-1号住居竈掘方全景(北西から)



5 B-2号住居全景(北西から)



6 B-2号住居掘方全景(北西から)



7 B-2号住居竈全景(南から)



8 B-2号住居貯蔵穴全景(南から)



1 C-1号住居遺物出土状態全景(南から)



2 C-1号住居全景(南から)



3 C-1号住居跡全景(南から)



4 C-1号住居跡掘方全景(南西から)



5 C-2号住居全景(南西から)



6 C-2号住居掘方全景(南西から)



7 C-2号住居遺物出土状態(北西から)



8 C-3号住居全景(北西から)



1 C-3号住居竈全景(北西から)



2 C-3号住居貯蔵穴全景(南から)



3 B-1号土坑全景(南から)



4 B-2号土坑全景(南東から)



5 B-3号土坑全景(西から)



6 B-4号土坑全景(西から)



7 B-5号土坑全景(東から)



8 B-6号土坑全景(東から)



1 C-1号土坑全景(南から)



2 C-2号土坑全景(南から)



3 C-3号土坑全景(南から)



4 C-4号土坑全景(南から)



5 A-3号溝全景(南西から)



6 C-1・2号溝全景(北西から)



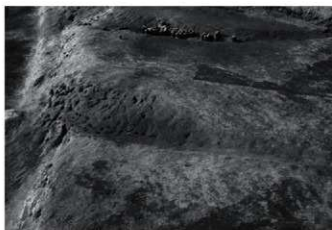
7 C-1号溝全景(北西から)



1 C-2号溝全景(北西から)



3 C-4号溝全景(北東から)



2 C-2号溝全景(東から)



4 A区As-B下水田全景(上が北東)



1 A区As-B下水田全景(北西から、井子遺跡を望む)



2 A区As-B下水田全景(南東から)



1 A区As-B下水田全景(北東から)



2 A区As-B下水田全景(北西から)



1 A区As-B下水田南東隅部(南から)



2 A区As-B下水田東端中央部(南東から)



3 A区As-B下水田北東部(南から)



4 A区As-B下水田北東隅部(東から)



5 B区縄文包含層遺物出土状態(北から)



6 C区縄文包含層遺物出土状態(北東から)



7 B区旧石器時代調査1号トレンチ(北東から)



8 B区旧石器時代調査2号トレンチ(北東から)

丑子遺跡

1号住居出土遺物



1

4号住居出土遺物



1

5号住居出土遺物



4



6



8



7



9

6号住居出土遺物



1



2



4



6

7号住居出土遺物(1)



丑子遺跡

7号住居出土遺物(2)



25



26



30

8号住居出土遺物



5

9号住居出土遺物



2



3



7



6



9



8



10



12



11

10号住居出土遺物



11号住居出土遺物



12号住居出土遺物(1)



12号住居出土遺物(2)



12号住居出土遺物(3)



33



34



35



37



38



45

15号住居出土遺物



1



2



3

16号住居出土遺物



1

17号住居出土遺物(1)



1



2



6

丑子遺跡

17号住居出土遺物(2)



18号住居出土遺物



19号住居出土遺物



20号住居出土遺物



22号住居出土遺物



24号住居出土遺物(1)



24号住居出土遺物(2)



27号住居出土遺物



28号住居出土遺物



丑子遺跡

29号住居出土遺物



3



4

32号住居出土遺物



1



3



4

33号住居出土遺物



1



2



4

34号住居出土遺物



1



4



7



8



6

PL.60

丑子遺跡

35号住居出土遺物



39号住居出土遺物



丑子遺跡

36号住居出土遺物



1



2



4



3

41号住居出土遺物



1



2



3



4



5

27号土坑出土遺物



2

56号土坑出土遺物



1



2



3



5

68号土坑出土遺物



1

78号土坑出土遺物



3

74号土坑出土遺物



1

33号土坑出土遺物



2



3

80号土坑出土遺物



1



2

丑子遺跡

89号土坑出土遺物



93号土坑出土遺物



96号土坑出土遺物



97号土坑出土遺物



114号土坑出土遺物



116号土坑出土遺物



120号土坑出土遺物



7号井戸出土遺物



2号堀出土遺物(1)



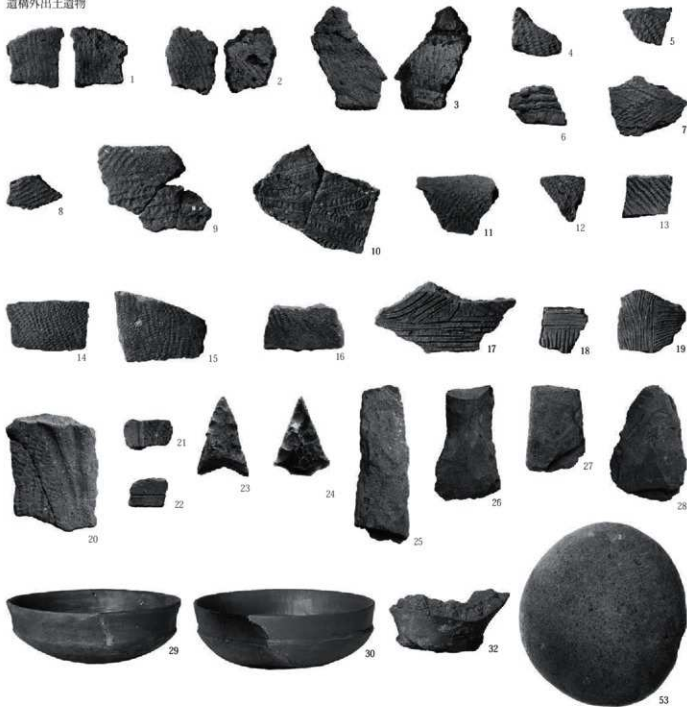
2号掘出土遺物(2)



4号溝出土遺物



道構外出土遺物



上細井五十嵐遺跡

B-1号住居出土遺物



B-2号住居出土遺物



C-1号住居出土遺物



C-2号住居出土遺物



B-1号土坑出土遺物



B-6号土坑出土遺物



C-2号土坑出土遺物



C-3号土坑出土遺物



C-4号土坑出土遺物



A区旧河川出土遺物



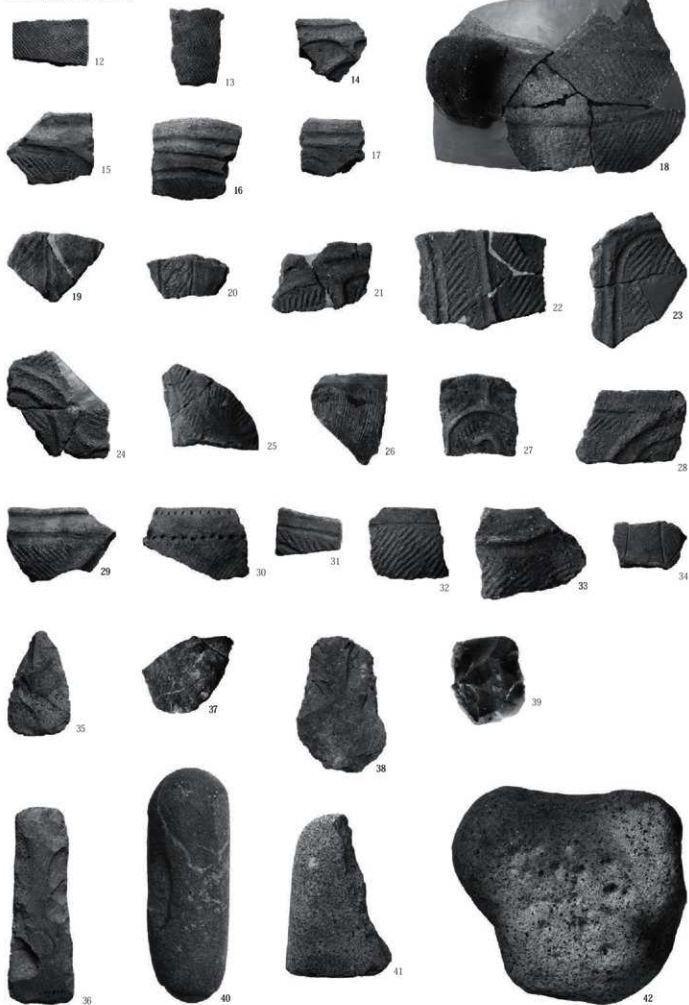
A区遺構外出土遺物



B区遺構外出土遺物(1)



B区遺構外出土遺物(2)



C区道構外出土遺物



報告書抄録

書名ふりがな	うしごいせき・かみほそいいがらしいせき
書名	庄子遺跡・上細井五十嵐遺跡
副書名	一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	558
編著者名	斎藤聡/高井佳弘
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20130228
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北碓町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	うしごいせき
遺跡名	庄子遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんまえばししかみほそいまち
遺跡所在地	群馬県前橋市上細井町
市町村コード	10201
遺跡番号	134
北緯(日本測地系)	362512
東経(日本測地系)	1390531
北緯(世界測地系)	362523
東経(世界測地系)	1390520
調査期間	20090101-20090331
調査面積	6246
調査原因	道路建設
種別	集落
主な時代	古墳/中世
遺跡概要	縄文-土器+石器/弥生-竪穴住居1/古墳-竪穴住居33+土坑-土器/奈良-竪穴住居3-土器/平安-竪穴住居1-土器/中近世-堀2+土坑+溝+井戸+ピット-土器+陶磁器+石製品
特記事項	古墳時代後期を中心とした集落/中世の館
要約	赤城山南麓末端、白川扇状地上に立地する古墳時代を中心とした集落である。竪穴住居は弥生時代から平安初期までのものが含まれるが、古墳時代に33軒が集中している。集落東側の谷にはAs-Bがみられ、小規模な水田耕作が行われている。調査区の西部には堀が巡り、15～16世紀の館であると思われる。
遺跡名ふりがな	かみほそいいがらしいせき
遺跡名	上細井五十嵐遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんまえばししかみほそいまち
遺跡所在地	群馬県前橋市上細井町
市町村コード	10201
遺跡番号	777
北緯(日本測地系)	362514
東経(日本測地系)	1390528
北緯(世界測地系)	362525
東経(世界測地系)	1390516
調査期間	20081202-20090220
調査面積	7042.08
調査原因	道路建設
種別	集落/水田
主な時代	縄文/平安
遺跡概要	縄文-竪穴住居1-土器+石器/古墳-土坑-土器/平安-竪穴住居4+水田-土器/中近世-土坑+溝-土器+陶磁器+石製品
特記事項	平安時代の集落と水田
要約	赤城山南麓末端、白川扇状地上に立地する。竪穴住居は縄文時代前期と平安時代のものがみられる。遺跡の東半部は浅い谷であり、As-B下面で棚田状の水田が見つまっている。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第558集

丑子遺跡・上細井五十嵐遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書

平成25(2013)年2月21日 印刷

平成25(2013)年2月28日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下箱田1784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／株式会社開文社印刷所

上細井五十嵐遺跡 全体図(1/300)

